観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話　03(3291)2488　振替00130－7－3552
〒604－0935　京都市中京区二条通麩屋町東入
電　話　075(231)1990　振替01010－0－113

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話　(052) 731－7984
FAX　(052) 733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## 謡初式と新年総会

### 能楽協会名古屋支部

能楽協会名古屋支部（泉嘉夫支部長）は平成十二年の新春を迎え一月三日午前十時から熱田神宮能楽殿で、恒例の新年謡初式を行い、泉支部長の発声で「四海波」を謡い新しい年の幕開けを祝賀した。

引き続いて楽屋で新年総会を開催、熱田神宮能楽殿運営委員会・二橋一彦委員長・熱田神宮權宮司から新年のあいさつとともに、熱田神宮能楽殿の運営状況について「熱田能楽殿の存廃について、財政面からここ二、三年のうちにはという状態もでている。芸能文化の一翼をになうという場所として残すべくご協力を賜りたい」とあいさつ、泉支部長は、昨秋逝去された井上菊次郎氏の長い努力を重ねられた人柄に追悼のことばをよせるとともに「昨年一年間の協会名古屋支部の諸活動について協会支部会員のご協力とご尽力を感謝する。本年もさらなるご支援をお願いしたい」とあいさつを述べた。

歳末助け合い協賛能について、愛知県、名古屋市民生部へそれぞれ二十八万二百四十円、合計五十六万四百八十円を寄託したと報告。平成十二年度の協会名古屋支部の行事予定が発表された。

また支部として、今春四月からの人事で狂言方、井上礼之助氏を顧問就任を決定、熱田能楽殿の運営に関して、梅田運営委員会委員から、支部として、使用料をふくめその活用について、使いやすさを考え検討中であり、次回の運営委員会に試案を諮ることになっている。と報告。

また能楽普及事業実行委員会による名古屋能楽堂定例公演は「評判がよく満員の状況で定着している。能が非常に普及し、社会に認められてきている。今後もひきつづいて公演していきたい」（泉支部長談）と報告が行われた。

## 薪能は8月5日

### 能楽協会名古屋支部主催

### 平成12年度演能予定

能楽協会名古屋支部主催による平成十二年度演能予定は次のとおりである。

◎熱田祭奉納能
六月五日(日)
宝生流能「田　村」　衣斐　愛
喜多流能「藤　戸」　和谷衡市
観世流能「菊慈童」　瀬戸洋子
ほか狂言、仕舞

◎名古屋薪能
八月五日(土)
観世流能「竹生島」　武田邦弘
観世流能「百　萬」　梅田邦久
法楽之舞
宝生流能「葵　上」　竹内澄子
ほか狂言、仕舞

◎初秋能
九月三日(日)
［第一部］
観世流能「頼　政」　泉　嘉夫
観世流能「鉄　輪」　清沢一政
［第二部］
観世流能「楊貴妃」　古橋正邦
宝生流能「船弁慶」　衣斐正宜
ほか、狂言、仕舞「松風」（生駒里翠）ほか未定。

◎歳末助け合い協賛能
十二月三日(日)
喜多流能「海　人」　長田　曉
経懐中之舞
観世流能「遊行柳」　久田勘鶴
宝生流能「小鍛冶」　稲川寿一
ほか狂言、仕舞

## 熱田神宮能楽殿運営委員会

年　新　賀　謹

委員長　熱田神宮權宮司　二橋　一彦
委　員　熱田神宮禰宜　大山　剛
同　熱田神宮禰宜　副野　均
同　熱田神宮禰宜　水田順造
同　木村清次
同　小林　允
同　狂言方　和泉流　野村又三郎
同　シテ方　観世流　梅田　邦久
同　シテ方　宝生流　衣斐　正宜
同　ワキ方　高安流　飯富　雅介
同　狂言方　和泉流　井上　祐一
同　太鼓方　観世流　鬼頭喜太郎
同　小鼓方　幸清流　福井啓次郎
同　笛　方　藤田流　藤田六郎兵衛
顧問　神社本庁祭式講師　長谷　晴男
運営委員会事務長　鈴木　忠一

## 尾張・大縣神社で第一回梅華能

### 3月5日に開催

尾張開拓の祖神・大縣大神を祀る大縣神社（愛知県犬山市字宮山）で、きたる三月五日(日)同神社の梅まつりに、第一回「梅華能」が奉納される。

主催は大縣神社崇敬奉賛会で、犬山城能楽友の会（代表・玉野宮夫氏）が協賛、演能は、素囃子「からくり三番叟　さんば之舞」連調「東北」、仕舞「紅葉狩」「求塚」「羽衣」舞囃子「箙」「富士太鼓」「梅」、能「猩々」の上演。

大縣神社では、平成九年に遷座二千年を迎えた記念事業として、神楽殿を造営、紅白の枝垂れ梅を植樹して梅林公園を造成、能の催しは、その時のこけら落とし以来二度目になる。

とくに今回上演の「からくり三番叟　さんば之舞」は、萬屋仁兵衛工房に制作依頼して初めて披露されるもので、能舞台の上で舞うからくり人形は、全国でも初めてという。

舞の曲は、新しく作曲し「さんば之舞」と名付けられ、十二拍子、八拍子、十二拍子、四拍子と拍子が移り変わっていくリズムが特色。このからくり三番叟は、人形を制作した萬屋仁兵衛工房本人によって自ら操作し動かされる。午後一時半開演。入場無料。

謹賀新年
名古屋能楽堂
名古屋市中区三の丸一丁目一番一号
電話　〇五二(二三一)〇〇八八番

年　新　賀　謹

名古屋観世会
観世清和

社団法人　銕仙会
観世銕之亟
観世栄夫
観世暁夫

幽謳会
片山九郎右衛門

財団法人　研能会
梅若万紀夫
梅若万佐晴

梅猶会
猶諷会
大阪国際フェスティバル能
梅若盛義

名古屋観衆会
山本　勝一
名古屋正花会
山本　博通
〒540－0025　大阪市中央区徳井町一丁目三－六
電話(〇六)六九四二－四〇七〇番

大槻清韻会
大槻文蔵
〒540－0005　大阪市中央区上町A番七号
電話(〇六)六七六四－〇八九八番

鳳鳴会
武田志房
稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15－3　浅井ビル
電話〇五二(七三二)三七三六

幽花会
片山慶次郎
伸吾
〒603－8123　京都市北区小山下花ノ本町二一
TEL　四九二－五三〇二番
FAX　四九二－五三〇九番

名古屋観世九皐会
観世喜之
観世喜正
加藤保彦
高木美智子
高橋瞭一
外山圭一

野村四郎

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

［平成12年1月］

22日(土)　花伝の会（有料）番組②面）
23日(日)　万作を観る会（有料）番組②面）
30日(日)　狂言鳳の会第23回公演（有料）番組②面）

［2月］

5日(土)　青陽会定式能（有料）番組③面）
11日(祝)　冨耀会（無料）
13日(日)　名古屋観世会定式能（有料）番組③面）
16日(水)　梅若六郎の会「道成寺」公演（有料）
18日(金)　名古屋能楽堂定例公演（有料）
20日(日)　名古屋観世九皐会（有料）
26日(土)　名古屋大学観世会定期自演能（無料）

### ◆熱田神宮能楽殿◆

［1月］

23日(日)　名古屋宝生会定式能（有料）番組③面）

［2月］

6日(日)　和泉流宗家熱田狂言ライブ（有料）

## 豊田市学生能楽鑑賞会

豊田市学生能楽鑑賞会は一月十九日、豊田市能楽堂で第一部、第二部の二部制で催される。

第一部＝十時三十分始、第二部＝午後二時三十分

お話　衣斐愛

狂言「清水」井上靖浩、井上祐一、後見佐藤友彦

能「小鍛冶」シテ（一部）東川光夫、（二部）水上輝和、ワキ高安勝久、ワキツレ西村信広、笛・大野誠、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・筧鉱一、太鼓・鬼頭喜太郎、間・佐藤融・地謡衣斐正宜ほか。

## 花伝の会公演

一月二十二日（土）午後二時開演

名古屋能楽堂

解説　法政大学能楽研究所所長　西野春雄

復曲能　**鐘巻**　大槻文蔵

道成寺原曲　中村弥三郎　河村大　前川光長　大倉源次郎　藤田六郎兵衛

間　茂山千之丞

後見　観世栄夫　地頭　阿部信之

鐘後見　赤松禎友

主催　花伝の会　中部日本放送　中日新聞社

## 万作を観る会

一月二十三日（日）午後二時開演

名古屋能楽堂

**佐渡狐**　佐渡の百姓　野村又三郎　甚後の百姓　佐藤友彦　秦者　井上祐一　後見　井上礼之助

**素袍落**　太郎冠者　野村万作　主　野村萬斎　伯父　野村万之介　後見　深田博治

**千切木**　太郎　野村萬斎　当屋　野村万之介　太郎冠者　月崎晴夫　立衆　深田博治　立衆　小川七作　立衆　高野和憲　立衆　竹山悠樹　女　石田幸雄　後見　野村良乍

（入場料）（全指定・税込）A席一万五千円、B席一万一千円
お求めはチケットぴあ・市内各プレイガイド
藤田六郎兵衛事務所（☎052・571・6341）

## 狂言　鳳の会　～新春初笑い狂言～

一月三十日（日）午後一時半始

名古屋能楽堂

番組

**三番叟**（さんばそう）　千歳　今枝靖雄　三番叟　井上祐一　大鼓　筧鉱一　太鼓　助川龍夫　小鼓　柳原冨司忠　頭取　福井啓次郎　小鼓　福井良治　笛　竹市学

**張章魚**（はりだこ）　果報者　佐藤友彦　太郎冠者　佐藤融　都の徒者　井上靖浩　後見　井上禮之助　大野弘之

新春トーク　名古屋女子大学短大部教授　林和利

**竹生嶋参**（ちくぶしままいり）　太郎冠者　大野弘之　主人　井上禮之助　後見　佐藤融

**金津地蔵**（かなづじぞう）　親　井上祐一　金法師　森健人　田舎者　佐藤友彦　在所の者　井上靖浩　今枝郁雄　今枝靖雄　林泰礼　鷺見政行　後見　佐藤融

（入場料）前売　指定席四千円、自由席三千円（当日三千五百円）
学生（自由席）二千円、
チケット取扱い＝チケットぴあ、052・320・9999
▽お問い合わせ＝名古屋女子大学林研究室（TEL052・852・9436）

（入場料）S席七千円、A席六千円　B席五千円、学生席三千円
チケット取扱い＝チケットぴあ
プレイガイド（三越）万作の会チケットセンター（TEL03・3997・8778）

主催　なごや・万作の会

後援　名古屋稲門クラブ、愛知県稲門教育会、中日新聞社、中部日本放送

事務局TEL052・243・0724

---

井上嘉久　〒603―8175　京都市北区紫野下鳥田町六

観世芳宏門人会　観世芳宏　観芳会　観世芳伸

大西智久　大西礼久

山中能舞台　山中義滋　〒545―0021　大阪市阿倍野区阪南町六―五―八　電話（〇六）六六九二―三八二五

邦謡会　梅田邦久　清沢一政　須部甫　本田勲　高島良一　今沢美和　名古屋市昭和区台町二丁目十六―五　電話（〇五二）八四一―四六三二番

壺泉会　泉嘉夫　名古屋市昭和区山手通3・8・2・306　電話（〇五二）八三二―三一八五　西宮市甲陽園目神山町二三―二五　電話（〇七九八）73二四五八

名古屋橋岡会　名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五　山田紀子方

武田謡楽会　武田欣司　武田邦弘

大垣浦声会　稽古場　大垣市伝馬町大垣別院　電話（〇五八四）七三―三三六二　浦田保利　浦田保浩　浦田保親　〒606―0814　京都市左京区下鴨芝本町五八　電話（〇七五）七八一―七〇三〇

久田観正会　久田勘鷗　馬場信至　玉木孝男　星野路子　大倉流小鼓松月会　郁風会　久田舞一郎　前野郁子　松謡会　松山幸親　〒465―0093　名古屋市名東区一社3―162　電話（〇五二）七〇五―一五八五

名古屋修諷会　梅若修一

名古屋淡交会　橋岡慈観　三交会　久田三津子　〒465―0093　名古屋市名東区一社3―162　電話（〇五二）七〇五―一五八五

大江能楽堂　大江将董

松音会　泉泰孝　〒168―0081　東京都杉並区宮前四―一九―四　電話（〇三）三三三一―八二八〇番

佳泉会　泉雅一郎　〒181―0002　東京都三鷹市牟礼二―三―一　電話〇四二二―七一―二四〇四

山本眞義　山本章弘　豊中市本町六丁目一〇―六

初陽会　武田宗和　稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15―3　浅井ビル　電話〇五二（七三二）三七三六

上田観正会能楽堂　社団法人　観正会　TEL〇七八―六九一―五四四九　上田観正会　上田貴弘　田拓司　公威　大介

財団法人　鎌倉能舞台　中森晶三　中森貫太

## 熱田神宮能楽殿演能

### 名古屋宝生会定式能（第44期 第1回）

一月二十三日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

能 **花月**
衣斐愛
飯冨雅介　河村総一郎　福井啓次郎　竹市学
間 佐藤融
後見 衣斐正宜　和久荘太郎
地謡 別所和子　松浦祥子　芳賀カヌ子　澤栗幸子　竹内澄子　倉本雅　戸田玉井博　祐和
仕舞 八島 佐藤耕司
藤 クセ 石黒孝
地謡 鬼頭嘉男　馬縅冨四夫　辰巳満次郎　稲川寿一
能 **遊行柳**
佐野萌
椙元正樹　飯冨寛　橋本雅介　宰鉱一　後藤孝一郎　助川龍夫　鹿取希世
間 井上靖浩
後見 辰巳孝　辰巳満次郎
地謡 鈴木久仁七　堀部稲葉学　外山義行　通夫　鬼頭嘉男　水上輝和　東川光夫　和久荘太郎
狂言 **鬼瓦**
井上祐一　佐藤融
後見 今枝靖雄
能 **絃上**
龍神 和久荘太郎
姥 稲川寿一
師長 水上輝和
衣斐正宜
杉江元
西村信広
間 佐藤友彦
後見 東川光夫　佐藤耕司
地謡 河村真之介　柳原冨司忠　鬼頭好信　竹市学　名倉信二　中埜恵生　竹内純一　馬縅冨四夫　竹内良伯　辰巳満次郎　久野幸三

主催 名古屋宝生会
事務所 名古屋市天白区島田二―三〇一
島田橋住宅二―三一〇
電話FAX 〇五二―八〇三―七三七二
携帯TEL 〇九〇―一七四一―六二三四
佐藤耕司方

## 名古屋能楽堂演能案内

### 青陽会定式能（第44期 第1回）

二月五日（土）十二時半開演
名古屋能楽堂

能 **屋島**
清沢一政　梅田邦久
杉江元　飯冨雅介　椙元正樹　河村真之介　柳原冨司忠　大野誠
大小鼓 久田勘吉郎　瀬戸洋子　久田三津子
間 井上祐一
能 **花筐**
橋本宰　高安勝久　杉江元　椙元正樹　河村総一郎　後藤嘉津幸　鹿取希世
狂言 **柑子**
今枝靖雄　井上靖浩　後見 佐藤友彦
能 **阿漕**
加賀敏彦
飯冨雅介　筧鉱一　福井啓次郎　助川龍夫　竹市学
間 佐藤融
（番組詳細12月号掲載）

### 冨耀会

二月十一日（祝）十時始
名古屋能楽堂

舞囃子「猩々」居囃子　連調二十数番ほか
（来場歓迎）
主催 冨耀会

### 名古屋観世会定式能（初回）

二月十三日（日）十二時半開演
名古屋能楽堂

素謡 **神歌**
梅田邦久　千才清沢一政
能 **葛城**
親世鍈之亟
大和舞
飯冨雅介　高安勝久　杉江元　河村真之介　福井啓次郎　助川竜夫　大野誠
間 井上靖浩
狂言 **水汲**
親世清和
佐藤友彦　佐藤融
能 **小鍛冶**
白頭
福王茂十郎　山本順三　井上祐一
河村総一郎　大倉源次郎　前川光長　藤田六郎兵衛
〔要会員券〕
〔初回に限り当日券の発売にございません〕
主催 名古屋観世会
（番組詳細12月号掲載）

名古屋後援会発足記念
第一回特別公演

### 梅若六郎の会

二月十六日（水）午後六時開演
名古屋能楽堂

狂言 **蝸牛**
梅若六郎
野村又三郎　井上祐一　松田高義
能 **道成寺**
特殊束
室生閑
河村総一郎　大倉源次郎　助川治　藤田六郎兵衛
間 野村小三郎
後見 片山九郎右衛門　鐘後見　梅宮晋矢　地頭山本勝一

料金 A席一万五千円、B席一万一千円
申込み先 東京都中野区東中野二―六―一四
梅若六郎事務局（梅若六郎の会）
電話 〇三・三三六三・七七一八、FAX〇三・三三六三・六八八二

---

春鶯会
梅若善高
〒565-0084 豊中市新千里南町三丁目18―12
電話〇六六八三一―七八五四

梅春会
井戸和男
〒166-0003 東京都杉並区高円寺南4・27・7・903
電話〇三三三一二―〇五七〇

下田雄三
〒545-0004 大阪市阿倍野区文の里3―16―17
電話〇六―六六二一―二二一九

雄諷会中部地区連合会
名古屋和諷会
一宮竹石会
岐阜花諷会
下呂雄諷会
倭文之屋社中

賀水会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
花晨の会
加賀敏彦
〒463-0035 名古屋市守山区森孝二丁目七〇九
電話〇五二―七七一―八九四五番

笙月会 中川雅章
〒526-0036 長浜市地福寺町八ノ二九
電話〇五四九―六二―〇六三〇番

洗心会 奥村富久子
〒606-8303 京都市左京区永観堂西町二〇
電話〇七五（七七一）〇七六七番

観修会 祖父江修一
〒507-0043 多治見市日ノ出町2の2
電話〇五七二―二二―三六五六

中日文化センター
謡曲・仕舞教室（名古屋（栄）・岐阜・四日市）
翠謡会 生駒里翠
〒465-0051 名古屋市名東区社ガ丘3ノ1503
電話（〇五二）七〇三―五七一七番

猶恵会 熊沢恵美子
〒465-0097 名古屋市名東区平和ヶ丘3―76
日車マンション四〇四

芳韻会 稲生芳雄
〒475-0021 半田市船入町三十一
電話〇五六九（21）〇八一五

幸謡会 近藤幸江
〒444-2122 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話（〇五六四）（21）二五二九

重陽会 菊池重郷
〒481-0081 犬山市犬山字相生五九―一六
電話（〇五六八）（61）四五〇一番

恵謡会 三村恵子
〒445-0051 西尾市住吉町三―一二
電話〇五六三（五七）二五九四番

千早会 八神孝充
〒464-0002 名古屋市千種区向陽町2―16
電話（〇五二）七六一―二二〇一

臘月会 加藤春枝
〒509-0035 可児市皐ヶ丘3―113
電話（〇五七四）五六―〇一六六

宝生英照

名古屋巽会
辰巳孝

近藤乾之助
〒170-0002 東京都豊島区巣鴨五―二三―八

恵美寿会
衣斐正宜
衣斐正宜後援会
〒466-0051 名古屋市昭和区御器所3―23―19
御器所パークマンション802号
電話（〇五二）八八二―五六〇〇番

佐野由於
〒150-0011 東京都渋谷区東2―14―21
〒921-8004 金沢市泉野町四丁目12―14

倉本雅
〒658-0061 神戸市東灘区田中町1―13―22―809
電話（〇七八）四四一―五四六五番

宝生流
嘉宝会
鬼頭嘉男
〒466-0055 名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

司宝会
佐藤耕司
〒468-0056 名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅二―三一〇電話〇八〇三七三七二

金剛永謹

廣田後援会
廣田陛一
廣田幸稔

# 京都・名古屋・大阪 四つの狂言会より

竹尾邦太郎

## 第四回 千作の芸を見る会

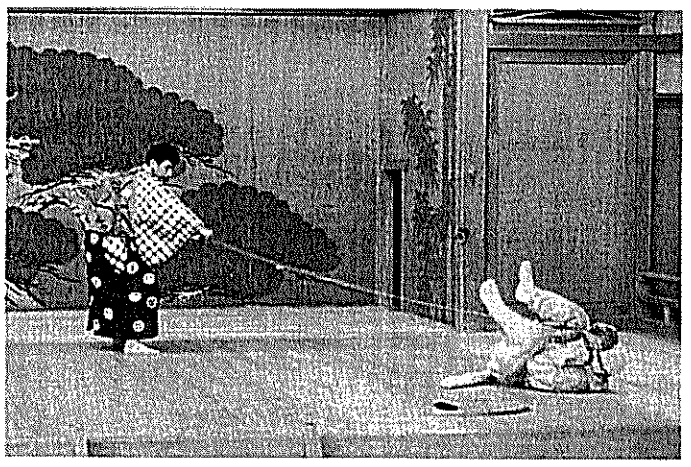
功成り名遂げた役者の芸への自負が会の命名に滲むが、得てして芸を「見せる」「見せびらかす」向きの役者の世界に在って、決して驕傲になることはなく、芸を「見て貰い」楽しんで貰うサービス精神を嫌味なく発揮出来るのは千作の器量であろう。

「萩大名」　シテ千作、太郎冠者・千三郎、庭ノ亭主・千之丞。「何ぢや」と強く語尾を上げて物事を問い直す千作の無邪気と、諭し、或いはたしなめ、抑えて応える千三郎専らの気配りは如何にも打ち解けた主従の雰囲気であるが、何分にも愚鈍に過ぎる主は当座を詠みきれず、責める千之丞に開き直ってなんとか辻褄を合わせようとする処など、人柄そのまま憎めない。なお、庭の在処は清水寺辺りに非ず下京辺、太郎冠者がアイ座に残るのも珍しかった。（30分）

「止動方角」　主人・七五三、太郎冠者・千五郎、伯父・千之丞、馬・正邦。茶壺・太刀・馬を使いの太郎冠者に快く貸す伯父の鷹揚さと、独りしての苦労がむくわれるどころか借りてくるのが遅いと叱り付ける主人の暴君ぶりが好対照。腹に据え兼ねた太郎冠者が咳払いで主人を馬から振り落とさせて溜飲を下げ、「サア召しませ」と再度乗馬を促せば、重い沈黙のあと馬の周囲をワキ座からスミ、正中へと大きく廻ると手綱を引ったくる処、優位に立った太郎冠者と癇性な主人の心理描写が巧妙、千五郎と七五三、兄弟の阿吽の呼吸である。更に太郎冠者の魂胆は、再度主人を振り落とさせてまんまと馬上入れ替わり、主従関係までも逆転させること、「最前の叱り返しをしをる」と謀られた怒りに切歯扼腕する七五三が良い。キリは見当違いに主人を取り抑える型だった。（39分）

「千鳥」　勘定を溜めていることなど委細かまわず、酒屋の亭主・千作と相口がよいのを幸い「酒を一樽取ってこい」と顎をしゃくり無造作に太郎冠者・万蔵へ言い付けると、主人・あきらは直ぐ切戸へ退く。「そちの来るのを待ってゐた」、と相好崩さんばかりに万蔵を迎える千作、異流人間国宝の激突ではあろうが余りにも和やかなムードに、早くも虚々実々の駆け引きである。引け目があるゆえの懸命な太郎冠者の口調法だが、思惑が外れて思わず口元が弛む照れ笑いには江戸ッ子万蔵の含羞があり、もし千作が同じ立場ならあっけらかんと笑い飛ばしてしまう京の町衆の暢達がみられるだろう、と思わせて面白い。個性や芸質の違いと言ってしまえばそれまでだが、そこには抜き差しならない流儀の主張があろうか。津島祭にさんざん気を持たされた挙げ句に話を中断され、「いて代わりを取って参りませう」と逸かされて狼狽する辺り、千作の味わいも出色である。

騙し掠め盗るというテーマは穏やかではないのだが、笑いに昇華させて人情の機微を鋭く衝き、後味も爽やかなのはこれ偏に主人独りが悪いだけ、万蔵・千作力量発揮の好舞台だった。（31分・平成11年9月17日・京都観世会館）



「釣狐」　佐藤友彦氏

## 第22回・鳳の会

鳳の会は名古屋の和泉流狂言共同社（平成三年度観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞）の中核、井上祐一と佐藤友彦に加えプロモーターとして研究者の林和利を得、一九九二年四月発足以来はや二十二回の公演を持ち、山脇派の六儀に換り若手後継者の育成にも努めて着実に成果を挙げている。先の二十回記念には祐一が「花子」を再演した。

「奈須与市語」　今枝靖雄（昭42生）披キ。与市・義経・実基の三役を演じ分ける立場の移動に強靱な腰が欲しいが、語は歯切れよく爽やか。「ヒッ、フッツと射切る」ところは天晴れ若武者の生意。（15分）

「釣狐」　シテ友彦、十六年ぶりの再演。披キのアド狐師は、当時父秀雄が病で共演叶わず松次郎（三世菊次郎）だったが今回は息融、意気込みの程も知れる。前シテ白蔵主には共同社に鯉の張った白っぽい面もあるが、披キと同じ眼に泥を差した茶色のものを使用した。眷族の絶滅を惧れ、思い余って狐師を訪ねるところ、神経過敏な姿を入念に見せる。

犬の遠吠えに飛び上がり、忍び足の獣足は遠巻きに大きく廻わり、案内を乞えば落ち着かぬ様子に何度も爪先立ちの足踏み、など繊細。狐を釣ること「真っ直ぐにおしゃれ」に声は上振り、床几の語は玉藻前に自ら興奮して「那須野の原へ落ちて行」の絶叫、狐師が釣りはやめると聞けば「何ぢゃ、止まるう」の素っ頓狂な声、なども熱演である。畏捨てさせては心悸も鎮まり、「昆布に山椒をまいて茶ばかり申う」と三ノ松は杖を両手に小躍りして廻れば、胸杖から欣喜雀躍ワキ正へ戻り小歌節機嫌、その浮かれ気分も罠に気付けば霧散。一旦三ノ松に逃げはするが憎い罠、「序でに罠の設いを見て置かう」と一ノ松から見込み、更にシテ柱に隠れて伸び上がり覗い、近寄って餌に戯え、杖で打ち据える。杖に旨い匂いを嗅げば、罠を恐れ餌には強く惹かれる葛藤に居ても立ってもいられない焦燥感は「食いたいなあ」の嘆息、この辺り少々オーバーアクション気味だが再演の余裕もみせて上々。

後シテは幕の裾、長衣の下をするりと被り抜けて出る。身軽になって餌を前に一種挑発的な戯れのデモンストレーションは、餌を横目に寝転び、三ノ松へ抜けては勾欄に両手を掛け「一郎、一郎」と狐師を牽制し、一ノ松では伏せて狐師の本名「融、融」と呼び掛けるがくどい。キリは罠を外し四つん這いで三ノ松に逃げるや狐師を嘲笑するように啼くと幕へ入る。アド融、罠の仕掛けの手際、捕獲から逃げられるタイミングもよかった。（1時間23分）

「朝比奈」　閻魔・靖浩、シテ朝比奈・祐一、それぞれ四拍子で次第、一声の登場楽がある。地獄への入来者が少ないと閻魔自ら六道の辻に立つが、出くわした相手が悪く剛力無双の朝比奈に極楽への先達をさせられるというコミカルなタッチは差し詰め武井武雄の童画の世界。和田軍の語で「小耳を取って引き寄せ、ころりころり」と仕方に転ばされた閻魔の武悪面が外れるアクシデントはあったが、進行に支障なく結構。（32分・平成11年10月30日・名古屋熱田神宮能楽殿）

## 茂山忠三郎狂言会

昨年の二十周年記念に忠三郎の嫡子良暢が十六歳で「釣狐」を被いたのが記憶に新しい。一九八一年以来東京・福岡・大阪・京都で公演するが一九九二年以降は概ね各地同一番組の三番、忠三郎・良暢ともに相手役を替え、相手の持味により自らの芸域を広め深めてゆこうとする。一九八八年、十周

（⑤面へつづく）

豊嶋能の会
豊春会
豊嶋三千春

菊扇会
後援会
廣田泰三
泰能

金剛流景雲会
能を楽しむ会
宇高通成後援会
宇高通成面乃会
（1・28・1 世界3・29）国際能楽研究会
宇高通成
竜成
徳成
〒606—8165 京都市左京区高野泉町四〇
TEL・FAX（〇七五）七〇一—〇七九三
敷舞台
〒606—0047 京都市左京区上高野薩田町二
TEL（〇七五）七〇一—一〇五五
敷舞台
〒791—8013 松山市山越四丁目二—三八
TEL・FAX（〇八九九）四—八五五四
名古屋事務所　前岨方
TEL・FAX（〇五二）八五一—三三四

金剛流
松野恭憲
松野洋樹
〒616—8211 京都市右京区鳴滝泉殿町一八—三
TEL〇七五（四六一）二一四八番
FAX〇七五（四六一）六〇九八番

金剛流
名古屋周星会
岐阜周星会
吉川周子
〒464—0825 名古屋市千種区西崎町三—六
電話（〇五二）七六一—二二五七

金春欣三
〒630—0113 奈良市法蓮南町一四
電話（〇七四二）二二—七九二九

金春信高
金春安明
〒167—0062 東京都杉並区南荻窪3—17—16
電話〇三（三三三一）二五七一番

春敲会
名古屋春栄会
金春晃実
金春穂高
廣瀬瑞弘

本田光洋
〒164—0002 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三（三三八六）二六四一番

伊勢金春会
宇仁田吉邦
〒516—0006 伊勢市八日市場町5—16
電話〇五九六（25）五二九八

二井栄逸
〒515—0073 松阪市殿町1412の3
電話（〇五九八）二三—〇二六

長田驍後援会
〒514—2221 津市高野尾町三三五一—四六
電話（〇五九二）（30）〇六九七番

喜多流
和楽会
和谷衡市
〒516—0067 伊勢市中島二丁目26—12
電話（〇五九6）（25）〇一五九番

福王茂十郎

高安流十四世宗家
高安勝人

西村同門会
飯冨雅介
杉江元
椙元正樹
橋本宰
西村信広

ワキ方高安流
山崎悛輔
〒837—0024 大牟田市大字歴木一四八ノ一
高泉団地一一一二

宝生閑
欣哉
〒176—0004 東京都練馬区小竹町一—五〇—五
電話〇三（三九七二）七二三〇
電話〇三（三九五五）四七九五

森常好
〒154—0017 東京都世田谷区世田谷一—47—12
電話〇三（三四二六）四八五三

ウシマド写真工房
〒602—8381 京都市上京区北野上七軒
TEL〇七五—四六一—三四一
FAX〇七五—四六一—五七七二

（④面よりつづき）

年記念で忠三郎は言う、「忠三郎が得意の演目を最高の相手役を得て上演する。そして選びぬかれた演者による緊張に充ちた競演が狂言の奥深い魅力のありかをさぐりあてる。これが本会発足以来一貫した主旨でした」と。その意欲的な舞台は着々と成果を挙げ、結実していると言えるだろう。

「二人袴」　袴一領では聟親子（良暢・忠三郎）揃って舅（千之丞）に目通りともゆかず交互に穿く破目。一方が欠ければもう一方はと舅に質され、太郎冠者（忠重）が呼びに立つのをそうはさせじと聟親子のそれぞれの対応は「身共が呼うでくる」と掴み掛からんばかりの聟・良暢の怒声と、「いやいや身共が呼うで参る」と揉み手せんばかりの親・忠三郎の慇懃な物腰、この対照が鮮やかである。親子二人して出ては、伴の後ろを絶えず気遣う忠三郎、実生活をも写すかで微笑ましい。（34分）

「鐘の音」　伴の差初めを黄金の駙斗附にして差させたい主・千作、「鎌倉へ行って附け金の値を聞いてこい」と太郎冠者・忠三郎に申しつける。はて撞き鐘の音とは、と一度は不審するものの太郎冠者、下々にとり鎌倉は相州鍛冶より数多の仏寺で有名とあれば寺々を見物出来る嬉しさ、不審も何処へやらお役大事に喜々として鐘の音を聞く忠三郎の無邪気、大役果たしたつもりの満足で戻れば待ちかねる千作である。しかし声高に「やれやれ大儀であった」のねぎらいもとんだ当て外れ、忠三郎・千作が醸し出す味わいに禅味が感じられた。仲裁人は千五郎。（30分）

「朝比奈」　赤い装束附が象徴する閻魔・千三郎と白いシテ朝比奈・良暢は軽躁と冷静の対立、登場楽は一管。少々くさい程に閻魔の戯画化を意図する千三郎が流石に巧く、良暢が上手に乗る。和田軍の語はまだ硬いが凛凛しさに可愛らしさがあり博多人形の武者、ユウケン留の得意に華があった。（37分・平成十一年十一月五日・大阪大槻能楽堂）

## 西本願寺奉納狂言会

お豆腐狂言を標榜する茂山千五郎家の会員組織「クラブSOJA」の会員限定企画公演である。SOJAはフランス語の大豆、ソジャと発音して下さいということじゃそじゃ。

西本願寺は例年五月二十一日、親鸞聖人降誕会祝賀能に重文の南舞台は使用するが、国宝の北舞台は滅多に使われず、今回の狂言尽くしは空前のことという。見所も国宝白書院の座敷、集う会員は当日百有余人、一期一会の贅沢であろうか。

「三本柱」　折から平成大修理中の御影堂の大屋根へ、中天高くクレーンで資材が運ばれる様が視野に入り、舞台ではシテ果報者・千作の言い付けで正邦・茂・逸平が知恵を絞り、一人二本宛三人で三本の柱材を担げて運ぶ。今昔の、材を運ぶ風景の懸隔を知る由もなく囃子物に浮かれる千作の破顔の美しさ。（24分）

「武悪」　武悪・千五郎、主人・七五三、太郎冠者・千之丞。秋の日が西に傾き、南面する舞台は脇正から陽光が一杯に入り、舞台半分が明るくなる。鏡板の松が俄に姿を見せ、そこへ武悪の幽霊が白装束で立ち現われる。間から出る構図とは逆が露骨な幽霊ぶりで、主人を威すに却って迫力。遣り過ぎに気を揉む太郎冠者が双方を宥め、好アンサンブル。（54分）

「千切木」　仲間外れの理由も分からず徒らに付き纏い足蹴にされる男・あきら、それを知り仕返しを嗾ける女・千三郎、両社機微心得た粘性の演技。対面を糊塗する男も哀れだが、伴の居留守に虚勢を張る男に「留守の所でその様な腕立てが何の役に立つものぢゃ」の女はきつい。しかし感情の起伏が激しいと情にも絆され易いか、キリの「なう愛しの人」は聊かこそばゆい。（33分・平成十一年十一月八日・京都西本願寺北舞台）

## ◆秋から冬へ、舞台点描◆

### 「第四回尾州座」と「金春会」「第廿二回定例能」「山本博之廿七回忌追善能」「宝生会」「能を楽しむ会」

竹尾邦太郎

「宗論」　法華僧・小三郎、角頭巾の上部を前へ垂らし、浄土僧・又三郎は後ろへ垂らし被る。前者は祖父（おおじ）も被る被り方、一徹が仄見えれば後者の心証は軽薄な意地悪、からかい方に毒があり聊かえげつない。キリに興奮の余り経を取り違え、へ妙阿弥陀仏とぞ申しける、と留めるが果して和解成ったのか疑問な程。（40分）

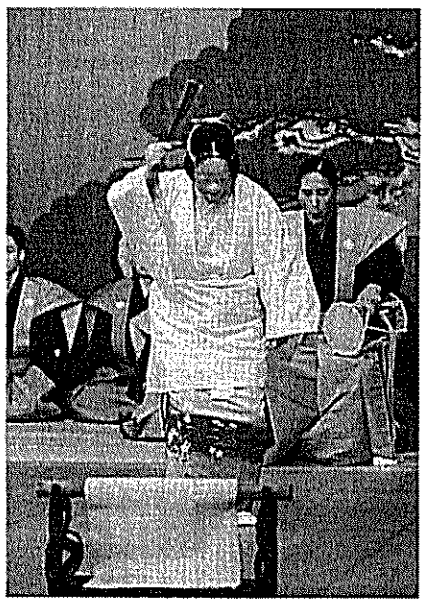
「砧・梓ノ出端」　シテ邦久、五年前の蝋燭能以来の上演。括弧内の異同のほか配役は同じツレ伸吾（清司）、ワキ弥三郎、アイ小三郎（又三郎）、囃子方・六郎兵衛、啓次郎（博朗）、総一郎、龍夫（光長）、地頭・九郎右衛門、主後見・欣司。

前は砧ノ段、へ君が其方に吹けや風、と脇柱へ胸指シに拍子一ツ強く踏むところ、在京の夫への強い思慕の情も切実。段のキリ、へほろほろはらはらはらと、と砧打つ型から右ウケ放心の体に凝然と居るところは一入の寂寥である。中入はシテが入ったあとツレ夕霧・伸吾、へ終に空しくなりにけり、の返シ一杯に二ノ松からシオリのまま幕入りも哀れ深い。

後は面泥眼・無紅縫箔腰巻・白綾壷折で先回と同じ。杖つき千鳥ガケに三ノ松、胸杖に梓の音を聞く妖しさ、内向する怨みは泥眼の方が強そうだが痩女でも見たかった。なお先回と異なり囃子方・地謡・後見は裃着用。（1時間42分・10月28日・尾州座・熱田神宮能楽殿）

「巴」　シテ光洋、面小面・襟白赤・白摺箔着付・赤萌黄段唐織（八橋文）。御神事とて一ノ松から舞台へ入り、へ有難や昔の事も思ひ出して候、と下居合掌から立ってゆくところワキ旅僧・元が不審の言葉を掛ける出遇いの場が良く、へ神前に向ひ手を合はせ、とこの度はワキと連吟に下居合掌すると義仲との縁で得た知遇を喜び、入相の鐘に姿を消す中入まで、沁々した情趣も良い。就中、入相の鐘を聞くところは、少しずつ右ウケてゆくのが自身も立（発）つタイミングを計るかの心にも思われ細心。

後は面・襟・着付は同断、白大口・段唐織（流水ニ菊ト水草文）壷折。へ雪は斑消えに、と右ウケ指廻、へ薄氷の、と左下を見て深田に嵌る馬の足掻きを足拍子に、手綱胸高に引き絞るも虚しく、へこは如何に、と絶望に膝を打つところ、義仲末期の床几の型に技の切れを見せて光洋精彩。長刀捌きも柔らかく、物着あとの独り落ちて、沁々した情趣も良い。（⑥面へつづく）



「砧」　梅田邦久
（杉浦賢次氏撮影）


謹賀新年

植田和光会　植田隆之亮　〒673-0062 明石市松ケ丘4の3 A6-301 電話・FAX〇七八-九一一-三三七四

龍吟会　花傳の会　藤田六郎兵衛　(有)藤田六郎兵衛事務所　〒451-0041 名名屋市西区幅下2-10-9 ロクサンヨイ TEL&FAX 〇五二-五七一-六三四一

大倉源次郎　〒532-0003 大阪市淀川区宮原4-4-2-705 TEL（〇六）六三九七-二三三三

幸友会　涛華能　福井啓次郎　福井良治　柳原冨司忠

桂会　後藤孝一郎　嘉津幸

亀井俊一　忠雄　保雄　実

冨耀会　柳原冨司忠　〒466-0825 名古屋市昭和区滝川町47-147 サザンヒル八事2-703 電話（八三二）一〇二一番

小鼓教室　名古屋市中区栄　朝日神社内（丸善前）

叶石会　河村総一郎　河村真之介　〒466-0021 名古屋市昭和区前山町一丁目二三 電話（〇五二）七六一-四八八二

河村大　〒603-8333 京都市北区紫野下柏野町五九-一 電話（〇七五）四六二-四一一五

飯島佐之六　大輔　〒920-0031 金沢市香林坊2-8-17 電話（〇七六）二六一-四三四〇

谷口正喜　〒602-0915 京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

呉竹会　筧鉱一

長生会　鬼頭喜太郎　好信　愛知県中島郡平和町城西 電話（〇五六七）46-一九六〇番

(株)大阪能楽会館　〒530-0015 大阪市北区中崎西2-3-17

助川龍夫　助川治

金春流太鼓　青耀会　上田悟　〒594-1153 和泉市青葉台2-17-25 電話〇七二五(56)八五二一　名古屋稽古場　名古屋市中区丸の内二-三-一七　那古野神社 電話（〇五二）二〇一-四〇三〇

前川光隆　前川光長　名古屋稽古場　〒616-8065 京都市右京区御室芝橋町一の六　名古屋市東区葵二-13-3 ツインクルガーデン801前野舞台 電話九三一-八八〇六番

大蔵会　大蔵狂言会　大蔵彌右衛門　大蔵彌太郎　大蔵吉次郎　〒177-0045 練馬区石神井台5-22-41-406 電話〇三-三九二〇-六七一七番

茂山千作　千五郎　七五三　千三郎　正邦　茂

野村万蔵　野村万之丞　野村良介　〒171-0062 東京都豊島区南長崎六-五-三 電話〇三-三九五〇-五二八八番

（④面よりつづき）

て行くキリの趣も深かった。（1時間22分）

「苞山伏」　山人・融の昼飯を盗み食いし、罪を山伏・弘之に転嫁していけしゃあしゃあの男・靖浩。「己れは推参な奴の」と山伏を本気に怒らせても相変わらずのえへらえへらだが、術が掛かれば途端に狼狽する他愛のなさは現在もよくある小悪党。更に懲らしめようとする山伏をもうそれ位にと引っ立てる様に行く山人は余りにも善人。（26分）

「融・笏ノ舞」　前シテ穂高。田子は紐を短く手繰って持ち、常座で一セイだけを謡い、田子は框に置き直ぐワキ雅介との問答から、へ古人の心いま目前の秋暮にあり、の連吟がシテとワキの心を通わせる。語すぎてへあら昔恋しや、と下居から右膝音たてがっくり安座は融大臣を匂わせ、へ恋しや恋しやと、と双手をゆっくり上げてゆき双シオリする辺りは少々思わせ振りに思えぬでもない。名所教えは深草山を幕へ、大原は笛柱、嵐山は地裏に見、汐はへ汲まんとて、と天秤棒に首を入れて立つと正面段階横の框外へ田子二つ同時に下ろすと一気に汲む。

後シテは晃実、初冠（巻纓）・面中将・指貫・直衣の殿上人。遊舞に戯れる風情は豪快で大きく、キリへその光陰に誘はれて、と左袖巻き上げ橋懸へ行くと、へ入り給ふ粧ひ、と袖を解き笏を両手に構へスラスラと地の裡に幕へ入るのを、常座で膝を着き見送るワキが立つと右ウケ留。舞あとの多彩な型をきびきびと極めてあれよあれよという間、面白かった。（1時間5分、11月6日・金春会）

「鏡男」　「心を嗜む物でござる」という土産の鏡一面を初めて見る妻・靖浩にはそこに映る顔はよその女。恪気に駆り立て、妻の心を却って見苦しくしてしまう、というのは当て外れもいいところ。声を大の説明は釈明と誤解されてあたふたする男を小三郎、コミカルといった洋風に演じて狂言はコント。（17分）

「朝長」　シテ嘉夫、前は青墓ノ長者。一宿の縁で、自刃して果てた哀れにも儚い若き公達のその跡を弔う母性愛の様な愛情が床しく、語の切々とした悲しみの中にも気品をみせる。へ亡魂幽霊もさこそ嬉しと思ふべき、とワキ僧・雅介にアシラヒ、へかくて夕陽影うつる、と静かに直りつつ右ウケて日脚が移るのを見る辺りも余情。後は朝長ノ幽霊、面今若・黒垂・梨子打・白鉢巻・襟白浅黄・濃緑薤箔（流水ニ花筏文）着付・紋大口・暗青色長絹・太刀。床几の型は馬が跳ね上がるところ、扇を左手に袖をきりりと巻き上げるとズバッと左膝に突き立て右足で二ツ拍子強く踏むのが鮮烈。その後は少々疲労の色が見えた。地に徳三・完治・勘鶴らで強力。（1時間55分・11月12日・第22回名古屋能楽堂定例能）

「景清・小返」　シテ勝一、沙門帽子・茶無地斐斗目着付・茶大口・焦茶水衣の渋い出立が品位をみせ面は髭のあるもの、床几に掛る。松門ノ会釈（六郎兵衛）があり、松門の謡は諦観の趣、それが一曲の基調を成し底流している様に思われる。へ姦し姦し、は顔を背け両耳塞ぐのが今更聞く耳持たぬの心だが、流人としての向後を思い藁屋を出て皆に会うのも観念か。へさてまた浦は、と立って柱に縋り、荒磯に寄する波を左へ首傾げて聞き、へ流石に我も平家なり、とやおら杖を両手に取り出て来るところなど、それと思わせる。

語は杖のまま床几、へ余すまじとて駆け向ふ、と杖を引きそばえるのは追っ取り刀の写実も妙。また、へ景清これを見て、で大小（鉱一・啓次郎）替ノ打切となりシテは右肩脱ぎ返シ句となる小書「小返」は、へ打者（ひらめかいて）、と杖に眼を遣るところに効き、いで我が太刀に一振りくれんと勇み立つ心を反映する。へさもうしや方々よ、の地（六郎・晋ら）の返シに床几立ち、三保谷との格闘はへ手捕にせんとて、と左手広げ挑む様に一・二歩出るとへ兜の鍬を取り外し取り外し、と右手左手と摑む型に討ちてしやまむの気魄。キリはツレ人丸（河村浩太郎）の発って行く気配にシテが見送り、ツレは一ノ松で振り返ってこれが父の見納めとシオリながら幕へ入るところ、ツレが子方であるだけに離愁も徒ならず、子方起用が大成功。浩太郎君もよく応え、前場の対面で父をなじる辺り身につまされた。シオリ留。（1時間15分）

「地蔵舞」　宿が貸せねば笠を置かせて、と占有権を確保し、隙をみて上がりこむシテ旅僧・祐一に洒落っ気。その言い分を種にふざけ散らし、人柄が面白いと禁を破り宿を貸すばかりか寝酒まで勧める宿主・友彦の剽軽。吸う分には飲酒戒に抵触はしまいと酒を楽しむ僧の、「お肴に経を読みませうか」の横着が人を食う。小舞「瓢箪」を舞い、更にへ善哉なれや地蔵坊、から地蔵舞の陽気だが、「アーア鮎の鮮が一尺許くいたい」の台詞ドメが珍しく、意味深長。（28分）

「道成寺・赤頭」　シテ博通、へ（暮れ初めて鐘や）響くらん、と左の褄を取り、ヌキ足に一ツ踏むと乱拍子になるところは、日暮に急く心と鐘への秘めた心の昂り。小鼓は曽和正博、当地に珍しい幸流の乱拍子で、ヤッと短かい掛声の後ろの暫しの静寂が切迫した緊張を生む。長い乱拍子で、中ノ段にヌキ足を踏むと扇左に右の褄を取り、更にワカを謡い込んで踏んでゆき、位が急に進むや地（揃二・順之ら）のへ山寺のや、と右に廻り扇持ち直し大小笛（総一郎・正博・学）が奔騰して急ノ舞になる。

鐘入は鐘引の六郎の好タイミングで鮮やか。後は白般若、着付を観世水文白摺箔から赤地金鱗箔に替えて緋長袴をダイナミックに捌き、のたうつ蛇性を見せる。祈りは就中柱巻、シテ柱に左手を掛け怨念の眼で鐘を見上げキリキリと柱を巻いてゆく凄味。キリは一ノ松に逃れて鐘を見込むや小廻りに二ノ松から膝行、そこに思い適わぬ挫折感をみた。笛は竹市学の披キ、懸命の勤めぶりは立派に大役を果す。ワキ弥三郎の風格は流石。（1時間42分・11月20日・山本博之27回忌追善別会）

「経政」　管弦講に惹かれ現われるシテ経政ノ幽霊・耕司、声はすれども姿は見えぬと不審のワキ行慶・雅介の近く正中へ出、へ常は手馴れし四つの緒に、と下居する。以下にワキへのアシラヒから直ルことがあるが少々ぎくしゃくし、風流公達にしては武骨。クセはへ松を払って、のスミでの型所、右ウケ橋懸の方を見、直ッて左に掻い込んだ扇を返して見る辺り、キリは正先手前、へ（火を消さんと）飛び入りて、と飛び上って左膝着き扇で火を消す型、の具象的な表現がよい。全体は若々しさが欲しかった。（36分）

「萩大名」　シテ大名・友彦、訴訟が上首尾で御機嫌、もはや余計な事に囚われず遊山に行きたいが其処では一首詠めと太郎冠者・融は言う。物に寄えて覚えはしても、そのこじつけが却って記憶力に障り恥を発け曝け出す。面目失墜は短慮のため、の印象でからりとしたおおどかさは余り感じられなかった。庭主の礼之助が変らず渋い味。（31分）

「綾鼓」　シテ萌、ツレ澄子、ワキ勝久、アイ祐一。引き締まった好舞台だった。前シテは少々緊張気味に思えたが（初演と聞く）、クセの後半、へ聞けども聞けども池の波窓の雨、と面伏せて聞く鳴らぬ鼓への哀怨の心持、恻々と胸を打ち精彩。後シテは白頭・大悪尉・厚板着付・紫地金波浮文半切・白地金渦巻文裕法被。へ打てや打てやと責め鼓、と左手で女御の胸倉摑みかからんばかりの忿怒も凄まじく、老いの純情を玩弄された恨みの深さを踏むへ身を責め骨を砕く、の六ツ拍子など恐ろしい程だった。（1時間7分・11月21日・宝生会）

「鉢木」　シテ通成、ツレ道一、地頭・三千春、主後見・永謹と金剛流挙げての布陣なら、脇方も旅僧即ち最明寺・勝久、二階堂・雅介、太刀持・元、薙刀持・宰、従者・信広と高安流挙げての出演。アイ従者・又三郎、早打・小三郎、囃子は学・冨司忠・眞之介で全員一丸となった気持ちの良い充実の舞台、通成颯爽として前後に気魄を見せれば、金入沙門帽子・白綾着付・萌黄大口・紫水衣に勝久執権の品位。武士の心意気に大いに見応え。（1時間44分・11月23日・能を楽しむ会）

「鉢木」　宇高通成
（杉浦賢次氏撮影）

## NHK　放送予定

（平成12年1月～2月）

◉NHK・FM能楽鑑賞（日曜午前8時～9時）

〔1月〕

16日　番囃子「田　村」（金春流）
　　金春　信高ほか

23日　番囃子「邯　鄲」（宝生流）
　　近藤乾之助ほか

30日　狂　言「武　悪」（大蔵流）
　　茂山千之丞、山本東次郎ほか

〔2月〕

6日　「朝　長」（観世流）武田志房ほか

13日　「羅願寺」（宝生流）佐野　萌ほか

20日　喜多流「国　栖」喜多節世ほか

27日　観世流「花　月」山本勝一ほか

◉NHK教育テレビ（土曜日 14:45～15:30）

〔2月〕

12日　能舞「相　聞」　梅若晋也ほか
　　狂言「茶子味梅」野村万作ほか

19日　能　「善知鳥」　観世栄夫ほか


新年謹賀

茂山忠三郎
茂山良暢
〒606-8205 京都市左京区北白川東小倉町28 電話〇七五(七〇一)二〇一一番

狂言やるまい会
野村又三郎
野村小三郎
〒460-0024 名古屋市中区正木二丁目16-25 電話〇五二(三三一)七五五三番

鳳の会
林　和利
井上祐一
佐藤友彦

狂言なのり座
井上靖浩
佐藤　融
野村小三郎

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓　後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五-六-四 電話(二六二)一一八三番

楽諷庵舞台
名古屋市昭和区滝川町四七-八三 電話(八三二)三四一九番

彰諷閣
名古屋市天白区植田西二-八〇二-二 電話(〇五二)八〇五-三三〇一
連絡先 名古屋市緑区鳴海町有松裏40-9 電話(〇五二)六二一-四二三八

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二 若杉ビル(旭市役所南)
電話 〇五六一五③二三四六番
能舞台 電話〇五六一五④〇六九八

能楽の友社

〔おことわり〕
年賀広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

年賀欠礼致します

松盛会
小松勝憲
松舞台
〒511-0801 三重県桑名市西別所一〇六一の五 電話(〇五九四)二二-四五八二

谷田宗二朗
〒603-8302 京都市北区衣笠街道町31-7 電話〇七五(四六三)四八七五番

名古屋狂言共同社
井上礼之助
大野弘之
井上祐一
佐藤友彦
佐藤　融
井上靖浩
今枝靖雄
名古屋市昭和区滝川町54 サンハウス滝川3F井上方 電話052・834・6112

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町２－１
電　話　03(3291) 2488　振替00130－7－3552
〒604－0935　京都市中京区二条通麩屋町東入
電　話　075(231) 1990　振替01010－0－113

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話　(052) 731－7984
ＦＡＸ　(052) 733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　1100円
郵送の場合　１年　1800円
一　部　100円

## 観世清和宗家「道成寺」公演

### 花伝の会　３月28日

花伝の会（藤田六郎兵衛氏主宰）、中部日本放送、中日新聞主催による「道成寺」連続公演は、きたる三月二十八日(火)、観世流宗家・観世清和氏の来演で第三回目の公演を飾る。（番組②面掲載）

とくに今回の「道成寺」公演はウイークデー（平日）の公演ということで、常の能公演に出かけにくい方々に観能の機会をということも配慮されており、是非この機会に緊迫感に満ちた大曲を観能していただきたいと主催者はよびかけている。

なお当日は歌人・馬場あき子氏のお話が予定されている。

## 梅田邦久師「鸚鵡小町」上演

### 4月1日　邦謡会能

邦謡会（梅田邦久師主宰）は、今春四月一日に名古屋能楽堂で開催する第二十二回邦謡会能で、秘曲「鸚鵡小町」が梅田邦久師により上演される。

「鸚鵡小町」は「卒都婆小町」「関寺小町」とともに三小町といわれ、老女物として重く扱われており、小書・杖三段之舞による妙技が注目されよう。

ワキ福王茂十郎、笛、藤田六郎兵衛、小鼓・曽和博朗、大鼓・河村総一郎。主後見・片山慶次郎、地頭・片山九郎右衛門の諸師がつとめる。（番組③面）

## 喜多流能「藤戸」

### 豊田市能楽堂　3月定例公演

豊田市能楽堂の三月定例公演は喜多流能「藤戸」と狂言「六地蔵」が上演される。

「藤戸」は、シテ香川靖嗣、ワキ飯富雅介、ワキツレ杉江元、橋本宰、アイ・三宅右近

笛・内潟慶三、小鼓・福井啓次郎、大鼓・筧鉱一、太鼓・助川龍夫、地謡・塩津哲生、内田安信ほか。

狂言「六地蔵」シテ三宅右近、アド高澤祐介ほか。

午後二時開演。入場料＝正面席／六千円、脇正面席／五千円（学生二千五百円）中正面席／四千円（学生二千円）。チケット取扱＝豊田市能楽堂（TEL0565・35・8200）チケットぴあ（052・320・9999）

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

〔２月〕
18日(金)　名古屋能楽堂定例公演（有料）
20日(日)　名古屋観世九皐会定期能（有料）
〔３月〕
１日(水)　野村萬氏講演会（申込み・抽せん）
11日(土)　朝日カルチャーセンター開講35周年記念能楽会（無料）
17日(金)　名古屋能楽堂定例公演（有料）（番組①面）
19日(日)　第５回恵謳会大会（無料）（番組①面）
26日(日)　壺泉会大会（無料）（番組②面）
28日(火)　花伝の会「道成寺」公演（有料）（番組②面）
〔４月〕
１日(土)　第22回邦謡会能（有料）（番組③面）

### ◆熱田神宮能楽殿◆

〔３月〕
５日(日)　名古屋梅猫会定期能（有料）（番組②面）

## 狂言に見る動物展

### 名古屋能楽堂企画展

名古屋能楽堂企画展は、二月五日から三月二十日まで「狂言に見る動物展」として、名古屋能楽堂展示室で行われている。

この〝動物展〟は名古屋狂言共同社の所蔵品より「動物の文様の狂言装束」六点、「狂言面」九点、「小道具類」など三点、全部で十八点を出展、さらに動物が登場する狂言、「釣狐」(狐)、「靱猿」(猿)、「止動方角」(馬)、「横座」(牛)、「蟹山伏」(蟹)、「蚊相撲」(蚊)が紹介されている。

入場無料、午前九時～午後五時。

## 神戸　若手狂言会

### 神戸文化ホール

神戸文化ホールでは、二月二十九日（火）中ホールで「若手狂言会」が催される。

番組は「萩大名」「鐘の音」「鎌腹」で、野村萬斎、野村小三郎ほか茂山家が誇る若手の新進気鋭が豪華番組を上演。

開演午後六時半、入場料三千五百円（全席指定）

なお番組の最初に「太郎冠者」について解説がある。

## 七世野村万蔵改め初世野村萬氏

和泉流狂言方、人間国宝・七世野村万蔵氏はことしから初世・野村萬に改名された。

なおきたる三月一日、名古屋能楽堂で「狂言の話」講演会が開催される。

## 名古屋能楽堂演能案内

### 朝日カルチャーセンター開講35周年記念能楽会

三月十一日（土）九時始
名古屋能楽堂

能　「枕慈童」　能　「土蜘」
狂言　「太刀奪」　狂言　「骨皮」ほか
〔御来場歓迎〕　問い合わせ　朝日カルチャーセンター　TEL052・261・3866

### 名古屋能楽堂定例公演
### ＝狂言尽くし＝

三月十七日（金）午後六時半始
名古屋能楽堂

狂言　蚊相撲
大名　野村萬（万蔵改メ）
蚊の精　野村万之丞（萬介改メ）
太郎冠者　野村与十郎
後見　橋本勝利

狂言　茶子塩梅
唐人　野村又三郎（妻　野村小三郎）
何某　松田高義
大鼓　河村総一郎
小鼓　福井啓次郎
太鼓　助川龍夫
笛　竹市学
後見　佐藤友彦

狂言　仁王
博奕打　井上靖浩
何某　井上祐一
参詣人　井上禮之助
佐藤鹿島俊裕
鷺見政行
今枝郁雄
今枝靖雄
大野弘之
後見　佐藤友彦

主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・名古屋城振興協会
名古屋市文化振興事業団
協賛　能楽協会名古屋支部

〔入場料〕前売一般三千五百円、学生二千円（当日一般四千円、学生二千五百円）
〔前売券取扱い〕名古屋能楽堂（電052・231・0088）チケットぴあ、市内プレイガイド

### 恵謳会

三月十九日（日）午前九時十五分始
名古屋能楽堂

番組

素謡　東北　松岡和子　黒柳信次
半蔀　古井ミサ子　岩崎喜久子
杜若　成田かづ江　祖父江修一
屋島　黒柳信次　石田啓介　松本千俊

天鼓　葛谷信子　宇野美子
蝉丸　村瀬慶子　大橋和子　小沢光代
隅田川　杉山悠紀子　武田志房　武田文志

舞囃子　高砂　古川美津子　河村眞之介　柳原冨司忠　助川龍夫　藤田六郎兵衛
龍田　武田友志　余谷ふみ子　沢田房枝　村上郁子　河村眞之介　柳原冨司忠　助川龍夫　藤田六郎兵衛
素謡　砧　小川博久　武田宗和　武田志房　小川明宏

仕舞　鶴亀　こうのもまさもり

能　羽衣　島山迪永　飯冨雅介　河村眞之介　柳原冨司忠　助川龍夫　竹市学
後見　中川雅章　武田志房　地謡　須部高橋清沢松本　甫瞭一政千俊　新井小川武田小島　和明宗和一英

素謡　夕顔　久納智子　岩田多喜子
舞囃子　須磨源氏　田口芳子　筧福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
富士太鼓　梛野晴美　筧福井啓次郎　鉱一　藤田六郎兵衛
巻絹　加藤伊都子　筧福井啓次郎　鉱一　助川龍夫　藤田六郎兵衛

素謡　安宅　義経　武田文志　武田友志　祖父江修一　新井和明　松木千俊　小川博久　石川英実　勧進帳　武田志房　地謡　中川雅章　小川明宏　武田宗和　小島一英

仕舞　田村　石田啓介
笹之段　板倉峰尾
舞囃子　経正　杉田敏子　筧福井啓次郎　鉱一　竹市学
源氏供養　岩崎喜久子　筧福井啓次郎　鉱一　竹市学
清経　都築弘子　河村眞之介　柳原冨司忠　竹市学

番外仕舞　実盛　武田志房
玉之段　武田友志
船橋　武田文志

素謡　弱法師　板倉峰尾　武田宗和
阿漕　都築良平　平野和由
番外仕舞　嵐山　三村恵子

御来場歓迎
入場無料

（終了予定　六時半頃）
主催　恵謳会　三村恵子
補佐　武田志房

# 第20回記念大阪城薪能

## 新作能「大坂城」「淀君」能面コンクール

### 読売新聞大阪本社、読売テレビ主催

読売新聞大阪本社では、二〇〇〇年に大阪城薪能が第二十回を迎えるのを記念して、新作能「大坂城」（堂本正樹作・演出）を製作・上演する。この上演にあたってシテ・淀君の能面（前シテ、後シテ二種）を一般から公募し、最優秀作品を当日、舞台で使用する「『淀君』能面コンクール」を開催することになった。

豊臣秀吉との栄華を極めた生活から一転して、大坂夏の陣で徳川方に攻められ、秀頼とともに自害した悲劇のヒロイン・淀君を表現する面を自由な発想で創作してもらう企画である。

新作能「大坂城」と新作能面「淀君」に求めるイメージとして、堂本正樹氏は次のように語っている。

能には、その土地に眠る霊の弔いという側面があり、それにこたえた企画である。

大坂夏の陣で、淀君と秀頼が自害して間もなく、落城の際に救い出され、若い未亡人となった徳川家康の孫娘、千姫は、淀川を下り、姫路の本多家に二度目の輿入れへ。と、夜空に燃え落ちたはずの天守閣の幻があらわれ千姫は過去の幻想の世界に誘われる。輿入れも昔の大坂城の秀頼とのものとなり、迎える姑、淀君との対面。喜びの相舞となる。その最中に突如射込まれる矢。いつか落城の時と変じた大坂城。淀君は怨念の化身となって敵の孫娘たる嫁、千姫を責める地獄。大砲の轟きと炎の包…。夢は醒め、千姫は夜舟の中で呆然と婚礼の舟歌を聞くのであった…。

この淀君の前・後の新作面で、前シテは東の間幸福に酔う、臈長けた誇り高い美貌の母。後シテは極限状況の絶望に、怒りと怨みに燃えた中年の女性。大阪城薪能という大きな空間にめげない繊細でいて力強い造型を…。

〔名称〕第20回記念大阪城薪能、新作能「大坂城」「淀君」能面コンクール

〔主催〕読売新聞大阪本社、読売テレビ

〔応募要項請求先〕（〒530－8551）大阪市北区野崎町五－九、読売新聞大阪本社事業開発部「『淀君』能面コンクール」事務局（TEL06－6366－1848）九十円切手同封

問い合わせも前記の開発部・事務局（担当・酒井・小林）

〔応募方法〕直接搬入＝六月三日（土）－五日（月）十時～六時

場所＝大阪市北区野崎町五－九、読売大阪ビル・ギャラリーよみうり

委託搬入＝六月一日（木）～七日（水）

送付先＝大阪市住之江区南港東四－一－一－九九、ヤマト運輸・美術品大阪公募展営業所内「第20回大阪城薪能『淀君』能面コンクール」係（TEL06・6812・2266）

〔審査と発表〕審査六月中旬、発表＝六月下旬。表彰式＝七月上旬

〔賞〕最優秀＝前シテ、後シテ各一点（賞状と賞金各三十万円）

※第20回大阪城薪能で使用。公演後は返却

優秀＝若干数（賞状と賞金各十万円）

〔審査員〕大槻文蔵（観世流能楽師）梅若六郎（同）堂本正樹（演劇評論・劇作家）中西通（能楽資料館長）五嶋雅徳（読売新聞大阪本社取締役事業局長）

なお入賞作品は七月一日から十七日までJR大阪セルヴィス・ギャラリー（JR大阪駅中央コンコース）を会場として展示される。

〔訂正〕本誌一月号1面、「熱田神宮能楽殿運営委員会」の委員名のなかで「シテ方観世流・泉嘉夫氏」の氏名が脱けておりました。お詫びして訂正いたします。（編集部）

---

## 熱田神宮能楽殿演能

### 名古屋　梅猶会定期能

三月五日（日）十二時三十分始

熱田神宮　能楽殿

**番組**

**狂言**　歌争　佐藤友彦　佐藤融　後見　井上礼之助

**能楽**

**弱法師**　梅若修一　飯冨雅介　後藤孝一郎　鉱一　鹿取希世

百目之舞　後見　梅若盛彦　岡田朗詠　地謡　菊池重郷　立花香寿子　井戸良祐　谷口澄夫　橋本雅一　岡田晃一　井戸和男　梅若基徳

**松風**　熊澤恵美子　後藤孝一郎　笈鉱一　鹿取希世

盛之舞　舞囃子　小松勝憲　井戸良祐　地謡　橋本雅一　池内光之助　池内幸三郎

**鵜之段**　菊池重郷

**杜若**　岡田朗詠

**熊坂**　井戸和男

**能楽**

仕舞　地謡　立花香寿子　池内幸三郎　井上生香　田中均

**玄象**　梅若盛義　杉江元　高安勝久　福井啓次郎　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛

究　師長　岡田晃一　姥　梅若盛彦　龍神　井戸良祐

問　井上祐一

後見　梅若修一　岡田朗詠　地謡　小松勝憲　谷口澄夫　梅若基徳　田中均　池内光之助　井上生香　井戸和男　熊澤恵美子

（終了四時二十分頃）

**附祝言**

主催　名古屋　梅猶会

◎会員券　五、〇〇〇円（全席自由席）

◎会員券申込み先　能楽殿・出演楽師・梅猶会事務所　熊澤恵美子方（〇五二―七八二―六九七三）

---

## 壺泉会大会

三月二十六日（日）午前九時二十分始

名古屋能楽堂

**番組**

**仕舞**　白楽天　八神孝充

**素謡**　杜若（キリ）　黒田博

**仕舞**　小鍛冶　泉雅一郎

**仕舞**（金城中）　高砂　真鍋沙智

**素謡**　清経　加藤ちえ

**舞囃子**　羽衣　杉本佳菜子

**素謡**　葵上　波多野千尋

**素謡**　鶴亀　不破麻佑子

**素謡**　猩々　長谷川惇雄　宮部悟

**仕舞**　東北　小幡宏子　小幡邦彦

**舞囃子**　船辨慶　平野園　河村真之介　後藤孝一郎　竹市学

**素謡**　草子洗小町　長屋文裕　大矢洋美

**仕舞**　葵上　伊藤鉦一

**素謡**　笠之段　片岡なゝ子

**能**

**素謡**　俊寛　成経　伊藤鉦一　康頼　戸松博史　高杉嘉彦　福島雄一郎

**仕舞**　熊野　中川真澄　石川晴子　飯冨雅介　村雨留　橋本宰　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

**仕舞**　雲雀山　中川万里奈

**仕舞**　経正　清水久美子

**舞囃子**　班女　亀井信子　河村真之介　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

**素盛**　内藤悦子　河村総一郎　福井啓次郎　竹市学

**羽衣**　柴田うた子　和合之舞　河村総一郎　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

**独吟**　近江八景　前川修

**舞囃子**　松風　中沢修　盛之舞　笈鉱一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

**菊慈童**　大坪由紀子　大森萬里子　河村真之介　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　竹市学

**素謡**　恋重荷　加藤定子　泉泰孝

**舞囃子**　井筒　前川和子　笈鉱一　福井啓次郎　鹿取希世

**花筐**　嶋田都彌子　笈鉱一　柳原冨司忠　鹿取希世

**山姥**　山本和子　河村真之介　福井啓次郎　助川龍夫　鹿取希世

**養老**　大矢洋美　水波之伝　笈鉱一　柳原冨司忠　助川龍夫　鹿取希世

**賀茂**　泉嘉夫　笈鉱一　柳原冨司忠　助川龍夫　鹿取希世

**附祝言**

主催　壺泉会　泉嘉夫

〔御来聴歓迎〕

西宮市甲陽園目神山町二三―二五
名古屋市昭和区山手通三―八―二
瑞光ハイツ三〇六

---

## 花伝の会主催

### 「道成寺」公演

三月二十八日（火）午後一時三十分始

名古屋能楽堂

お話　馬場あき子（歌人）

**能**

**道成寺**　観世清和　福王和幸　福王茂十郎　是川正彦　守家由訓　大倉源次郎　観世元伯　藤田六郎兵衛

赤頭　中之段数調　無調之崩　五段之舞　間　野村万作　井上祐一

鐘後見　藤井徳三　上野朝義　山本幸弘　上野雄三　上田公威

後見　大江吉井基晴　赤松将董　槙英　地謡　武富康之　浦田大西礼久　杉浦豊彦　藤井完治　大槻文蔵　斉藤信隆　上田拓司

主催　花伝の会

中部日本放送

中日新聞社

〔入場料〕（全指定・税込）A席一万五千円　B席一万一千円

お求めはチケットぴあ・市内各プレイガイド

藤田六郎兵衛事務所（☎052・571・6341）

# 戦後名古屋能楽史 ⑥

竹尾　邦太郎

## 〔第二章〕演能の場を求めて

### （昭和二十二年）

市立第一高女講堂の仮設舞台を使用する目処が立ち、この年から名古屋能楽師協会の活動が軌道に乗り年六回の予定で定式能が催されることになる。

第一回は一月廿六日、「高砂」二世観世喜之・「佐渡狐」井上新三郎・「船弁慶・前後ノ替」二世喜之、の観世九皐会主体。第二回は三月廿三日、「蝉丸」金剛巌夫（廿五世巌）豊鶴一（弥左衛門）・「捧縛」不詳・「海人・変成男子・懐中ノ舞」廿四世金剛巌、の金剛流主体で大鼓に石井流谷口喜代三の来演があった。なお三月四日付中部日本新聞には「中京市民になじみの深かった御園座株式会社（社長磯貝浩氏）では焼け残った旧御園座の骨組をそのまま新しく復興させることになり、改築費八百万円で清水組が着手した。竣工は八月末の予定」と報じられたが御園座開場は十月にずれこんだ。因に四月の名古屋宝塚劇場では十日から十六日まで午前と午後の二回公演で宝塚歌劇月組のグランドレヴュウ「アリババ物語」・歌劇「傀儡船」があり、入場料は税共四十円、三十円、二十円。更に驚いたことには四月十五・十六日の両日の如きは夜六時半より諏訪根自子のヴァイオリン演奏会（料金・指定席四十円、三十円）もあって、如何に劇場舞台が不足していたかが知れるのである。

四月、戦後初めて十四世喜多六平太能心（七十四歳）が帝国芸術院（当時）会員に正式に選任されて能楽界にも曙光が見えてきた。五月十一日、第三回定式能は「百万」橋岡久馬・「千鳥」不詳・「熊坂」橋岡久太郎、の観世流淡交会が主体、ワキに和泉太郎の名が見える。六月に入ると戦前から名古屋に勢力を持つ観世九皐会が独自に演能活動を開始する。場所は奇跡的に戦火を免れた東区舎人町の料亭「かね重」の仮設舞台、案内には市電平田町下車西南約二丁とある。第一回九皐会は六月一日、「隅田川・鉦ノ拍子」二世喜之・「伯母ケ酒」河村丘造・「望月」二世喜之、子方は何れも観世武雄（当代三世喜之）、大鼓に安福春雄、太鼓に金春惣一（当代惣右衛門）の来演があり、大曲のシテ二番を勤めた主宰者喜之の意気込みの程も知れようというものである。

次いで六月廿一日は第四回定式能、「花月」辰巳孝・「素袍落」不詳・「杜若」宝生重英（十七世九郎）、の宝生流一門で、大鼓の亀井俊雄が同道した。これが実質的には装束納の催能となり秋になるまで能楽界は端境期となるが、当時は冷房設備など夢のまた夢、盛夏前に装束納をすると虫干や補修にかかり、能と言えば専ら袴能や素謡会で、今日の冷房完備舞台や新能ブームで寧日無き有様とはまさに隔世の感である。

この盛夏七月に津島出身の詩人野口米二郎が亡くなり、次のように報じられた。「十三日午後二時三十分茨城県結城郡豊岡村の疎開先で胃癌のため死去、享年七十三、氏は愛知県出身、慶應大卒業後渡米、詩人ホーキン・ミラー氏に師事、幾多の詩作を発表、ヨネ・ノグチの名で欧米詩壇に知られ、帰国後慶應大学教授を勤め、またインドの詩人故タゴール翁との交友も有名である。著書には日本詩歌論、或いは英文著書多数ある」と。因に野口米次郎は著名な彫刻家イサム・ノグチの父であり、能にも造詣が深かった。「情景兼ね備はる詩劇の逸品は松風の一番に止めを刺す」で始まる卓抜した能楽論を収める「能楽の鑑賞」の一書が京都の富書店から発行されたのは死の四ケ月前、三月廿五日である。

九月に入り装束始は第五回定式能、日時不明が残念であるがシテは大阪からの来名で、大槻十三の「頼政」と山本博之の「葵上」があった様である。秋も半ば十月廿四日には丸二年振りに名宝劇場で「秋の芸能祭典」と銘打たれた演能会が催される。梅若一門による昼夜二部制の大能で昼ノ部は「松風・見留」梅若六郎（二世実）・「素袍落」井上新三郎・「土蜘蛛・入遠ノ伝・黒頭」梅若六之丞（先代六郎）、夜ノ部は「隅田川・彩色」六之丞・「三人片輪」佐藤卯三郎・「葵上・梓ノ出」六郎、で好評をもって迎えられたという。

十月廿六日、第六回名古屋能楽鑑賞会が午前午後の二部制で行なわれ、一部は「小袖曽我」小島芳雄・氷島誠二・「融」観世清寿（後に寿夫）、二部は「松風・戯ノ舞」観世華雪・清寿・「安達原・黒頭・急進ノ出」観世喜之（二世）、であったが狂言など詳細は不明である。十一月九日には本年度第二回九皐会が舎人町「かね重」舞台で行なわれ先回同様二世喜之の「善知鳥」「紅葉狩」の独演二番、狂言は井上新三郎の「寝音曲」、大鼓は二番共亀井俊雄だった。この年最後は十一月十五日、第六回定式能は宝生流で「鉢木」重英・「狐塚」不詳・「乱」英雄、仮設舞台の不備不便を耐え忍び昭和廿二年も暮れる。

（つづく）

## 歌村鴻助さんを悼む

歌村さんは異色の狂言役者だった。家系から言えば名古屋狂言共同社の主流の一であったろうが常に傍流であったのも、なりわいに関わる方の比重が大であったせいだろう。

歌村さんは初世井上菊次郎の四男で後年歌村家へ入った彦四郎（一八九一―一九六三）の息、先年死去した三世菊次郎の従弟である。狂言は初世菊次郎と共に共同社の創立メンバーであった河村鍵三郎に師事したというから、その息河村丘造（一八九五―一九七九）のおとうと弟子に当たろう。古い番組に拠れば、熱田神宮能楽殿が竣工した翌昭和三十一年秋、和泉流先覚物故者追善狂言会で「仁王」のアド、現在の朝日狂言会に移行してゆくと思われる昭和三十二年の第一回狂言の夕の「蚊相撲」では蚊ノ精、三十三年の第二回では大曲「毅猿」の太郎冠者を、何れも歌村鴻一郎の名で勤める。

以後しばらく空白期があるが昭和四十六年から六十一年に掛けて、この度は歌村鴻助の名で番組に現れる。当時、夏の朝日狂言会、秋の名古屋和泉会の止狂言には「首引」「仁王」「釣針」「千切木」「茸」「若市」などいわゆる大勢物が出たが、その立衆の一人だった。立衆とはいえその素姓から滲む存在感は軽い役ならばこそ一頭地を抜いていた。刈り込んだ半白の角刈りの風貌から受ける印象は、酸いも甘いも噛み分ける粋人といったものだった。事実、人当たりは柔らかく、知らぬ者同士を引き合わせる折の人を逸らさない話術は見事で、狂言共同社のボランティアを自称するのも宜なるかな、狂言を離れても味噌御田（おでん）の名店「つる軒」主人としての声望は狂言に培われたこの資質によるだろう。一方でまた狂言共同社を愛してやまない歌村さんはその芸風を自負し、次のように語って硬骨漢ぶりを示しもした。

「現在、和泉流の宗家をしておられる和泉元秀さんは、加賀藩お抱えの和泉流三宅派の出身で、宗家の山脇家とは血縁はなく、また芸風も尾張藩の和泉流とはいささか異なるところがある。尾張藩の和泉流狂言は、名古屋狂言共同社がその流風と、重要な郷土の文化財である伝書雲形本、演能のための装束、面、小道具ともども共同社結成以来、五世代にわたり、かろうじて伝えてきた」と（中日紙コラム「回転いす」85・5・21）。

享年八十一歳、謹んで御冥福をお祈りする。

（竹尾邦太郎）

---

## 第22回　邦謡会能

四月一日（土）十二時半開演

名古屋能楽堂

仕舞

放下僧　今沢美和
東北　須部甫
小鍛冶　清沢一政

地謡　高島良一　青木道喜　武田欣司　本田勲

能

巻絹

武田大志　上野嘉宏

間　飯富雅介　松田高義

後見　今沢美和　片山清司

地謡　河村真之介　曽和尚靖　橋本忠樹　高島良一　本田勲　須部甫　助川龍夫　大野誠　味方玄　片山伸吾　片山慶次郎　古橋正邦

狂言

花争

野村又三郎　野村小三郎　後見　松田高義

仕舞

邯鄲　片山伸吾
雨月　片山慶次郎
藤戸　片山九郎右衛門
鵜　片山清司

地謡　武田大志　橋本磯道　武田邦弘　上野嘉宏　藤田六郎兵衛

能

鸚鵡小町

梅田邦久

福王茂十郎　河村総一郎　曽和博朗

後見　青木道喜　片山慶次郎　武田欣司

地謡　清沢一政　分林道治　味方玄正　古橋邦　橋本磯道　片山清司　片山九郎右衛門　武田邦弘

附祝言

（終了五時頃）

主催　邦謡会

（入場料）全館自由席　五千円
前売券取扱所　邦謡会（052・841・4632）、チケットピア市内プレイガイド（052・320・9999）

---

## 栄謡曲クラブ　発足20周年記念大会

### 2月6日　栄能楽舞台で

能楽愛好者によるつどい「栄謡曲クラブ」は栄能楽舞台を主会場として月例会を開催、ことしで二十周年を迎えたのを記念して、さる二月六日午前十時から、ゆかりの栄能楽舞台で「月例会発足二十周年記念大会」を開催、当日は、素謡「砧」「木賊」「景清」など七番、連吟、仕舞、独吟、独調など約四十人が参加、午前十時から午後六時まで日頃の研鑽の成果を披露、盛会であった。

なお、栄謡曲クラブ世話人の三口謙介氏は次のように同クラブの二十周年の一文を本紙に寄せている。

### 20周年に当たって

三口　謙介

栄能楽舞台の謡初めをと、親しい謡い仲間がつどい神歌を謡った。昭和五十六年正月のことでした。いっそ毎月謡おうかと盛りあがって発足したのが栄謡曲クラブ月例会です。以後営々と継続。今年二月をもって発足二十年を迎え、去る二月六日に、同舞台において記念大会を催しました。素謡、独吟、連吟、仕舞、独調と多彩な番組で、見所は満員の盛況でした。

栄謡曲クラブは謡歴、社中、所属会派をいっさい問わず、（観世流主体）誰でも自由に参加出来、肩苦しくなく、ただ能楽を楽しもうというのが趣旨。グループの調和を乱してはならないというのが唯一の条件です。

芸は真摯に、座は和やかに。をキャッチフレーズに、同好者の厚い支持を得て、これまでに舞台で共に謡った者、総数三千五百名を越えました。

毎月の謡会は、リタイヤしない生活づくりへの励みになっているようです。謡会のあとの懇親のひとときは、それぞれ豊富な人生経験のふれあいは貴重であり、にぎやかで楽しいものです。

栄謡曲クラブ記念大会

---

## 第四回研究発表会

大阪能楽養成会

大阪

大阪能楽養成会では、第四回研究発表会を二月二十九日（火）六時から北区中崎西の大阪能楽会館で開催する。

同会は、昭和三十八年の発足以来、今日に至るまで養成事業を行い、多くの能楽後継者を舞台におくり出しており、この研究発表会は、現在養成中の生徒の研修成果を発表する場として、毎年四回行われている。

番組は、仕舞「東北」「葛城」能「杜若」舞囃子「草子洗小町」「源氏供養」狂言「茶壺」

---

これからの検討課題として、せっかくながい年月謡に親しんで来たのに身体の具合で正座が困難になり、こころならずも謡を断念してしまう例が多く残念なことです。謡は正座して声を出すものという固定観念はひとまず横に置いて、椅子を使用するとか、むしろ車椅子の人でも謡えるぐらいの環境を考えてもよいのではないかと思っています。

二十周年といってもただの通過点。これからも変わらず謡会を続けます。人生まだまだ、これからという人、一緒に謡いませんか。

## 瓢扇会二十五周年記念大会

3月26日　浅井能舞台

東芝・中部支社謡曲部の会員で組織する瓢扇会（荒船泰成会長）は、西暦二〇〇〇年という記念すべき年に創部二十五周年を迎え、きたる三月二十六日（日）、千種区今池の浅井能楽舞台で「瓢扇会二十五周年記念大会」を開催する。午前九時半始。

番組は「瓢扇会讃歌」の発声で始まり、素謡「弱法師」「千手」「東北」「百萬」「三井寺」「俊寛」「盛久」舞囃子「桜川」ほか仕舞八番。出演約三十名、御来場歓迎。

# ◆去年今年の舞台から◆

## 「大阪梅猶会」「壷泉会」「第十一回涛華能」と「名古屋能楽堂正月特別公演」

竹尾邦太郎

「遊行柳」　シテ善高、面阿古父尉・襟浅黄・小格子厚板着付・茶水衣、数珠を持つ。ワキ遊行僧・茂十郎の一行に出遇い西行ゆかりの老柳に案内するところ、〽人跡絶えて荒れ果つる、蕭条とした原野を秋風が吹き過ぎる風情を描写する地（修一・光之助ら）が上々で、シテの老柳への思いも深い。老柳の塚の鬱金色引廻シは如何にも曰くありげな有り難い佇まいを見せ、念仏を授け授かるワキとシテが互いに下居合掌し、シテが塚へ中入するところは閑寂味も一入である。

後シテは面雛尉・白垂・柳寂風折烏帽子・茶大口・暗緑色狩衣、〽忽然と現れ出でたる、床几に掛かる姿は枯淡の趣、面はクモリがちに観想の能で成仏出来た老柳ノ精に似つかわしい。柳にまつわる故事のクセは〽暮れに数ある、と拍子一ツ、沓の音に耳を澄ますところ小鼓（達志）も旨く反応し、〽小簾の隙、と翳シ正先、〽手飼の虎、と左下を見遣り静かに右へ曳くところは愛玩するペットを慈しむ心も優しい。寂び寂びした序ノ舞、キリは〽漂ふ足もとも、とよろよろ前へ出て踏み止めるところ、〽西吹く秋の風、と右袖口を抓み遠く暮へ見るところなど印象に残った。（1時間40分）

「薬師」　法螺の競い合いは両者の気合いが勝負、都方・善竹隆司、鎌倉方・隆平の兄弟が息の合ったところをみせ、繰り広げる舌戦の活きのよさは若さの爽快である。因に都方は薬師の成分は山に棲む鯉・土用に降る雪の黒焼・幽霊の陰干し、鎌倉方は木に生る蛤・海の底を走る鴉・蚯蚓の胴骨。（29分）

「山姥」　百万山姥の異名を取る都の遊女（ツレ立花香寿子）は善光寺詣に険路を敢えて修行の道と捉え、強い求心力で深山の妖精である本物の山姥（シテ井戸和男）に惹かれてゆき、山姥の山廻りに輪廻転生の世界を眼前にさせられて人間の矮小さを知らされる、というのであろうか。

前シテは面深井の何ともない女人、〽すはやかげろふ夕月の、と左膝着いた構えで右上方を見るところ、冷え冷えとした山の気配を感じさせて後シテの登場を強く暗示する。後シテは面やや赤っぽい山姥・山姥鬘・鱗箔着付・紺ト銀連続大三角文半切・紺地金ノ棒縞ニ飛雲三巴雲板散シ文厚板壷折、半切の斬新なデザインが目をひく。〽恐ろしや、とツレ、〽恐れ給ひそとよ、とシテ、その掛合が進んでゆくところ面白く、シテがツレに謡を勧めるところへ〽一声の山鳥羽を搏く、のシテの打ち合わせが切っ掛けとなり和らぐ気分はシテが舞い出すことになる。鹿背杖を扇に替えると〽千丈の峯、と床几に掛り、眼目のクセは〽法性峯挙えては、と目付柱を見て拍子二ツ、〽金輪際に及べり、は床几立って半身に扇逆手で指シて拍子一ツ強く踏む。立廻は再び鹿背杖、杖の突きようも強々と如何にも険路を往く態である。〽帰る山の、と再度扇に替えるとキリはノリ込拍子から飛び返り、〽谷に響きて、と扇高く翳して見下ろすと鋭く面使ヒするのが山姥の本性を見るようだった。地（盛義・生香ら）が素晴らしく、ワキ弥三郎も立派。（1時間35分・12月5日・梅猶会・大槻能楽堂）

「胸突」　何某・又三郎、貸金の取り立てに借人・小三郎と諍いになり、はずみで突き倒せば肋骨を打ち折られたと大仰に騒ぎ立てられ途方に暮れ、挙げ句は利はおろか元までチャラにさせられる。逆の立場で当代は「腎臓を売れ」とまで迫る取り立て人も出たという金融業界のえげつなさだが、笑いごとでは済まず教訓として受け取らなければならないのは情け無い。「最前から痛い痛いと言うは偽り」とぬかす狡智な小三郎のドライな小面憎さが中々。（13分）

「山姥・白頭」　ツレ百万山姥・雅一郎の従者ワキ雅介、名宣にツレの母の十三回忌で善光寺へ詣る由を言うのが下掛と同じで珍しい。シテ嘉夫、前は霊性を帯びた面霊女か、〽霊鬼これまで来たりたり、とワキにアシラフ辺りそこはかと凄味をみせる。〽すはやかげろふ、と下居に右へ見、〽（暮るるを急ぐ）深山辺の、と静かに直ルと地（文蔵・信隆ら）の返シに立ち、腰を捻りスミへ出て廻り込むと位進み中入地一杯に聞いて橋懸はすらすらと入る。アイ里人は友彦、先の梅猶会のアイ（大蔵流善竹隆司）の「山姥には団栗」に非ず「山姥には山寺の鰐口がなると申す」の方が幾らからしいが、恐ろしい雰囲気の能に此の間狂言の荒唐無稽がツレとワキ一行にとっては救いであるだろう。

後シテは赤っぽい面山姥・白頭・竹文濃緑地半切・竹文白地唐織壷折に葉付鹿背杖。〽青巌の形を削りなせる、と一ノ松から幕へ見込み、〽水また水、と杖を突き舞台へ入る。〽一声の山鳥、は打ち合わせ、杖を扇に替え床几のクセは〽金輪際に及べり、も扇逆手に下を指ス型、立つと上ゲ端あと、〽休む重荷に扇を貸し、と扇を肩にする具象の型が美しい。立廻は鹿背杖を担ぎ合膝（ガッシ）のところに山廻りの辛さをみせる。キリは〽暇申して、と名残を惜しむのを杖を手操りつつ立つところに余情。地の裡に一ノ松へ抜け、地との掛合に二ノ松から再び一ノ松へ、〽月見る方、と頭ヲ取り（写真）、〽冬は冴えゆく、とする正中へ戻る。〽雪を誘ひて、と面切り、〽廻り廻りて、と杖を両手にくるくる小廻りして〽（妄執の雲の）塵積もって、と正中の胸杖姿に存在を示すのも立派。其処から〽見るや見るやと、と乗込拍子は峯に翔る力も限界か、〽谷に響きて、と杖を捨てると〽あるよと見えしが、と位進み三ノ松へ、幕を見て留拍子、山の妖精鬼女と看做される山姥が山の賢者と思えたのは嘉夫の資性。（1時間42分・12月18日・壷泉会・熱田神宮能楽殿）

「関寺小町」　重習別伝、当地二百七十七年ぶりという。

江州関寺の七夕祭、笹飾りの短冊に歌を詠む稚児の上達を願いワキ住僧・関（金襴角帽子・襟浅黄・白綾着付・白大口・小豆色水衣）は歌の上手と聞くシテ老女・恭行（面姥・姥鬘・襟白浅黄・霞文白摺箔着付・茶地秋草文縫箔腰巻・萌黄地桜華散シ文唐織壷折）を訪ねる。「優しくも幼き人の御心に好き給ふものかな」、と同行する稚児（子方・山中景昌君）の姿に心を許す老女が、誘導尋問めく住僧との問答に小町の成れの果てと心を開いてゆくところ、スリリングと思える程の面白さ、シテとワキの絡み具合が上々で、就中〽忘れて年を経しものを聞けば涙の故事の又思はるる悲しさよ、とシオルところ笛と小鼓（大五郎・啓次郎）が寂々とアシラフのが切ない。クセはへせめて今はまた、と老いを感じ初めた頃を追懐してシオルところが悲傷一入なら、関寺の鐘を聞く上ゲ端あと、好ける道とて短冊を手に取り墨を磨る態は筆を染めて一筆とはゆかず二度に短冊へ書きつけるのも老いの弱り、恭行沁々とみせる。

後場、七夕祭が気懸かりな稚児に住僧が渋る老女を寺にいざなうところは、〽糸竹の、と薬屋を出ると、〽天つ星合の、と常座へゆき、〽傷はしや、と粗衣を恥じて床几に掛かる。老女に酒を勧め（写真）舞う子方景昌君の好演はきびきびした舞も鮮やか。それに刺戟され触発されて杖で舞い出す老女、途中薬屋に杖を立てかけ扇に替えるが文字通りの老女の足の運びである。スミで掬うような扇の型があり、クツロギはシテ柱に手を当てて沈み下居したが立ち上がるのに頽れ、再び立って舞い上げるが如何にも痛々しい。杖を置き、〽あら恋しの古やな、と下居にシオルと暁の鐘をしんみり聞く風情の寂寥感。切地（六郎・晋矢ら）前、扇を懐中して杖を取り、後見・勝一の介添で立つと〽暇申して、と稚児と住僧らに黙礼して帰ってゆくところも哀感にただならず感情移入させられる。薬屋に入ると床几に掛かり、切地一杯にシオリ解き薬屋を立ち出て大小（忠雄・啓次郎）のトメ、老いの現実の哀しさ、ひたすら寂しかった。因に恭行の伯父亀堂万三郎（一八六八―一九四六）が「関寺小町」を勤めたのは五十七歳、兄の先代六郎（一九〇七―一九七九）は六十八歳、恭行は八十二歳で五月の梅若祖先祭に次ぎ二度の勤めの異例。披曲の時宜は役者の心技体の体に考慮の余地ありとも思えるが、何分「関寺小町」は最深奥の秘曲、家柄以外は許されず、遠慮して舞い残すともいう。軽々に口を利くのも憚られるかもしれない。（1時間46分・12月18日・福井啓次郎古稀記念第十一回涛華能）

「翁」　シテ正宜、ツレ荘太郎、昨年八月に続き二度目の出勤である。千歳は直垂の露を取り膝を立て替えて立ってゆくところ、凛凛の気魄に若さ。翁は神妙、「地ノ拍子」のあと位進み、正先で左袖被き扇を面に当てる型が極り美しい。三番叟・高義は緊張が過ぎて揉ノ段は力余る感じだったが鈴ノ段は調子に乗る。（1時間12分）

「胼」　シテ太郎冠者・又三郎、川渡りに背負えと命じられてあかぎれを盾に断われば、アド主・小三郎はあかぎれを詠み込み歌を作れば逆におぶってやると言う。掛け言葉を巧みに折り込んだ古歌立ての小癪に主は太郎冠者を川へ投げ出して鬱憤を晴らす。「盆の窪まで濡れた」といけしゃあしゃあのクサメ留メの又三郎が流石に老練。（10分）

「羽衣・和合ノ舞」　ワキ漁夫白龍・勝久、折角ワキツレ二人を伴うも三保の長閑な春景を描写するワキツレとの連吟部を全部省略し、一ノ松の名宣だけなのは勿体ない。シテ勘鬘、面増・風風立天冠・襟白二・小葵文白摺箔着付・赤地青海波地紋ニ磯馴松ト帆掛舟文縫箔腰巻、裳着胴姿のしおらしさに差じらいの風情も上々。物着に白地長絹を着ると喜色は伸びやかにクセ舞から和合ノ舞が麗わしい。〽三五夜中、とスミで月ノ扇、〽七宝充満の、と招キ、面使ヒに正先へ出て下居、〽国土にこれを施し給ふ、と框外に扇を差し出すところなど味をみせる。〽時移り、二ノ松へ抜けると〽三保の松原、とカザシて下界を見渡し、〽愛鷹山や、と袖を被くと大小太の流シにつれ小廻りからそのまま後ろ向きに幕へ入る（写真）のが鮮やか、素晴らしかった。（59分・1月3日・名古屋能楽堂正月特別公演）

「山　姥」

（杉浦賢次氏撮影）

㊤「関寺小町」㊦「羽衣」

（杉浦賢次氏撮影）

## NHK放送予定

平成12年2月～3月放送予定

◉NHK・FM能楽鑑賞（日曜日午前8時～9時）

［2月］

| | | | |
|---|---|---|---|
| 20日 | 喜多流 | 「国栖」 | 喜多　節世ほか |
| 27日 | 観世流 | 「花月」 | 山本　勝一ほか |

［3月］

| | | | |
|---|---|---|---|
| 5日 | 観世流 | 「船橋」 | 野村　四郎ほか |
| 12日 | 宝生流 | 「三山」「野守」 | 渡辺　三郎ほか |
| 19日 | 金春流 | 「鵜祭」 | 本田　光洋ほか |
| 26日 | 金剛流 | 「藤戸」 | 金剛　永謹ほか |

## 能楽一口メモ

### ◉三英傑と能楽

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三人の武将は色々な形で能楽に関わっています。

信長は、将軍の新しい屋敷の完成を祝って、観世・金春両方が参加する能を開いたり、丹波猿楽の梅若太夫を後援していました。

秀吉は、朝鮮出兵のさなか、肥前名護屋の地に数十人の能役者を呼び寄せて演じさせたり、自分の手柄を描いた新作の能を作らせたり、秀吉自ら能の主人公であるシテの役を演じることもあるほど能に熱中していました。さらに、能楽四座に扶持や配当米を与えるなど、能楽はこの時期、急速に発展します。

家康も、自らを祝うための能を二条城で開くなど、能好きだったことが知られています。家康は少年期から能楽に親しんでいたため、その鑑識眼はかなり高かったようです。

### ◉尾張藩と能楽

徳川御三家のひとつ、尾張藩では早くから能楽が盛んで、名古屋城内はもちろん、江戸の藩邸でも盛んに能が演じられていました。

三代藩主綱誠、六代藩主綱友、七代藩主宗春などは特に能楽に力を入れ、江戸中期には尾張藩に、金春・宝生・金剛の三流が共存しました。さらに江戸後期に観世流も加わって、シテ方四流がそろう他の藩にはない活況ぶりでした。

また、ワキ方や笛方など各役にも、複数の流儀が存在したというのが、尾張藩の能楽の特徴でした。（名古屋能楽堂公演案内より）

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話　03(3291) 2488　振替00130－7－3552
〒604－0935　京都市中京区二条通麩屋町東入
電　話　075(231) 1990　振替01010－0－113

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話　(052) 731－7984
FAX　(052) 733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## 名古屋能楽堂定例公演

## 平成12年度 特別公演など8回

## 市民能楽セミナーを開催

名古屋能楽堂の定例公演は、名古屋市、名古屋城振興協会、名古屋市文化振興事業団による「能楽普及事業実行委員会」主催で、能楽協会名古屋支部の積極的な協賛により平成九年から行われ、充実した演能で東海地区はじめ北陸、また東西からの来観もみられ、期待も高まっている。

実行委員会では、このほど平成十二年度の定例公演の開催日程および演能内容を次のとおり発表した。

十二年度は、十一月が第三十回記念として特別公演、能「安宅」上演、一月は正月特別公演として、能「大原御幸」、狂言「松囃子」の上演。また十三年二月公演は、市民能楽セミナーの特別企画として、入場料も低くして多くの人によびかける。

〔五月公演〕五月十九日（金）午後六時三十分開演
能「錦木」衣斐正宜（宝生）、狂言「磁石」松田高義（和泉）
〔六月公演〕六月十六日（金）午後六時三十分開演。
能「葵上」泉嘉夫（観世）
舞囃子「須磨源氏」前野郁子（観世）
狂言「腰折」佐藤友彦（和泉）
〔七月公演〕七月二十一日（金）午後六時三十分開演。
能「砧」長田驍（喜多）
狂言「鐘の音」井上靖浩（和泉）
〔九月公演〕九月二十二日（金）午後六時三十分開演。
能「千手」本田光洋（金春）
狂言「飛越」野村又三郎（和泉）
〔十一月・三十回記念特別公演〕十一月十日（金）午後六時三十分開演。
能「安宅」久田勘鶴（観世）、
狂言「痩松」大野弘之（和泉）
〔一月・正月特別公演〕一月三日（水）午後二時開演
能「大原御幸」梅田邦久（観世）
狂言「松囃子」井上祐一（和泉）
〔二月公演〕二月十日（土）午後二時開演
＝市民能楽セミナー＝
能「土蜘蛛」古橋正邦、武田邦弘（観世）
狂言「文荷」佐藤融（和泉）
〔三月公演〕三月三十日（金）午後六時三十分開演
＝狂言尽くし＝
狂言「入間川」佐藤友彦（和泉）
狂言「隠狸」野村万作（和泉）
狂言「闘罪人」野村小三郎（和泉）
前売り＝一般三五〇〇円、学生二〇〇〇円（十一月と一月の特別公演は前売り四五〇〇円、学生二五〇〇円）、二月の市民能楽セミナーは前売り一般一五〇〇円、学生一〇〇〇円、当日券はいずれも五百円高。
前売り券取り扱い＝名古屋能楽堂（TEL052・231・0088）チケットぴあ（052・320・9999）市内プレイガイド。

能「葵上」

## 喜多流　粟谷　菊生氏
## 芸術院賞を受賞

日本芸術院は三月十日、今年度の日本芸術院賞の受賞者を内定、能楽界から喜多流シテ方・粟谷菊生氏の芸と能楽界に尽くした業績が顕彰され受賞した。

粟谷氏は大正十一年生まれ。大正十四年初舞台、平成六年には喜多流では百八十年ぶりという「伯母捨」を演じた。平成三年観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞。

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

〔3月〕
26日(日)　壺泉会大会（無料）
28日(火)　花伝の会「道成寺」公演（有料）
〔4月〕
1日(土)　第22回邦謡会能（有料）（番組①面）
9日(日)　名古屋観世会定式能（有料）（番組①面）
16日(日)　邦謡会春の会（無料）（番組②面）
22日(土)　青陽会定式能（有料）（番組②面）
23日(日)　久田観正会春季大会（無料）
29日(祝)　中日能（有料）（番組③面）

### ◆熱田神宮能楽殿◆

〔4月〕
2日(日)　名古屋猶調会春の大会（無料）（番組②面）
23日(日)　和泉流宗家熱田狂言ライブ（有料）

## 第22回 邦謡会能

四月一日（土）十二時半開演
名古屋能楽堂

仕舞
放下僧（小歌）　今沢美和
東北（クセ）　須部甫　　地謡　高島良一　青木道喜　武田欣司　本田勲
小鍛冶（キリ）　清沢一政
能
武田大志　上野嘉宏
巻絹
問　飯冨雅介　松田高義　　地謡　河村真之介　曽和尚靖　助川龍夫　大野誠
後見　今沢美和　片山清司
狂言
花争　野村又三郎　野村小三郎　後見　松田高義
仕舞
邯鄲（アト）　片山伸吾
雨月（中入前）　片山慶次郎
藤戸　片山九郎右衛門
鵺　片山清司
能
梅田邦久
鵺鳥小町　福王茂十郎　河村総一郎　曽和博朗
後見　青木道喜　片山慶次郎　武田欣司　地謡　清沢一政　分林道治　味方玄　古橋正邦　橋本磯道　片山清司　片山九郎右衛門　武田邦弘　藤田六郎兵衛
（終了五時頃）
附祝言
主催　邦謡会
〔入場料〕全館　自由席　五千円
前売券取扱所　邦謡会（052・841・4632）、チケットぴあ（052・320・9999）市内プレイガイド

## 名古屋観世会定式能（三回）

四月九日（日）十二時半開演
名古屋能楽堂

能
采女（美奈保之伝）　片山九郎右衛門
問　山本順三　中村弥三郎　広谷和夫　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
後見　山本博通　片山清司　井上靖浩
地謡　松山幸親　加賀敏彦　清沢一政　古橋正邦　久田勘鶴　梅田邦久　片山慶次郎　武田邦弘
仕舞
難波　久田勘鶴
西行桜　片山慶次郎
昭君　片山清司
地謡　本田熱　中川雅章　小島一英　高橋暁
狂言
内沙汰　井上祐一　佐藤友彦
後見　井上靖浩
能
子方　山本麗晃
姥　山本博通
天女　古橋正邦
山本勝一
国栖（白頭）　高安勝久　杉江元　椙元正樹
問　佐藤融　今枝靖雄
後見　小島一英　片山慶次郎
地謡　笶久田舜一郎　鉱一　鬼頭喜太郎　竹市学　外山圭一　高島良一　須部甫　祖父江修一　中川雅章　片山清司　梅田邦久　武田邦弘
（終了五時前頃）
附祝言
（有料）
当日券八千円（自由席）
（予約受付あり、枚数限定）
問い合わせ＝出演楽師宅
主催　名古屋観世会

# 狂言方 井上禮之助氏 逝去
## 2月16日 告別式を執行

和泉流狂言方・井上禮之助氏は、藤田保健衛生大学附属病院に入院加療中であったが、黄だんのため二月十四日午前七時四十五分逝去された。享年八十五。

通夜は二月十五日午後六時から、告別式は翌十六日午前十時より豊明市栄町南館の豊明愛昇殿で執り行われた。喪主は長男・禄資氏。

故井上禮之助氏は、大正四年一月、狂言師・井上新三郎氏の長男として名古屋に生まれ、和泉流名古屋狂言共同社のメンバーとして活躍、昭和五十七年五月アメリカ（ニューヨーク）能楽公演に参加。昭和六十四年八月野村狂言団ソ連公演に参加。

日本能楽会会員、重要無形文化財（能楽総合）保持者、能楽協会名古屋支部相談役として貢献。

昭和十年第三十九回CBCクラブ文化賞（くちなし賞）を受賞。

また地元の豊明町（現豊明市）の町会議員を昭和二十六年から四十六年まで五期二十年勤め、昭和三十八年五月から一年間豊明町議会議長の要職もつとめた。（関連記事③面掲載）

## 各地だより

### 能「隅田川」
4月2日　廣田後援会能

**都京**　金剛流・廣田後援会（廣田陛一師主宰）は、四月二日（日）金剛能楽堂で第九十四回後援会能を開催する。午後一時半始。

番組は、舞囃子「羽衣」（廣田陛一）狂言「蝸牛」（茂山千之丞）、茂山あきら、茂山七五三）能「隅田川」（シテ廣田幸稔、ツレ弘田美穂、ワキ中村彌三郎、ワキツレ森本幸治、笛・森田保美、小鼓・曽和正博、大鼓・河村大、後見金剛永謹、広田奈三、広田泰能、地謡・松野恭憲、今井清隆、宇高通成、谷口宗義、塚本嘉樹、種田道一、松野洋樹、今井克典。）

後援金剛会、京都新聞社、入場券売り四千五百円、当日券五千円。学生券一千円。

取扱所＝金剛能楽堂（電〇七五・二二一・三〇四九）広田後援会（電〇七五・七八一・一八八五）

## 熱田神宮能楽殿演能
### 名古屋　猶諷会春の大会
四月二日（日）九時三十分始
熱田神宮能楽殿

素謡　羽衣　酒井初子　花村とし子
井筒　河合敦子　梅若盛彦
雲林院　菊池敏子　岡田晃一
隅田川　立花香寿子　久次米宏祐　井戸和男
遊行柳　北田麻綺子　池内光之助
砧　梅若恭徳　藤崎雅春　梅若修一
能　熊野　橋本雅一　鈴木八寿　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛　村雨留　読次之伝

## 長生会が伊勢神宮春季奉納

観世流大鼓方、鬼頭喜太郎師主宰の長生会はきたる四月六日、伊勢神宮内苑能楽殿で春季神楽祭を奉納する。長生会の奉納は、社中一同により毎年四月に行われており、今回は四十二回目となる。

午前十一時始。囃子十二番、仕舞　独鼓など十五番。

## 篁陰能面研究会能面展
4月25日から津・三重画廊で

篁陰能面研究会（工房：アトリエ晤々庵、津市北丸之内一八三）は、四月二十五日（火）から三十日（日）まで六日間、津市中央一八―一九の三重画廊三階で「能面展」を開催。約四十点が展示される。

平成十年に市川了一氏（号・篁陰）が能面研究会を結成して初めての能面展である。問い合わせは電〇五九・二二七・八七四四。

主宰の市川篁陰氏は「会員一同精魂こめて作りあげた作品をぜひご高覧賜り、ご高評を頂きたい」とあいさつしている。

## NHK放送予定
（平成12年3月～4月）

◉NHK・FM能楽鑑賞（日曜日午前8時～9時）
〔3月〕
26日　金剛流「藤戸」金剛永謹ほか
〔4月〕
2日　観世流「求塚」藤波重満ほか
9日　宝生流「雲林院」「須磨源氏」三川淳雄ほか
16日　観世流「西行桜」梅若恭行ほか
23日　喜多流「芦刈」内田安信ほか
30日　狂言・和泉流「千切木」野村万之介ほか
狂言・大蔵流「富士松」善竹十郎ほか
◉NHK教育テレビ
4月1日（土）午後1時50分～3時35分
能　金剛流「道成寺」古式
シテ　豊鶴三千春、ワキ　鏑木岑男

## 名古屋　猶諷会春の大会
四月二十六日（日）午前九時半始
名古屋能楽堂

番外舞囃子　吉野天人　高島良一　河村眞之介　柳原冨司忠　助川竜夫　竹市学
素謡　花筐　美濃辺眞知子　上田牧子　山下松江　井上苑枝
定家　瀬辺聡子　北洞節子
仕舞　鞍馬天狗　林文貫
笹之段　橋本恒夫
笠之段　松原幸男
舞囃子　胡蝶　宇佐美怜子　河村眞之介　柳原冨司忠　助川竜夫　竹市学
邯鄲　石黒由美子　河村眞之介　柳原冨司忠　助川竜夫　竹市学
素謡　當麻　高橋和代　山中たね子　日沖一子
木賊　細井みどり　ツレ尾藤英邦　加藤茂　河合六三郎
舞囃子　野宮　市田周子　合掌留　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
砧　森崎紀子　河村総一郎　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
素謡　西行桜　横山国枝　鈴木志ず子　井上苑枝
番外仕舞　葵上　片山清司
素謡　求塚　石黒由美子　高野千勢子　遠山美津子
仕舞　二人静　井上苑枝　美濃辺眞知子
歌占　細井みどり
舞囃子　養老　芦谷民枝　河村総一郎　柳原冨司忠　助川竜夫　藤田六郎兵衛
素謡　卒都婆小町　近藤とき子　松原幸男　橋本恒夫
舞囃子　融　田中健昭　河村総一郎　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
熊坂　斉藤繁　河村眞之介　福井啓次郎　助川竜夫　竹市学
素謡　恋重荷　森山培根　三好伊藤正
山姥　早川順子　西沢冨貴枝　武藤弘子
番外仕舞　景清　梅田邦久
附祝言
〔御来場歓迎〕
（終了六時）
主催　邦謡会　梅田邦久

## 青陽会定式能（第44期 第2回）
四月二十二日（土）十二時半始
名古屋能楽堂

仕舞　田村　瀬戸洋子
笹之段　今沢美和
能　吉野天人　武田邦弘　椙元正樹　河村総一郎　柳原冨司忠　鬼頭好信　竹市学
間　井上祐一
後見　今沢美和　久田勘鬼　地謡　瀬戸洋子　生駒里翠　高島良一　古橋祖父江修一　玉木正邦　高橋孝男　加賀敏彦
仕舞　羽衣　加賀敏彦
隅田川　梅田邦久
昭君　古橋正邦
地謡　玉木孝男　須部甫　祖父江修一　松山幸親
能　杜若　近藤幸江　杉江元　河崎孝一郎　助川龍夫　大野誠
恋之舞
後見　三村恵子　中川雅章　地謡　瀬戸洋子　久田三津子　高島良一　高橋瞭一　加藤正彦　古橋保　梅田邦久　清沢一政
狂言　蝸牛　佐藤融　佐藤友彦　今枝靖雄　後見　大野弘之
能　山姥　星野路子　前野郁子　飯冨雅介　橋本宰　河村真之介　後藤嘉津幸　鬼頭好信　鹿取希世
間　井上靖浩
後見　生駒里翠　武田邦弘　地謡　三村恵子　今沢美和　松山幸親　加賀敏彦　中川雅章　久田勘鬼　須部甫　清沢一政
附祝言
主催　青陽会
〔有料〕当日券三千円、学生千円
入場券はチケットビア・チケットセゾン及び各出演者宅
お問い合わせ＝〇五二―七〇五―一五八五、久田勘鬼方

## 故 久田秀雄十七回忌追善
## 久田観正会春の大会
四月二十三日（日）午前十時始
名古屋能楽堂

番囃子「望月」稲垣つね子
素謡「正尊」吉田隆美、「梅」服部喜美子、「当麻」村井すみ子、「弱法師」渡辺清彦、「海士」久田政子、「采女」前川千勉子
舞囃子「通小町」雨夜ノ伝」石黒直子、「葛城・大和舞」田中雅子、「砧」神谷功、「天鼓」斎藤利子、「菊慈童」瀬戸洋子、ほか仕舞十七番
番外舞囃子・久田勘鬼
（終了午後五時頃）
〔御来場歓迎〕
主催　久田観正会　久田勘鬼

# 戦後名古屋能楽史⑦

竹尾　邦太郎

## 〔第二章〕演能の場を求めて

### 御園座・名古屋商工会議所・栄小学校の仮設・特設舞台（昭和二十三年）

戦後二年四ヵ月が経ち、名古屋能楽師協会の定式能も市立第一高女講堂仮設舞台を本拠に年六回の公演が定着する。二十三年度出演の流儀・結社の内訳は、初回に九皐会（一月二十五日）、以下順に金剛会（三月二十八日）、淡交会（五月九日）、宝生会（六月二十日）、山本観衛会ト大槻清韻会（九月十九日）宝生会（十一月二十一日）である。番組は概ね舞囃子・能・狂言・能の組立であるが、狂言の後仕舞や一調が置かれることもある。

先例に習い煩瑣を避けて能と狂言だけを列記すれば、「田村」永島誠二・「末広かり」佐藤卯三郎・「山姥」観世喜之（先代）、「千手」金剛巌（二十四世）・「縄綯」河村丘造・「鉄輪」豊鶴弥左衛門、「藤戸」橋岡久太郎・「簸屑」井上松次郎・「小鍛冶」橋岡久馬、「松風」宝生重英・「貫摂」歌村彦四郎・「鵜飼」辰巳孝、「龍太鼓」山本博之・「入間川」井上新三郎・「阿漕」大槻十三、「葛城」宝生英雄・「鐘の音」井上松次郎「野守」野口禄久、以上である。

三役の脇方と囃子方をみれば、脇方は高安滋郎・西村弘敬、囃子方の笛は藤田六郎兵衛（先代）・金森準三、小鼓は田鍋惣太郎・田鍋惣一郎・福井五郎・青木恒治・守屋寿石、大鼓は西尾孫太郎・永田虎之助、太鼓は鬼頭八郎・野崎太郎である。当時の当地能楽会の風土やシテ方の勢力分布も知られようか。なおこの定式能第五回だけは舞台を栄小学校講堂に移しているが理由は不明である。余談になるが、昭和四十七年十一月五日刊の「栄小学校開校百年祭記念誌」は次のように記している。

「空襲により栄一帯は焼土と化し、白川、南久屋の両国民学校はその校舎を失ったが、中ノ町国民学校の鉄筋校舎だけは、辛うじて焼失を免れた。これにより戦後昭和二十一年、已むなく三校は統合され、昭和二十一年四月十五日、焼け残った旧中ノ町国民学校の校舎に、栄国民学校が創立された。その後昭和二十二年四月一日、六・三制の新学制発足に伴い、名古屋市立栄小学校と改称され、今日に至っている」と。

更に同誌は、昭和四十七年七月三十一日、卒業生が同校に集まった際の思い出の余話に言う。「昭和六年一月十六日、鉄筋コンクリート三階建ての新校舎が完成。学区から校舎建築の資金を集めたところ、資金が集まり過ぎてしまって、何か施設をほかに造ろうということになった。そこで、暖房施設でも造ったらということになり、ボイラー室ができ、教室にはスチームが通るといった最新設備ができ上がった。ところが、それでもなお、お金が余るというので、大きな講堂でも建てようということで、今の講堂が建てられたという話だ。そして、できた講堂が大き過ぎて、市役所に叱られたという話だ。当時の校舎は、三十五万円で出来たという話だが、更に或る人が一万円寄附されて、そのお金で講堂の椅子を作ったのだそうだ。その椅子の幅が広いため、子供が腰掛けるのには不向きで、おまけに重いため、皆が難儀をしたものだ」と。何とも太平楽なことで、大講堂に大きな椅子なら恐らく仮設舞台には恰好だったろう。しかし、六・三制により市内に三十七校の新制中学校が開校し、「本校には前津中学が同居したが、それ以前に校舎を焼失し、これまた本校に同居していた名古屋商業高校を合わせ、一校舎に小学校から高等学校までが揃うという時期があった」という事情があれば、度々の借用は無理だったことだろう。そして当然のことながら、明治二十九年六月十六日創立の伝統ある市立第一高等女学校も、新学制により小・中学校に遷れること一年余、この年十月一日に市立菊里高等学校の校名のもと新発足するのである。

さて、二月に入ると、二十四日には昨秋十月に無事開場成った御園座の特設能舞台で、明治・大正・昭和の三代に亙り巨歩を印してきた田鍋惣太郎（一八八四―一九七一）肝煎りの名古屋能楽復興後援会主催による第一回演能会が午前・午後の二部制で華々しく行われた。

第一部は「翁」観世喜之（先代）・千歳永島誠二・三番叟佐藤卯三郎・面箱井上松次郎、「高砂・礼脇」喜之・ワキ西村弘敬、「楢縛」河村丘造、「羽衣・和合ノ舞」梅若万佐世、第二部は「熊野・村雨留」喜之、「武悪」歌村彦四郎、「乱・双ノ舞」万佐世・誠二、式能の体裁を備え、九皐会・梅若研能会のシテを支える名古屋三役陣の熱気が伝わるかである。大鼓には大阪の山本敬一郎の来演があった。

三月二十八日は第二回定式能（前出）。四月二十六日は御園座に於ける名古屋能楽復興後援会主催の第二回演能会、「景清」宝生重英・「竹の子」佐藤卯三郎・「船弁慶・後ノ出・留ノ伝」宝生英雄で宝生会が主体である。五月一日には市一高女で名古屋学生能楽会の発会式がある。会長は栗田元次・八高校長（当時）、その趣意は「文化国家の建設!!　之こそ我が国民の寸時も忘れてはならないことであります。此の線に沿って、古典芸術の最高峰たる能楽を若き学生諸君が充分研究し理解し我が国の文化水準を高めて頂かうとして生れたのが名古屋学生能楽会であります」とその後に機関紙に代へる番組（十月三十一日・狂言の会）には言うが、当日の詳細は不明である。蛇足だがこの日は美空ひばりが横浜国際劇場で歌手デビューを果している。

五月九日、第三回定式能（前出）。六月十三日「進駐軍招待お能とお茶の会」が名古屋日米協会・九皐会・松蔭会の共催により中区大池町四丁目一番地の名古屋商工会議所特設舞台で行われた。「安宅・勧進帳・滝流」観世喜之・高安滋郎、「寝音曲」佐野平六・野村万蔵（六世）、「小鍛冶」観世武雄（当代喜之）、大鼓は二番共山本敬一郎。占領政策に逆らう様な、刃物三昧になりかねない関所突破の「安宅」、刀剣を神の加護で鍛える「小鍛冶」、米軍占領下でのこの選曲のアイロニー（皮肉・風刺）可笑しいが、この時以後このての催しがないのは退屈だったからであろうか。当時の名商会頭は十四代三輪常次郎、副会頭は後に十五代を継ぐ伊藤次郎左衛門祐蕊、因に彼は観世喜之の門下である。なお昭和二十一年九月十六日の総会で議決した定款の第五条ノ七は国際親善に触れているが、この催しの会場提供に及ぼす彼の影響力は看過出来ないだろうと思われる。

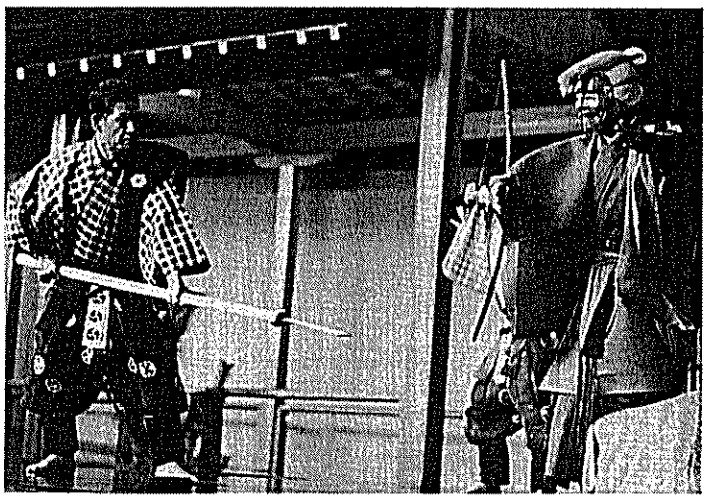
六月二十日、第四回定式能（前出）に続き六月二十七日は名古屋能楽復興後援会主催の第三回演能会、「橋弁慶」山本博之・山本順之（子方）、「引括」井上新三郎、「杜若・恋ノ舞」橋岡久太郎、「土蜘蛛」大槻十三・橋岡久馬（頼光）で行われた。この演能会は当初六回が予定され、八月第四回（喜多実又は桜間金太郎）、十月第五回（野口兼資・禄久）、十二月第六回（金剛巌・滋夫）となっていたが立ち消えとなり、以後名古屋能楽復興後援会の名による催会も無くなった。装束納と言えるだろうか、七月四日には鬼頭為太郎追善能が「かね重」で催された由だが詳細は不明、八月二十一日に野口兼資が初の日本芸術院賞を受賞する。

九月十九日、装束始は第五回定式能（前出の通り会場は栄小学校）、次いで十月三日、商工会議所特設舞台で名古屋学生能楽会鑑賞会が催される。内藤宗一（宝生流・旧県立一中教官）の解説のあと、「邯鄲」豊鶴弥左衛門・「桌山伏」佐藤卯三郎、能・狂言各一番に解説付という此のスタイルは近年の鑑賞会形式の走りを思わせる。同月二十六日は同所で、市民を鼓舞し活気づけるための秋の文化祭に協賛し、戦前から田鍋惣太郎が主宰してきた名古屋能楽鑑賞会の名匠鑑賞能が戦後初めて再開される。第八回を数え今回は二部制、一部は「小袖曽我」水島誠二・小島芳雄、「栗焼」歌村彦四郎、「融・思立ノ出・窕」観世清寿（後に寿夫）、二部は「松風・戯ノ舞」観世華雪、「靭猟」井上禮之助、「安達原・黒頭・急進ノ出」観世喜之、で九皐会と銕仙会勢、三役は地元の外に大鼓山本敬一郎が参加した。なお世阿弥の再来とまで謳われて早世を惜しまれる観世寿夫はこのとき二十三歳、戦後初の来名だった。

十月三十一日は名古屋市と名古屋学生能楽会共催の文化祭協賛の狂言の会。会場は中区仲之町の栄小学校講堂で午前と午後同一番組の二部制である。「萩大名」佐藤卯三郎、内藤宗一の「名古屋学生能楽会に就て」の講演のあと「伯母ヶ酒」河村丘造、「太刀奪」歌村彦四郎、番組の余白には御注意として「正会員の女学生は午前、男学生は午後に出席して下さい」とあるのも時代相だろうか。昭和二十三年度最後の演能は十一月二十一日の第六回定式能（前出。会場は市一高女が改組改称された菊里高校）で納会となった。

〔訂正〕先月号（昭和二十二年）の四段目後半、「十月二十六日～不明である」を削除。

## 井上禮之助師を追慕する



1973年名古屋宝生会定式能（初回）、「国栖」シテは野口禄久師

名古屋の能楽界はまた惜しい人材を失った。井上禮之助（一九一五年一月一日―二〇〇〇年二月十四日）享年八十五、公職に就くやら家業など古希近くまで二足の草鞋を履いての舞台は、一部を除けば我人ともに生活があってこその芸の世界、戦中戦後は苦難の時代でもあった。

これを克服してきたのは、明治維新後の尾張藩和泉流の伝統を絶やしてはならないという使命感で結成された狂言共同社の柱石の一人、祖父の初世井上菊次郎とその遺志を継ぐ父・新三郎（一八八七―一九五五）への敬愛の念であり、昨秋先立った従兄・三世菊次郎をサポートする役割を自覚する責任感の強さであったろう。今は名古屋能楽界の一端を知る貴重な遺著となった平成七年師走に刊行の「祖父・父を憶ふ」に詳しい。

禮之助師は滋味溢れる人柄、剛直で信義に厚い古武士の風格を備える一方で、茫洋としたキャラクターも得難く、持ち前の錆（さび）声と相俟ち一種独特な雰囲気があった。「萩大名」の粗忽な大名、天真爛漫な「鬼瓦」の大名、身ぐるみ脱いでしまい取り戻そうと焦る「入間川」の大名、といった大名狂言や柄（がら）の活きる山伏狂言、間狂言では前シテ魚籠を侮り居丈高に迫る「国栖」の追手ノ雑兵など持ち味が遺憾なく発揮された。また、都心に生い育ったにもかかわらず、どこか土の匂いのする朴訥な一面も垣間見られ、「縄綯」に、どこまでも愚直に薄情な主の肩を持つ太郎冠者などは、年功を積んできた役者だけが見せる燻銀の輝やきがあった。

葬儀の二月十六日、前日から降り続く雪の銀世界は悉皆「木六駄」の舞台、「させいほうせい」と十二頭の牛を追うシテ太郎冠者を何ら案じ巧むこと無く地のままに勤めれば、自ずからそこに禮之助の太郎冠者像が見事に現われるであろうの思いがした。

弔辞に手向ける声涙俱に下る野村又三郎師の小歌は、「遥々と送り来て、面影の立つ方を返り見たれば、月細くかかりたりや、名残やな、さらばさらば」と永別を悲しむ。幻の太郎冠者は、老いの坂の遥か彼方へ蒼惶と去ってしまった。残念である。生前に受けたという戒名は「禮誉法岳顕彰居士」、永（とこしな）えの御冥福をお祈りする。（竹尾邦太郎）


# 中日能

四月二十九日（土・祝）午後一時始
名古屋能楽堂

解説　増田　正造

舞囃子　頼政　藤井　完治　河村眞之介　後藤嘉津幸　大野　誠

能　井筒　観世清和　中村弥三郎　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
物著　後見　観世芳伸　武田宗和　地謡　松山清沢一政　武田邦弘　祖父江修一　藤井完治　藤波重彦　久田勘鶴　中川雅章

狂言　大般若　野村又三郎　松田高義　野村小三郎

仕舞　鵜之段　梅田邦久
火入れ
枕之段　武田宗和　地謡　武田中川久田　雅章勘鶴上田　宗典公威

蝋燭能　鉄輪　武田志房　高安勝久　筧鉱一　後藤孝一郎　助川大野　龍夫誠

早鼓之伝
間　野村小三郎

後見　武田邦弘　観世芳宏　地謡　須部敏彦　加賀甫　高橋暁一　上田公威　小島一英　上野朝義　梅田邦久　観世芳伸

〔有料〕
前売＝S席一万五千円、A席一万三千円、B席一万一千円（当日券各千円高）
取り扱い＝中日サービスセンター、プレイガイド、中日新聞文化事業部（221―0729）

# ◆早春如月の舞台から◆

## 「青陽会」「第廿三回名古屋能楽堂定例公演」「九皐会」

竹尾邦太郎

㊤「屋島・大事」梅田　邦久師
㊦「景　　清」高橋　瞭一師

「屋島・大事」　シテ邦久。小書「大事」は「弓流」と「素働」を同時に勤める。「大事」とは何よりも廉恥を重んじる大将義経が遭遇した難局の一大事か。

前は面笑尉・茶無地覇斗目着付・茶水衣・白茶染分ケ腰蓑、釣竿手に持つ瀟洒な感じの漁翁。ツレ漁夫・一政、段覇斗目着付・濃紺縹水衣・白紺染分ケ腰蓑、釣竿を担ぐ。覇斗目の段と無地は、段が上位だが「弓流」の小書付の極めという。宿を乞う僧（元・雅介・正樹）が部人と聞き、初同（邦弘・正邦ら）でシテは立つと〽傷はしや、と内へ招じる態にワキへ指シ、共に下居すれば、〽などか雲居に、と目付柱へ向けた視線を、〽旅人の故郷も、とワキへ向けると〽懐かしや、とシオル懐旧の心が良い。腰の後ろから扇を抜き持つと、居語は「鉦踏ん張り」を居立つ構えに見せ、ツレとの掛合に三保谷と景清との組み討ちは、〽著たる兜の、と飛び掛からんばかりの気迫で左手の開いた扇を突き出し、〽引きちぎって、と腰を落とすのも勢い余る態である。〽これを御覧じて、と立ち、〽お馬を汀に、と常座へ進んで幕を見込み、〽どうと落つれば、と拍子一ツ強く踏むのが利く。中入は、〽春の夜の、と薄く左へ眺めると〽（潮の落つる）暁ならば、とワキへアシラフところ、寂た風情そこはかとなく感じられる。間は「奈須与市語」祐一、仕形は機敏、音吐は朗々、聊かの得意も交え晴れやかに語って十三分の長丁場も素晴らしい。

後シテは面平太・黒垂・梨子打・白鉢巻・襟浅黄・花菱亀甲繋文厚板着付・紫地金波涛文半切・紫地法被（袖折込）・太刀の雄姿。〽帰る屋島の恨めしや、と幕へ見込む姿もよく、床几に掛かり屋島の戦語りになる。〽鐙（くつばみ）を浸して、と床几を立つと眼目の「弓流」はイロエにスミから左へ廻り胡座前、弓に擬した扇をぽとりと落とすが（写真）、その音を小鼓の音に隠すというタイミングは大鼓に合った様に思えた。シテはそのまま一ノ松に流れて〽そのとき何とかしたりけん、から再び常座、熊手で弓を引っ掛ける具象の型は、〽すでに危く、拍子一ツ強く踏みカケリになる。大小（真之介・冨司忠）流シで扇を拾いに行き、拾い損ね流レ足でシテ柱へ流れると、この度は太刀を抜き放って扇に寄り拾い上げて床几に掛かる。

クセは〽一命なれば、で立ち、〽佳名を留むべき、とワキへの指込開キに心組みを示すと〽矢叫びの音、と一ノ松へ、カケリは省く。すぐ地との掛合になり、〽（閻浮に帰る）生死の、と舞台へ戻ると、〽船よりは、と幕を見込み、〽月に白むは、と太刀を抜いて剣の光を見るが、ここだけは国定忠治「今宵の虎徹は」の新国劇じみて一寸好きになれない。〽春の夜の、と左右へ面使ヒ、〽浦風なりけり、でするする幕へ入るとワキ留、緊張の好舞台だった。笛・誠、主後見・勘鬼。（1時間50分・2月5日・青陽会）

半能「葛城・大和舞」　シテ葛城ノ神・幸江、ワキ由伏・橋本宰の勤行の法味に惹かれ報恩の舞を舞う。半能でシテは雪山の中、引廻が下ろされ、〽神姿は恥かしや、とワキにアシラヒ面を伏せる風情が得も言われない。面増・葛紅葉ノ天冠・露芝文白地舞衣壺折の清浄な姿は、〽吉野の山葛、で床几を立ち雪山を出ると、〽神楽歌始めて、と綺麗に被いた袖を、〽大和舞いざや奏でん、と戻し神楽になる。雛子静まり正先に下居、捧げる榊を左右に打ち振り再び捧げて立つと、榊を担ぐのも一心不乱の印象。位進んで地となると、〽天の香具山、と袖被くところ、〽恥ずかしや、と袖屏風にワキへ面を隠すところ、〽明けぬ前にと、と一ノ松で袖返シてワキを見込むところ、などキリの型は繊細で手綺麗、地を残し三鼓の流シで幕へ入り、ワキが常座に膝を着き合掌して立つと太鼓がトメた。ワキと雛子方以外は全て女性で地謡は六名（地頭郁子）、装束を着けた舞雛子と思えなくもなかった。（33分）

「太子手鉾」　大昔、板屋の雨漏りは下から長柄で突き、板をずらすなどして止めたそうだが、この漏り屋を守屋に掛け、仏教を排斥する物部守屋が聖徳太子に阻止された故事から長柄を太子手鉾と洒落る。シテ太郎冠者・祐一の小賢しさが鼻に付き憎げで、アド主・靖浩の苛立ちを買い叱り留されるのも当然と思わせる。事が現代の生活感覚からは離れ過ぎ、話柄も高踏的で稀曲。（19分）

「花月」　小歌を謡い、羯鼓を打ち、鬱（ささら）を摺る放下（大道芸）のお陰で父ワキ雅介との再会を果たすシテ花月・邦弘、芸尽くしの達者は遊狂の気分も伸びやか。その花月を売り込む相棒役を任じているらしいアイ清水寺門前ノ者・友彦、小歌のキリへ恋こそ寝られね、でシテに強く押されたとは見えなかったが、スミの方へばったりと倒れ込み、目付柱を見上げ「花に目がある」と叫ぶのには少々吃驚した。シテが鶯を射るのをやめるに至る型はきびきびと小気味よく、清水寺の縁起を言うクセも中々である。羯鼓の舞は撥扱いも美しく、中で合膝返シする辺りは幼時の彦山登攀の回顧ともみえ、キリに霊山尽シから苦難の象徴でもある鬱に擬した撥を、文字通り〽さっと捨てて、扇を手にすると広げてワキを指シて出る嬉しさも一入だった。（51分・2月18日・第23回定例公演）

「景清」　娘・人丸ツレ宜夫との対面がありながらも別れねばならない老残の武将シテ景清・瞭一、松門の詰に笛のアシラヒは無く静かなる声がよく通る。初同（三郎・喜久ら）〽棄れ果て、と引廻下ろすとシテは面景清（髭無）・沙門帽子・襟浅黄・小格子着付・紺水衣で安座、両手を膝に置く。尋ね人問答での微妙なシテの表情が読めず、あっさり諦めるトモ従者・英明の淡泊はシテの独白の述懐を深めるか。ワキ里人・勝久ともども再度の往訪の従者と人丸、景清は里人の激しいノック二度に「姦し姦し」と面を背け両手に耳を塞ぐが、己が無念の胸中を解さないことへの反発も、さりながらと反省の心は〽由なき言ひ事ただ許しおはしませ、と手を合わせるがこの辺り少々くどい。〽山は松風、と左へ、〽すは雪よ、と目付柱へ見ると波音を聞く所は左手を耳の近くに当てがい面を伏せるが、ここらは渋い。〽流石に我も、と杖取り立つと〽物語始めて、と薬屋を出る。シテ・ワキ問答の冷静に比べ、父娘対面は、〽我を怨みと思ふなよ、と激しくツレに躙り寄るシテが、掴み掛からんばかりに両肩に手を掛ける所などは直情あからさまに過ぎるか。

合戦譚は、〽兜の鍬を取り外し取り外し、と左手で空へ二度掴み掛かり、掴み損ねた態に手を着くと、〽通さじ、と居立って飛びかかり押さえつける所（写真）気合い充分である。キリは〽はや立ち帰り、とツレを指シて促し、杖取って立ち出るとツレがその杖を身体で押し退ける様に行くのが意味深長を思わせ、〽さらばよ、とシテが肩に手をやってもそのまま行き過ぎてゆくのが覚悟の上とはいえ寂しく、シテのシオリ留になった。シテは部分的に派手なところも見られたが、一体はしんみりとした情緒が流れ、ツレ・トモ・ワキもそれぞれに良かった。（1時間15分）

「仏師」　何か面白い事はないかと徘徊するシテすつば弘之が、よい鴨とばかりにアド田舎者・靖浩に取り付き巫山戯るだけといった感じ。場当たり的で、とても金銭には執着がありそうにも見えないすつばが弘之に嵌り、靖浩もその悪ふざけに乗りかねない雰囲気。（26分）

「小鍛冶・黒頭」　ワキツレ勅使・元より宣旨を受け、ワキ刀工三条宗近・雅介、シテ霊狐・直也の相鎚を得て見事に名剣を鍛える。

小書で前シテは面喝食・喝食髪・襟白赤・赤地金紗彩形文摺箔着付・萌黄地龍田川文縫箔腰巻の裳着胴姿、左手に稲穂を持つ。髪に乱れの見える面の表情は、クセの草薙剣の霊験譚、〽尊は剣を抜いて、と稲穂を取りすばっと立つ所、火焔吹き返され〽天に輝き地に充ち満ちて、に面使フ所、獣性の俊敏も見えて精悍である。中入は、〽通力の身を変じて、の返シに立ち、〽参り会ひて、とワキへ向き、ワキが平伏すると詰メ、〽待ち給へと、とさっと向きを変えて獣足の跳躍の様に高く抜き足して一ノ松へ走り、そこでも跳躍の抜き足を見せて走り込んだ。

アイは段覇斗目・長袴・小刀の宗近ノ下人・靖浩、立ちシャベリに作刀神助のことを言って退くと、後ワキが出る。風折・白大口・萌黄単狩衣の威容は、幣を捧げ祈念する悠揚迫らぬ態度に雅介自信をみせる。〽謹上再拝、で後シテは半幕に姿を垣間見せ、〽勅の剣、と一旦幕を下ろすと、走り出て一ノ松勾欄に右足を掛けて威勢を示す所は胸がすく。面狐蛇・黒頭・襟白紺・紺黄段稲妻雲板飛雲文厚板着付・金紫段半切、の凄味は舞働の霊気、台上ワキとの相槌に剣を鍛える互いの呼吸も素晴らしく、〽天地に響きて、と胸杖の型に左手を鎚に掛け（写真）面を上げて頭を振るのは、宗近の大願を成就させた安堵と得意のポーズに見えて面白い。キリは〽これまでなりと、と勅使に平伏すると三ノ松へ走って乗り込み留拍子、鮮烈な中にも爽やかな品位も感じられる出色の一番だった。（54分・2月20日・九皐会）

「小鍛冶・黒頭」　駒瀬　直也師
（杉浦　賢次氏撮影）

御料理あつた　蓬莱軒
本　店　熱田区神戸町五〇三　電話（671）8686
神宮南門店　熱田区神宮2丁目10―25　電話（682）5598
松坂屋店　松坂屋本店10階　電話（264）3825
売　店　松坂屋本店地下売店　電話（264）3761

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町2－1
電話　03(3291) 2488　振替00130－7－3552
〒604－0935　京都市中京区二条通麩屋町東入
電話　075(231) 1990　振替01010－0－113

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電話　(052) 731－7984
FAX　(052) 733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一部　100円

## 上演希望曲「道成寺」「葵上」

### 狂言は「釣狐」「附子」「棒縛」

### 名古屋能楽堂　定例公演アンケート

名古屋能楽堂では、平成九年から実施している定例公演について、公演の内容、上演曲の希望、能・狂言の観賞回数など来場者のアンケートを求めているが、平成十一年度（平成十一年五月公演・第十八回から平成十二年三月公演・第二十五回の八回についてこのほどアンケートの集計をまとめた。

八回にわたる演能の総入場者数は、四千七百三十七名。それぞれの項目についての回答数には多少差があるが、回答率はおよそ二三%に達している。

「公演はいかがでしたか」の設問では、大変よかった、よかった、余りよくなかったの三つに分け、平均で「大変よかった」が五六・三%、「よかった」が四一・五%、「余りよくなかった」二・二%。とくに第二十回の「道成寺」公演、第二十三回の「翁」「羽衣」「胼」、第二十五回の「狂言づくし」の公演では、大変よかったの回答が全体の六〇～七〇%を占めている。

また「能・狂言」を観覧した回数」は回答率（入場者比）二三・七%であるが、「初めて」という回答が総数千百二十三通のうち、四一・一%の四百六十二通、年一～数回観能というのが百九十三通で一七・二%となっている。また二回目という回答も百四十四通で一二・八%を占めている。

「今後上演してほしい能・狂言」の設問には「道成寺」「葵上」「隅田川」が上位三つを占めている。

回答は次のとおり。（複数以上のものを掲載、カッコ内は回答数）

「道成寺」(32)「葵上」(30)「隅田川」(21)「石橋」(16)「井筒」(16)「安宅」(12)「土蜘蛛」(11)「松風」(10)「船弁慶」(9)「巴」(9)「融」(8)「二人静」(7)「熊野」(7)「紅葉狩」(7)「卒都婆小町」(7)「蝉丸」(6)「俊寛」(5)「野宮」(5)「羽衣」(5)「翁」(5)「黒塚」(5)

ついで熊、弱法師、水無月祓、清経、杜若、敦盛、芭蕉、梅、大江山＝以上4回答、鉢木、阿漕、花筐、邯鄲、当麻、桜川、天鼓、定家、恋重荷、一角仙人、善知鳥、錦木、砧、猩々＝以上3回答となっている。

狂言では、「釣狐」(38)「附子」(26)「棒縛」(17)「花子」(14)「唐人相撲」(12)「鞍狼」(8)「末六駄」(6)「末広がり」(6)「川上」(6)「八尾」(5)「蚊相撲」(5)「三番叟」(4)「二人大名」(4)「武悪」(3)「清水」(3)「金岡」(3)「井礒」(3)「狸腹鼓」(3)以下2回答として、彦一ばなし、三人片輪、寝音曲、蝸牛、隠狸、鑑男、二人袴、止動方角、茶子味梅、察化、千鳥、鎌腹、濯ぎ川、仏師。

## 芸術選奨受賞

### シテ方　観世流　大槻文蔵氏

文化庁は三月十七日、芸術の各分野で優れた業績をあげた人に贈る芸術選奨の受賞者を発表し、古典芸術部門で、能楽界からシテ方観世流能楽師・大槻文蔵氏が受賞した。とくに「摂待」の充実した演能が顕彰された。

大槻文蔵氏は昭和十七年生まれ、初舞台は四歳、「松浦佐用姫」「菊萱」「鵜羽」などを復曲、新作活動にも積極的である。平成九年読売演劇大賞男優賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞。

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

〔4月〕
22日(土)　青陽会定式能（有料）
23日(日)　久田観正会春季大会（無料）番組①面
29日(祝)　中日能（有料）
〔5月〕
3日(祝)　豊水会春季大会（無料）番組①面
4日(祝)　萬狂言披露名古屋公演（有料）番組②面
7日(日)　下田雄諷会中部地区大会（無料）番組②面
14日(日)　幸謡会大会（無料）番組②面
19日(金)　名古屋能楽堂定例公演（有料）番組②面
20日(土)　名古屋観世九皐会定例会（有料）番組②面
21日(日)　狂言やるまい会名古屋公演（有料）番組②面
27日(土)　第12回たまも会（無料）
28日(日)　故・橋岡久太郎37回忌追善能（有料）

### ◆熱田神宮能楽殿◆

〔4月〕
23日(日)　和泉流宗家熱田狂言ライブ（有料）
〔5月〕
21日(日)　笙月会創立70周年記念大会（無料）（番組③面）
27日(土)　名古屋巽会（無料）

## 故・久田秀雄十七回忌追善
## 久田観正会春季大会

四月二十三日（日）午前九時半始
名古屋能楽堂

仕舞
放下僧　小歌　鈴木良子
杜若　キリ　岡井真由美
羽衣　キリ　川合鮎圭
大江山　飯田恭子
松虫　キリ　竹中聖人
岩船　倉地芽里
玉之段　金井美晴
柏崎　道行　高橋喜久子
遊行柳　クセ　堀江達雄
小督　キリ　伊藤晏義

素謡　海士
坪井美記江　久田政子　藤谷音彌
采女
前川千鶴子　前川幸子

仕舞
松風　坪井美記江
巻絹　キリ　村井すみ子
蝉丸　大竹富三江
紅葉狩　尾崎泰恵
船弁慶　クセ　吉田隆美

素謡　弱法師
渡辺清彦　佐野安男
当麻　大竹富三江　村井すみ子　水谷充子
梅
服部喜美子　上田公威

番囃子　望月
子方　瀬戸洋子　ツレ　前野郁子　稲垣つね子
高安勝久
間　井上祐一　河村眞之介　久田陽春子　大野誠　鬼頭喜太郎

素謡　正尊
子方　星野路子　岱和　松山幸観　義経　岩田実
吉田隆美　久田勘鷗

舞囃子　葛城　大和舞
田中雅子　河村総一郎　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　鹿取希世

通小町　雨夜之伝
石黒直子　河村総一郎　柳原冨司忠　鹿取希世

砧　前
神谷功　河村総一郎　柳原冨司忠　鹿取希世

天鼓
斎藤利子　河村総一郎　柳原冨司忠　鹿取希世

番外仕舞　殺生石
久田勘鷗

追加

（四時頃終了予定）

主催　久田観正会
久田勘鷗

〔入場無料〕

## 豊水会二十周年記念春季大会

五月三日（祝）午前九時半始
名古屋能楽堂

素謡　神歌
川本悠三　千歳　伊藤正則

土蜘蛛
トモ　室奈美江　胡蝶　竹内千智　頼光　大島熙　児玉宏　高橋邦充

舞囃子　高砂
下尾和子　河村眞之介　後藤嘉津幸　鬼頭喜太郎　大野誠

遊行柳
高井紀美子　河村眞之介　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世

蝉丸
青木美子　筧鉱一　福井啓次郎　大野誠

籠
秋山比登美　筧鉱一　後藤嘉津幸　大野誠

素謡　砧
三村恵子　加藤洋子　観世喜正

能　杜若　早川寛
飯冨雅介　筧鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

素謡　隅田川
三村恵子　魚住吉彦　子方　清水久美子　寺下武子　白井正光　高橋邦充

番囃子　鉢木
高安勝久　橋本宰　間　井上祐一　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

舞囃子　屋島
佐竹由巳子　河村眞之介　後藤嘉津幸　鹿取希世

葛城　大和舞
上野美与乃　河村眞之介　柳原冨司忠　助川龍夫　藤田六郎兵衛

龍田
清水久美子　河村総一郎　柳原冨司忠　助川龍夫　藤田六郎兵衛

野守
衣田清子　河村眞之介　後藤嘉津幸　助川龍夫　大野誠

素謡　松風
青木美子　堀田喜子　森谷達男

能　安達原　楠木真理
高安勝久　橋本宰　間　井上祐一　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　鹿取希世

仕舞
難波　横井敬子
小鍛冶　クセ　室奈美江
熊野　竹下福代
胡蝶　竹内千智
竹生島　安間忠一

素謡　頼政
成田友之　伊藤一美

花月
田中喜代子　山崎明子

田村
宮地俊彦　伊藤正則

番外仕舞　綱之段
高橋暸一

鵜之段
観世喜之

附祝言

主催　豊水会
高橋暸一

〔御来場歓迎〕

## 萬狂言披露2000年 名古屋公演

五月四日（木）午後二時三十分始
名古屋能楽堂

解説と実演　野村万之丞ほか
復曲本狂言「呼声」
新生小狂言「雛売」
古典間狂言「奈須与市語」
狂言　萩大名　野村萬ほか
狂言　白雪姫　野村万之丞ほか
（終演予定午後四時半）

S席一万円／A席七千円／B席四千円
取扱い＝チケットぴあ（TEL052・320・9999）
問い合わせ＝コースケ事務所（TEL03・5396・5443）

## 下田雄諷会 中部地区連合大会

五月七日（日）午前九時半始
名古屋能楽堂

連吟　雨月　加藤鉦一　浅田宏　杉江貞一（和）
東北　森喜久子　橋本暁子（和）
蝉丸　吉田義治　杉山且芳　竹中宏　岩佐和信　佐野博子　山本鷲見　大藪崩　三郎　黒宮義輝　出町正男　小西武久　村瀬正光　杉山貞夫（花）
通小町　夫馬康裕　長谷川満二　不破喜久夫　大島公和　加藤寿夫　森恒夫　平田仁史（竹）
舞囃子　安宅　小西武久　河村真之介　平野邦子　竹市学（花）
桜川　大岩千寿子　河村真之介　加藤順子　竹市学（竹）
連吟　班女　小西綾子　黒宮一子　沢田幸江（和）
籠太鼓　加藤博子
千手　中島ひろみ
仕舞　鳥追舟　加藤美代子
芦刈　多田政子
舞囃子　小塩　坂野儀子　笈佐野鉦一　博子　鬼頭喜太郎　竹市学（和）
弱法師　加藤順子　河村真之介　後藤孝一郎　鹿取希世（和）

連吟　住吉詣　中野敏　関戸弘子　夫馬昌子（竹）
舞囃子　羽衣　村瀬登美子　笈鉦一　後藤嘉津幸　鬼頭喜太郎　竹市学（竹）
忠度　森宏子　河村真之介　大前悦信　鹿取希世（竹）
連吟　藤戸　田ノ上稔　柿本太久治　菅野金太郎　岩島勇雄　杉山久次郎　阪田信夫（倭）
松虫　岡本たえ子
采女　今井実子
松風　今井ちえ子
笹之段　中川富美子
隅田川　武川澪子
杜若　平野綾子（下）
仕舞
舞囃子　清経　杉山若生子　河村真之介　直井冨士子　竹市学（倭）
夕顔　山田和泉　笈鉦一　岡本たえ子　鹿取希世（花）
素謡　卒都婆小町　滝千代子　中川良三　中川健三（下）
敦盛　岩島勇雄
杜若　高田義子
梅枝　田中冨久子
鵜之段　国島とし子
野宮　阪田信夫（倭）
舞囃子　花筐　鈴木幸子　笈鉦一　西尾薫子　鹿取希世（竹）
砧　上木礼子　笈鉦一　後藤孝一郎　鹿取希世（倭）
素謡　放下僧　杉山出町　貞夫　巽杉山且芳（花）
玉鬘　武居フミ
梅枝　山本ひろ恵
巴　村田園
屋島　館林欣一郎
鐘之段　村田雄三郎
山姥　浜崎捨雄（徳山）
舞囃子　実盛　黒宮義輝　河村真之介　後藤嘉津幸　竹市学（花）
西行桜　北村利弥　笈鉦一　後藤嘉津幸　鬼頭喜太郎　鹿取希世（和）
番外仕舞　白楽天　橋岡慈観
（終演予定五時三十分頃）

〔御来場歓迎〕
倭文之屋社中
下呂雄諷会
岐阜花諷会
一宮竹石会
徳山雄諷会
名古屋和諷会
（担当）連絡所　名古屋市瑞穂区東栄町二―七　加藤鉦一　☎〇五二―八五一―四〇六一

## 幸謡会

五月十四日（日）午前十時始
名古屋能楽堂

素謡　巴　阪野蓉子　鷺見良子
連吟　薪之段　沖野多哥　荒木悦子　多田良子
清経　小田新次　近藤勇夫
素謡　隅田川　芝崎恭子　青木朋子　村井邦子　近藤幸子
江口　酒井照子　小野内喜春子　石川晴子
能　菊慈童　高安勝久　笈鉦一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
遊舞の舞　後見　八神孝充　泉嘉夫　地謡　青木朋子　田中米子　石川晴子　上田智子　前野都子　近藤幸江　久田三津子　今沢美和
班女　鷺見良子
葵上　石河フサ子
松虫　柿木園子
小鍛冶　長井嘉生
舞囃子　養老　芝崎恭子　笈鉦一　後藤孝一郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
敦盛　酒井照子　河村真之介　後藤嘉津幸　鹿取希世
羽衣　近藤幸子　河村真之介　後藤嘉津幸　助川龍夫　藤田六郎兵衛
須磨源氏　百瀬永三子　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　鹿取希世
嵐山　小林敏雄
采女　小野内喜春子
三輪　青木朋子
善知鳥　高取良昌
舞囃子　源氏供養　石川晴子　河村総一郎　福井啓次郎　大野誠
通小町　村井邦子　河村真之介　後藤嘉津幸　鹿取希世
蝉丸　田中米子　河村真之介　後藤嘉津幸　鹿取希世
能　千手　飯冨雅介　河村総一郎　福井啓次郎　大野誠
後見　武富康之　大槻文蔵　地謡　小野内喜春子　加藤春枝　三村恵子　今沢美和　上田智子　森寿子　近藤幸江　前野郁子
雨之段　大槻文蔵
番外仕舞　鵜之段　泉嘉夫
藤戸　近藤幸江
附祝言
（終了五時頃）

〔ご来場歓迎〕
幸謡会
近藤幸江
岡崎市鴨田本町十一―三　TEL（〇五六四）二二―二五二九

## 名古屋能楽堂定例公演

五月十九日（金）午後六時半始
名古屋能楽堂

狂言　磁石　すっぱ松田高義　見附の者　野村又三郎　福屋大野弘之　後見今枝靖雄
（宝生流）
能　錦木　衣斐正宜　衣斐愛　間　飯冨雅介　橋本宰　野口隆行　杉江元　河村総一郎　柳原冨司忠　助川龍夫　竹市学
後見　山内崇生　和久荘太郎　地謡　青木堯　久野幸三　佐藤耕司　稲川寿一　金森秀祥　水上輝和　渡邊他賀男　鬼頭嘉男
（午後八時四十五分頃終了予定）
主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・名古屋城振興協会
名古屋市文化振興事業団
協賛　能楽協会名古屋支部
〔入場料〕前売一般三千五百円、学生二千円（当日一般四千円、学生二千五百円）
〔前売券取扱い〕名古屋能楽堂（電052・231・0088）チケットぴあ、市内プレイガイド

## 名古屋観世九皐会定例会

五月二十日（土）午後一時始
名古屋能楽堂

能　楊貴妃　観世喜之
能　女郎花　ツレ外山圭一　中所宜夫
ほか狂言、仕舞
〔要会員券〕
名古屋観世九皐会
事務所　名古屋市南区元塩町一―一―一七　加藤保彦方
電話052・611・3659

## 狂言やるまい会 第43回名古屋公演

五月二十一日（日）正午始
名古屋能楽堂

当日自由席券五千円、学生券二千円
取り扱い＝九皐会事務所または出演楽師

狂言　武悪　野村又三郎
狂言　浦島　野村小三郎
狂言　月見座頭　茂山忠三郎
狂言　弓矢太郎　野村万作
主催　やるまい会
（有料）
野村事務所　TEL052・751・9966
前売＝S席六千五百円／A席五千五百円　B席四千五百円／C席三千円
（当日券各五百円高）

# 戦後名古屋能楽史⑧

竹尾　邦太郎

## 〔第三章〕名古屋商工会議所特設舞台の一年（昭和二十四年）

年が明け一九四九年（昭和二四）、連合国軍最高司令官D・マッカーサー（一八八〇―一九六四）元帥は新年のメッセージで国旗の使用を無制限に許可すると声明し、吉田茂（一八七八―一九六七）首相は年頭の辞で国土再建に愛国的熱情を、と呼び掛ける。

一九四七年（昭和二二）に制定された学校教育法に基づき実施された六・三・三・四の新学制もようやく落着きをみせ、この年は学校の講堂を演能に借用するのが難しくなり、専ら名古屋商工会議所特設舞台が使用されることになった（以下特に記述無き場合はそれ）。

一月十六日、第一回定式能は正月らしく囃子「翁」観世喜之・増田一雄、「竹生島」永島誠二、「福の神」井上新三郎、「弱法師」観世喜之の九皐会勢、「翁」の小鼓頭取は田鍋惣太郎、脇鼓を青木恒治と守屋寿石が勤めた。

この十日後、喜多流の現行曲「夢殿」（昭和十四年秋、土岐善麿作）の舞台、「げにや聞き及びたる堂塔の佇まひ、広大荘厳仏恩無辺の感涙」とワキ旅僧が衣の袖を濡らした法隆寺で火災が発生し、人々の耳目を驚かせた。二十六日の朝七時頃、漏電による火災は金堂内陣と壁画十二面を焼失して同八時二十分頃鎮火したという。三月十三日、淡交会は名古屋邦楽協会の後援で「吉野夫人」片岡怜子、「遊行柳」橋岡久太郎、「三人片輪」井上松次郎、「小袖曽我」柴田初太郎・高橋静夫、を上演し、時局に鑑みるかの様に番組に次の挨拶を載せた。「すばらしい抱負を以て二十四年を迎へました私等は三月を期して能楽を民主化した芸能として世に贈る事となりました諸兄姉の御批判と御支援を乞ふ次第であります」。

三月二十七日、第二回定式能は金剛会、「花筐」金剛巌、「歌手」河村丘造、「山姥・白頭」豊嶋弥左衛門。四月五日の名匠鑑賞能（第九回）は喜多一門、「小鍛冶・白頭」和島富太郎、「文荷」佐藤卯三郎、「隅田川」喜多六平太能心、「望月」喜多実、の堂々たる番組は芸術院会員・名人六平太の戦後初の来名、長田驍の「隅田川」「望月」の子方二番、大鼓亀井俊雄・太鼓小寺金七の来演、舞囃子「船弁慶」に観世喜之の客演など話題も豊富であったであろう。

四月二十三日、GHQは日本円に対する公式為替レート設定の覚書を手交、一ドル三六〇円の単一為替レートが同二十五日より実施された。

ちなみに戦後初の海外公演は一九五四年（昭和二九）八月、ヴェニス国際演劇祭参加のための喜多実（団長）・観世喜之（副団長）の一行（丸岡明著「日本の能」に詳しい）だが、外貨の持ち出し制限もあり、彼等での買物も儘ならなかったであろうこと想像に難くない。

（つづく）

---

# 岡崎城二の丸・薪能（第八回）

## 舞と能の夕べ

五月十三日（土）

会場　岡崎城内・二の丸能楽堂

〔会員発表の部〕（午後二時始）

連吟　竹生島　岡田弘子　鈴木明雄　杉田千鶴子

仕舞　鶴亀　本勤子　羽衣クセ　川出芙美子

大江山　中入前　岸野光子

連吟　天鼓　伊藤礼子　水越弥生　加藤茂代　榊山きよ子　鬼頭みゆき

仕舞　難波キリ　今川米子　敦盛クセ　織田敏男

放下僧　小歌　山口耕造

連吟　大原御幸　高橋千晴　山本博子　磯部三枝子

仕舞　殺生石　水越弥生　花筐クセ　岩田加代

船弁慶キリ　手嶋なみ江

独吟　鵜之段　金井邦夫

連吟　熊野　今川米子　西野志保　小林美和子　岩田加代

舞囃子　胡蝶　杉田千鶴子　龍田金原孝典

須磨源氏　替之型　鬼頭みゆき

連吟　木賊　加藤茂代　榊山きよ子　鬼頭みゆき　水越弥生

舞囃子　熊野　高橋千晴

歌占　小林美和子

素謡　国栖　都築照治　福嶋武憲　鷲見幸一　伊藤孝治　地謡　織田敏男　金原孝憲　山口耕造　金井邦夫

〔夕べの部・薪能〕（午後六時始）

火入れ

舞囃子　山姥　梅田邦久　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛

清沢一政

能　鉄輪　飯富雅介　橋本宰　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛

間　野村又三郎

後見　今沢美和　近藤幸江　地謡　松山幸親　本田祖父江修一　須部勲　久田勘鬼　高橋瞭一　甫梅田邦久　中川雅章

附祝言

（観世流謡曲・仕舞教室）

主催　清沢謡一会

TEL〇五六四・五二・六九〇九

補佐　梅田邦久

〔御来場歓迎〕（入場無料）

※雨天にても実施します

---

# 熱田神宮能楽殿

## 創立七十周年記念　亡父清十七回忌追善　笙月会

五月二十一日（日）午前九時始

熱田神宮能楽殿

素謡　神歌　山口正男　千歳成瀬清　法会之式

連吟　経正　水上春雄　藤原邦治　雑井輝英　生田敬三　大石原彦　高木績　和田良治

班女　豊永紗弘子　清水たず子　吉田早代子　竹内千鶴子　清水芳子

小督　森英子　吉村千代子　猪野間たづゑ　酒井たま子

玉之段　井口賀恩　安藤勝義　楠木喬　鶴森昭雄　阿部毅　藤井昭道

仕舞　嵐成度　羽衣段　笹之界　北村浩好　長野昌宏　長尾明夫　縞道彦　内田清志

連吟　大原御幸　土田三紀　車戸博子　石水千衣　両国喜美子　土田田鶴子

俊寛　小川春枝　中川はるゑ　柴田静子　笠原一郎　中川景蔵　梶一居　松村道信　和雄渺　成亥辰巳

仕舞　巻絹キリ　北原由美子

須磨源氏　廣島啓子

連吟　藤戸　松井水二　高木和郎　山田宏　加代晃三　子安勇　飯沼定男

舞囃子　難波　五段替　飯沼加遠利　河村真之介　福井啓次郎　助川龍夫　大野誠

胡蝶　神谷節子　河村真之介　福井啓次郎　助川龍夫　大野誠

猩々　今井肇　河崎勲　福井啓次郎　助川龍夫　大野誠

連吟　富士太鼓　岡崎信夫　田口祐一郎　島倉光次　長尾雅也　今井圭一　今井久　富央

舞囃子　天鼓　生田咲子　河崎勲　福井啓次郎　大野誠

屋島　深尾祐子　河村総一郎　林光寿　大野誠

熊坂　幅敏明　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　大野誠

連吟　鵜之段　木下喜代男　森田松右エ門　加藤久登

仕舞　花月キリ　放下僧小歌　西王母　吉田信子　帰家みさ子　中口禎子

融　舟口青江　加藤万由子　内藤ヤス　加藤哲也

素謡　砧　仕舞　雨夕之段　通小町　顔上　山之内節子　森本文子　追分智水子　桑山てふ

連吟　鐘之段　伊藤栄子　福田朋哲　松崎勝　横井啓三　高木守

舞囃子　鶴亀　渡邊守　河崎勲　林光寿　助川龍夫　森田保美

熊野　田中賀子　村雨笛　河村総一郎　林光寿　森田保美

花筐　伊藤キクエ　河村総一郎　福井啓次郎　大野誠

連吟　鉄輪　弼川嘉子　長尾登志　熊崎桂川正子　野村みさゑ　北条悦子

仕舞　春栄　野上陽平

舞囃子　道明寺　三段楽　澤村千代子　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　大野誠

山姥　立廻入　島倉たか　河村総一郎　林光寿　助川龍夫　森田保美

仕舞　笠之段　島香代子　渡邊光女　山崎佐東子　長谷川京子　内木誉子

班女　渡邊光女アト

杜若キリ　山崎佐東子

松風キリ　長谷川京子

梅枝アト　内木誉子

連吟　忠度　吉田秀吉　日下部保郎　熊崎進吾　奥田藤夫　黒木小林秀男　牧胤太郎　奥田昭吾　利夫

仕舞　敦盛キリ　松尾裕　野田龍守　山田善晴　加藤久登

素謡　姨捨　河崎幸子　武田志房

番外舞囃子　卒都婆小町　中川雅章　河村真之介　福井啓次郎　森田保美

連吟　箙　清水己良　下田正克　中島国彦　大澤慶隆　宮代一　木谷昭典　蒲忠成

番外仕舞　隅田川　武田志房

能　船弁慶　子方　中辻耕太郎　前シテ　白川順子　後シテ　安田範之

飯富雅介　河村真之介　林光寿　助川龍夫　森田保美

間　杉江元　橋本宰　松田高義

地謡　山口正男　高子安勇　木山幸親　梅田味方　靖武田　関根祥人　邦志房　久玄

・御来場歓迎
・入場無料

主催　笙月会

中川雅章

◆早春の舞台から◆

# 「茂山狂言会」「名古屋梅猶会」「第廿四回名古屋能楽堂定例公演・狂言尽し」

竹尾邦太郎

「二人袴」　聟・童司、親・千之丞は実生活の孫と祖父。「弁慶の人形を買うて下され」の幼い甘えも窮地に立てば親に恥をかかせまいと苑い、楯になろうの気概を示す聟と、裂けた長袴の片方ずつを前に当てただけなのを頻りに気にする親、俗に孫は子よりも、と言うが、童司がかわいくて仕方がないといった風情を垣間みせる千之丞が微笑ましい。折角の祝い、と親子同席にこだわる舅・千作の慈味が得難い。太郎冠者は宗彦。橋懸をあまり使わず物着も舞台なら宴席でおごう（嫁）を話題にすることもなく、全体は和泉流よりもあっさりしている。キリに聟・親・舅が相舞する「雪山」は如何にも春の到来。（35分）

「花子」　千三郎の披曲だが披キとは思えない練達の舞台はこれまでの芸の積み重ねの成果、見事だった。「二人袴」の士鳥帽子につくのを避け前シテは変形の烏帽子に裃浅黄赤・厚板着付、浅黄の素袍裃は片輪車二瓢箪文様、波間に流される車の輪、風に揺れる瓢箪、どことなくシテの心のうちを象徴する様である。

花子会いたさの想いは仏詣に事寄せての時間の捻出も至難のわざ、土下座合掌の懇願に妻・千五郎も流石に衝き動かされて一夜を許すが、「さらばさらばさらば」の立ち別れ際、男の後ろめたさを嗅ぎ取る妻のテレパシー（精神感応）が怖い。そして身替座禅の会の内、外が見えないだけに不安だならぬ太郎冠者・逸平の、近付く妻女に怯える辺り、少々の大仰もさもありなんである。

後シテ、きぬぎぬの別れは放心の夢見心地、〽更けゆく鐘わかれの鳥も独り寝る夜はさはらぬものを、の痴れた様な微吟に濃縮された一夕も思われる。右肩脱ぎ下げの、素袍は替えて濃紺地に色紙ト短冊散シ文。されば後シテの心のうちに惚気の小歌の数々、その色紙短冊に留められようというものである。会の内が妻とは露知らず、小歌の詠吟は時に激しい感情移入で平家節風に変化し、感情の起伏は妻を嘲罵するやら花子に添えぬ不幸を愁歎するやらと、千三郎男心の機微を巧みにみせる。愚挙が露見のキリは、あくまでも図太く途方もない御託を並べ、「アーア面目も居りない」と安座に不貞腐れるのもいけしゃあしゃあと如何にも現代的、面白かった。（1時間6分）

「菌」　シテ法印・七五三と、菌退治の依頼主・あきらとの絡みにみる素っ頓狂な雰囲気の軽みは熟れた味わい、茂山一門のチームワークの良さである。（17分・3月4日・茂山狂言会・京都観世会館）

「歌争」　物知り顔の二人（シテ友彦・アド融）、聞き違えて覚えた歌を心安立てに嗤い合えば、折角の春の野遊びも本気の喧嘩相棒になる。「咲くやこの花」を「芍薬の花」と詠むアド、「萎れてぐんなり」を嘲笑されたシテは、慈鎮和尚（天台座主慈円の諡号）の歌に「風騒ぐんなり」とあると反論するも、それは「風騒ぐなり」だとアドに窘められて面目を失墜する。友彦・融の親子競演が半可通の愚を戒めて実をあげる。（17分）

「弱法師・盲目ノ舞」　譏言に因り放逐され、今は盲（めしい）の乞食弱法師と姿は変われど心は清いシテ俊徳丸・梅若修一、春の彼岸に四天王寺の人込みをさ迷う中、贖罪の施行に立つワキ父即チ通俊・雅介に奇しくも邂逅する。

シテは面弱法師・黒頭・襟浅黄・白地縫箔（観世水ニ海松貝ト芦文）着付・濃萌黄水衣・杖。千鳥掛に三ノ松、初同（和男・晃一ら）〽（照らし給ひ）けるとかや、で運び舞台へ入ると、〽石の鳥居は、とシテ柱に向き直り、〽ここなれや、で杖を柱の側面に軽く触れさせるのは、早く施行を受けたいの性急な態度から遠く、ワキの問いもさらりと受け答えて卑しさは微塵もない。施行を受ける先に、盲の嗅覚の鋭敏は梅の香をきくや、胸杖に暫し香を愛でるのも出自の品である。

施行を受けるところは、小さく拡げた袖へワキが進み出て与え、次いでアイ通俊ノ下人・靖浩も地前からシテへ行き、「さらさらさら」とこぼす。春の長閑さは施行を受けた心の長閑さ、その媒体が梅の香で、〽見る心地する梅が枝の、と右ウケ胸杖にきく盲の心の裡を修一入念にみせる。

四天王寺の縁起を述べるクリ・サシ・クセを省き、ワキが単刀直入に「あら不思議や」、と弱法師を吾子と認めるのもシテに具わる気品から、惻隠の情に人目を避ける夜陰の対面と決めれば、今は西方浄土を想観して入日を拝むように勧める。シテは〽心あてなる日に向ひて、と幕へ膝を着いて拝し、門の方位に関するワキとの問答・掛合から地の〽入日の影も舞ふとかや、と一ノ松に抜け、〽あら面白や、となる。〽（何のなす所）ぞや、と拍子一ツ強く踏むと、イロエ掛の舞はいわゆる盲目ノ舞、舞台へ戻るのにシテ柱に杖を当て、杖つきスミへ出て大きく左から大小前へ廻り込むと、更に杖で静かに舞う。舞上げ地との掛合は〽今は入日や、と斜に幕を見込み、〽満目青山は、で弾みを付ける様に扇を胸に当てるのは少々強い印象。

難波の致景を〽東の方は、と胸杖に脇柱の方を心眼に見、北は、〽難波なる、と小刻みに杖をついて橋懸へ入ると、〽長柄の橋の、とよろよろ杖で勾欄を擦り、向き直ると盲目の悲しさ、〽貴賤の人に行き逢いの、と杖を小刻みに忙しなくついて千鳥掛に舞台へ入り、立ち出たアイ下人に激しく突き当り倒れるところは吃驚した。杖を探って拾うと立って大小前、〽今よりは更に狂はじ、と下居する。父と邂逅のキリは、〽こは夢、と膝を打ち、〽恥かし、と袖屏風に逃れるところをワキが立ってシテの肩へ扇を留め、アイの送り込みにワキのユウケン留の喜び、爽やかな舞台はシテと三役の好演も清々しかった。囃子は希世・孝一郎・鉱一、後見を生香・盛彦。（57分）

舞囃子「松風・戯ノ舞」　シテ恵美子、狂乱とは一途の思い、行平の幻影に戯れるのも無心の境か、虚飾を排した舞の引き締まった美しさが清冽。（15分）

「玄象・窕」　琵琶の極意を得るため渡唐途次の師長・晃一、従者ワキ勝久・元・正樹を伴い須磨で汐汲みの老夫婦シテ盛義・ツレ盛彦に出遇う。シテは田子を担ぎ杖をついて出、ツレとの掛合に浦の夕景を愛で、〽あら面白の、と連吟するところは如何にも悠揚の風である。初同（生香・光之助ら）〽伊勢島や、で手繰って持った前の田子の紐を弛めると、〽度重ねても、と杖は持ったまゝ天秤棒に手を掛け左、右とスミ近く正面框へ出てさらりと汲む巧さ。〽佗ぶと答へて、と再び担げて常座に戻り、左右の田子の紐を手繰り寄せると静かに音もさせず框際に置く手際も実に鮮やかである。一度は断わるも師長の一行に宿をして琵琶を聴聞のところは、左ウケて琵琶を弾く床几の師長が俄の雨音に〽管絃の障り、と琵琶を外して直ルのに、「や、何とて」と師長にアシラヒ、さればとばかりに雨音を琵琶に合わせて調律の苦を茸く辺り、さりげない描写が繊細。中入は、己れを恥じて忍び出る師長を引き留めるシテが、村上天皇と明かして消えるところ、一ノ松からへ夢中にまみえ、と師長を指す風姿に凛とした気品をみせる。

アイ祐一の立シャベリの後、出端（六郎兵衛・富司忠・総一郎・龍夫）で出る後シテ村上天皇は面中将・初冠（垂纓）・襟白赤・紅入縫箔着付・紫指貫・白単狩衣の品位。龍神・良祐に名器獅子丸を持参させて師長に授けると、遠拝掛早舞は師長の渡唐を思い留まらせた喜びの秘曲の舞、幕際まで行き右袖返シてクツロギ、再び三鼓のナガシで戻って舞い進むが、両袖返シ、撥ネルなど喜悦のうちに舞上げる。キリは龍神を先立て、〽帝は飛行の、と左袖高々と巻上げて爾々と入るのも清爽の気、スミから常座へ行く師長が地一杯にトメた。後見は朗詠・修一。（1時間29分・3月5日・梅猶会・熱田神宮能楽殿）

「蚊相撲」　シテ大名・萬、アド太郎冠者・与十郎、小アド蚊ノ精・万之丞。野村万蔵家当主と次子の改名後はじめての当地舞台に気合が入る。時節外れの選曲に思えるが子規に「春の蚊や一つとまりし雛の顔」の一句、折から相撲も大阪場所最中である。栄養の行

（名古屋能楽堂定例公演・狂言尽しの会）
「茶子塩梅」（杉浦賢次氏撮影）

「仁　王」
（杉浦賢次氏撮影）

## 狂言やるまい会
### 名古屋と東京で公演

狂言やるまい会（野村又三郎師主宰）はきたる五月二十一日、名古屋能楽堂で第四十三回名古屋公演を催す。正午開演

演目は「武悪」（野村又三郎）「浦島」（野村小三郎）「月見座頭」（茂山忠三郎）「弓矢太郎」（野村万作）

なお八月二十日（日）には東京公演として、国立能楽堂で開催される。狂言三番と能「大会」（シテ観世暁夫）

き渡った蚊ノ精は「シクシクシクとして目がクラクラクラとした」程の強烈な毒気を大名の額に注入したらしい。負けた腹癒せに太郎冠者を引き倒した大名は、自身も注入された毒気に当ったか、蚊になって「ブーン」と飛び去る。萬の無邪気が童画の雰囲気を醸して楽しい。（32分）

「茶子塩梅」　訳ありのシテ唐人・又三郎を夫に持つ日本人妻アド小三郎、夫が「ジベンジンムシンガアトウチーレン」などと意味不明の言葉を口走り嘆き悲しむので何某・高義に相談すれば、日本人無心我唐妻恋、即ち「日の本の人の心の無かりけり、我唐土の妻ぞ恋しき」だと謎を解き、更にチヤスアンバイは茶が、キスアンバイは酒が飲みたいのこと、精々飲ませて慰めよと諭され、夫の機嫌を取り結ぶことにする。

狂言次第の囃子で出るシテは唐人頭巾・大髭・白地縫箔着付・黒地丸紋尽下袴・茶縷水衣・側次。一ノ松の名宣、舞台正中に出ては安座に寛ぎ憂さを忘れる無礼講、一度は断わる唐土の「楽」を遠拝掛に舞う。スミで数拍子を踏み、大小前から正先へ招いて出れば勃然として里心、望郷の思いに彼方を見廻し退ってシオルと、妻の堪忍の緒も切れる。怪しげな唐語の歯切れの良さ、舞の達者、又三郎元気である。稀曲、昭和37年にシテ保之・アド又三郎・小アド松次郎がある。（27分）

「仁王」　ギャンブラーをカリスマに仕立てて一儲けを企むなんぞは珍しくもなさそうな嫌な当今、そこへゆくと破産した博奕打シテ靖浩を見棄てるに忍びず、思案する何某アド祐一が、「目口はだけて立ってござるあの大きいお仏か」と驚く博奕打を仁王に造る時代は、馬鹿馬鹿しくも可笑しい。足の病の治癒祈願に跋・弘之が寄進する大草鞋を首に下げられてよろめき、身体をさすられて身悶えるところなど、仁王を経験して壺を心得る弘之と相俟ち靖浩巧まない面白さ、立派な仁王役者の誕生を喜びたい。（30分・3月17日・第24回定例公演・狂言尽しの会）

## NHK放送予定

（平成12年4月～5月）

◆NHK・FM能楽鑑賞

（日曜日午前8時～9時）

〔4月〕

23日　喜多流「芦刈」内田安信ほか

30日　狂言・和泉流「千切木」野村万之介ほか

狂言・大蔵流「富士松」善竹十郎ほか

〔5月〕

7日　観世流・番囃子「善知鳥」観世栄夫ほか

14日　宝生流「千手」「氷室」金井章ほか

21日　金春流「通盛」「朝長」高橋汎ほか

28日　観世流「邯鄲」「橋弁慶」大槻文蔵ほか

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町2－1
電話　03(3291)2488　振替00130－7－3552
〒604－0935　京都市中京区二条通麩屋町東入
電話　075(231)1990　振替01010－0－113

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電話　(052) 731－7984
FAX　(052) 733－2837
振替口座　00800－6－36393
購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一部　100円

## 熱田祭奉納能

### 能「田村」「藤戸」「菊慈童」
### 6月5日　熱田能楽殿

能楽協会名古屋支部（泉嘉夫支部長）主催による熱田神宮大祭の協賛「熱田祭奉納能」は、六月五日(月)午前十時半から熱田神宮能楽殿で催される。入場無料。

演能は、宝生流、喜多流、観世流の能三番はじめ、狂言、舞囃子、仕舞で、能楽協会名古屋支部の恒例の行事である。

演能は次のとおり。

仕舞（観世流）「笹之段」三村恵子「鵜之段」前野郁子
能（宝生流）「田村」シテ衣斐愛
舞囃子（観世流）「吉野天人」高島良一
仕舞（金剛流）「八島」前田茂穂
能（喜多流）「藤戸」シテ和谷衡市
舞囃子（金剛流）「源氏供養」羽多野良子
狂言（和泉流）「酢蟹」野村又三郎
能（観世流）「菊慈童」シテ瀬戸洋子　（番組②面）

## 能「竹生島」狂言「鎌腹」

### 観世栄夫師ら出演
### 8月4日　長良川薪能

天下の清流、岐阜・長良川で毎年行われる伝統文化の夕べ「長良川薪能」はことし第十四回を数え、きたる八月四日(金)長良川特設舞台（岐阜グランドホテル前河原）で行われる。

この長良川薪能は、毎回東西の著名な演者と特設舞台の立地の良さにより、観客動員も一万人を越える規模で夏のイベントとして話題を高めており、今回は、観世流シテ方・観世栄夫師による能「竹生島」和泉流狂言方・井上祐一師の狂言「鎌腹」が上演される。入場無料。

とき　八月四日(金)午後五時開場
午後五時三十分開演。雨天増水時は中止。

主催・岐阜市、主管・岐阜青年会議所、後援・岐阜県、岐阜県教育委員会、岐阜商工会議所。

問い合わせは、岐阜市総合企画部文化・生涯学習課（TEL058・265・4141）岐阜青年会議所事務局（TEL058・264・8090）

## 春の叙勲

### 勲四等旭日小綬章
### 一噌幸政氏（七二）

笛方一噌流・一噌幸政氏は、ことし春の叙勲で勲四等旭日小綬章に叙せられた。

## 能にみる中国史劇

### 大阪

大槻能楽堂自主公演能

大槻能楽堂自主公演能は、六月十七日、二十四日、七月一日の三日間にわたり、「能にみる中国史劇」のテーマで、能「邯鄲」（シテ観世暁夫）能「項羽」（シテ赤松禎英）能「張良」（シテ泉泰孝）を上演する。井沢元彦氏の解説つき。

入場料（全自由席）当日四千三百円（前売五百円引）、入場券はチケットぴあ、阪急、阪神プレイガイドなど。電話予約、友の会の問い合わせは06・6761・8055・大槻能楽堂。

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

〔5月〕
19日(金)　名古屋能楽堂定例公演(有料)
20日(土)　名古屋観世九皐会定例会(有料)
21日(日)　狂言やるまい会名古屋公演(有料)
27日(土)　第12回たまも会(無料)(番組①面)
28日(日)　故・橋岡久太郎37回忌追善能(無料)(番組①面)
〔6月〕
4日(日)　翠謡会大会(無料)(番組②面)
10日(土)　故六世野村万蔵23回忌追善
狂言ござる乃座(有料)(番組②面)
11日(日)　名古屋観世会定式能(有料)(番組②面)
16日(金)　名古屋能楽堂定例公演(有料)(番組②面)
18日(日)　名古屋宝生会定式能(有料)(番組③面)
25日(日)　也留舞会・信謡会合同発表会(無料)

### ◆熱田神宮能楽殿◆

〔5月〕
21日(日)　笙月会創立70周年記念大会(無料)
27日(土)　名古屋巽会(無料)(4面紹介)
〔6月〕
6日(火)　熱田祭奉納能(無料)(番組②面)
〔7月〕
2日(日)　名古屋春栄会(無料)

## 第12回たまも会

五月二十七日(土)午前十時開演
名古屋能楽堂

加茂　太田初一　天野元成　橋口昭猪
竹生島　水野峰子　川本三橋　長棟萩野　忠美敏子　服部公恵　松本尚栄子　平野久子　河田直倪　青柳光昭　猪飼逢也　松岡賢二
能　善知鳥　奈良善一　玉川裕香　金児晶子　飯冨雅介　河村真之介　福井啓次郎　大野誠　後見　東川光夫　衣斐愛　駒林豊徳　澤田拓　平松豊司　真野久　鈴木彦一　岡戸四朗　青木衣斐　水上輝和　三橋茂三　正宜　堯
玉葛　経政　小川博三　猩々　篠田慎子　竹生島　水野すま子
舞囃子　花筐　松本栄子　三橋尚美　猪飼逢也　水野峰子　服部公恵　萩野敏子　河田直倪　松岡賢二
藤戸　塚本照子　亀井茂一　早川鈴木　山本洋子　照子　久恵　小山澄子　皓司　小野郁子　平岡寺田　一子
雲雀山　真野豊久　駒林豊司　平松
仕舞　昭君　金児晶子
仕舞　清経　青山博子　澤田拓　羽衣　西澤康夫　玉川裕香　敦盛　俊成忠度
融　鈴木彦一　岡戸四朗　俊寛　駒林豊徳　小山澄子　澤田皓司　真野久拓
小袖曽我　天野元成　太田初一　長棟忠美　橋口昭猪
仕舞　羽衣　松虫　鈴木久恵　小野郁子　蝉丸　融　早川照子　山本洋子　小山皓司　澤田拓　長棟忠美
胡蝶　平松豊司　駒林豊徳　井筒
仕舞　山姥　女郎花　天野元成　太田初一　玉川裕香　青山博子　水野すま子　枕慈童
藤　仕舞　杜若　野宮　奈良善一　平岡一子　駒林豊徳　真野久　小山皓司　平松豊司　西澤康夫　澤田拓　玉川裕香　青山博子　水野すま子　三橋茂三　寺田澄子　氷室　阿瀧
羅生門
（終了予定五時半頃）

〔御来場歓迎〕
主催　たまも会　金児晶子
三重県一志郡一志町田尻七〇〇番地
TEL（〇五九）二九三－五〇五六

## 第37回故橋岡久太郎三十七回忌追善能

日本芸術院会員
五月二十八日(日)九時半始
名古屋能楽堂

番外仕舞　清経　久田三津子
素謡　海士　服部千加子　市川武彦　松原克己　加藤章子　鮎貝晩月　神原登美子　立松美貴子　渡辺磐子
仕舞　高砂　蝉丸　網之段　巴　女郎花　山内満智子　中田恵子　仲尾和子　戸松花枝
素謡　景清　トモ　屋島　経正　熊野　紅葉狩　蝉丸　松原克己　市川武彦　服部千加子　後藤阿紀子　山内満智子
仕舞　恋重荷　松虫　賀茂　籠太鼓　野宮　隅田川　殺生石　森　大前清子　数枝　原小夜
能　羽衣　村瀬登美子　和合之舞　野口敦弘　野口能弘　野口琢弘　河村寅之介　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　大野誠
素謡　大原御幸　内侍局　林賢一　法皇　小谷隆之　早川功一　後藤弘次郎　加納博　藤井圓隆
能　卒都婆小町　瀬戸勝治　野口敦弘　野口能弘　河村総一郎　久田舜一郎　鹿取希世
舞囃子　高砂　五段　藤井圓隆
独吟　近江八景　竹井喜信
安宅　二木和子
菊慈童　バンシキ　光松見知子
舞囃子　紅葉狩　急之舞　秋田恵美子
海士　五段　藤井一美
舞囃子　松風　急之舞　原田千恵子
舞囃子　遊行柳　青柳之舞　黒川恵美子
番外仕舞　柏崎　遊行　山口幸
絵馬　鈴木多美子　瀬戸綾子　梅田弘子　橋岡慈観
番外仕舞　清経　久田三津子
素謡　海士　服部千加子　市川武彦　松原克己　加藤章子　鮎貝晩月　神原登美子　立松美貴子　渡辺磐子
仕舞　高砂　蝉丸　網之段　巴　女郎花　山内満智子　中田恵子　仲尾和子　戸松花枝
素謡　景清　トモ　屋島　経正　熊野　紅葉狩　蝉丸　松原克己　市川武彦　服部千加子　後藤阿紀子　山内満智子
仕舞　恋重荷　松虫　賀茂　籠太鼓　野宮　隅田川　殺生石　森　大前清子　数枝　原小夜
能　羽衣　村瀬登美子　和合之舞　野口敦弘　野口能弘　野口琢弘　河村寅之介　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　大野誠
素謡　大原御幸　内侍局　林賢一　法皇　小谷隆之　早川功一　後藤弘次郎　加納博　藤井圓隆
能　卒都婆小町　瀬戸勝治　野口敦弘　野口能弘　河村総一郎　久田舜一郎　鹿取希世
舞囃子　高砂　五段　藤井圓隆
独吟　近江八景　竹井喜信
安宅　二木和子
菊慈童　バンシキ　光松見知子
舞囃子　紅葉狩　急之舞　秋田恵美子
海士　五段　藤井一美
舞囃子　松風　急之舞　原田千恵子
舞囃子　遊行柳　青柳之舞　黒川恵美子
番外仕舞　柏崎　遊行　山口幸
絵馬　鈴木多美子　瀬戸綾子　梅田弘子　橋岡慈観
番外仕舞　柏崎　遊行　橋岡慈観

〔御来場歓迎・入場無料〕
主催　名古屋淡交会　橋岡慈観
協賛　三交会　久田三津子

拝啓、卯の香、薫る季節となりました。日頃能楽発声芸術の魅力に心を寄せ、生涯学習の一環として、中日文化センター翠謡会会員一同、素謡、連吟、仕舞、舞囃子などへの出演を楽しみに、また、励みとして、伝統文化に親しむ事によって明日への活力を培う事を心からの願いとするものです。

生駒里翠

## 翠謡会大会

六月四日（日）十二時半始
名古屋能楽堂

（番外、発声学研究講座）
声の変化と情感（呼吸法について）
熊野　テキスト別途配布
野宮　テキスト別途配布
放下僧　小歌

素謡　**熊野**　足立　田中　東　幸　小野　柴田　薫　康行
仕舞　芦刈キリ　中者　蟬治
小袖曽我　尾関由利子
草子洗小町キリ　鈴木　純子
杜若キリ　松井　澄子
桜川クセ　石川美智子　地謡
野宮キリ　葛西　和子
玉鬘キリ　栗田あき子
羽衣クセ　山内　弘司
山本　正直　日野　大順　後石原国夫

素謡　**放下僧**　僧キリ　神戸　秀
仕舞　邯鄲アト　山本　正直
花筐ヒ　久保　恵子
笹之段　木村　秀子　地謡
女郎花　渡辺　錠一　須部　甫　清沢　一政　生駒　里翠　篠木　只夫
笠之段
天鼓　後石原国夫　日野　大順

舞囃子　**巻絹**　太田　一栄　笹　鉱一　助川　龍夫　後藤嘉津幸　大野　誠
**融**　内田　修平　笹　鉱一　助川　龍夫　後藤嘉津幸　大野　誠　地謡　須部　甫　清沢　一政　生駒　里翠　今沢　美和
**菊慈童**　澤田美智子　笹　鉱一　助川　龍夫　後藤嘉津幸　大野　誠　地謡　須部　甫　清沢　一政　生駒　里翠　篠木　只夫
囃子入　**猩々**　笹　鉱一　助川　龍夫　後藤嘉津幸　大野　誠　地謡　渡辺　錠一　須部　甫　清沢　一政　生駒　里翠　今沢　美和

〔御来場歓迎〕（入場無料）

## 中日文化センター

名古屋（栄）・岐阜・四日市
主催　翠謡会
名古屋市名東区社が丘三丁目
電話（〇五二）七〇三―五七一七番
生駒里翠
日本声楽発声学会

## 熱田神宮能楽殿演能

## 熱田祭協賛　奉納能

六月五日（月）十時三十分始

仕舞（観世流）笹之段　三村　恵子
鵜之段　前野　郁子　地謡　星野　路子　今沢　美和　近藤　幸江　生駒　里翠　久田三津子

能（宝生流）**田村**　衣裳　愛
後見　竹内　澄子　玉井　博祐　地謡　安江　良郎　外山　通夫　加賀山憲治　柴田　賢治　東川　光夫　衣斐　正宜　水上　輝和　久野　幸三
楊元　正樹　アイ　佐藤　融　河村総一郎　柳原冨司忠　鹿取　希世

舞囃子（観世流）**吉野天人**　高島　良一　河村眞之介　福井啓次郎　地謡　外山　圭一　黒田　博　高橋　暸一　梅田　邦久　清沢　一政　佐久間祥夫　加藤　正嗣　廣瀬　雅弘　竹市　龍夫　学　助川

仕舞（金春流）八島　前田　茂穂　地謡

能（喜多流）**藤戸**　和谷　衡市
後見　中村　正　加藤　誠子　地謡　丸田　小出　森　越川　寛行　吉川　寛治　長田　郷　長田　暁　松井　俊介
飯冨　雅介　橋本　宰　アイ　佐藤　友彦　笹　鉱一　助川　龍夫　後藤嘉津幸　竹市　学

舞囃子（金剛流）**源氏供養**　羽多野良子　河村眞之介　柳原冨司忠　大野　誠　地謡　牧野　元子　伊藤　雅子　吉川　周子　熊谷眞知子

狂言（和泉流）**酢薑**　野村又三郎　野村小三郎　後見　佐藤　融

能（観世流）**菊慈童**　瀬戸　洋子　橋本　宰　河崎　勲　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　大野　誠
後見　久田三津子　久田　勘鬼　地謡　八神　孝充　松山　幸親　本田　勲　須部　甫　加賀　敏彦　祖父江修一　古橋　正邦　加藤　保彦

附祝言
〔入場無料〕
主催　能楽協会名古屋支部

故六世野村万蔵二十三回忌追善

## 狂言　ござる乃座　公演

六月十日（土）午後二時始
名古屋能楽堂

**宗論**　浄土　僧　野村　万作　法華　僧　野村　万斎　宿屋　高野　和憲

**博奕十王**　博奕打　閻魔大王　石田　幸雄　前鬼　後鬼　鬼鬼　深田　博治　高野　和憲　小川　七作　月崎　晴夫　野村万之介　鉄鬼　杖鬼　野村　万作　万斎

主催　万作の会
お問い合わせ　〇三・三九九七・八七七八

チケット料金
S席七千円、A席五千円
B席三千五百円、学生席二千五百円
取扱い＝チケットぴあ（〇五二・三二〇・九九九九）
名古屋三越プレイガイド（〇五二・二五一・四三七七）

## 名古屋観世会定式能（三回）

六月十一日（日）十二時半始
名古屋能楽堂

能　**熊野**　観世　喜正　梅若　六郎　松次之伝　村田留　植田隆之亮　中村　宜成　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
後見　武田　邦弘　井上　嘉久　地謡　松山　幸親　須部　甫　加賀　敏彦　祖父江修一　久田　勘鬼　梅田　邦久　小島　一英　山本　順之　本田　勘鬼　武田　邦弘　古橋　正邦

仕舞　**兼平**　中川　雅章
**江口**キリ　井上　嘉久
**女郎花**　山本　順之　地謡

狂言　**薩摩守**　野村又三郎　野村小三郎　松田　高義　後見　野口　隆行

能　**阿漕**　観世　喜之　高安　勝久　河村眞之介　後藤孝一郎　助川　竜夫　鹿取　希世
間　野口　隆行
後見　観世　喜正　山本　順之　地謡　外山　圭一　加藤　保彦　高橋　暸一　清沢　一政　古橋　正邦　梅田　邦久　中川　嘉久　井上　雅章

附祝言
〔有料〕（終了五時前頃）
要会員券
当日券（自由席）八千円（枚数制限あり）
主催　名古屋観世会

## 名古屋能楽堂定例公演

六月十六日（金）
午後六時三十分開演
名古屋能楽堂

舞囃子
**須磨源氏**　前野　郁子　河村眞之介　福井　良治　助川　龍夫　鹿取　希世　地謡　瀬戸　洋子　三村　恵子　久田三津子　近藤　幸江　今沢　美和

狂言
**腰祈**　祖父　佐藤　友彦　山伏　佐藤　融　太郎冠者　今枝　靖雄　後見　井上　靖浩

能
**葵上**　巫女　高橋　暸一　侍女　八神　孝充　泉　嘉夫　空之祈　高安　勝久　杉江　元　笹　鉱一　鬼頭喜太郎　福井啓次郎　鹿取　希世
アイ　井上　祐一
後見　中川　雅章　梅田　邦久　地謡　外山　圭一　黒田　博　松山　幸親　本田　勲　古橋　正邦　清沢　一政　久田　勘鬼　祖父江修一

（午後八時四十五分頃終了予定）
主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・名古屋城振興協会
名古屋市文化振興事業団
協賛　能楽協会名古屋支部
〔入場料〕前売一般三千五百円、学生二千円（当日一般四千円、学生二千五百円）
〔前売券取扱い〕名古屋能楽堂（電〇五二・二三一・〇〇八八）
チケットぴあ、市内プレイガイド

## NHK放送予定

（平成12年5月～6月）

◉NHK・FM能楽鑑賞
（日曜日午前8時～9時）

〔5月〕
21日　金春流「通盛」「朝長」高橋汎ほか
28日　観世流「邯鄲」「橋弁慶」大槻文蔵ほか
〔6月〕
4日　観世流「養老」「鵜飼」木月手月ほか
11日　宝生流「唐船」「杜若」寺井良雄ほか
18日　金剛流「三井寺」豊嶋調三ほか
25日　観世流「隅田川」梅若六郎ほか

◉NHK教育テレビ
6月25日(日)午後3時～4時40分
観世流能「松風」見留
シテ片山九郎右衛門　ツレ片山　清司
ワキ福王茂十郎ほか

# 戦後名古屋能楽史 ⑨

## 〔第三章〕名古屋商工会議所特設舞台の一年（昭和二十四年）

竹尾　邦太郎

五月に入り八日は日本で初めての「母の日」、米国に起ったといい爾来五月の第二日曜日の恒例となり現在に至る。五月十五日、第三回定式能は淡交会の担当で「芦刈」橋岡久馬、「察化」佐藤秀雄、「安達原」橋岡久太郎。五月二十一日には九皐会が西川流演舞場であった由だが詳細は不明である。

翌二十二日、金剛流の大塚一二、竹市秀雄職分披露能が両氏主催、山田仁三郎の春鶯会後援で行われる。「乱・脇能ノ式」竹市秀雄、「大原御幸」金剛巌、「望月」大塚一二、「棒縛」歌村彦四郎、「船弁慶・白波ノ伝」豊鶴弥左衛門、と京都より金剛宗家以下一門大挙しての来演は、大鼓に谷口喜代三・谷口勝三、小鼓の曽和博朗、太鼓の前川善雄も同行し、ワキには遠来の豊鶴十郎、と華やかな催能が彷彿とする。

六月、他誌に先駆けて喜多流々誌「喜多」が復刊され、六月十九日の第四回定式能は宝生会の当番で「井筒」宝生重英、「二九十八」歌村彦四郎、「小鍛冶」辰己孝、これが装束納のようで翌二十日の紙上には「熱田まつり」の広告が掲載されている。曰く「二十日午後六時より奉納演芸（芸能殿）、二十一日午前九時祭典、献茶祭、花火、巻藁船、相撲、弓道、献花、献茶、神輿、仮装行列、特に巻藁船は本年より復活、熱田神宮奉賛会」と。そして祭り後の六月二十三日には写真入で「巻藁船三隻、三百六十五個の大提灯に飾り立てられた熱田祭りの名物巻藁船は六年ぶりの復活だ。宮の渡し熱田区神戸の浜をゆらりゆらりと船出すれば浜一面を埋め尽した万余の観衆からどっと歓声が沸き起る」とその興奮を記事を伝える。復興途上の名古屋市民の意気と、公害以前の堀川の水の美しさが思われる。

九月、「喜多」に続き観世流々誌「観世」が主筆斎藤太郎の許に復刊される。装束始は九月十一日、掬水会主催の柴田初太郎還暦祝賀能、「乱」柴田収、「田村・長胡床」大槻十三、「班女」橋岡久太郎、「鈍太郎」井上新三郎、「安宅・勧進帳」柴田初太郎・高安滋男。「戦後、能舞台もないとき、中区大池町の商工会議所のホールで、能・安宅のシテをやったことがあります。装束など皆私のもっていたものでした」と私家版の自著「帰童閑談」で柴田初太郎が言うのはこれである。

九月二十三日は第十回名匠鑑賞能、「蝉丸」宝生九郎・野口禄久、「石神」佐藤卯三郎、「砧」野口兼資、「紅葉狩」宝生英雄、宗家以下宝生流一門の来演は当地三役の外に金沢から大鼓・飯島佐六も参加、名人と謳われた野口兼資は戦後初の来名で、この日は「砧」のほかに催主田鍋惣太郎と一詞「松虫」も勤めている。九月二十五日、第五回定式能は「清経」大槻十三、「重喜」井上祐一、「天鼓・弄鼓ノ舞」山本博之、で大槻清韻会と山本観衛会の大阪勢、この月は東西から名手の来演があり、戦前の活況を取り戻す勢いがみえた。

さて戦中戦後、当時の能楽界を取り巻く情況はどうなっていただろうか。昭和十九年、軍部の圧力で能楽関係の出版各社は統合されて「能楽出版社」となり、流誌などは「能楽」誌に一本化された。戦時態勢に沿った能楽師団体が社団法人能楽協会として発足するのは終戦の僅か十日前、昭和二十年八月五日だったという。この組織は終戦直後の大混乱期にも残存し、大河内俊輝は「現代能楽論」の中で、「二十年九月始めて、自主的に結成式を上げた。家貧なる時であったから、能界は一致して復興に努力した」と言う。協会書記長は三宅襄（一八九七―一九六五）、全国各域ごとに支部を置くが地域によって支部設立には遅速があったらしい。田鍋惣太郎は「小鼓芸話」の中で次のように言う。「名古屋支部設立について、同氏が来られた時には、私が二つ返事で承諾しまして、大へん喜んで居られました。名古屋支部は早かったですよ」と。ここで高安滋男（ワキ方高安流宗家、一九一七―一九七八）が三宅襄に宛てた書簡（筧鉱一氏所蔵の能楽資料の一）を紹介する。

「先般は早速御返信に接し有難く御礼申上候当地以外の協会員には目下支部所属の意向を一応問合せ中に附確定の上名簿作成御送附申上可暫時御猶余願上候

次に大阪支部は結成式に何か催の意向に候や御伺申上候　当支部としては目下計画も無く尊台大阪支部結成式に御出席ならばその往路又は帰途に御立寄願ひ結成式挙行致し度く御都合竝に日時御一報願上度御依頼申上候

次に現在入会金は何程に改正せられ居り候や御通知賜度其節入会申込用紙若干御送附被下度重ねて御依頼申上候

先便にも一寸御伺申上候が東京支部等に於ける支部細則等有之候はば御通知願上度候

夏場にて催も少なき為連絡も不充分にて早急に進渉も致さず候へ共九月に入れば色々連絡も出来何かと御報告も出来申す事と存じ居り候

先は取急ぎ要用のみ申上げ御伺申上候　以上」

これを読めば少なくとも名古屋支部は大阪支部に遅れて発足したことが分かるであろう。そして昭和二十四年十月一日現在の会員名簿は次の四十二名を列記する。

シテ方（観世流）飯尾義之・飯田納恵・早川輝吉・林愿蔵・加藤良久・高野瀬透・塚本秀雄・村瀬小右衛門・国枝照清・増田一雄・松良正一・斉藤安次郎・柴田初太郎・杉村竹翠、（宝生流）畑富次、（金剛流）大塚一二・竹市秀雄・山田仁三郎、（喜多流）二井栄逸・和谷宏・中尾栄一・脇方（高安流）高安滋男・西村弘敬・西村欽也、狂言方（和泉流）井上松次郎・井上新三郎・河村丘造・歌村彦四郎・佐藤卯三郎、笛方（藤田流）藤田六郎兵衛・金森準三・小島鉄次郎、小鼓方（幸清流）田鍋惣太郎・田鍋惣一郎・福井五郎・青木恒治・守屋寿石、大鼓方（石井流）西尾孫太郎、（大倉流）永田虎之助、太鼓方（観世流）野崎太郎・鬼頭八郎・鬼頭喜太郎、以上。

これらの人々が終戦直後の非常時の催能に、東西から来名するシテを地謡や三役で支えたのである。

またこの年、昭和二十四年は名古屋市市制六十周年に当り、市は記念事業として十月一日から十日間、全市をあげて華やかに「大名古屋まつり」を繰り展げる。予算は二千万円でうち半額は各種の催しものから得る収入でまかなう予定という（六月二十九日付・中部日本新聞既報）が、能楽界では特にこの行事に関わったものは無く、脇道に逸れて当時話題を独占したのは名古屋に限らず能楽界では戦前から愛好者の多かった野球で、本場米国のプロ球団サンフランシスコ・シールズ軍がオドール監督に率いられ、十月十二日戦後初来日したことである。十月十五日、後楽園球場の対巨人第一戦で初めてコカコーラが球場内で自由販売されたという。戦後日本の、自由主義の先兵はベースボールとコカコーラであったろうか。

十月十六日は九世藤田清兵衛重孝廿三回忌追善能、「乱・双ノ舞」橋岡久太郎・久馬、「宗論」歌村彦四郎、一管「豊後下り端」金森準三、連管「真ノ音取」森田光春・藤田六郎兵衛（森田流と藤田流の共演が珍しい）、「融・思立ノ出・今合返・名所教・十三段ノ舞・舞返・脇留」観世喜之・西村弘敬。主催は十世藤田六郎兵衛重明、囃子方の催能らしく他に舞囃子二番、一調一声など盛沢山で「融」に六つもの小書が付くのもこれ亦珍しい。

十一月一日、京都榆書店に請を置く花発行所より能謡雑誌と謳う「花」が創刊される。A5判・表紙とも十二頁の小冊子ながら能楽界の情報に飢渇しているファンにとっては正に旱天の慈雨の一滴であった（約七年間、九九号まで発行）。題字・片山九郎右衛門（博通）、表紙絵・松野奏風、編集兼発行者は京都観世界主事の小林芫佑、売価十円（送料六円）、名古屋の取扱販売所は中区門前町二丁目の其中堂である。創刊号に寄稿した梅若猶義は、「関西の謡」と題する文章の冒頭で次の様に述べている。「終戦当時の混乱状態もようやく整斉せられ、各部門ごとの復興と共に、我が能楽界も戦前に勝る隆昌をみ、国民各層への浸透は、斯道に携わる者として誠に欣ばしい次第であります」と。なお同誌に掲載の図書案内には野上豊一郎著「観阿弥清次」要書房、野上豊一郎著「花傳書研究」小山書店、田中允著「能楽の鑑賞」紫乃故郷舎などがある。

十一月三日は明治節と言ったが、前年より文化の日と改まって二年目、一九四九年度ノーベル物理学賞は湯川秀樹博士の中間子論に対し授与、と報じられた。博士は知る人ぞ知る狂言愛好家で茂山千五郎家の狂言を蟲眉にし、就中「月見座頭」に関心を寄せ、三世茂山千作とは昵懇の間柄であった。この日、当地では故武田宗治郎の追善能楽会、「砧」武田太加志、「不腹立」井上新三郎、「船弁慶・前後ノ替」観世元正、外に舞囃子一、素謡四、連吟二、独吟二、仕舞十一番で観世宗家（十九歳）の戦後初来名である。ちなみに催主武田太加志は当時四十二歳、昭和十八年十月廿七日に召集を受け、昭和二十一年四月末に派遣先の南支から無事名古屋港へ帰還、休養の後、七月から稽古を始めた、と随筆集「二人静」に書く。昭和二十三年二月十五日、戦火を免れた東京多摩川能楽堂で亡父宗治郎七回忌追善能を催すが、能楽堂払底の折柄、同年中に名古屋でもという訳にはゆかなかったであろう。この月も能楽界は活況で、六日には中区梅川町（現・橘一丁目）長栄寺に於て高安会が発会式を挙げ、十一月には千種区城山町三丁目の大塚一二邸舞台で能楽協会名古屋支部結成記念会が、各流によって行はれ、観世金剛の進展めざましい、と能謡雑誌「花」二号も報じている。十三日は淡交会、二十日の第六回定式能は「三輪」宝生英雄、「名取川」井上松次郎、「車僧」野口禄久、で宝生会の担当である。余談になるが二十六日にはパシフィック野球連盟が結成され、師走の十二月一日にはお年玉つき郵便はがきが初めて登場して世相を和ませ、同日夕刊中部日本新聞（一部一円五十銭）が創刊された。五日、遅れてセントラル野球連盟も結成されてプロ野球は二つに分立する。戦争は多数の有為貴重な人材を奪ったが、無事帰還して即戦力となる人材に加え、新戦力とする若手の育成を計らなければならないことは、野球界も能楽界も同じ、そこには活躍の場を広げる意図もあったであろう。昭和二十四年度の納会は清韻会創立三十年記念杉村竹翠師範披露素謡会で、午前と午後の二部制、メーンの午後の部は素謡四、仕舞七、舞囃子二、一調一番、能「高砂」を杉村竹翠が勤めた。清韻会の大槻十三、大槻秀夫の他に井上嘉介、山本博之、観世喜之、橋岡久太郎の客演があり、当時の観世流名古屋能界地図の一端が知られる様である。（つづく）

## ナディア狂言

6月2日アートピアホール

名古屋・栄のナディアパークで若手狂言師たちにより、昨年「ナディア狂言」と銘うって公演が行われ話題をよんだが、きたる六月二日「第二回ナディア狂言」が、名古屋市青少年文化センターのアートピアホールで開催される。

演目は、狂言「萩大名」（大名・井上靖浩、太郎冠者・今枝靖雄、亭主・今枝郁雄）「清水」（太郎冠者・佐藤融、主人・鹿島俊格）、開演午後七時

入場料（全自由席）一般二千五百円、学生千五百円（当日は五百円増）、チケット取扱い＝チケットピア（TEL052・320・9999）

## 能楽鏡座公演

7月1日名古屋能楽堂

能楽「鏡座」の第四回公演が七月一日名古屋能楽堂で開催、観世流シテ方・味方團氏が能「猩々乱」和泉流狂言方・野村小三郎氏が狂言「花子」を披曲する。

同公演には、林豊一郎、片山慶次郎、ワキ方福王流福王和幸、太鼓方金春惣右衛門、狂言方野村萬の諸師が来演。午後一時半開演。

入場料前売A券四千五百円、B券三千五百円、学生券千五百円（当日券は五百円増）

取り扱い　チケットピア（052・320・9999）

## 名古屋宝生会定式能（第44期第2回）

六月十八日（日）午後一時始　名古屋能楽堂

### 番組

能　**敦盛**
内藤　飛能
伊藤　浩史
和久荘太郎
佐藤　耕司
間　茂山　宗彦　飯富　雅介　笈福井　鉱一　良治　大野　誠
後見　竹内　澄子　衣斐　愛　地謡　鈴木　伊藤　青木　平子　温　通　稲　堯　美　勝　石黒　馬縁冨　辰巳　満次郎　稲川　寿一　四夫　孝

仕舞　**羽衣**（クセ）　高橋　章
**山姥**（キリ）　佐野　萌　地謡　石黒　馬縁冨　辰巳　満次郎　和久荘太郎　四夫　孝

能　**砧**
宝生　小倉健太郎　英照
間　高安　勝久　福井啓次郎　河村総一郎　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎
後見　佐野　萌　石黒　孝　地謡　柴田　智幸　石森　勲　加賀山憲治　柴田　賢治　水上　輝和　高橋　章　衣斐　正宜　鬼頭　嘉男

狂言　**寝音曲**
辰巳満次郎
茂山　千作　茂山千五郎　後見　茂山　茂

能　**阿漕**
間　杉江　元　茂山七五三　河村真之介　後藤嘉津幸　助川　龍夫　竹市　学
後見　辰巳　孝　和久荘太郎　地謡　大森　織也　富田正代司　寺部　一威　尚人　哲也　水上　輝和　佐野　萌　衣斐　正宜　鬼頭　嘉男

附祝言

主催　名古屋宝生会

正会員年四回綴り一万八千円（当日の販売も致します）

事務所　名古屋市天白区島田二―三〇一
島田橋住宅二―一三一〇
佐藤　耕司
電話FAX〇五二―八〇三―七三七二
携帯TEL〇九〇―一七四一―六二三四

## 也留舞会　信謡会　合同発表会

六月二十五日（日）正午始　名古屋能楽堂

狂言「二人大名」「石神」「井杭」ほか

〔来場歓迎〕

主催　也留舞会　信謡会

事務所　名古屋市千種区仲田1―11―16
電話（052）751―9966

## 熱田神宮能楽殿演能

# 名古屋巽会大会

五月二十七日㈯十時半始

名古屋巽会は、五月二十七日㈯熱田神宮能楽殿で能楽大会を開催、能「船弁慶」（シテ渥美公美乃）はじめ素謡、舞囃子、独吟、仕舞など上演、午前十時半開演、来聴歓迎、入場無料。

演目は次のとおり。

〔仕　舞〕「養老」近藤翠「田村」クセ玉井房子「胡蝶」上嶋愛子「西王母」山下知子「小督」広瀬久子「巻絹」クセ金子恵津「養老」田口將成「清経」キリ山内悠太朗「嵐山」長縄三枝子「田村」キリ川本マサ子「羽衣」キリ山田スミ子

〔独　吟〕「善知鳥」玉井道夫

〔仕　舞〕「巻絹」クセ柿野光子「敦盛」クセ塚本照子「国栖」伴定子「竹生島」清水達郎「田村」キリ金剛徹

〔素　謡〕「巻絹」鈴木ゆり子、金子恵津、山下知子

〔仕　舞〕「高砂」安岡美智子「清経」キリ小島加代子「黒塚」高木富美子「藤」クセ桜井昌子「網ノ段」土岐静香「鵜ノ段」澤田美枝子

〔舞囃子〕「敦盛」藤田光子「松風」大渓和子「三輪」長崎邦子

〔仕　舞〕「網ノ段」依田佳子「班女」クセ荒川倭子「天鼓」夏目哲子「葵上」加藤美知子「鞍馬天狗」西本紀子

〔舞囃子〕「小袖曽我」中村成利、木村仁「雪雀山」高柳京子「融」岩田幸子

〔仕　舞〕「雲林院」富田正代司「井筒」織田哲也「遊行柳」寺部一威

〔舞囃子〕「実盛」足立知子「羽衣」大森尚人「猩々」柴田美恵子

〔仕　舞〕「葛城」戸田和「小歌」玉井博若「岩船」佐藤耕司「鵜」稲川寿一

能　**船弁慶**

鈴木　慶祐
渥美公美乃

高安勝久
杉江　元

笛　鉱一　鬼頭喜太郎
後藤孝一郎　鹿取　希世

間　佐藤友彦

附　祝　言

名古屋巽会連絡先＝愛知県愛知郡東郷町和合ケ丘2－11－5、TEL056－13－9－1487、戸田和方

## ◆陽春の舞台から◆

# 「花傳の會」「林定期能」と「第廿二回・邦謡会能」

竹尾邦太郎

「道成寺・赤頭・中ノ段数圃・無圃ノ崩・五段ノ舞」　盛沢山な小書のうち「圃」は「ひやうし」と読み習わし「拍子」の意、乱拍子に係わる。シテ清和、面近江女・襟白浅黄・浅黄地金鱗箔着付・白地丸紋尽縫箔腰巻・赤地糸巻枝垂桜文唐織童折、次第三遍返へ鐘の供養に参らん、の語気に徒ならぬ執念を滲ませ、アイ能力（万作）を誑（たら）して供養を許されるところは「あら嬉しや」に物凄く気合が入る。物着もいそいそと、前折烏帽子を着けて一ノ松、凝然と鐘を見詰めると、闘志は胸の鼓動の高まりに同調する大鼓（由訓）に乗り、するすると舞台へ出れば「嬉しやさらば」は念願叶い狂喜の喚声と聞かれ、大いに引き付ける。

乱拍子（小鼓・源次郎）は三段で中ノ段、扇を左に持ち替えて突き出すや小書で数拍子を踏み、ワカを刻み込みつつ踏み進み、へ（道）成寺とは、と再び扇を右に持ち替え拍子を踏まず鐘へ向き直る、小書拍子無しのくずれである。鐘を見込み急ノ舞五段、はきはきとしているが乱拍子から急ノ舞への一聯、どろどろした粘っこい情炎の様なものは余り感じられなかった。鐘（鐘後見・徳三）はきれいに入るが撥ねた烏帽子は正面白洲に飛ぶ。落ちた鐘に驚き、アイ能力二人（オモ万作・アド祐一）が同時に鐘に触って「熱や熱や」と騒ぐところや、オモとアドが互いに報告の義務を押し付け合う問答のところもあっさりしている。

ワキ茂十郎はいつもながらの堂々の風姿、語の重々しさに蛇体への畏れを籠め、諄々と語って盛り上げる。鐘が上がると、後シテは白綾を被いて跼り、被衣撥ね腰に巻いて立つと折り。面般若・赤頭・赤地金鱗箔着付・段ニ山道宝輪鱗文縫箔腰巻の、すっきりした装着胴姿に冷たい凄味をみせ、鱗落シから悶え苦しむ柱巻と切れがよい。キリは一ノ松へ逃れて胸杖に鐘をキッと睨むと打杖を頭上に幕へ走って飛び込んだ。

笛は能主の六郎兵衛・太鼓を元伯、シテ・ワキ・囃子方が全て宗家及び宗家筋が珍しい。主後見・将薫、地頭・文蔵。（1時間29分・3月28日・花傳の會納会）

『延命袋』　妻あきらの里帰りを好機とばかり、相対では怖いので太郎冠者・千三郎を嚇し賺して三下り半を持たせる夫・千之丞、刀に物を言わせる恐い戯れ事が迫力なら、お内儀も怖い太郎冠者、怯えて及び腰ながら夫婦喧嘩を面白がる下心もあってちょっかいを出そうか、の強かさをみせる千三郎も精彩。一方、愛を裏切る卑怯な夫の仕打ちに妻の激情はかわいさ余っての逆上、あきらのヒステリックなわわしい女は蓋し嵌り役である。慰藉料には何なり、の言質を取って要求する「身についた物」とは夫の身体そのもの、袋を頭から被せ引っ立ててゆくところは正にブラック・ユーモア。延命袋は一般に福の神の持つ錦の袋だが、ここは二人の生活を永らえさせずには置かない袋の意か。千五郎家だけの曲名で普通は端的に「引括」。（16分）

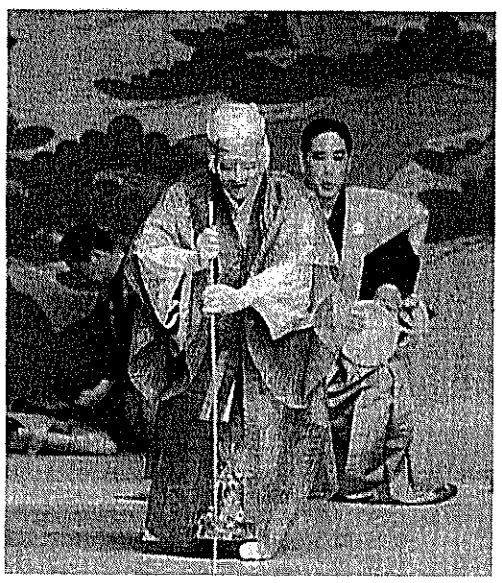
「小塩」　桜立木が出ると痴れるような逝い春の午後、へ若き人々を伴ひ、とワキツレ正彦・敬三を同道し洛中から大原野へ花見の風流人士ワキ隆之亮、己れより更に年嵩の鄙めいた老翁シテ隆司が、人込みに桜枝を担げる粋狂を見咎めて問答になるところ、隆司飄々とした風情に芸劫。へ小塩の山も今日こそは、と小さく廻りへ神代も思ひ知られけれ、と直ッて返シ句に左から正へ見遣る辺り、ワキに付き合う裡に萌す感興に口遊（すさ）む、業平が二条の后との昔を懐旧する歌への憧れである。

正中、下居に桜枝を置き、昔の事を語るのも、とワキへアシラフと、業平を匂わせて直り、老いさらばえた身には歎いてもへかひぞなかりける、と双シオリせずに面をやや左へ伏せるだけなのが却って哀れ深い。気分一転、ワキと更に心が通い花見の輪に入るところは、へ心若木の、と桜枝取って立つと、へ老隠るやとかざさん、と桜枝担く諧謔に若やぐ。中入地（健・晴道ら）へ天も花にや酔へるらん、と仰いで首を左へ廻らし、へ紅埋む夕霞、に右へ廻り込むと、へ影ろふ人の面影ありと見えつつ、と桜枝を捨てて瞬時留まり、返シ句一杯に橋懸へ入る。アイ黒人は正邦、二条の后が大原野へ行啓の砌、業平が御衣を下賜されて詠んだ歌の故事を淡々と語って神妙。

後場、先の老人は業平か、と不審するワキが奇特を待つ裡に、一ノ松に花附物見車が出、面中将・初冠（巻纓・道懸・桜花翳ス）・白地縫箔着付・浅黄指貫・花色単狩衣・真ノ太刀（懸緒付）の優美な姿の後シテが中に入り一セイ、ワキとの掛合に、へ姿現はすばかりなり、とワキを見込み、へ花も今、と再度ワキを見込むと、地のへ明日は雪、と薄く面テラシ、直ルとへ花も雪も、と望見するとへ桜かざしの袖ふれて、と後ろ向きに車を出る。月の出を待ち、へ春宵一刻値千金、のクリ地に桜立木を見るシテの一種の放心状態も微妙に、クセは、忍ぶ恋に心乱れる思いを、へ（紫の色に染み）香に愛でしなり、と拍子二ツ踏むところに現わすかである。

クセ切のへ昔男、と瞬時薄く面伏せ、へぞと人も言ふ、と面上げ、へ昔かな、の詠嘆も意味深長。序ノ舞の流れるような美しさは指貫の隙から時にこぼれる緋の華やぎ、込大口に緋を用いた隆司のセンスが素晴らしい。キリはへ山風、と目付柱へ高く見、へ散らせや散らせ、と桜立木へ招いて出ると、へ木の下ながら（睡めば）、と左袖返シて枕を使う心に沈む具象の型も美しかった。囃子は洋一・光寿・喜彦・敬介、主後見を馬野義男。（1時間45分・3月29日・林定期能楽会・京都観世会館）

「巻絹」　シテ上野嘉宏、岐阜市出身。平成七年春、高校卒業と同時に片山家へ内弟子修業に入るという。それまでは能楽協会名古屋支部の能楽後継者育成研修会に在り、初舞台は第一回発表会（平成五年）の舞囃子「吉野天人」、近年は片山同門会に出演の機会があり、当地でも先頃「経正」を勤める。今回も清新の気に溢れ素直、ツレ大志と共に几帳面な舞台に好感がもてるが、憑依の狂いは余り感じられなかった。大成を祈りたい。なおシテ、ワキ雅介とも



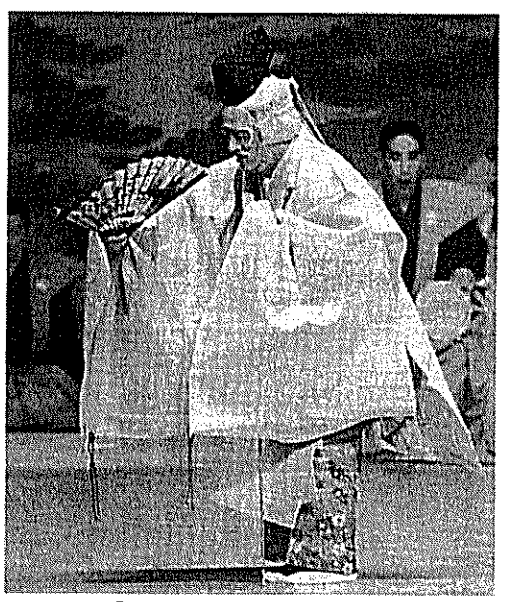
「鸚鵡小町」邦謡会能
（杉浦賢次氏撮影）

に前折烏帽子で景は映えない。（1時間4分）

「花争」　花見と桜狩り、同一概念にもかかわらず花だ花だと拘泥する主・又三郎と太郎冠者・小三郎の確執。古歌や諺の知識を振りかざす猪口才も調子に乗って自縄自縛に陥る若さは小三郎のもの。一方、言葉遊びを楽しみつつミスは聞き逃さず遣り込める又三郎は、苦虫噛み潰した面（つら）に小鼻蠢かさんばかりの表情に妙。両者のテンポ快調。（10分）

「鸚鵡小町・杖三段ノ舞」　重習奥伝、邦久披キ。関寺辺に逼塞する小町の消息を仄聞した帝は、ワキ新大納言行家・茂十郎に御製を託して尋ねさせる。当ても無くさ迷うシテ小町・邦久は面姥・純白姥髪・襟白二・白浅黄段観世水ニ水草文摺箔着付・茶地鉄線ニ飛燕文縫箔腰巻・萌黄縷水衣（肩上）・女笠・杖の姿、三ノ松で杖に両手を重ね暫時停まり、再び杖をついて運ぶと一ノ松でへ身は一人、と今の境遇を漏らし、へ九十九髪、と運ぶとへ長き夜を飽き果てたりな、と舞台に入る。ワキが立って問答となるが、雲の上人にも怯む気配はなく、対話の糸口は辺りの様子から地（九郎右衛門・清司ら）に語わせる近隣の景観に及ぶ饒舌。へ白雲の色香面白き、と胸杖に左ウケて薄く見上げ、へ北に出づれば、と二・三歩笛の方へ、へ志賀辛崎の、と笠に手をやり眺め、へ瀬多の長橋、は一ノ松へ見る。眺望には詩的な感懐があり、知らず識らずに話題が己が身辺、歌に及んでくるところなどシテとワキ共に上々である。へ涙の関寺に、と杖に縋り下居すると杖を置き笠を脱ぐ。ワキとの問答に帝よりの憐れみの歌を渡され、目から離して右から左へ視線を移すも読めず、ワキは立って行き、歌が認められた懐紙を扇面に載せ正中へ戻ると右ウケ下居、扇を置き懐紙を捧げ静かに詠む。憐れみは憐憫に非ず恵み、慈悲の心をかけることであろう。

「あら面白の御歌や候」は忘れずに居てくれる帝への感謝、しかし返歌を詠めそうにはなく、かと言って詠まねば恐れ多い胸中、「唯一字にて申さう」とワキへアシラフところには才媛を謳われた機智がみえ、不審のワキを説得する辺りは余裕すらみせる。帝へのこの不遜事も和歌の道なら、とワキから視線を外して直ルと、へ神も許し、と合掌し、へ和歌の徳とかや、とワキにアシラフと、ワキも納得か、立ってワキ座に戻る。



「鸚鵡小町」邦謡会能
（杉浦賢次氏撮影）

クリに鸚鵡返しの歌の解説を重ね、小町の往時を顧みるクセは居グセ、クセ切、窶れてへ身体疲瘁する、と身体を震わせての双シオリは哀れそのもの。ワキの呼び掛けでシオリ解くと、両手で杖に縋って立ち（写真）物着になる。黒風折に水衣を白地芒文長絹に替えると心は業平、玉津島で舞った業平の法楽の舞を偲う。後見座から杖つき堂座へ出ると、業平にへ我も同じく、と右ウケ、へ玉津島に参りつつ、の地で一ノ松、へ木賊色の、と左袖を引き付け眺め、へ風折烏帽子、と扇で指スと其処はもうへ和光のひかり玉津島、の神前。地へ（廻らす袖や）波がへり、と一ツ踏むと序ノ舞は小書でイロエ掛三段ノ舞、囃子（六郎兵衛・博朗・総一郎）の裡に舞台へ入る。

業平を真似るとはいえ、扇を開く手つきや替える手つき、途中何度も腰を屈め、杖を肩に掛けて下居にクツログなど老女の杖ノ舞（写真）はあくまで静か。舞上げ、へ芦辺をさして、と指廻、へ月には、と左へ薄く見上げ、へ（これぞ）この、とスミへ、へ老となるものを、と扇を面に翳し、へかほどに早き、と左へ廻り、へ光の陰の時人を待たぬ習ひとは白波の、と廻り込み前へ出ると、へあら恋しの、とたちたら退り下居。へかくてこの日も、と右ウケ、へ暮れ行くまま、と茫と遠く見ると、へさらばと言ひと、でワキは立ち、シテは扇を懐中し、へ行家都に帰り）ければ、でシテも杖取り立つと、とぼとぼ堂座へ行き、直ってワキに向き胸杖。へ小町も今はこれ迄、でワキもシテに向くと切、へ杖に縋りてよろよろと、とツツツとワキの方へ躓く様なよろけ足で出ると、へ立ち別れ行く、と互いにすれ違い、正中でワキを見送るとへ立ち別れ行く袖の涙も、とシオル。ワキが幕に入るとシオリ解き、へ柴の庵に帰りけり、と右ウケて詰メ留めた。

老いの寂しみの中に小町の矜持も見え余情惻々、立派な舞台だった。主後見・慶次郎。（1時間43分・4月1日・邦謡会能）

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話　03(3291) 2488　振替00130－7－3552
〒604－0935　京都市中京区二条通麩屋町東入
電　話　075(231) 1990　振替01010－0－113

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話 (052) 731－7984
FAX (052) 733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## 名古屋城夏まつり

### 8月3日～15日薪能上演

### 能楽協会名古屋支部協力

真夏の夜のファンタジーとして恒例となった「名古屋城夏まつり」は、きたる八月三日から開催されるが、この夏まつりを飾るイベントとして薪能は毎年人気を集め話題となっている。ことしは八月三日(木)から十五日(火)まで（八月五日は休演）上演される。

上演曲目、演者は次のとおり。

八月三日(木)「羽衣」和合之舞（シテ今沢美和）

八月四日(金)「東北」（シテ前野郁子）

八月六日(日)「千手」（シテ近藤幸江、ツレ本田勲）

八月七日(月)「清経」（シテ加賀敏彦、ツレ高島良一）

八月八日(火)「安達原」（シテ清沢一政）

八月九日(水)「通小町」（シテ須部甫、ツレ三村恵子）

八月十日(木)「融」（シテ祖父江修一）

八月十一日(金)「小督」（シテ松山幸親、ツレ久田三津子、トモ瀬戸洋子）

八月十二日(土)「船弁慶」（前後之替（シテ久田勘鬼、子方・久田勘吉郎）

八月十三日(日)「百萬」（シテ古橋正邦、子方・古橋正明）

八月十四日(月)「井筒」（シテ高橋暸一）

八月十五日(火)「葵上」空之祈（シテ梅田邦久、ツレ上野嘉宏）

入場料（前売）大人・八百円、小人・中学生二百円（当日）大人九百円、小・中学生三百円、福祉券三百円、市内各プレイガイド、チケットぴあなどで前売券発売。

開門は午後五時、薪能は午後七時開演。

## 第17回　天王薪能

### 能「船弁慶」狂言「業平餅」など

### 8月5日　天王川公園

尾張津島天王祭で名高い津島で薪能が催されるようになって本年で第十七回を迎えるが、ことしは愛知県立津島高等学校創立百周年記念行事として、金春流本田光洋師、和泉流狂言・野村万作、野村萬斎両師が来演、地元の津島はもちろん愛好者の大きな話題になっている。

（第十七回天王薪能）

日時　八月五日(土)開場午後四時、開演四時三十分

場所　津島市天王川公園特設舞台（雨天・津島市文化会館大ホール）

番組は次のとおり。

（解説）名古屋女子大学教授・林和利氏

（狂言）水掛聟（佐藤友彦、井上靖浩、佐藤融）

――火入れ（午後六時十分）

（仕舞）鵜之段（金春安明）

（狂言）業平餅（野村萬斎、野村万之介、石田幸雄、林泰礼、深田博治、高野和憲、月崎晴夫、野村万作）

（能）船弁慶・小曲遊女ノ舞、替ノ出（シテ本田光洋、子方鬼頭尚久、ワキ飯富雅介、ワキツレ橋本宰、アイ井上祐一、笛・鹿取希世、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・筧鉱一、太鼓・鬼頭喜太郎）

後見・本田芳樹、横山紳一

地謡・金春安明、高橋忍、吉場広明、井上貴覚、金春穂高、前田登、永田孝司、河村高、佐久間祥夫、井上洋三

鑑賞前売券／全自由席（先着二〇〇名）、大人三千円、学生二千円、中学生以下千五百円

主催・津島市観光協会、主管・天王薪能鑑友会

協賛・海部津島青年会議所、津島市職員互助会、名古屋金春会

後援・津島市、津島市教育委員会、佐織町、佐屋町、佐屋町教育委員会、立田村、八開村

お問い合わせは津島市観光協会（津島市立込町四―一四四、津島商工会議所内、電話0567・28・2800）

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

〔6月〕

18日(日)　名古屋宝生会定式能（有料）

25日(日)　也留舞会・信謡会合同発表会（無料）（番組①面）

〔7月〕

1日(土)　第4回能楽鏡座公演（有料）（番組①面）

8日(土)　野村四郎名古屋公演（有料）（番組②面）

9日(日)　第一回御洒落「名匠狂言会」（有料）（番組②面）

16日(日)　名古屋観世会・夏の素謡会（有料）（番組②面）

20日(祝)　人間国宝・茂山千作の狂言を観る会（有料）（番組③面）

21日(金)　名古屋能楽堂定例公演（有料）（番組③面）

27日(木)　名古屋能楽同好会ゆかた会（無料）

29日(土)　吉井寿陽会歌仙会（無料）

### ◆熱田神宮能楽殿◆

〔7月〕

2日(日)　名古屋春栄会（無料）

〔8月〕

5日(土)　第35回名古屋薪能（熱田神宮神楽殿前）

## ころも薪能　8月31日

### 宝生英照宗家ら来演

豊田市主催、豊田市教委共催による「ころも薪能」が八月三十一日(木)豊田市美術館庭園で、宝生流・宝生英照宗家らが来演して開催される。

開場午後六時十五分、開演午後七時。（雨天の場合は豊田市民文化会館大ホール）

演能は次のとおり。

狂言（和泉流）「水掛聟」（舅・井上祐一、聟・佐藤融、妻・井上靖浩、後見・大野弘之）

能（宝生流）「殺生石」白頭（シテ宝生英照、ワキ飯富雅介、アイ佐藤友彦、笛・竹市学、小鼓・福井啓次郎、大鼓・河村真之介、太鼓・助川龍夫、後見・衣斐正直、東川光夫、地謡・近藤乾之助、水上輝和、寺井良雄ほか。

入場料二千円、学生千円。

問い合わせ＝豊田市コンサートホール・能楽堂（TEL0565・35・8200）

## 「藤田・龍吟の会」

### 藤田六郎兵衛氏が新発足

笛方藤田流宗家・藤田六郎兵衛氏は、平成五年から「花伝の会」を主宰し、多角的な芸能活動を推進してきたが、昨年の藤田六郎兵衛事務所設立や移動等で事情が変わり、このたび一旦「花伝の会」に終止符をうち、ことし七月から「藤田・龍吟の会」の会名で新発足することになった。

なお発会記念公演として、今秋十一月七日、名古屋能楽堂で、観世清和宗家、小鼓大倉源次郎宗家、片山九郎右衛門、大槻文蔵諸師の来演により、一調一管「龍田川辺」復曲能「長柄の橋」能「土蜘蛛」を上演の予定である。

## 演能案内

狂言・也留舞会
謡曲・信謡会　合同発表会

六月二十五日（日）正午開演
名古屋能楽堂

二人大名　大名　東松　舞　／　使いの者　天野朋子　杉澤麻里子

いろは　弟　田端奏衛　兄　三浦思季

薩摩守　旅僧　平山みよ子　／　船頭　野村又三郎　茶屋　奥津健太郎

石神　妻　三宅千生　／　夫　野村小三郎　何某　庄司武

狂言語　朝比奈　吉村由紀子

柿山伏　山伏　柴田聖子　／　太郎冠者　三浦みのり　／　畑主　野口隆行

しびり　太郎冠者　磯村美和　／　主人　杉澤麻里子

竹生島参　太郎冠者　柴田鏡子　／　主人　松田高義

素謡　杜若　杜若ノ精　柴田鏡子　／　僧　田中芳子　／　地謡　清沢一政　祖父江修一

クリサシスキ、サグセ

不見不聞　太郎冠者　菊市　片岡なゝ子　加藤志津子　／　主人　吉村由紀子

伯母ケ酒　太郎冠者　庄司武　／　伯母　野村又三郎

井杭　太郎冠者　伴野俊彦　／　井杭　天野朋子　何某　野村小三郎

附祝言

御来場歓迎（入場無料）

（終了予定四時十五分頃）

主催

和泉流　也留舞会
観世流　信謡会
指導　十二世　野村又三郎
四世　野村小三郎
野村信廣

## 能楽鏡座　第四回公演

七月一日（土）
午後二時三十分開演
名古屋能楽堂

番組

狂言　花子　野村小三郎　／　野村又三郎　松田高義

能　猩々乱　味方　玄　／　福王和幸　／　河村真之介　後藤嘉津幸

後見　林喜一郎　味方　玄　／　野村萬

独吟　鼓の瀧　林喜一郎

仕舞　砧　片山慶次郎　／　地謡　分林道治　武田邦弘　片山伸吾

小舞　放下僧　野村萬　／　地謡　野口隆行　野村与十郎　奥津健太郎

後見　林喜一郎　味方　玄　／　地謡　河村和貴　田茂井広道　分林道治　片山慶次郎　久田勘鬼

味方　健　／　地謡　古橋正邦　武田邦弘　片山慶次郎　久田勘鬼　／　金春憲右衛門　大野誠

（終了予定午後五時頃）

〔入場料〕A券（指定席）前売四千五百円
B券（自由席）前売三千五百円（当日五千円）
学生券（自由席）前売千五百円（当日四千円）
取り扱い＝チケットぴあ（052・320・9999）（当日二千円）
能楽鏡座（090・7671・8945）

主催　能楽鏡座
お問合せ　野村事務所鏡座係
名古屋市千種区仲田一―一―一六
TEL・FAX052・751・9966

## 第一回梅若善久「堯之会」
# 能「道成寺」上演
### 7月20日　大槻能楽堂

観世流・梅若善久堯之会の第一回公演が七月二十日（祝・木）大槻能楽堂で開催される。午前十一時開演。

主催・梅若善久堯之会、後援・梅猶会、春鶯会。

演能は次のとおり

連吟「高砂」仕舞「二人静」「土蜘蛛」

能「乱」（梅若盛義、梅若善高）

仕舞「加茂」「屋島」「松風」「松虫」「竹生島」「小袖曽我」「龍虎」

能「弱法師」盲目之舞（シテ梅若六郎、ワキ中村弥三郎）

狂言「寝音曲」（茂山七五三、善竹忠一郎）

仕舞「芭蕉」「采女」「山姥」

舞囃子「安宅」滝流（梅若万紀夫）

仕舞「笠之段」「枕之段」「鵜之段」

能「道成寺」（シテ梅若善久、ワキ福王茂十郎）

入場料＝S席一万五千円、A席一万三千円、自由席一万円。取扱い所＝大槻能楽堂（TEL06・6761・8055）大阪能楽会館（06・6373・1726）阪急プレイガイド、チケットぴあ

問い合わせ＝梅若善久堯之会事務所（TEL06・6831・7854）

## 7月26日　大阪城薪能
# 新作能「大坂城」上演

読売新聞大阪本社、読売テレビ主催の「大阪城薪能」は、七月二十六日㈫大阪城西の丸庭園で行われる。午後五時三十分開演。

「大坂城薪能」は、今回第二十回の記念公演として、新作能「大坂城」が初演される。新作能「大坂城」は、堂本正樹氏が書き下ろした新作、公募による淀君の新作面が使われるのも大きな話題。淀君・梅若六郎、千姫・大槻文蔵はじめツレ、ワキ、間狂言、囃子、後見、地謡など三十八人が出演するダイナミックな演出である。

演目は次のとおり。

（半能）喜多流「絵馬」女体（粟谷菊生、ワキ植田隆之亮）

（能）（観世流）「鷺」（片山九郎右衛門、帝・片山慶次郎、ワキ福王茂十郎）

（狂言）（大蔵流）「佐渡狐」（茂山忠三郎、茂山千作、茂山忠重）

（新作能）（観世流）「大坂城」（淀君・梅若六郎、千姫・大槻文蔵、幸村・赤松禎英、秀頼・大槻一文、ワキ（片樹且元）福王和幸ほか。地頭・山本勝一）

入場料＝一般三千五百円（前売三千円）高校・大学生二千五百円（前売二千円）取り扱い＝チケットぴあ、ローソンチケット、サークルK、阪急、京阪、阪神プレイガイド、大槻能楽堂、大阪能楽会館など。（雨天中止の場合は翌二十七日に順延）

## 夏休み親子
# 能楽教室開講
### 8月1・2日名古屋能楽堂

〝夏休みに「岩船」を能舞台で舞いませんか〟と呼びかける名古屋能楽堂の「親子能楽教室」がことしも八月一日㈫二日㈬の二日間開催される。

募集定員＝親子三十組、六十人（定員を越えた場合は抽せん）

参加費＝親子一組千五百円。

申込み＝往復はがきに、住所・氏名・年齢・性別・学校名、学年、自宅電話番号記入のうえ、名古屋能楽堂「夏休み親子能楽教室」係へ送付。締切り七月七日㈮（スケジュール）

講師　能楽協会名古屋支部長・泉嘉夫師（シテ方観世流）ほか。

八月一日㈫午前十時～十一時＝お話、能、仕舞、謡について▽十一時～十二時＝ビデオ鑑賞▽十三時～十四時三十分＝仕舞、謡の体験と実演

八月二日㈬午前十時～十二時＝仕舞、謡の練習▽十三時～十四時三十分＝仕舞、謡の発表会

※問い合わせ＝名古屋能楽堂（TEL052・231・0088）

## 二世金剛巌舞台写真集
# 「我忘吾」
### 発行所・金剛宗家

金剛流二十五世宗家・二世金剛巌氏の舞台写真集がこのたび刊行された。題字は「我忘吾」（がぼうご）。金剛家の秘伝書「我忘吾」表紙から複写されている。

二世金剛巌氏（本名滋夫）は大正十三年十二月二十三日生、昭和二十六年二十五世宗家継承、二世巌を襲名、生涯の演能数は千四百四十二番とされるが、演能写真はほぼ年代順に昭和、平成の時代を凝集した写真集。総ページ百六十二頁、巻末「演能年譜」が掲載されている。

監修・金剛永謹、発行所・金剛宗家、発行人・金剛君子

制作発売・株式会社八宝堂（京都市下京区麩屋町四条南、電話〇七五・三五一・五二二一）

定価七千円。

発行に当って二十六世金剛永謹宗家は次のようにあいさつしている。（要旨）

父が亡くなりまして、今年は早三回忌を迎えることとなりました。

父は、先々代の初世金剛　巌の三男として生まれましたが、兄達が相次いで亡くなったため、宗家を継承することとなりました。そして、先々代の父とも早く死に別れたため、宗家継承直後には大変に苦労したと生前よく語っておりました。しかしその後は多くの方々の御援助を得、本人も芸道に精進を重ねまして、その舞台は太夫芸ということを感じさせるものでした。又、縁あってローマ法王ヨハネ・パウロ二世の御前で能「羽衣」を舞うという栄にも浴させて頂き、父の能楽師としての生涯は、幸せなものであったと感じております。

能のような舞台芸術は、絵画や彫刻のように作品が形を残してはくれず、その場で消え去ってしまいます。そこで、亡父のおもかげを少しでも残しておきたいと願い、この本を作らせて頂きました。この本をご覧頂き、在りし日の故人を偲んで頂きますれば幸甚に存じます。

## NHK放送予定
（平成12年6月～7月）

◉NHK・FM能楽鑑賞
（日曜日午前8時～9時）

〔6月〕
25日　観世流「隅田川」梅若六郎ほか

〔7月〕
2日　観世流「楊貴妃」浅見真州ほか
9日　宝生流「鳥追」「来殿」高橋勇ほか
16日　喜多流「半蔀」塩津哲生ほか
23日　観世流「頼政」「鵜」五木田武計ほか
30日　和泉流「内沙汰」井上祐一ほか
大蔵流「入間川」山本則直ほか

# 第十七回野村四郎名古屋公演
七月八日（土）午後二時開演
名古屋能楽堂

番組

能
鵜之段　浅井文義
砧　後見　赤松禎英　泉嘉夫　地謡　野村昌司　山本章弘　上野雄三　久田舜　浅井文義　斎藤信隆　上野朝義　鵜沢郁雄（午後五時頃終演）
間　佐藤友彦
梅枝　泉嘉夫
天鼓　上野朝義

仕舞
梅枝　浦田保浩　野村四郎
梓之出　鏑木岑男　高橋正光　河村総一郎　福井啓次郎　小寺一噌　佐七唐二

（入場料）S席（指定席）一万円　A席（指定席）八千円　B席（自由席）六千円

主催　中部日本放送　中日新聞社

お問い合わせ　中部日本放送事業部（TEL052・241・8118）

取扱い＝チケットぴあ、三越、CBCプレイガイド　名古屋能楽堂（052・231・0088）

# 第一回　御酒落（おしゃらく）名匠狂言会
七月九日（日）午後一時半開演
名古屋能楽堂

（大蔵流）
二人袴　親　茂山良暢　茂山忠三郎　安東伸元　山口耕道　太郎冠者　男

（和泉流）
無布施経　僧　野村萬（万蔵改め）　施主　野村祐丞（英丘改め）

素囃子　神舞　大鼓　小鼓　太鼓　笛　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　竹市学

（和泉流）
唐人相撲　皇帝　野村又三郎　日本人　井上祐一　通辞　佐藤友彦　唐人　大野弘之　佐藤融　井上靖浩　今枝靖雄　ほか多数

入場券（全席指定）S席八千円、A席六千円、B席四千円（前売券全席五百円割引）

取扱い＝チケットぴあ、出演者

主催　狂言共同社

（連絡・問い合わせ先）狂言共同社　佐藤方　052・911・8784

# 名古屋観世会
## 夏の素謡会
七月十六日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

仕舞
敦盛　クセ　今沢美和
夕顔　生駒里翠
松虫　キリ　前野郁子

素謡　野村四郎

地謡　松山幸親　高橋暸一　祖父江修一　須部甫

盛久
地謡　外山圭一　松山幸親　加藤保彦　本田勲　梅田本田邦久勲　久田勘鷗　武田邦弘　野村四郎久

仕舞
高砂　須部甫
東北　キリ　加賀敏彦
鞍馬天狗　高橋暸一

地謡　高島良一　清沢一政　中川雅章　松山幸親

砧
素謡　久田勘鷗　観世清和

地謡　高橋暸一　清沢一政　祖父江修一　古橋正邦　中川雅章　久田勘鷗　観世清和　小島一英

仕舞
田村　キリ　清沢一政
網之段　中川雅章
鵜飼　キリ　祖父江修一

素謡　古橋正邦　片山九郎右衛門

地謡　外山圭一　高橋暸一　小島一英　加賀敏彦

山姥
地謡　高島良一　本田勲　須部甫　清沢一政　古橋正邦　梅田邦久　片山九郎右衛門　武田邦弘

武田邦弘

（終了午後四時頃）

附祝言

（入場料）前売四千五百円（当日券五千円）

取り扱い＝能楽堂・チケットぴあ・出演者宅

主催　名古屋観世会

# 戦後名古屋能楽史⑩

〔第四章〕

竹尾　邦太郎

## 二年目に入った名古屋商工会議所特設舞台（昭和二十五年）

戦後九四年四カ月余、一九五〇年の正月を迎えるが物資不足はおいそれと解消するものでもなく、経済復興の掛声の中では早急な能楽堂再建は無理なこと、文化行政の貧困を言う前に、従前からも公立の能楽堂は皆無だったことを思えばこれも致し方なかったであろうか。前年に引き続きこの年も名古屋商工会議所ホールが主舞台である。

元旦、D・マッカーサーは年頭の辞で日本国憲法は自己防衛の権利を否定せずと声明する。放送では謡初めに観世流の「翁」があり、シテ観世元正、千歳観世華雪、三番三大蔵弥太郎が勤めた。同日、昭和十七年八月から停止中であった名古屋の朝日・毎日の両新聞社が印刷・発行を再開する。

一月二十二日、昭和二十五年度第一回定式能は正月らしく雪の能二番。「鉢木」観世喜之・西村弘敬、「葛城・大和舞」観世喜之、狂言は「鶏聟」佐藤秀雄、独演二番の観世喜之は当時四十八歳、二年後には戦火で焼失した矢来能楽堂を再建し、社団法人観世九皐会を設立して初代理事長となり、能の近代的経営に手腕を発揮する。

二月五日、戦後は遂に来名の機がなかった二世茂山千作（一八六四－一九五〇）が八十五歳で死去する。因に当地最後の舞台は昭和十八年五月二日「賈聟」アドである。二月十九日は淡交会、「翁」シテ橋岡久馬・千歳高橋静夫・三番叟井上松次郎・面箱井上礼之助、「高砂」橋岡久馬、「夷大黒」井上松次郎、「蟬丸」橋岡久太郎・大槻十三、「望月」柴田初太郎、で他に舞囃子「安宅」観世喜之、「熊坂」山本博之に仕舞六番、連吟三番は午前九時半始の大能で大鼓に吉見嘉樹の来演もあった。二月二十三日、英文学者にして且つ能楽研究に多大の功績を残し、能楽界に裨益してきた野上豊一郎（一八八三－一九五〇）の訃が齎される。享年六十七歳、臼川と号して俳句を能くし、句集『能百句』には「紅梅に軒端も古りて陽のなごみ」の名句がある。

三月に入ると前年の『観世』に続き流誌『金剛』復刊第一号（通巻十九号）が発行される。編集は栗林貞一、題字金剛巌、表紙は春らしく松野奏風描く「熊野」、「各地の流勢」欄で名古屋は竹市秀雄が記事を寄せる。概略は「（昭和二十一年の）十二月に、山田仁三郎師の還暦を祝う素謡会が名古屋市内の十州楼で催され、名古屋春鶯会を中心として、流儀の者が多数集まって同師の健闘を寿いだ。これが戦後名古屋で初めての（金剛流の）催しであった。なお山田師は岐阜にも（疎開先の瀬戸の他に）流儀を拡げ、岐阜金剛会の発会もみた――中略――豊嶋弥左衛門師の名古屋出張稽古は（昭和）二十三年の早々から復活し、今につづいている。職分披露能を機に清風社（大塚一二）竹謡会（竹市秀雄）の二つの会が生れ、会員も漸次増加している。布池町の名古屋能楽堂の復興はかねてから懸案になっていたが、その再建計画が今年はいよいよ具体化することになっている――後略――」、また『花』三月号にはワキ高安流宗家高安滋男が谷田民之助追善に「京都の高安流」の一文を寄稿する。この月はまた東京水道橋能楽堂の再建が成り、十九・二十の両日舞台披キが賑々しく行われている。二十六日、当地第二回定式能は金剛流で、「東北」金剛巌、「無布施経」歌村彦四郎、「黒塚・白頭」豊嶋弥左衛門、であった。

四月二十三日、第十一回名匠鑑賞能は「田村」桜間金太郎（後に弓川）、「悪太郎」佐藤卯三郎、「蟬丸」観世喜之・桜間金太郎、「土蜘蛛」観世喜之・本田秀男、で能二番が観世と金春の異流共演となり問題化する。

催主の田鍋惣太郎は自著『小鼓芸話』で「流儀の異なるこの様な能が問題になったので、私は上京して能楽協会理事会や宗家会で説明、賛同を得ましたが、＊前にも述べた通り（＊大正十四年一月には金剛巌、観世喜之両氏が二流合同で「夜討曽我」を演じました。二流の合同演能は名古屋では既に明治卅六年那古野神社舞台で、金剛謹之輔、桜間伴馬両氏がやはり「夜討曽我」を演じて以来、大正十年に「蟬丸」、十一年には「土蜘」をやはり金春金剛二流合同で演じておりますが、これは名古屋の様にシテ方が東西から来演する土地では止むを得ない事と思うのでありまして、これについては色々意見もありましょうが、私としてはお互に芸を競う事になりますから時折はやった方がよいと考える次第であります）私は二流で競演するという意味でもこの様な能は大いにやった方がよいと思うのであります」、と実に先進的な見解を披瀝している。

これについては『能楽思潮』誌40・41合併号（一九六七年刊）の『能楽戦後二十年史年表』に次の記述がある。昭和二十五年五月「同一曲を異流の演者で共演する可否を宗家会で審議。反対四・賛成三・条件つき賛成十一・保留五。届出制とし各自宗家の責任で善処することとなる」と。

五月、『花』に山田仁三郎は「直面物の難かしさと宣伝能の曲目に就て」を寄せ、歌舞伎や舞踊に取り容れられた解り易い曲目よりは仮面を用うる幽玄の曲を、と呼び掛ける。五月二十一日は第三回定式能、「竹生島」橋岡久馬、「鏡男」河村丘造、「熊野」橋岡久太郎、の淡交会勢である。そして二十三・二十四の両日は奈良興福寺薪御能に倣い、歳時記の季までも替えて夏の風物詩としてしまった薪能の嚆矢、京都薪能が平安神宮で産声をあげる。二十八日には昨年結成された能楽協会名古屋支部の第一回演能がある。金剛流「小袖曽我」大塚一二・竹市秀雄、和泉流「痺」井上祐一、「三人片輪」河村丘造、観世流「鞍馬天狗」柴田初太郎、他に舞囃子を宝生流「絃上」畑富次、金剛流「山姥」山田仁三郎の二番、観世流で素謡・独吟各一番に仕舞三番、それに田鍋惣太郎の小鼓一調では謡がワキ高安流西村弘敬で「蟬丸」という珍しいものもあり、当時のシテ方と三役の流勢が窺える。

六月に入り十八日は第四回定式能で宝生流、「盛久」宝生九郎、「瓜盗人」佐藤卯三郎、「鵜」辰巳孝、これが本年の装束納になるが激動する世界は戦争始、二十五日、朝鮮動乱が勃発する。性懲りもない戦争騒ぎも平和を取り戻した日本には対岸の火事としか見えず、『花』八月号は「先ず稽古をして」と竹市秀雄が所見を述べ、「近来古典芸術愛好心が青年層に躍動しつつあるのが嬉しく、此の良き芸術を志し始められた方へ折る事は、趣味と平行して熱心に研究練磨せられん事を」と結論して自他を鼓舞する。

九月、装束始は十七日の第五回定式能、「松風・見留」山本博之、「居杭」井上祐一、「殺生石・白頭」大槻十三、の大阪勢、次いで二十三日には脇方高安流の和泉太郎と主宰する白水会が宗家の共催で先覚並同門物故者諸霊追善能楽会を催す。「鉢木」柴田初太郎・和泉太郎、「大般若」歌村彦四郎、「隅田川」橋岡久太郎、「紅葉狩」豊嶋弥左衛門、の他に脇方の催能らしく脇仕舞三番、「春栄」豊嶋十郎、「蟻通」松村利雄、「羅生門」和泉勉、が珍しい。同日、東京の染井舞台では小早川精太郎（一八六九－一九一八）三十三回忌追善会があり、前年ソ連から復員した野村信廣が「花子」を再演（披キは昭和十四年）、十一世又三郎を襲名する。なお『花』九月号では柴田初太郎が「奥行の芸を」の一文を寄せ、冒頭「終戦後予想外に早く能楽の復興しました事は、誠に私共の御同慶に堪えぬ所であります。この機に於きまして、我々能楽人は懸命に芸の向上に努めまして、能楽の真価を大衆にも認めて頂く様、心掛ける事が大切であると信じます」、と抱負の一端を述べるが、世情も朝鮮動乱に因る米国の緊急物資調達計画に日本経済も編入されていわゆる特需景気に沸き、更には九月二十一日から十一月一日までの約一カ月半、名古屋市を中心に県下七都市で開催された第五回国民体育大会が物心両面の復興に寄与することは計り知れない、と報じられもした。十月一日、第十二回名匠鑑賞能は「花月」杉浦義朗、「吹取」河村丘造、「花筐・筐ノ伝・大返」片山九郎右衛門、「小鍛冶・黒頭」観世喜之、他に舞囃子二番は「俊寛」井上嘉介、「卒都婆小町」橋岡久太郎で、ワキに福王茂十郎、大鼓に山本敬一郎を迎える。

十一月十九日、第六回定式能は『玉葛』野口禄久、「蟹山伏」井上松次郎、「融」宝生英雄。そして、十一月二十一日の名古屋観世九皐会は、記念すべき催能として記憶されることだろう。即ち第二章・昭和二十三年の項で既述の伊藤次郎左衛門祐茲（観世喜之門）がこの年昭和二十五年は一月から名古屋商工会議所会頭に就任しているが、社長を勤める松坂屋にホールを開設して特設能舞台を備えたことである。舞台披キに相応しい祝賀の番組は「翁」シテ観世喜之・千歳観世武雄・三番叟歌村彦四郎・面箱井上松次郎、「高砂」観世喜之、「末広かり」井上新三郎、舞囃子「羽衣」永島誠二、「紅葉狩・鬼揃」観世喜之、で大鼓は三年ぶりの安福春雄、太鼓の柿本豊次は昭和十六年十一月九日の九皐会以来二度目の来名で珍しい。十一月二十六日は去る十月二十二日に山田仁三郎・竹本秀雄・大塚一二らが中心となって結成された金剛会中部支部の発会第一回定式能、「宗家の御勧奨に依り当地に深き因縁と伝統を持つ金剛流の定式能楽会を春秋貳回開催する事になりました　切に同好諸賢の御支援と御清鑑を賜らん事を御願申し上げます」と番組には言う。宗家の「名古屋と金剛流」と題する講演があり、「三井寺」豊嶋弥左衛門、「狐塚」佐藤卯三郎、「鉢木」金剛巌、の番組で会場は再び名古屋商工会議所特設舞台となり、昭和二十五年度の残りの催能も同所。松坂屋ホール特設舞台でない理由は不明だが、舞台細部のチェック整備だったであろうか。なお金剛会中部支部の役員は次の通りである。支部長片岡信一、副支部長伊藤鉄之進・後藤宗平、常任理事中内利一・徳永寛一・水野潔・安部長太郎・後藤清・高橋三平・寺西磯次・古藤碁彰・山口清七・天野昇従・木下琢郎（『金剛』復刊第三号に拠る）。

師走十日、長能会は『俊寛』柴田初太郎、『磁石』伊藤宏文、『葵上・梓ノ出・空ノ折』武田太加志。柴田初太郎の『帰童閑談』によると長能会は戦前から『楽師の養成というようなこともあって、観世流のシテ方と囃子方とで統けられて』いたらしい。更に記述は『昭和二四年五月戦後（長能会）の第一回の会が催されましたが、そのときの嬉しかったことは今でも忘れられません』とあるが該当の催しは不明、今回のものがそれではなかろうか。

昭和二十五年度の納会は師走十七日の第二回社団法人能楽協会名古屋支部能楽会、番組に支部員一同として次の文がある。『本支部も昭和二十四年八月結成以来大阪支部と連携呼応して益々文化芸術能楽の発展、普及、保存の為種々尽力致して居ります今回左記番組に依り支部員一同奉仕致し第二回支部能を開催致す可く就ては当協会支部の目的達成の為大方諸賢の御賛助御後援を賜度御願申上る次第であります』と。番組は「蟬丸」山田仁三郎・大塚一二、「不見不聞」井上新三郎、「痩松」井上松次郎、「巻絹」柴田初太郎、他に素謡「小督」国枝照清、舞囃子二番「胡蝶」内藤泰二、「融」竹市秀雄、など。

因に支部役員は左の通りである。支部長田鍋惣太郎、副支部長高安滋男・藤田六郎兵衛、監事西村弘敬・福井五郎、常議員柴田初太郎・林愚蔵・増田一雄・山田仁三郎・大塚一二・歌村彦四郎・井上松次郎・田鍋惣一郎・西尾孫太郎・鬼頭八郎、以上。

なお昭和二十四年十月一日付の名簿以後の会員増は、宝生流の大野芳穂・内藤宗一・内藤泰二・鈴木右門、喜多流の岡本保道で減は観世流村瀬小右衛門、会員総数四十六名、役員の顔触れからも名古屋能楽界では三役（脇方・囃子方・狂言方）が勢力を持っていたことが分かろう。またこの師走には、明治二十八年（一八九五）四月二十七日の『土蜘』以来度々来名してお馴染みの、名人と謳われた宝生流の野口兼資（一八七九－一九五三）が喜多六平太能心に次いで戦後二人目の芸術院会員に選任された。


茂山千作（人間国宝）
茂山千五郎の狂言を観る会

七月二十日（木・祝日）
午後二時始
名古屋能楽堂

萩大名
大名　茂山千作
太郎冠者　茂山正邦
亨主　茂山千五郎
後見　茂山茂

濯ぎ川
男　茂山千五郎
女　茂山千三郎
女房　茂山茂
後見　茂山正邦

寝音曲
太郎冠者　茂山千作
主人　佐々木千吉
後見　茂山正邦

〔入場料〕（全席指定）
A・七千円。B・五千円
C・三千円

申込先　TEL・FAX
052・722・4000（岩田方）
名古屋能楽堂　TEL052・231・0088

名古屋能楽堂定例公演

七月二十一日（金）
午後六時三十分開演
名古屋能楽堂

狂言　鐘の音
太郎冠者　井上靖浩　主人　井上祐一
後見　佐藤融

能　砧
長田　長田
騒郷
飯富雅介　河村総一郎　助川龍夫
アイ　佐藤友彦　後藤嘉津幸　大野誠
後見　大島輝久　松井俊介　地謡　森中村健和谷衡市　森田克彦正梅津忠弘　吉川寛治　笠井大島政允陸
（午後八時四十五分頃終了予定）

主催　能楽普及事業実行委員会
名古屋市・名古屋城振興協会
名古屋市文化振興事業団
協賛　能楽協会名古屋支部

〔入場料〕前売一般三千五百円、学生二千円（当日一般四千円、学生二千五百円）
〔前売券取扱い〕名古屋能楽堂（電052・231・0088）チケットぴあ、市内プレイガイド

◆晩春から初夏への舞台◆

# 「観世会」と「第廿五回定例公演」「九皐会」「第四三回やるまい会」

竹尾邦太郎

「采女・美奈保ノ伝」　采女は後宮の女官。小書は、帝の寵を失なって悲嘆の余り猿沢の池に身を投げた一人の采女に焦点を絞る。シテ九郎右衛門、前は面若女・露芝文白摺箔着付・赤地枝垂柳ニ飛燕文唐織。左袖口を抓みへ生ける身と思すかや、と池畔に誘ったワキ旅僧・弥三郎へアシラフ中入地（慶次郎・清司ら）の、冷たい美しさが象徴的。

後は着付を白銀鱗箔に替え、浅黄大口・霰ニ飛燕文紺水衣、洲浜ニ網目文小袖を被いて出ると、一ノ松に安座は深に絡まる体。僧の弔いを喜び、被衣を脱ぎ捨てるのは水からへ浮かむ心、と同時に成仏得脱の心であろう。舞台へ入りワキに合掌すると古の采女のエピソードをいうクリ・サシ・クセを省き、思いは一気に叡慮を受けて舞った曲水の宴の楽しきことになる。

序ノ舞は袖を返さず拍子も踏まず四回程小腰を屈めるが、就中スミで目付柱へ屈むと扇を左手に取り一ノ松先に抜けると、匂欄に寄って右袖抱くように胸に当て暫し下を見る姿（写真）が美しい。トメも一ノ松先、波に沈む心に扇で面を隠し小さく廻って沈むと、返シ句に立ち一足詰メてトメ。前後それとなく水辺に縁の装束の文様（鱗箔は鱗類）に九郎右衛門の細心の演出意図も窺われ好舞台。アイ靖浩、囃子は六郎兵衛・孝一郎・総一郎、後見を一英・博通。（1時間34分）

「国栖」シテ　山本勝一（杉浦賢次氏撮影）

「内沙汰」　左近の牛に田を荒らされて地頭に訴えるという右近（シテ祐一）に、左近と通じる妻（アド友彦）は権威に弱い小心の右近に付け入り、自ら地頭に扮して模擬白洲を構え威喝する。雰囲気に呑まれてしどろもどろの右近に畳み掛ける妻、祐一・友彦それぞれの持ち味が生き、フランス風艶笑譚はコキュ（妻を寝取られた男）の泣き笑いのペーソスも上々。内沙汰とは表沙汰にせず内々で事を処理すること、大蔵流はずばり曲名「右近左近」。右近は鳥滸（愚かなこと）か、鳥滸の沙汰は物笑いになる愚かな所行、曲趣に反映するだろう。（26分）

「国栖・白頭」　侍臣（ワキ勝久）と吉野へ落ちる帝（子方・山本麗晃君、すっぽりと船を被せられる前後も健気に品よく勤め立派）をもてなす漁翁夫婦（シテ勝一、ツレ博通）、供御の鮎を下賜されて川に放つ鮎ノ段の鮮やかさは面使ヒの冴え。追手（アイ融・靖雄）撃退に、はぐらかすとみせて一旦緩急には居丈高に凄む呼吸も巧妙。

後場、天女（ツレ正邦）は緋大口・白地舞衣壷折、柄の大きい人だから長絹の方が舞に派手な美しさが出たのではなかろうか。へ子守の御前蔵王とは、と正中平伏し、へ琴の糸、に惹かれ一ノ松に出た後シテ蔵王権現（勝一）を迎える。白頭・輪冠・白地輪宝繋文半切・茶地火焔太鼓文袷狩衣（衣紋）に面は泥大飛出の偉風は、地（清司・勘鶴ら）のへ地を又指すは（写真）、に漲る力感を示しキリも豪快。囃子は希世・舜一郎・鉱一・龍夫、後見を九郎右衛門・一英（1時間7分・4月9日・観世会）

「采女」片山九郎右衛門（杉浦賢次氏撮影）

「磁石」　田舎者と見縊られて危うく売られるところだった見附ノ者（アド又三郎）、夜陰に乗じ逆に買手（宿屋弘之）からその身の代をせしめれば、人買い（シテ高義）は押っ取り刀で追う。今は是迄と腹を括って磁石の精を騙るアドが、太刀を「呑まう」と双手をあげて迫るところ、蛮勇の言外に滲むおっかなびっくりが老巧。気合いに呑まれて亦もスカを喰わされるシテもがっぷり四つの力演だった。（25分）

「錦木」　前場、睦まじげな夫婦（シテ正宜・ツレ愛）それぞれが商う品は錦木に細布（ツレは持たずに出る）、その錦木は想う女の門に立て、取り入れられれば願いが叶うという、など旅僧（ワキ雅介）の問いに答えるシテが、初同（輝和・他賀男ら）へ夕日の影も錦木の、と正中から笛柱へ眺め、へいざや帰らん、と地前のツレを促すかに見るところ、ワキが「なほ〳〵」と昔話をねだる辺り惹き付ける。日参三年千束の錦木も効なく死んだ男の念力に、女も空しくなり共に塚へ葬られた、と居語のシテの語気に、古墳を孤憤と聞く。里人（アイ隆行）は細布のことを丁寧に語り一抹の哀感。

後場は、陋てられた男女の距離を塚の内と外に、僧の幻視の中へ塚の幻に、と引廻シ下ろされると、面怪士・黒頭・襟紺・紅白段厚板着付・法被（肩脱ぎ）の後シテが姿を見せ、僧の目に塚の内が機屋と変じるや、へいでいで昔を現さん、と塚を出てツレと摩り替わり、昔が再現する。地のへきりはたりちょうちょう、と拍子踏みつつの指廻は、すだく虫の音に機織の音と所作を重ねる象徴か、正中安座するとツレもさりげなく脇座に就く。懺悔の姿を見せるクセに立つと、錦木を女の前に置き、空しく放置の俤ならへ我も門辺に立ち居り錦木と共に朽ちぬべき、とツレに躙り寄って袖返スところ凄味充分。へ袖の涙の、と錦木を取り、それを捨てれば即ち解脱の身か、喜びの舞を舞上げ、へ妹背の仲立ち、と二ツ拍子からへ織るは細布、と正先で袖を広げ、沁沁見詰めながら膝を着く辺り感慨も深い。

キリは、へ夢人なるもの、と音を殺して二ツ拍子からへ覚めなば、と拍子二ツ踏むところ文字通りへ夢も破れて、トメは常座右ウケ袖返シ拍子二つ。（1時間34分・5月19日・第25回定例公演）

蛇足だが観世流柴田初太郎（一八八九―一九八七）著『舞童閑談』に次の記述がある。「（和布刈）と（錦木）の能は名古屋では演じられたことがありませんが、これは、昔（和布刈）が名古屋で演能されていたとき松明を振る方向に火事が起きたということで、（錦木）はこの演能中、殿様である徳川さんがなくなられたということに起因するものときいています」と。これ程の稀曲ゆえに正宜の平成五年と今回の再演は極く珍しく、観世流でも「鸚鵡盃ノ舞」の小書で泉嘉夫が昭和六十年に勤めて以来上演されていない。

「楊貴妃」　勅命を受けて漸う蓬莱国に楊貴妃（シテ喜之）を尋ね当てた方士（ワキ雅介）、宮殿王楼の描写に感動がよく表わされれば、宮のシテの、古を恋う哀愁味ある艶やかな独白はゆうに優しく、玄宗皇帝ならずともそのしおらしさにそそられるだろうと思わせる。シテ・ワキ問吟もしっぽりとへ涙を浮かめさせ給へば、のシテの哀調は一方ではない。初同（三郎・喜久ら）のキリに漸く引廻シが下ろされると、襟白二・白地小葵文摺箔着付・錆朱色破レ七宝繋文大口・紅白段八ツ橋ニ鴛鴦文唐織壷折の装いはまこと梨花一枝雨を帯びた風情、天冠をつけた増の面は愁いを含み輝く美しさである。

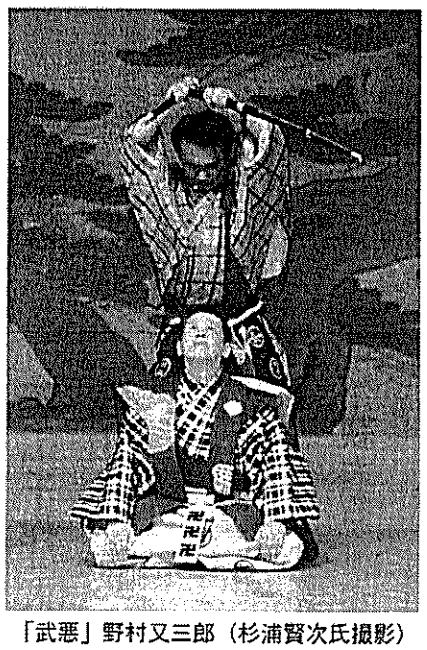
貴妃に目見得の証を物（鳳凰ノ立物、釵に擬する）の外に言葉にも求めるワキに、シテは契りの言葉を思い起こし、触発されてシオル切なさ、しかしへされども、と空気が変わりシテはへ連理も、と宮を出る。物着に、ワキが戻す鳳凰ノ立物を天冠に立てると、夢幻の戯れの舞はへ胡蝶の舞ならん、のイエロの一巡、舞グセは型も主に指込開きだが、思いは怨みの文月、へ七日の夜、と踏む足拍子が積る心の裡を表わして象徴的である。序の舞の寂寥感ある美しさも素晴らしく、舞上げて鳳凰ノ立物が再びワキの手に渡る。

キリはへはかなや別れの、と幕へ入るワキを見送り、へ蓬莱の台に、と宮に入って下居シオリ、その儘立つと外に出て地一杯のシオリ留、切なかった。唐織の鴛鴦が仄めかす貴妃の心情、三婦人の一に相応しい喜之の好舞台。アイ又三郎、囃子は希世・富司忠・総一郎、後見を喜正・宜夫。（1時間22分）

「二人大名」　大名は小三郎と隆行、通り掛かりの者（高義）に太刀を持たせようの無体も、「昆布売」と違うのは二人連れ故の粋狂と思われるところ。小三郎が恰好をつければつけるだけ隆行が迷惑気味なのがみそか。立場が逆転して鶏の鐵合いや起き上り小法師の真似をさせられるところも大名の単細胞の無邪気、次第に熱中してゆく過程で両者の心に微妙な相違がみられ、役の性格よりは役者の資性が仄見える感じがした。因に闘鶏は三月三日、殿上人が鶏を出し合い清涼殿の白洲で行ったという。江戸中期の俳人炭太祇に「勝鶏の抱く手にあまる力かな」がある。（26分）

「女郎花」　旅僧（ワキ勝久）が京も間近の男山で有名な女郎花を手折ろうとして所の尉（シテ宜夫）と出会う前場がワキと相俟って佳。古歌問答から岩清水八幡宮の神域へ、更には女郎花の由来、と何処となく小粋なシテは謡・詞も師譲りの調子の豊か。七五調を繰り返すへ和光の塵も、以下のワキとの連吟が好い。アイは男山麓ノ者（健太郎）、長い居語（九分程）に女郎花に纏わる子細を丁寧に澱みなく語って爽やか。

後場、シテの心変わりを怨み、入水の妻（ツレ圭一）を葬る塚の女郎花の己れを忌避する様子に絶望のクセはへ続いてこの川に身を投げて、の上ゲ端で拍子二ツ踏み開キ下居のところ、キリでは恋しい人を山上に認めへ嬉しやとて行き登れば、と飛返って膝行のところ、へ盤石は骨を砕く、の四ツ拍子など、鮮烈なだけに深刻味は薄いようにも思えた。（1時間18分・5月20日・九皐会）



「武悪」野村又三郎（杉浦賢次氏撮影）

「武悪」　朋輩の誼で武悪（又三郎）を斬るに斬れない太郎冠者（高義）の苦衷が巧く表わされ、東山で武悪を見咎める主（小三郎）に一瞬狼狽の色をみせるが、此処を先途と食い止める辺りも気力充実。武悪が幽霊に扮して主を脅し、弱味に付け入り翻弄する辺りは武悪の独壇場。一門のアンサンブルの良さだが少々小振りに思えなくもない。（47分）

「浦島」　又三郎家番外曲。明治十三年五月十五日、早川幸八舞台の狂言尽の会で十世又三郎信茂が勤めた記録がある。昨年四月廿二日、国立の企画公演で復曲され、その再演、シテ浦島・小三郎、孫・森智一、亀ノ精・友彦（先回は又三郎）。

面袒父・角頭巾（上部を角帽子様に後ろへ垂らすのが奇）・小格子着付・茶十徳・杖の浦島老、肩衣・括袴・釣竿の孫と浜へ出、老は正中床几に寛ぎ、孫は一ノ松で糸を垂れる。しかし釣れずに「釣針」同様、幕へ糸を投げ入れれば獲物がかかる。亀に擬する女笠を両手に抱えて老の前に持参すると、「寝酒の肴に致しませう」の孫の猪口才。そこで老は仕方話に亀に纏わる恐い話を語り、床几を立つと腰痛治癒を祈念して亀を逃がす体に女笠を後見座の方に投げ放つ。と、笠は独りでにするすると幕へ入ってゆくのが工夫で、前場の浦島と孫のほのぼのとした景は誠に結構。

後場は、面嘘吹・白垂・亀蔵に福ノ神に同じ下袴・唐織壷折の亀ノ精が呼掛で出、玉手箱を捧げ橋懸で六ツ拍子から小廻り、報謝の印と正中へ玉手箱を置きへ立つ波に隠れ、失せれば、開けろと煽る孫がそれを正先に持って来る。蓋は取られ、間髪を入れず中からは怪しや白煙、と見せ浦島老は白縷水衣を被り、面・白垂脱ぐ間も見せず飛び上がりざま組落シ、見事に若者に変身する。キリは孫を右肩に抱き上げ、へ孫諸共に喜びて我が宿さして急ぎける、と退いてゆく地（高義ら）の謡留、小三郎の老体にみせる達者は心憎いばかりだった。（26分）

「月見座頭」　野にすだく虫の音を楽しむ座頭（シテ忠三郎）、そこへ腰に瓢箪を下げた月見の男（アド十郎）が同座して風流韻事を楽しみ、酒宴となる。盲の座頭が男に舞を所望する可笑しさ、男も座頭に舞を所望して一段と賑やか。当地では珍しい忠三郎と十郎の組み合せは共に謡の上手、聞き応えも充分である。就中「座頭に舞の御所望も珍しいによって一さし舞いませう」の忠三郎の小舞「弱法師」の杖の舞は見事。しかし「静かに行かしめ」と別れの挨拶を受けた男は、一ノ松で呵々大笑すると再び戻って別人を装い、あろうことか座頭に乱暴狼藉を働いて立ち去る。不可解な人間の深層心理を鋭く抉り、障害者に対する健常者という言葉の胡散臭さを暴いて遺憾がなく、これこそが文字通りの不条理劇であり、サイコサスペンスであろうか。へ独り秋野に、と泣き濡れ「クツサメ」と留めた。（32分）

「弓矢太郎」　虚勢が徒で鬼が出る噂の森へ赴く破目の太郎（シテ万作）、恐さを紛らそうと鬼の面を着けて行けば、出会したのは鬼に扮して脅そうと企む当屋（万之介）、だんまりの両者が互いに鬼と驚き卒倒するところが愉快。先に覚めた太郎は講中一同の魂胆を知り逆襲するが、立衆の粒が揃い弛みのない舞台（43分・5月21日・第43回やるまい会）

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話　03(3291) 2488　振替00130－7－3552
〒604－0935　京都市中京区二条通麩屋町東入
電　話　075(231) 1990　振替01010－0－113

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話　(052) 731－7984
FAX　(052) 733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## 第35回 名古屋薪能

### 能3番・狂言1番上演

### 8月5日熱田神宮で

「名古屋薪能」はことし第三十五回をむかえ、きたる八月五日(土)熱田神宮神楽殿前の特設舞台で催される。午後五時半開演。

演能は、金春、喜多、観世、金剛各流による仕舞。

観世流能「竹生島」（シテ武田邦弘、ツレ祖父江修一）、観世流能「百萬」（シテ梅田邦久、子方・林大貴）、和泉流狂言「文山賊」（大野弘之、佐藤融）宝生流能「葵上」（シテ竹内澄子、ツレ衣斐愛）

火入れ式は熱田神宮・宮田理博弥宜によって執り行われる。（番組②面掲載）

## 伝統芸能上演会

### 能「葵上」狂言「鬼瓦」

### 8月10日 東海能楽研究会主催

名古屋を中心とする東海各地域の能楽の特徴、その歴史などの研究、調査、発表を行うとともに、能狂言の一般への普及を図ることを目的に平成六年に有志により東海能楽研究会が結成され、定例会はじめ各事業に取り組んでいるがこのたび愛知銀行教育文化財団より助成が得られ、きたる八月十日名古屋能楽堂で「伝統芸能上演会」が行われる。

同会の筧鉱一代表は「子どもたちが少しでも伝統芸能に触れる機会をと願い、芸能の一端を上演する会を企画しました。どなたでもご来場を歓迎しますが、特に学校教育関係の方々には、この機会にぜひご覧頂き、子どもたちの教育の一助にしていただければ幸いです」と案内している。

番組は次のとおり。

平曲　須須与一　今井　勉
箏曲　千鳥の曲　胡弓 澤田孝子　唄・箏 今井　勉
三曲　八千代獅子　箏 南川久子　唄・三絃 今井　勉　尺八 岩田律園
狂言　鬼瓦　ツレ 松井俊介　シテ 長田　驍　佐藤友彦　佐藤　融
能　葵上　ツレ 梶本正樹　シテ 長田　驍　ワキ 飯冨雅介　間 佐藤友彦　後見 加藤誠子　吉川寛治　長田　驍　地謡 中村正　松井　彬　森　健　和谷衛市

上演に先立ち、舞台体験として、楽屋見学、能面をつけて舞台を歩くなどが企画されている。

## 人間国宝 観世流シテ方 観世銕之亟氏逝く

### 6日 銕仙会葬で告別式

観世流シテ方・人間国宝の観世銕之亟氏（本名＝静夫）は七月三日午前六時十五分、肝不全のため逝去した。享年六十九歳。

告別式は銕仙会会葬として、葬儀委員長・観世流宗家観世清和氏、喪主・長男暁夫氏により六日午後一時から東京都新宿区の千日谷会堂で厳かに執り行われた。

故銕之亟氏は昭和六年生まれ、祖父・華雪、父・雅雪、兄・寿夫に師事。昭和五十五年八世観世銕之亟を襲名、「三山」などを復活上演。銕仙会の支柱として後進の育成に尽力。平成三年日本芸術院賞受賞、平成七年重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定、平成九年紫綬褒章を受章。

## 朝倉氏と戦国を生きた芸能者たち

### 一乗谷朝倉氏遺跡資料館

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館では、七月二十七日から九月十日まで、第十一回企画展「朝倉氏と戦国を生きた芸能者たち」を開催する。

展示は、中世の越前の芸能史の紹介、能面（須波阿須疑神社蔵）、重要文化財「鬼面」（加多志波神社蔵）朝倉財（東京国立博物館蔵、一乗谷朝倉氏遺跡出土品（資料館蔵）ほか文書類、茶道具など。

なお七月三十日（日）午後二時から昭和女子大学教授・後藤淑氏による「朝倉氏と越前能楽」のテーマで記念講演が行われる。

観覧料一般三百円、大・高生二百円。月曜休館。問い合わせは、同資料館（福井市安波賀町四－一〇、電話〇七七六・四一・二三〇一番。

## 能楽後継者育成研修発表会

能楽協会名古屋支部主催による能楽後継者育成研修発表会はきたる八月五日（土）名古屋能楽堂で催される。

今回は第八回目の発表会で午前九時半始、観世、宝生、金剛、金春、喜多各流による舞囃子、居囃子、狂言「仏師」、狂言小舞など十四番。来場歓迎。

舞台体験午後四時～五時、上演会午後五時半始。入場無料・御来場歓迎（先着六百三十名）

後援名古屋市、名古屋市教委、愛知県教委。

お問い合わせ＝名古屋市中村区下米野三－二九、筧鉱一方、電話〇五二・四五一・九七九七

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

〔7月〕
20日(祝)　人間国宝・茂山千作の狂言を観る会（有料）
21日(金)　名古屋能楽堂定例公演（有料）
27日(木)　名古屋能楽同好会ゆかた会（無料）
29日(土)　吉井青陽会歌仙会（無料）

〔8月〕
3日(木)　全国金春流学生交歓会（無料）
5日(土)　能楽後継者育成研修発表会（無料）
6日(日)　青陽会定式能（有料）（番組④面）
10日(木)　伝統芸能上演会（無料）
26日(土)　第16回衣斐正宜後援会能（有料）

### ◆熱田神宮能楽殿◆

〔8月〕
5日(土)　第35回名古屋薪能（熱田神宮神楽殿前）（有料）（番組②面）

〔9月〕
15日(祝)　鳳の会（有料）

## NHK放送予定

（平成12年7月～8月）

◉NHK・FM能楽鑑賞
（日曜日午前8時～9時）

〔7月〕
23日　観世流「頼政」「鵜」五木田武計ほか
30日　和泉流「内沙汰」井上祐一ほか
　　大蔵流「入間川」山本則直ほか

〔8月〕
6日　名演ふたたび①初世梅若万三郎「俊寛」「鉢木」二世梅若實「三井寺」ほか
13日　名演ふたたび②観世銕之亟を偲ぶ「檜垣」「屋島」
20日　鼓の響き①一調「松虫」梅若六郎／北村治
　　一調「勧進帳」高橋章／亀井忠雄ほか

◉NHK教育テレビ
8月6日(日)　午後9時狂言（大蔵流）「棒縛」
8月19日(土)　午後1時50分狂言（大蔵流）「佐渡狐」「蚊相撲」

伺　御　中　暑

観世清和

幽謳会
片山九郎右衛門
清司

梅猶会
猶諷会
大阪国際フェスティバル能
梅若盛義

名古屋観衛会
山本勝一
名古屋正花会
山本博通
〒540－0025　大阪市中央区徳井町一丁目三－六
電話(〇六)六九四一－四〇七〇番

大槻清韻会
大槻文蔵
〒540－0005　大阪市中央区上町A番七号
電話(〇六)六七六四－〇八九八番

鳳鳴会
武田志房
稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15－3　浅井ビル
電話〇五二(七三二)三七三六

幽花会
片山慶次郎
伸吾
〒603－8123　京都市北区小山下花ノ木町二一
TEL　四九二－五三〇二番
FAX　四九二－五三〇九番

名古屋観世九皐会
観世喜之
観世喜正
加藤保彦
高木美智子
高橋暸一
外山圭一

井上嘉久
井上裕久
〒603－8175　京都市北区紫野下鳥田町六

観世芳宏門人会
観世芳宏
観芳会
観世芳伸

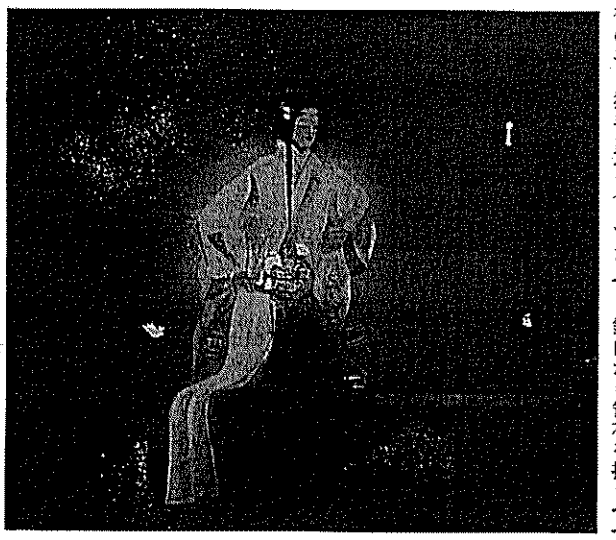
山中能舞台
山中義滋
〒545－0021　大阪市阿倍野区阪南町六－五－八
電話(〇六)六六九二－三八二五

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山手通3・8・2・305
電話(〇五二)八三二－三一八五
西宮市甲陽園目神山町二三－二五
電話(〇七九八)㊗二四五八

# 能楽行

## 唐津の海

二井　栄逸



昔、世阿彌生誕六百年祭が催され、その時に、松浦佐用姫（まつらさよひめ）が上演されたことを覚えている。その時の私の写生帳には、佐用姫の舞台スケッチが数枚ある。

松浦佐用姫は、伝説の人物で、肥前の松浦に住んでいたという女性である。

任那（みまな）の救援に向う大伴金村の子、狭手比古（さでひこ）と契り、離別のときに、領布振の峰（鏡山）から領布を振り続け別れを惜しむのである。

領布（ひれ）と言うのは、古代の服飾具の一つで、女性が首から肩にかけ、左右に垂らして飾りとした布のことをいう。

これより領布振るといって、女性が人を招いたり、別れを惜しんだりする様子の形容詞になった。

鏡山から領布を振りつづけた佐用姫は、なお狭手比古の後を慕い、小舟に乗って追うが、ついに形見の鏡を胸に抱いて身を投げてしまう。

この憐れな乙女が、永遠の海に同化してゆく透明な美しさは、ひとしお哀愁をかきたててゆくのである。

面（おもて）は、観世家に伝わる「小夜姫」と言い、龍右衛門作の小面系誌のものであったことを後で聞いた。

その後、平成八年の初夏の頃であったと思うが、大槻文蔵師出演の佐用姫を見ることができた。

その時の佐用姫は、装束が素晴らしくて、強く印象に残っている。

東京で見たときは、シテは、雪をのせた女笠を深々とかむっていたが、この時は、鏡山から領布を振る場面で、一曲中見どころで絵になるところであった。

唐津の海の冬景色として、その後、何度か佐用姫をかいてみたいと思いながら、他の制作に追われて機を逸したが、来年のカレンダーに組み入れたいと思ってかいてみたのがこの作品である。

能の面や、装束、あるいは舞台姿は、日本の伝統美や、ユーゲニズムの象徴として、絵の題材はすこぶる多い。

一つ一つの演目で、すべてが違った能という複雑な対象をとらえるリアリティを忘れてはならないし、また、単に幽玄性に溺れることの無い眼と描写力を持つことが、創作の必須条件となる。

若葉、青葉のしげる頃になると、唐津の海は、青さが増すようであるが、唐津の海に佐用姫が入水するのは雪の降る頃なので、薄墨に錆びた緑と黄土で空間をうめてみた。

絵の制作として世阿彌が至花道にかいた次の体用の事を忘れてはならないと常に思っている。

能に体用のことを知るべし
体は花。用は匂のごとし
また月と影のごとし、
体をよくよく
心得たらば、
用もおのづからあるべし——

（青雅流家元・
社団法人能楽協会会員）

狂言和泉流

## 野村小三郎氏　華燭の典

狂言和泉流野村又三郎氏嫡男・小三郎氏は、このたび野村萬氏夫妻の媒妁により広瀬愛子さんとの婚約が整い六月十九日、名古屋城西のウェスティン・ナゴヤキャッスルで結婚式を挙げ、正午から同ホテル二階の天守の間で盛大に結婚披露宴が催された。

野村小三郎氏は昭和四十六年生まれ、平成二年南山高校卒、平成六年東京芸術大学音楽学部邦楽科（狂言専攻）卒、平成八年同大学邦楽別科（謡曲専攻）修了、平成六年皇后陛下主宰の御前演奏に芸大邦楽科総代として「見物左衛門」にて参加、平成八年四世野村小三郎名跡継承。平成九年松尾芸能賞新人賞受賞。

新婦愛子さんは昭和四十八年生まれ。平成七年青山学院大学文学部卒業、中部日本放送勤務、平成十年日本放送協会名古屋放送局勤務。

## 第三十五回 名古屋 薪能

八月五日（土）午後五時三十分始
熱田神宮神楽殿前

### 番組

金春流仕舞　難波　加藤正嗣　地謡　伊藤雄二　前田茂穂　広瀬雅弘　鈴木寿

喜多流仕舞　敦盛　キリ　長田郷　地謡　小出和谷　衡市　吉川寛治　甚吉

観世流仕舞　鐘之段　近藤幸江　地謡　星野久田　路子　三津子　前野郁子　生駒里翠　三村恵子

観世流仕舞　天鼓　瀬戸洋子　地謡　羽多野良子　牧野元子　吉川周子　伊藤雅子

金剛流仕舞　邯鄲　熊谷眞知子　地謡　外山圭一　黒田博　八神孝充　松山久田　幸親　加藤保彦　加賀敏彦　古橋正邦　勘鴎　河崎勲　柳原冨司忠　竹市鬼頭好学

観世流能　竹生島　祖父江修一　武田邦弘　祖元正樹　杉江元　後見　近藤幸江　中川雅章　地謡　間佐藤融

火入式

御挨拶

観世流能　百萬　子方　林大貴　梅田邦久　高安勝久　間野村小三郎　後見　瀬戸洋子　久田勘鴎　地謡　高島良一　本田熱古橋　須部正邦　高橋甫泉　瞭一祖父江修一　河村真之介　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛　助川龍夫　清沢一政

和泉流狂言　文山賊　大野弘之　佐藤融　後見今枝靖雄

宝生流能　葵上　衣裳　竹内澄子　杉江愛　楯元正樹　間野村又三郎　後見　玉井博祐　足立知子　地謡　青木堯　柴田賢治　久野幸三　佐藤耕司　鬼頭嘉男　衣斐正宜　辰巳満太郎　稲川寿一

（終了予定　午後八時五十分）

主催　能楽協会名古屋支部
後援　名古屋市・熱田神宮

当日券＝三千円（前売券二千五百円）学生千五百円
取扱い＝チケットぴあ、チケットセゾン、市内各プレイガイド、熱田神宮能楽殿

※雨天順延の間い合わせは熱田神宮能楽殿電（〇五二—六八二—一七五一）

※先着千名に団扇進呈

## 伺御中暑

邦謡会
梅田邦久
清沢一政
須部甫
本田勲
高島良一
今沢美和
名古屋市昭和区台町二丁目十六—五
電話（〇五二）八四一—四六三二番

武田謡楽会
武田欣司
武田邦弘

大垣浦声会
稽古場　大垣市伝馬町大垣別院
電話（〇五八四）七三—三三六二
浦田保利
浦田保浩
浦田保親
〒606—0814　京都市左京区下鴨芝本町五八
電話（〇七五）七八一—七〇三〇

名古屋修諷会
梅若修一

財団法人鎌倉能舞台
中森晶三
中森貫太

笙月会　中川雅章
〒526—0036　長浜市地福寺町八ノ二九
電話（〇七四九）六二〇六三〇番

名古屋淡交会
橋岡慈観

三交会
久田三津子
〒465—0093　名古屋市名東区一社3—162
電話（〇五二）七〇五—一五八五

初陽会
武田宗和
稽古場　名古屋市千種区今池四丁目15—3　浅井ビル
電話〇五二（七三二）三七三六

上田観正会能楽堂
社団法人観正会　TEL〇七八—六九一—五四四九
上田観正会
上田貴弘
大公拓司
介威

松音会
泉泰孝
〒168—0081　東京都杉並区宮前四—一九—四
電話（〇三）三三三三—八二八〇番

佳泉会
泉雅一郎
〒181—0002　東京都三鷹市牟礼二—三—一
電話〇四二二—七一—二四〇四

春鶯会
梅若善高
〒560—0084　豊中市新千里南町三丁目18—12
電話（〇六）六八三一—七八五四
〒166—0003　東京都杉並区高円寺南4-27-7-903
電話（〇三）三三一二—〇五七〇

梅春会
井戸和男
〒545—0004　大阪市阿倍野区文の里3—16—17
電話〇六—六六二一—二二一九

# 戦後名古屋能楽史⑪

〔第五章〕

## 松坂屋ホール特設舞台の時代来る（昭和二十六年）

竹尾　邦太郎

恒例となったD・マッカーサーの年頭の辞は、集団安全保障と講和とを強調する。朝鮮動乱は治まる気配もなく、元旦に北朝鮮軍が前年十月に参戦した中国軍と共に三十八度線を突破して再度南下する勢いであることを踏まえての発言であろう。当然のことながら日本の特需景気は続き、基幹産業の盛んな中京経済圏の舵を取る名古屋商工会議所も、その機能をフル活動させる必要があり、今や日曜が休日とはいえホールを能舞台に貸し出すどころではなかったこと、想像に難くない。ここに会頭伊藤次郎左衛門祐茲は、自社松坂屋七階ホールに前年十一月二十一日披いたきりであった特設舞台を提供したのであろうし、以後は此処が熱田神宮能楽殿の新設まで名古屋能楽界の主舞台となった。

さてこのとし昭和二十六年は、昭和二十二年以来年初一月中に催されていた第一回名古屋能楽会定式能が、二月十八日にずれこむ。「草子洗小町」観世喜之、「節分」佐藤卯三郎、「望月」観世喜之、で相変らず二番能の喜之が元気である。

三月十八日、第十二回名匠鑑賞能は宝生大会で「鉢木・黒頭」宝生九郎・西村弘敬、「水汲」歌村彦四郎、「熊野」野口兼資、「葵上」宝生英雄、金沢から大鼓の飯島佐六の来演があった。三月二十一日、初世金剛巌宗家が享年六十五歳をもって死去する。前年の金剛会中部支部発会の第一回定式能で勤めた「鉢木」が当地での最後の舞台だった。流誌『金剛』第五号の追悼号で、高安流ワキ方西村弘敬は「金剛巌氏を偲ぶ」と題し、概略次のように述べている。

「思い出の曲目も数多くありますが内、先年室町の御舞台で檜垣の御相手を勤めた事があります。其の時の檜垣は最も印象の深いもので、自分にも相当に出来たと思います。巌氏としても会心の出来栄えであったらしく思われました。その檜垣の切りに、金剛流ではロンギがありますが、それをワキが地謡と調子を替えて同吟することが、私の流儀の定めとなって居ります。それを同氏へ話した処大変喜ばれ、丁度今の洋楽の二部合唱に似たもので、昔でも我邦にこの様な事があった名残りであろうかと語り合った事がありました。私の見た金剛巌氏を一言で申しますと円融無凝と申したいのです。何事によらず小言に拘泥せず鹿爪らしい事は言わず、非常にスムースに事を運んで行く仕方で、これも氏の人格の一端の発露かと存じます。能楽界の損失の大なるは申すまでもなく、私共の流儀の根本同流の一宗家を失い、一入の淋しさを覚える処であります」と。

また田鍋惣太郎は「名古屋と巌師」の中で、「名古屋は金剛流とは因縁の深い土地で、私が知るようになってからも、寺田左門治師（一八四四―一九二二）が在住し、また金剛謹之輔師（一八五四―一九二三）も度々来られて演能があった。故巌師（一八八六―一九五一）と私（一八八四―一九七一）とは年もあまり違わなかったので、特に懇意にして頂き、私が明治四十五年（一九一二）に名古屋能楽会を設立したが、初会以来巌師には毎年二、三回出演してもらっていた。その上室町の舞台へもしばしば招かれたので、地方のものでお相手したのが私が一番多いのじゃないかと思う」と懐しむ。

三月二十四日、第二回定式能は金剛流で、宗家死去以前に既報の番組は「桜川」宗家、「清水」河村丘造、「善知鳥」豊嶋弥左衛門、であったが宗家の代勤は不明。後嗣金剛滋夫の演能年譜にもこの日の記述はない。同じ日、連合国軍と兼任の国連軍最高司令官マッカーサーは中国本土攻撃も辞せずと声明を出し、のち（四月十一日）罷免されて離日（四月十六日）、リッジウェイ中将が着任し戦後のマッカーサー時代は終る。

この月、芸能各分野における前年度の秀れた活動に対して文部大臣から贈られる芸能選奨文部大臣賞が新設され、第一回の受賞者として能楽界からは名古屋でもお馴染みの桜門弓川が選ばれた。この賞はのち（昭和三十一年）に芸術選奨文部大臣賞と改称される。

月が替り四月一・二の両日、南都春日興福寺古儀薪御能の、南大門の儀（般若ノ芝での演能）が復興すると報じられる。四月十五日の九皐会は午前ノ部「俊寛」観世喜之、「裘袍落」井上新三郎、「杜若・恋ノ舞」梅若万三郎、午後ノ部「熊野・読経ノ伝・村雨留・藤行」観世喜之、「蜘盗人」歌村彦四郎、半能「石橋・大獅子」観世喜之・永島誠二、の大能で喜之の大活躍、梅若万三郎のほか大鼓に亀井俊雄の来演があった。同日『金剛』誌第四号の発行があり、「中京の金剛流を語る」座談会が六頁に亘り掲載される。大塚一二・片岡信一・白木周次郎・竹市秀雄・西村弘敬・山田仁三郎・栗林貞一・前西芳雄の八名が片岡邸に集う今昔の四方山話は、寺田左門治のこと、明治時代の演能、保能会の回顧、など示唆に富み有益である。

四月二十九日、金剛会中部支部は、第一部の春季能謡会に引き続き、第二部は第二回定式能。番組冒頭に次の挨拶がある。「此の度は若宗家滋夫師を中心に京都及在名の新進諸師に依り左記番組の通り第二回定式能を催します　特に宗家御逝去の後を受け金剛流の向上発展の重責を荷ふ若宗家以下の熱演に御期待を賜り、初回に寄せられました御支援に増る御鞭撻御後援を切に御願申上げます」と。

「邯鄲」竹市秀雄、「熊野・花ノ留」金剛滋夫、「鬼瓦」歌村彦四郎、半能「石橋・和合連獅子」種田治郎・大塚一二、の番組であるが、「邯鄲」を勤めた竹市秀雄は「金剛」第五号の宗家追悼に一文を寄せ、自身のこの「邯鄲」についても触れている。

五月十三日、第三回名古屋能楽会定式能は淡交会で「通小町」橋岡久太郎・奥善助、「竹の子」井上松次郎、「絃上」橋岡久馬。五月十九日は第三回社団法人能楽協会名古屋支部能で「巴」大塚一二、「鈍根草」河村丘造、舞囃子「西王母」内藤泰二、「杭か人か」佐藤卯三郎、「天鼓」柴田初太郎、で小鼓一調が田鍋惣太郎に謡ワキ方西村弘敬の「桜川」が珍しい。

六月十日は同一会場で午前十時始の淡交会に午後四時始の潤水会という二つの催会である。前者は「文荷」井上松次郎、「巴」片岡怜子、「小鍛冶」橋岡久太郎、後者は林愚蔵の還暦祝賀能で「羽衣・彩色」観世元正、「釣針」河村鉦二、「安宅・勧進帳・酌掛」武田太加志・高安滋男、で林愚蔵は素謡「道成寺」を岡久雄のワキで勤める。六月十七日の第四回定式能は宝生会で「隅田川」宝生九郎、「呂蓮」河村丘造、「熊坂」辰己孝。

七月に入り一日の第十三回名匠鑑賞能は京都勢。舞囃子二番「三笑」井上嘉久、「藤戸」片山九郎右衛門、「清経」杉浦義朗、「縄綯」井上松次郎、一調「女郎花」田鍋惣太郎・井上嘉介、「砧」片山九郎右衛門、で太鼓の前川光隆の外に神戸から上田照也の来名もある。この年の装束納は七月八日の第一回名古屋金春会定式能。発会に当り番組は次の挨拶を載せる。「小暑益々御清栄の御事と御慶び申上げます　予而今回各位の御勧奨を頂き金春流定式能を年次開催する事と致しましたが元より小なる私共の微力を以っては如何とも致し難く一重に各流の同好諸賢並に先輩各位の絶大なる御支援なくしては覚束なく何卒吾等の微意を御含取の上能楽発展の一助ともなるの思召を以ちまして絶大なる御鞭撻と御支援の程伏して御願ひ申上る次第で御座います」と。

番組は舞囃子「高砂」桜間龍馬、「俊寛」桜間弓川、仕舞「融」金春信高、「笠被」河村丘造、「望月」本田秀男・本田光洋（子方）。弓川は自著『桜間芸話』に「昔の能楽師は、何処か武士的気魄を持ってゐた様に思ひます」と言う。発会の選曲にそれが出ていようか。

（この項つづく）


## 暑中御見舞申し上げます

宝生英照

佐野由於

〒150-0011 東京都渋谷区東2-14-21
〒921-8604 金沢市泉野町四丁目12-14

倉本雅

〒658-0021 神戸市東灘区田中町1-13-22-609
電話（〇七八）四四一―五四六五番

金剛永謹

廣田後援会
廣田陛一
廣田幸稔

菊扇会
後援会
廣田泰三
泰能

松野恭憲能の会
松野恭憲
松野洋樹

〒616-8241 京都市右京区鳴滝泉殿町一八―三
TEL〇七五（四六二）二一四八番
FAX〇七五（四六一）六〇九八番

金春信高
金春安明

〒167-0052 東京都杉並区南荻窪3-17-16
電話〇三（三三三一）二五七一番

伊勢金春会
宇仁田吉邦

〒516-0076 伊勢市八日市場町5-16
電話〇五九六（25）五二九八

二井栄逸

〒515-0073 松阪市殿町1412の3
電話（〇五九八）二三―〇二六

福王茂十郎

高安流十四世宗家
高安勝久

宝生閑
欣哉

〒176-0004 東京都練馬区小竹町一―五〇―五
電話 〇三（三九七二）七二三〇
電話 〇三（三九五五）四七九五

植田和光会
植田隆之亮

〒673-0662 明石市松ケ丘4の3　A6-301
電話・FAX〇七八―九二一―三七四
電話 〇七八―九一一―〇八一三

谷田宗二朗

〒603-8302 京都市北区衣笠街道町31-7
電話〇七五（四六三）四八七五番

藤田龍吟の会
藤田六郎兵衛

〒451-0041 名古屋市西区幅下2-10-9
TEL&FAX 〇五二―五七一―六三四一

亀井俊一
忠雄
保雄
実

前川光隆
前川光長

〒616-8055 京都市右京区御室芝橋町一の六
名古屋稽古場　名古屋市東区葵二-13-3
ツインクルガーデン601前野舞台
電話九三一―八八〇六番

名古屋狂言共同社
井上祐一
佐藤友彦
大野弘之
佐藤融
井上靖浩
今枝靖雄
名古屋市昭和区滝川町54
サンハウス滝川3E　井上方
電話052・834・6112


〔おことわり〕暑中広告の掲載は紙面の都合にて勝手ながら七月号、八月号に分けて掲載させて頂きました。順不同と併せ何卒ご理解賜わりますようおねがい申上げます。

## 青陽会定式能（第44期 第3回）

八月六日(日)午前十時半開演
名古屋能楽堂

**能　巻絹**
高島 良一
今沢 美和
替装束
橋本 宰
間　佐藤 融
後見　生駒 里翠　梅田 邦久
地謡　星野 路子　久田三津子　玉木 孝男　須部 甫
仕舞　賀茂 松山 幸親
班女 舞アト 中川 雅章
地謡　久田 勘鶴　武田 邦弘　祖父江 修一
天鼓 須部 甫

**能　玉鬘**
三村 惠子
杉江 元
河村真之介　柳原冨司忠
間　佐藤 友彦
後見　瀬戸 洋子　近藤 幸江
地謡　生駒 里翠　前野 郁子　高島 良一　松山 幸親　加賀 敏彦　祖父江 修一　高橋 暸一　加藤 保彦

**狂言　船ふな**
トモ　古橋 正邦
子方　久田勘吉郎
久田 勘鶴
井上 祐一
井上 靖浩
後見　佐藤 融

**能　橋弁慶**
笛　後藤孝一郎　鉦　大野 誠
間　今枝 靖雄
後見　久田三津子　中川 雅章
地謡　今沢 美和　近藤 幸江　高橋 暸一　松山 幸親　武田 邦弘　須部 甫　梅田 邦久　清沢 一政

**附祝言**

当日券三千円（前売券二千円）
取り扱い＝チケットぴあ及び出演楽師

主催　青陽会
問い合わせ　名古屋市名東区一社3－162　久田勘鶴方
電話052－705－1585

## ◆仲夏の舞台から◆

## 「第三回ござる乃座」「観世会」「第二十六回定例公演」

竹尾邦太郎

「宗論」括袴に縷水衣、能力頭巾に塗笠のアド法華僧は萬斎。半袴に十徳、角頭巾に菅笠のシテ浄土僧は万作、風采自ずから性格を表わす。さて、旅は道連れ、とばかり同行を願いはしても、意に染まない相手と知って逃げ出したい思いのアドの潔癖を萬斎地でみせれば、決して愉快とは思えぬ露骨な嫌がらせを楽しむシテの腑（やに）っこさを万作老獪にみせる。この老獪、最後に妙阿弥陀仏、と和解成るのだろうか。（43分）

「博奕十王」　十王は冥界で死者の罪業を裁く十人の王だが、狂言は閻魔王とその眷属の鬼共。不景気でアド閻魔王・幸雄自身眷属帯同、亡者狩りに六道の辻に立つと、白装束も小粋なシテ博奕打・萬斎が網にかかる。娑婆での罪状言いたてられて地獄行必至のところ、身についた博才は巧言を弄して閻魔王を誘い込み、ここでも大博奕を打って出る辺り、萬斎の、いかにも現代的なゲーム感覚の軽みがよい。賭の心理を衝き、眷属共の異見を悉く斥けてあくまで一の目に拘り、身ぐるみ剥がれる閻魔王の、せこいくせに憎めないスケールの大きさもみせ幸雄好演なら、鉄杖鬼・万之介は隠然たる存在感をみせて舞台を引き締める。紅緞で飾り、黒白の鉄札を立てた玉座や、正先に置く浄玻璃の鏡台など物々しい道具立ても雰囲気を出す。四拍子の登場楽もあり、トメは地の謡留。稀曲。（46分）・6月10日・第三回ござる乃座）

「熊野」梅若六郎
（撮影・杉浦賢次氏）

「熊野・読次ノ伝・村雨留」シテ六郎、襟白二、観世水文白摺箔着付・段替り色紙短冊散シ文唐織・面若女。熊野の許へ古里より齎された文は、「見るまでもなしそれにて高らかに読み候へ」ではなく下掛と同様に「さらば諸共に読み候べし」である。ワキ宗盛・隆之発がわざわざ床几を立ってシテへ行くのも珍しく、文を受取り下居に文ノ段はシテと分けて謡うが、その優しさは東の間、気散じの花見を強行するワキの、勿体ぶった一方的な言い分に気弱なところも仄見せ隆之発達者。

道筋の景に托して取留めもないシテの胸中を、地（順之・邦久ら）との掛合に述べる花見車の中は、六郎の優婉。へ愛宕の寺も、と右へ小廻りしてワキ正を眺め、へげに恐ろしや、と薄く面を伏せるのも繊細。

車を出て母への長い祈りの後の、呼ばれて宴に侍る「あら面白の花や候」の取って付けた様な感情の起伏表現の巧妙は、誠に思ひ内にあれば色外に現はる、である。クセは上ゲ端あと、大悲擁護の、とワキに向き拍子一ツ踏むが、宗盛に強く慈悲を求めるかの意味深長。舞のまえ、深き情を人や知る、と涙を隠すかにワキへ背を向けてシオルと二ノ松へゆくのも今や居たたまれない心、気を取り直して小刻みな運びで舞台へ戻ると舞になった。途中一ノ松でへななうな、となりへあら心なの村雨やな、の三ツ拍子は地団駄の悔しさ。正先で受けた花片を、シオリながら常座へゆき下居して零すと、左袖から短冊を取り出し、墨を磨ると一気に一首を認め、扇面に載せてワキへ進むと手ずから短冊を渡すのも村雨に急かれ切羽詰まった心か。帰国を許されキリは一ノ松、へ明け行く後の、と引分扇から、へ山見えて、と右ウケ抱へ扇二ノ松でトメた。（1時間32分）

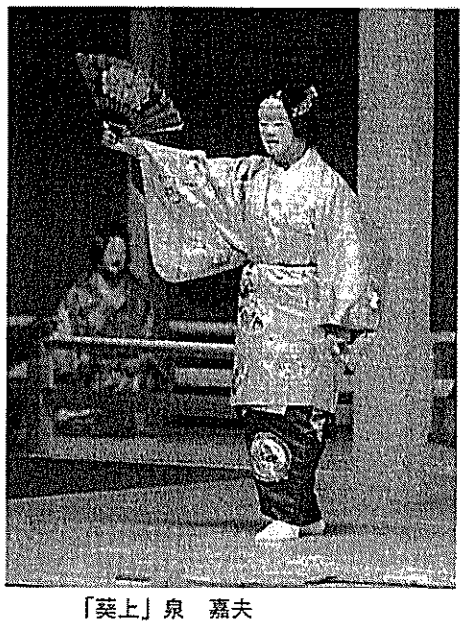
「薩摩守」　秀句好きのアド渡守・又三郎の意に適えば無賃乗船も可能、となまじっか親切な茶屋・高義に秀句を伝受されたばかりに赤ッ恥をかいて面目を失墜するシテ旅僧・小三郎。そのそそっかしさは渡守に薩摩守の心を性急に質され、頭は只乗（忠度）ののりばかり、「青海苔の引干し」に飢えの食い意地も張るかである。小三郎のコミカルな味。（27分）

「阿漕」　シテ喜之、前は面笑尉・襟帷・茶小格子着付・銀灰色水衣・裾茶腰蓑・釣竿。密漁が習い性の、殺生の寒々とした心象風景は、「今日もまた釣に出でて候」と一ノ松から運ぶ漁翁の重い足取りに反映する。阿漕ケ浦の謂れを述べるシテ語からクセへ、沈痛の思いは、へ貫一人に度重なる、悲しさをワキ勝久に訴えるかにアシラヒ、シオルところ哀れである。へさては幽霊、と悟られてか、へ日も夕暮れの汐煙立ち添ふ方や漁火の、と竿を引き寄せ取って立つと、へすはや手繰の、と釣糸を竿にキリリと巻きつけスッと解くと、今度は逆に巻きつける手練も鮮やか。へ俄に疾風吹き、の強い面使ヒは、へこはそも、と竿を捨てると退って両手で耳を蔽い小さく常座へ廻り込むと、地（嘉久・邦久ら）一杯に橋懸へ入る。アイ隆行の居語は淡々。

「阿漕」観世喜之
（撮影・杉浦賢次氏）

後シテは面河津・黒頭・襟帷・紺中格子着付・白縷水衣（屑上）・裾紺腰蓑。密漁の有様、地獄の責め苦を見せる。

四手網を担げ一ノ松、海上船の有無を確かめるようにへ沖にも磯にも、と幕へ見ると、安堵した様に静かに舞台へ入り、極く慎重にスミへ四手を置く。立ち去るときも気掛りか、凝視して立廻に橋懸へゆくと二ノ松手前から戻り一ノ松、遠く四手を眺め勾欄へ詰めると、更に頭を取りぐっと見込むと、よし、とばかりに二・三足退ってから舞台へ入り、左から右からと大きく魚を追い、最後は太鼓前から両手で真直ぐにスミの四手へ追い込むと下居、網を取りへ伊勢の海、となった。へただ罪をのみ、と四手を引き上げ、へ波は却って、と猛火の熱さに四手を後ろへ投げ捨てると焦熱地獄。キリの型どころは、へ紅蓮大紅蓮、の数拍子からへ骨を砕けば、と胸を扇で強く打つところ、また、へ冥途の責も、と逗々の体で逃れようとするかに合膝返シで立つところ、など河津の面が無気味なだけに印象も強烈だった。（1時間19分・6月11日・観世会）


「葵上」泉　嘉夫
（撮影・杉浦賢次）

「腰祈」　祖父・友彦の曲った腰をしゃんと伸そうと祈る甥の山伏・融。過ぎたるは及ばざるが如し、で要は伸ばすのも程度問題。伸ばしたはよいがつっぱらかして痛みを伴えば元のままが良いは当然。さくりさくりと屈伸する友彦の背骨の構造が、さもあるかと思わせて妙。（24分）

「葵上・空ノ祈」　シテ嘉夫。小書にないがいわゆる古式で、シテツレは巫女・暸一の外に青女房（侍女）孝充が出、物語の展開に首尾が一貫して理解し易くはある。

病臥の葵上を象徴する出小袖は紅地柳ニ蹴鞠文、徳川美術館所蔵の名物の写しか。巫女は常座でへ天清浄地清浄、と四手付榊枝で祓うと地前へ行き、へ寄り人は、と梓で六条御息所ノ生霊を呼び寄せる。後見が三ノ松に車を出し、青女房は轅横、シテは車に入り一セイから二ノ句、へ悲しけれ、と両人シオルところ早くも雰囲気を作る。シテは面泥眼・鱗箔着付・黒地紋尽縫箔腰巻・赤地縫箔（？）壷折の姿。梓の弓に惹かれ現われたと言い、直ぐへ梓の弓の音は何処ぞ、と青女房に問うところなど現実味があり、青女房が下居（跪り）シオルのを巫女がへ不思議やな、と不審するのも合理的である。大方は推量したというワキツレ臣下・元に名を問われ、シテはへ只今梓の弓の音にひかれ、とクドキに素性を明かすが、このクドキを口寄せが職業の巫女と同吟し、へ六条の御息所の怨霊なり、と両人ワキツレにアシラフのも巫女の役割が鮮明になる。

この恨みへ今は打たでは叶ひ候まじ、のシテの激情に、へあら浅ましや、と諫める青女房へキッと左袖あしらう堅固な意志は、枕に立寄りて、と出小袖を打てば、青女房も同調して打つなど面白い。へ瞋恚の炎は、と青女房は一ノ松後ろ勾欄へ、シテはへ思ひ知らずや、へ思ひ知れ、と拍子一ツ強く踏み枕ノ段となると、なほも思ひは真澄鏡、と出小袖に寄り、扇を抱くのは葵る光君への思い。その已れを恥じ、ならばいっそ破レ車で葵上を拉致、の心は扇を捨て逃げるように橋懸へ行くが、壷折を引っ被くのにやや手綺麗さは欠く。

ワキ小聖・勝久は兜巾・襟紺・中格子着付・白大口・縞水衣・篠懸・小刀。ノットの間に白綾を被いだ後シテは、シテ柱手前でワキを見込むとひっそりと出てワキの背後に跪る。ワキがヘバサラダ東方に降三世明王、と唱え祈になると、シテは被衣を撥ね、長髪をゆっくり手繰って左手に持ち、立つと拍子一ツ強く踏むのが闘志を掻き立てるかである。面白般若・緋長袴の凄味は、手にした長髪をシテの面上に発止と投げつけると、二ノ松に抜け、ワキはその幻術の目晦ましに姿を見失ない、スミからワキ座へと虚空へ珠数を揉み祈るのも空しく、出小袖に向い更に祈り続ける。

その様を胸杖に見るシテが、舞台に戻りワキとの対決の場は、二ツ拍子にワキを威嚇して追い立て、隙を見て出小袖（葵上）に手を掛けるのを、そうはさせじとワキ。この辺り小書「空ノ祈」のシテとワキの闘争は見応えも充分、就中ワキは派手に思える。地のへ東方に降三世明王、となり、以下はシテ語をワキが謡うのも理に適い、キリは成仏得脱して打杖を捨て合掌、返シ句に右ウケ詰メて留めた。6月16日・第26回定例公演）

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話　(052) 731－7984
ＦＡＸ　(052) 733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　1100円
郵送の場合　１年　1800円
一　部　100円

## ◆ＮＨＫ放送予定◆

◆ＮＨＫ・ＦＭ能楽鑑賞　（日曜日午前８時～９時）
〔８月〕
20日　鼓の響き①
27日　鼓の響き②一調一声「三井寺」関根祥六・鵜沢速雄、一調「花筐」野村四郎・安福建雄、一調「氷室」粟谷菊生・金春惣右衛門ほか
〔９月〕
３日　番囃子「昭君」　（観世流）梅若万紀夫
10日　「清経」「花筐」（宝生流）三川　泉
17日　「江口」　（観世流）杉浦元三郎
24日　「歌占」「雲」　（金剛流）種田道雄

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

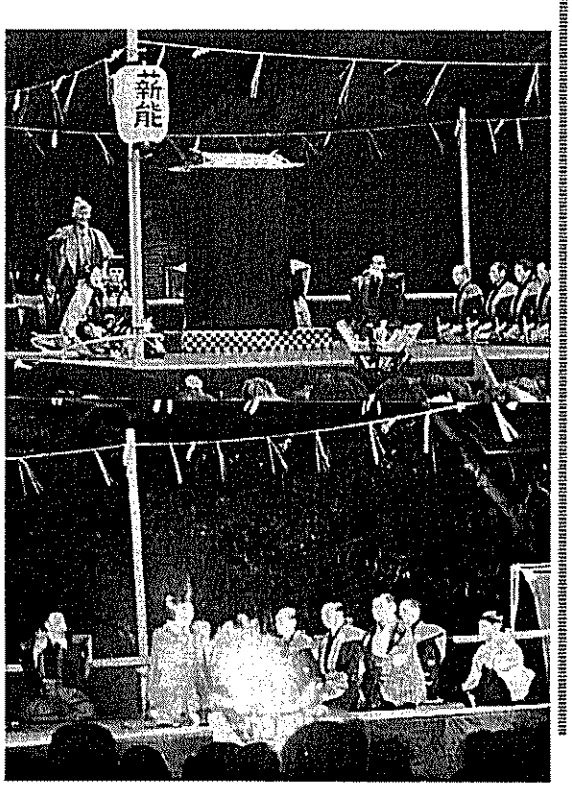
〔８月〕
26日(土)　第16回衣斐正宜後援会能　（有料）（番組①面）
〔９月〕
３日(日)　能楽協会名古屋支部公演　（有料）（番組②面）
「初秋能」
９日(土)　青陽会定式能　（有料）（番組③面）
10日(日)　名古屋観世会定式能　（有料）（番組③面）
16日(土)　名古屋観世九皐会・先代観世喜之23回忌追善公演　（有料）（番組③面）
17日(日)　名古屋宝生会定式能　（有料）（番組④面）
22日(金)　名古屋能楽堂定例公演　（有料）（番組④面）
23日(祝)　久田勘鶴の会追善特別公演　（有料）（番組⑤面）
24日(日)　和泉流狂言大会（無料）

### ◆熱田神宮能楽殿◆

〔９月〕
15日(祝)　鳳の会　（有料）（番組①面）

## 第35回名古屋薪能

### 能楽協会名古屋支部主催




第35回名古屋薪能は八月五日（土）熱田神宮で開催、熱田神宮宮田理博彌宜による火入式、松原名古屋市長のあいさつ（武藤文化振興室長代読）、能三番はじめ狂言、仕舞を上演、盛夏の夜の演能を鑑賞しました。

## 初秋能　名古屋能楽堂
## 9月3日、2部制で

能楽協会名古屋支部主催による「初秋能」は、九月三日（日）名古屋能楽堂で、午前、午後の二部制で挙行される。

この「初秋能」は、これまで三十有余年にわたって大衆能の名称で演能が行われてきたが、昨年から新たに「初秋能」として行われ、ことし第二回目。愛知県、名古屋市が後援している。

演能は、第一部（午前十時半始）観世流能「頼政」「鉄輪」狂言「柿山伏」ほか喜多流、金剛流仕舞。第二部（午後二時始）は、観世流能「清経」宝生流能「船弁慶」狂言「子盗人」ほか金春流、観世流仕舞。

前売二千五百円（当日三千円）取り扱い＝チケットぴあ（TEL 320－9999）市内プレイガイドなど。（番組②面掲載）

## 先代観世喜之23回忌追善能

9月16日　観世九皐会

名古屋観世九皐会では、先代観世喜之師の二十三回忌にあたり、故人をしのんで、九月の名古屋九皐会は先代の追善公演として開催する。九月十六日（土）午後一時始。名古屋能楽堂。

能組は、能「安宅」を当代観世喜之師、能「道成寺」を観世喜正が所演、大曲そろいの追善公演。狂言は「寝音曲」の上演。名古屋九皐会は先代観世喜之師が創始、当地の能楽の進展に大きな役割をはたしている。（番組③面掲載）

## 小鼓方・後藤孝一郎氏
## 岐阜ふるさと文化賞受賞

岐阜市では、地域文化の振興に顕著な活動をされている個人、団体などを顕彰する「岐阜ふるさと文化賞」を創設しているが、本年度の受賞者として、多年にわたり市民能楽愛好者を指導し、岐阜市の能楽発展に寄与されている幸清流小鼓方、後藤孝一郎氏（六九）を決定、さる八月四日、伝統ある岐阜「長良川新能」で表彰が行われた。

後藤氏は、昭和二十三年初舞台、五十二年から岐阜護国神社の「鵜篝（かがり）能」、六十一年から「長良川薪能」の開催に尽力、その観客動員において全国屈指の薪能の緒をひらき、地域の能楽の普及発展に貢献、五十三年重要文化財総合指定。幸清流小鼓方職分、平成四年岐阜県芸術文化顕彰で表彰されている。

## 名古屋能楽堂演能案内

### 第16回衣斐正宜後援会能

八月二十六日（土）午後一時始
名古屋能楽堂

講演　羽衣伝説に基づく芸能のあれこれ　伝統芸能評論家　本田善郎

番組

能　羽衣
衣斐　愛　杉江　元
唱元　正樹　河村総一郎　助川　龍夫　福井啓次郎　大野　誠
後見　近藤乾之助　衣斐正宜　和久荘太郎　地謡　平田　正文　中埜　恵生　竹内　淳一　久野　幸三　佐野　宝生　英照　寺井　良雄　稲川　寿一　登

狂言　梟山伏
水上　嶂和　衣斐　正宜　井上　祐一　佐藤　融　後見　今枝　靖雄　井上　靖浩

能　乱
和合　飯冨　雅介　河村真之介　柳原冨司忠　助川　龍夫　竹市　学
後見　宝生　英照　寺井　良雄　地謡　沢村　雅利　小林　光由　名倉　信二　久野　幸三　佐野　登　近藤乾之助　東川　光夫　稲川　寿一
（終了予定　午後四時四十分）

会員制
一般入場料　五千円（限定）
学生入場料　二千円（限定）
主催　衣斐正宜後援会
事務所　名古屋市昭和区御器所3－23－19－802
TEL・FAX052・822・5600

## 熱田神宮能楽殿演能案内

### 狂言　鳳の会第25回公演

九月十五日（祝）午後二時始
熱田神宮能楽殿

番組

◆狂言トーク
名古屋女子大学短大部教授　林　和利

懐中聟（かいちゅうむこ）
聟　井上　靖浩　太郎冠者　井上　祐一　教え子　今枝　靖雄　大野　弘之

素囃子
現の楽（うつつ）　大鼓　河村総一郎　小鼓　後藤孝一郎　笛　竹市　学
蝉（せみ）　蝉　佐藤　友彦　所の者　僧　佐藤　今枝　融　郁雄　地謡　鷺見　政行　井上　靖浩　鹿島　俊裕

犬山伏（いぬやまぶし）
山伏　井上　祐一　茶屋　僧　佐藤　友彦　鷺見　政行　犬　今枝　靖雄

〔入場料〕全席指定
A席四千円、B席三千円　学生二千円
主催　鳳の会
取り扱い＝チケットぴあ（052・320・9999）
〔会員のお問い合わせ〕
▽名古屋女子大学・林研究室（TEL052・852・9436）
▽井上祐一方（TEL052・834・6112）
▽熱田神宮能楽殿（TEL052・682・1751）

暑中御伺
熱田神宮能楽殿
運営委員会
委員長　熱田神宮権宮司　二橋　一彦
委員一同

暑中御伺
名古屋能楽堂
名古屋市中区三の丸一－一－一
電話　〇五二（二三一）〇〇八八

# 能楽行

## 邯鄲傘の出

二井　栄逸

私は、古代文化の発掘が行われるたびに、そのなまなましい現実を見るにつけ、一瞬、古代との距離がなくなったような錯覚におちいることがある。

あっ、という間に十年過ぎてしまったとか、人はよく言うけれど、その二百倍が二千年。光陰矢の如し、と、昔の人が言ったことをつくづく感じるし、人間の一生だってほんとうに粟つぶのようでしかないと思ったりする。

私は、私の手に秒をきざむ時計の針をみつめながら、誰も止めようとしても止められない、また、早めることも出来ない、時間という姿なき絶対支配者をつくづくと思うのである。

しかし、人間には夢というものがあって、主観的には、時の流れをかけ戻ることや、カプセルに入って、或る時限を省略してしまう可能性もある。

昔、蜀の国に住む盧生というわかものは、日頃迷路をたどっていたが、楚国の羊飛山（ようひざん）に高徳の僧がいるときいて、その教えを受けようと、尋ねてゆく途中、村雨にあい、邯鄲の里に立ち寄る。宿の主のすすめにより、邯鄲の枕に一睡の夢を結ぶ。夢中、王位につき、五十年の栄華を極めるが、たちまちに夢はさめ、人間一生の盛衰に開悟の眼をひらくのである。

能の作者は、この盧生をして、一介の書生――楚国の帝王―得悟の道士と、三段に分け演出した。すなわち、迷い、夢、悟り、の三段である。

傘の出の小書になると、シテ（盧生）は、長柄の傘を左手にさして幕を出る、小雨そぼふる邯鄲の里に宿を乞う盧生の姿には、すでに詩情があふれている。

二段目の夢の中では、華やかな宮廷生活と豪華な景観を展望し、歓びが絶頂に達した時、はげしい飛込みの型があって夢がさめる。三段目は悟達の境に入り、静けさがあたりをつつむ。

雨の中に消える能、傘を狂言から受けとり、悟りきった心境のうちに、シテはしっかりとした足の運びで幕を入る。

## 能楽協会名古屋支部公演

### 初秋能

九月三日（日）
第一部　午前十時三十分始
第二部　午後二時始
名古屋能楽堂

第一部（午前十時三十分始）

（観世流能）**頼政**　泉　嘉夫
後見　外山　圭一　近藤　幸江
高安　勝久　笠　後藤孝一郎　鉱一　竹市　学
地謡　高島　良一　八神　孝充　松山　幸親　本田　熟
間　野村小三郎

（喜多流仕舞）**通小町**　長田　驍
地謡　伊藤　英毅　長田　郷　和谷　衡市　川上　日出国　古橋　正邦　梅田　邦久　中川　雅章　加藤　保彦

（金剛流仕舞）**野宮**　竹市　幸司
地謡　熊谷眞知子　伊藤　雅子　吉川　周子　羽多野　良子

（和泉流狂言）**柿山伏**　松田　高義　野村小三郎
後見　野村又三郎

（観世流能）**鉄輪**　清沢　一政
後見　前野　郁子　梅田　邦久
飯冨　雅介　椙元　正樹
地謡　外山　圭一　黒田　博　八神　孝充　松山　幸親　須部　敏彦　加賀　祖父江修一　高橋　暸一　甫
河村眞之介　福井啓次郎　助川　龍夫　藤田六郎兵衛
間　井上　靖浩

附祝言

第二部（午後二時始）

（観世流能）**清経**　本田　勲　古橋　正邦
後見　生駒　里翠　中川　雅章
杉江　元
地謡　高島　良一　黒田　博　須部　甫　加賀　敏彦　河村総一郎　後藤嘉津幸　高橋　暸一　祖父江修一　泉　嘉夫　清沢　一政
大野　誠

（金春流仕舞）**山姥**　キリ
伊藤　雄二
地謡　小島　芳樹　前田　茂穂　加藤　正嗣　佐久間祥夫

（和泉流狂言）**子盗人**
佐藤　友彦
地謡　井上　祐一　今枝　靖雄　後見　井上　靖浩

（観世流仕舞）**松風**　生駒　里翠
**善知鳥**　久田三津子
地謡　瀬戸　洋子　三村　恵子　近藤　幸江　今沢　美和　星野　路子

（宝生流能）**船弁慶**　福井　憲介　衣斐　正宜
後見　玉井　博祐　衣斐　愛
飯冨　雅介　橋本　宰
地謡　河村眞之介　柳原冨司忠　鬼頭　喜太郎　竹市　学
間　佐藤　融

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部
後援　愛知県・名古屋市

前売二、五〇〇円（当日三、〇〇〇円）学生一、五〇〇円
取り扱い所＝チケットぴあ、チケットセゾン、市内プレイガイド、各出演者
熱田神宮能楽殿（052・682・1751）

## 暑中御見舞申し上げます

名古屋観世会

財団法人 研能会
梅若万紀夫
梅若万佐晴

野村四郎

大西智久
大西礼久

名古屋橋岡会
橋岡久馬
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五
山田紀子方

久田観正会
久田勘鵬
馬場信至
玉木孝男
星野路子

大倉流小鼓松月会
久田舜一郎
都謡会 前野郁子
松謡会 松山幸親
〒465-0091 名古屋市名東区一社3-162
電話（〇五二）七〇五-一五八五

大江能楽堂
大江将董

山本眞義
山本章弘
豊中市本町六丁目一〇-六

下田雄三
豊中市曽根東町四-一-一二

雄謡会中部地区連合会
名古屋和謡会
一宮竹石会
岐阜花謡会
下呂雄謡会
倭文之屋社中

賀水会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
花晨の会
加賀敏彦
〒463-0035 名古屋市守山区森孝二丁目七〇九
電話（〇五二）七七一-八九四五番

洗心会 奥村富久子
〒606-8433 京都市左京区永観堂西町二〇
電話〇七五（七七二）〇七六七番

観修会 祖父江修一
〒507-0048 多治見市日ノ出町2の2
電話（〇五七二）二二-三六五六

猶恵会 熊沢恵美子
〒465-0067 名古屋市名東区平和ケ丘3-76
日車マンション四〇四

幸謡会 近藤幸江
〒441-2122 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話（〇五六四）㉑二五二九

中日文化センター
謡曲・仕舞教室 名古屋(36) 岐阜・四日市

翠謡会　生駒里翠
〒465-0061 名古屋市名東区社ガ丘3ノ1503
電話（〇五二）七〇三-五七一七番

芳謡会　稲生芳雄
〒475-0021 半田市船入町三十一
電話〇五六九㉑〇八一五

恵謡会　三村恵子
〒445-0051 西尾市住吉町三-一二
電話〇五六三（五七）二五九四番

千早会　八神孝充
〒464-0002 名古屋市千種区向陽町2-16
電話（〇五二）七六二-二二〇一

朧月会　加藤春枝
〒509-0206 可児市皐ケ丘3-113
電話（〇五七四）五六-〇一六六

松盛会
小松勝憲
松舞台
〒511-0031 三重県桑名市西別所一〇六一の五
電話（〇五九四）二三-四五八二

名古屋巽会
辰巳孝

惠美寿会
衣斐正宜
衣斐正宜後援会
〒465-0031 名古屋市昭和区御器所3-23-19
御器所パークマンション802号
電話（〇五二）八八二-五六〇〇番

## 青陽会定式能（第44期 第4回）

九月九日（土）十二時半開演
名古屋能楽堂

仕舞
菊慈童　前野郁子
放下僧　三村恵子　地謡　星野路子　今沢美和　生駒里翠　久田三津子

能
松山幸親　須部甫

養老
間　佐藤融
能　高安西村　植元勝久信広正樹　河崎柳原冨司忠　鬼頭大野　熙好誠信

井筒
間　飯冨雅介　佐藤友彦
狂言　後藤孝一郎　河村真之介　竹市学
能　祖父江修一

瓜盗人
仕舞　井上靖浩　井上後見祐一　今枝靖雄

松虫クセ　玉木孝男
野宮　清沢一政　地謡　松山幸親　加藤保彦　久田勘鬼　加賀敏彦
殺生石　武田邦弘

能
高橋暸一

藤戸
間　杉江橋本元宰　大野弘之　福井啓次郎　冨鉱一　鹿取希世

附祝言

入場券＝前売二千円（当日券三千円）　主催　青陽会

取り扱い＝チケットぴあ、出演者宅

## 名古屋観世会定式能（四回）

九月十日（日）十二時半始
名古屋能楽堂

能
片山清司　観世晩夫

蝉丸
間　高安杉江勝久元　植元正樹　河村総一郎　柳原冨司忠　大野誠
後見　小島一英　浦田保利　井上靖浩　地謡　高島良一　須部甫　本田熙　清沢一政　武田邦弘　古橋正邦　梅田邦久　中川雅章

仕舞
白楽天　小島一英
遊行柳クセ　浦田保利
善界　武田邦弘　地謡　加藤保彦　中川雅章　久田勘鬼　古橋正邦

狂言
佐藤融

船渡聟
能
大槻文蔵

融
舞返　宝生欣哉
間　井上祐一
後見　武田邦弘　片山清司　地謡　冨鉱一　久田舜一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　松山幸親　加賀敏彦　高橋暸一　祖父江修一　久田勘鬼　梅田邦久　浦田保利　小島一英

附祝言

〔有料〕要会員券　主催　名古屋観世会（終了五時頃）

## 先代観世喜之二十三回忌追善
## 名古屋観世九皐会公演

九月十六日（土）
開場　正午
開演　午後一時
名古屋能楽堂

番組
仕舞
松虫クセ　外山圭一
葛城キリ　加藤保彦　地謡　坂真太郎　佐久間二郎　長沼範夫　小島英明

子方　駒瀬佐保子　岡山奥川恒治　岡山遠藤喜久　岡山鈴木啓吾　岡山駒瀬直也　岡山高橋暸一　岡山遠藤和久　岡山中所宜夫　岡山小林喜久　岡山五木田三郎

能
安宅
観世喜之　勧進帳　滝流
間　高安勝久　野村又三郎　井上祐一
後見　遠藤佐久間二郎　長沼六郎範夫　地謡　冨鉱一　福井啓次郎　鹿取希世　坂真太郎　加藤保彦　松山幸親　清沢一政　弘田裕一　梅田邦久　観世喜正　祖父江修一

（④面へつづく）

## 暑中御見舞申し上げます

近藤乾之助
〒170-0002　東京都豊島区巣鴨五―二三―八
電話〇三（三九一五）一三七六番

宝生流
嘉宝会　鬼頭嘉男
〒466-0855　名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

司宝会　佐藤耕司
〒468-0066　名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅二一三〇電話（八〇三）七三七二

豊嶋能の会
豊春会
豊嶋三千春

金剛流景雲会
能を楽しむ会
宇高通成後援会
宇高通成面乃会
（世界遺産）国際能楽研究会
宇高通成
竜成
徳成
〒606-8105　京都市左京区高野泉町四〇
TEL・FAX（〇七五）七〇一―〇七九三
敷舞台
〒606-0047　京都市左京区上高野薩田町二
TEL（〇七五）七〇一―一〇五五
敷舞台
〒791-8013　松山市山越四丁目二―三八
TEL・FAX（〇八九）九一四―八五五四
名古屋事務所　前畑方
TEL・FAX（〇五二）八五一―三三四

金剛流
名古屋周星会
岐阜周星会
吉川周子
〒464-0825　名古屋市千種区西崎町三―六
電話（〇五二）七六一―二二五七

金春欣三
〒630-8113　奈良市法蓮南町一四
電話（〇七四二）二二―七九二九

春敲会
名古屋春栄会
金春晃実
金春穂高
廣瀬瑞弘

本田光洋
〒164-0002　東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三（三三八六）二六四一番

長田驍後援会
〒514-2221　津市高野尾町三三五一―四六
電話（〇五九二）㊁〇六九七番

喜多流
和楽会
和谷衡市
〒516-0067　伊勢市中島二丁目26―12
電話（〇五六二）㊀〇一五九番

西村同門会
飯冨雅介
杉江元
植元正樹
橋本宰
西村信広

ワキ方高安流
山崎悛輔
〒837-0024　大牟田市大字歴木一四八ノ二
高泉団地一一二二

ウシマド写真工房
〒602-8331　京都市上京区北野上七軒
TEL〇七五―四六二―二三四一
FAX〇七五―四六一―五七七二

森常好
〒154-0017　東京都世田谷区世田谷一―47―12
電話〇三（三四二六）四八五三

大倉源次郎
〒532-0003　大阪市淀川区宮原4―4―2―705
TEL（〇六）六三九七―二三三三

幸友会
涛華能
福井啓次郎
福井良治
柳原冨司忠

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

冨耀会
柳原冨司忠
〒466-0825　名古屋市昭和区滝川町47―147
サザンヒル八事2―703
電話（八二三）一〇三二番

小鼓教室
名古屋市中区栄　朝日神社内（丸善前）

叶石会
河村総一郎
河村真之介
〒466-0021　名古屋市昭和区前山町一丁目二三
電話（〇五二）七六一―四八八二

河村大
〒603-8113　京都市北区紫野下柏野町五九―一
電話（〇七五）四六二―四一一五

（③面よりつづき）

狂言　寝音曲　佐藤友彦　大野弘之　後見　井上祐一

仕舞　隅田川　遠藤六郎　藤戸　梅田邦久　地謡　高橋暎一　駒瀬直也　五木田三郎　中所宜夫

能　道成寺　観世喜正　杉江元　飯冨雅介　橋本宰　河村真之介　観世元伯　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛

赤頭　中之段数調　無調之崩

間　野村小三郎　井上靖浩

後見　奥川恒治　観世喜之　遠藤六郎　地謡　外山圭一　小島英明　佐久間二郎　鈴木啓吾　遠藤和久　駒瀬直也　弘田裕一　中所宜夫

鏡後見　五木田三郎　長沼範夫　小林喜久　遠藤喜久　坂真太郎

狂言鏡後見　松田高義　佐藤融　今枝靖雄　今枝郁雄

追加

（終演予定五時三十分頃）

主催　名古屋観世九皐会

事務所　名古屋市南区元塩町一一一一七　加藤保彦方

電話　〇五二―六一一―三六五九

（有料）

全自由席一万五百円

問い合わせ・お申し込み＝観世九皐会（〇一二〇）一五〇九五〇（フリーダイヤル）

取扱い＝チケットぴあ（〇五二・三二〇・九九九九）

## 名古屋宝生会定式能（第44期第3回）

九月十七日（日）午後一時始

名古屋能楽堂

能　忠度　玉井博祐　高安勝久　佐藤融　覓鉱一　後藤孝一郎　大野誠

間　後見　辰巳孝　佐藤耕司　地謡　三橋茂三　織田哲也　玉井道夫　柴田賢治　鬼頭嘉男　広島克栄　辰巳満次郎　和久荘太郎

仕舞　鳥追　竹内澄子　衣斐愛　地謡　佐藤耕司　馬螺富四夫　衣斐正宜　和久荘太郎

融　倉本雅　飯冨雅介　河村真之介　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

間　野村又三郎　後見　竹内澄子　衣斐愛　地謡　吉村純功　新村一世　中島静男　外山通夫　辰巳満次郎　馬螺富四夫　衣斐正宜　佐藤耕司

狂言　伯母ケ酒　野村小三郎　伯母　野村又三郎

稲川寿一　殺生石　杉江元　河村総一郎　後藤嘉津幸　鬼頭好信　竹市学

間　松田高義

後見　辰巳満次郎　和久荘太郎　地謡　野々山忠利　安江良郎　石森智幸　大松福三郎　鬼頭嘉男　衣斐正宜　広島克栄　久野幸三

正会員（年4回綴）一万八千円　当日券一万円（三枚綴）

主催　名古屋宝生会

事務所　名古屋市天白区島田二―三〇一　島田橋住宅二―一三一〇　佐藤耕司方

電話FAX〇五二―八〇三―七三七二　携帯TEL〇九〇―一七四一―六二三四

## 名古屋能楽堂定例公演

九月二十二日（金）午後六時三十分開演

名古屋能楽堂

狂言　飛越　野村又三郎　新発意　奥津健太郎　何某　今枝靖雄

能　千手　杉江元　覓鉱一　柳原冨司忠　鹿取希世　金春安明　本田光洋

後見　金春晃実　本田芳樹　地謡　廣瀬雅弘　前田茂穂　小島芳樹　鬼頭尚久　高橋汎忍　吉場廣明　金春穂高

（午後八時四十五分頃終了予定）

主催　能楽普及事業実行委員会

名古屋市・名古屋城振興協会　名古屋市文化振興事業団

協賛　能楽協会名古屋支部

（入場料）前売一般三千五百円、学生二千円（当日一般四千円、学生二千五百円）

（前売券取扱い）名古屋能楽堂（電052・231・0088）チケットぴあ、市内プレイガイド

## 名古屋能楽堂定例公演　今後の公演予定

◉30回記念特別公演

能「安宅」（観世流）久田勘鴎　11月10日（金）午後6時30分始

狂言「煙松」（和泉流）大野弘之

◉正月特別公演

能「大原御幸」（観世流）梅田邦久　平成13年1月3日（水）午後2時始

狂言「松囃子」（和泉流）井上裕一

（前売券は前々月の15日から行われる）

## 暑中御見舞申し上げます

飯島佐之大輔

〒920―0961　金沢市香林坊2―8―17　電話（〇七六）二六一―四三四〇

呉竹会　覓鉱一

谷口正喜

〒602―0915　京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

長生会　鬼頭喜太郎　好信

愛知県中島郡平和町城西　電話（〇五六七）49―九六〇番

助川龍夫　助川治

金春流太鼓　青耀会　上田悟

〒594・1153　和泉市青葉台2―17―25　電話〇七二五（56）八五二一

名古屋　名古屋市千種区今池4―15―3　稽古場　浅井能舞台

大蔵会　大蔵狂言会　大蔵彌右衛門　大蔵彌太郎　大蔵吉次郎

〒177―0045　練馬区石神井台5―22―41―406　電話〇三―三九二〇―六七一七番

茂山千作　千五郎　七五三　千三郎　正邦　茂

野村萬　野村万之丞　野村良介

〒171―0052　東京都豊島区南長崎六―五―三　電話〇三―三九五〇―五二八八番

茂山忠三郎　茂山良暢

〒605―0025　京都市左京区北白川東小倉町28　電話〇七五（七〇一）二〇一一番

狂言やるまい会　野村又三郎　野村小三郎

〒460―0003　名古屋市中区錦一―五―一　シマノニシキビル四階　電話〇五二（二二二）五二二五番

鳳の会　林和利　井上祐一　佐藤友彦

狂言　なのり座　井上靖浩　佐藤融　野村小三郎

朝日カルチャーセンター　囃子教室　小鼓　後藤孝一郎　丸栄スカイル10階

㈱大阪能楽会館

〒530―0015　大阪市北区中崎西2―3―17

栄能楽舞台

名古屋市中区栄五―六―四　電話（二六二）一一八三番

楽諷庵舞台

名古屋市昭和区滝川町四七―八三　電話（八三二）三四一九番

彰諷閣

名古屋市天白区植田西二―八〇二―二　電話（〇五二）八〇五―三三〇一

連絡先　名古屋市緑区鳴海町有松裏40―9　電話（〇五二）六二一―四二三八

葵心庵舞台

尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二　若杉ビル（旭市役所南）

電話　〇五六一五③二三四六番

能舞台　電話〇五六一五④〇六九八

能楽の友社　同人一同

（おことわり）

暑中広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により七、八月号に分けて掲載するとともに順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようおねがい申上げます。

## 亡父久田秀雄十七回忌追善
# 「能」久田勘鷗の会特別公演

九月二十三日（祝・土）
午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

### 番組

舞囃子
百万　上田貴弘　笠田昭雄　地謡　笠田音彌　久田舜一郎　笠田昭雄　下川宜長　上田拓司　鹿取希世　助川龍夫　鹿取希世　笠田稔　下川宜長　上田拓司　笠田稔　鹿取希世　助川龍夫　久田舜一郎　笠田昭雄　下川宜長　上田拓司　笠田稔　鹿取希世　助川龍夫　久田舜一郎　笠田昭雄　下川宜長　上田拓司　笠田稔　鹿取希世　助川龍夫

仕舞
海士　玉木孝男
清経　瀬戸洋子
杜若　星野路子
女郎花　前野郁子
鵜之段　松山幸親

能
羽衣　杉江元　楢本正樹　久田三津子　彩色之伝　後見　祖父江修一　橋岡慈観　地謡　笈田鉱一　久田陽春子　鬼頭喜太郎　大野誠　松山幸親　須部甫　清沢一政　高橋瞭一　上田義高　加賀敏彦　上田貴弘　上田拓司　須部甫　清沢一政　祖父江修一　高橋瞭一

能
求塚　高安勝久　飯富雅介　橋本宰　藤谷音彌　笠田昭雄　久田勘鷗　河村総一郎　久田舜一郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世

問　井上祐一

狂言
千鳥　野村又三郎　後見　橋岡清沢　下川慈観　宜長一政　地謡　玉木孝男　松山幸親　須部甫　祖父江修一　松田高義　野村小三郎　笠田浦田保利稔　藤井完治　上田拓司　笠田山田義高　藤谷音彌　玉木孝男　山田義高　笠田稔

西行櫻　橋岡慈観
弱法師　浦田保利
船弁慶　藤井完治
猩々　久田勘吉郎

半能
融　観世清和　酌之舞　飯富雅介　後見　久田勘鷗　浦田保利　地謡　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛　松山幸親　高橋瞭一　加賀敏彦　笠田昭雄　山田義高　上田貴弘　藤井完治　下川宜長

（終了予定六時頃）

主催〝能〟久田勘鷗の会

入場料（全自由席）
一般　前売八、五〇〇円（当日九、五〇〇円）
学生　前売四、〇〇〇円（当日五、〇〇〇円）
取扱い＝チケットぴあ、市内各プレイガイド、名古屋能楽堂
お問い合わせ＝久田勘鷗事務所　TEL・FAX052・705・1585

# 戦後名古屋能楽史⑫
## 〔第五章〕松坂屋ホール特設舞台の時代来る（昭和二十六年）

竹尾　邦太郎

（前項につづく）

さて、暦の上では夏が終わる九月一日、全国に先駆け当地で中部日本放送が新日本放送と共に開局する。九月八日、金権吉田茂により日米安全保障条約が調印（翌年四月二十八日発効）され、九月十日には能に造詣が深い映画監督黒澤明の「羅生門」がベニス映画祭でグランプリを受賞する快挙がある。装束始は九月十六日の第五回定式能、「景清・小返」大槻十三・西村弘敬、「鵜飼」歌村彦四郎、「海士・赤頭三段ノ舞」山本博之・高安滋男で大阪勢のシテである。ここに九月一日発行『金剛』第五号の「流内消息」欄に拠ると、「高安流宗家高安滋男氏は今度（滋郎）と改名された」とあり、流誌編集の時間を勘案すれば、改名はこの夏のことと思われる。一般に番組は催会日をかなり遡って印刷されるが、記録に残すには訂正の必要ある番組は多々であろう。

九月二十九日、名古屋観世会が発足する。これについて柴田初太郎は自著『帰童閑談』に言う。「名古屋観世会は長能会と観友会とを合併して昭和二十六年私の家を本部としてスタートしたのが始まりで、同年九月二十九日愛知県商工館で発会式が行われました。宗家と観世華雪師ご出席のもとに当時会員二十五名が集って設立総会を開き名古屋観世会が創立されました。会長に宗家、顧問に華雪師をお願いし、同年十月に名古屋観世会の会則が出来まして、昭和二十七年二月から定式能楽会が催されて以来、今日に及んでいます」と。因みに当日選任された常任理事は柴田初太郎・林愿蔵、理事は飯田朝恵・国枝照清・増田一雄・松良正一・鬼頭五郎・真柄米次・太田重次郎である（『観世』昭和二十七年三月号に拠る）。そして翌九月三十日、故二十四世観世左近十三回忌追善能が会長観世元正の「井筒」、顧問観世華雪の「玄象」で行われる。狂言は「重喜」井上祐一、他に一調二番、仕舞八番、連吟二番があり、橋岡久太郎・大槻十三・観世喜之・山本博之・武田太加志・岡久雄らが来演する。時を同じくして能楽評論家にして著名な能楽プロデューサーでもあった西田三好（一九〇一―一九八五）は、十月二日付で「中京の三つの動き」と題する一文を『観世』誌に寄稿（同年十二月に掲載）、当時の名古屋能楽界の様子を映して示唆に富む。全文は次の通りである。

「由緒ある布池町能楽堂を昭和二十年の空襲で失って以来当地楽師及能楽ファンの失望は想像以上であった。東西両都に挟まれて変則的な発達ではあったが、他都市に比し意外な隆盛を見た中京能楽界も手足を取られた動きのとれないものになってしまった。が辛じて囃子会位で意気の喪失するのを支えて来たが、当時の国内事情としては之が最大限の努力であった。昭和二十二年頃より学校講堂、演舞場、商工会議所ホール、劇場等で架設舞台を造って曲りなりにも能が見られる様になった。あの狭い女学校講堂の演壇の後に金屏風を立て並べ青竹を配して橋掛り欄干を模した粗末な舞台で熱演する土地の楽師を見て私は幾たび涙を拭ったか知れない。この頃福田子好氏と言う特志家があって能楽界に非常に協力して呉れた。当地の大劇場御園座で仮設能舞台を設け沈滞した能楽界に活を入れるため大家を招聘して市民招待能を催した其中には私は今尚印象に残って居る能が数多くある。又同氏は独力で二ケ年以内に能楽堂を新設してやろうと話が出て全く夢を見て居る様な気持でかすかに希望を持って居った其後財界異変で其話は何時の間にか消え失せてしまった。併し私は今でも福田氏の約束には期待を捨ててはいない。何れ折を見て同氏に会って意向を聞いて見たいと思って居る。

それから間もなく田鍋惣太郎師、西川鯉三郎師等芸能団体が中心となって布池町舞台焼跡の残骸を利用して資本金二千万円株式会社名古屋芸能会館設立が発起されたが、これも少時くして立消えとなり其後は松坂屋ホールに仮設舞台が出来て兎に角現在は其処で能を演って居る。今迄よりは幾分ましであるが平面的な舞台での演技は丁度芝居の舞台を見て居る様なもので、名人の至芸も時にその真髄を窺い得ない場合もあり本格舞台の出現が速かならん事を中京能楽人は切に望んで居る。

昨年春頃より熱田神宮境内に神宮奉讃会の事業の一環として能楽殿新築の議が出て一条の光明が見え始めたので関係者は勇躍した。能楽会会長の伊藤次郎左衛門氏、岡谷惣助氏の尽力の下に話は進んでこの秋になって那古野神社境内の舞台を熱田神宮境内へ移築して能楽堂を建設しようと計画が具体化して来た、そして今迄にない活発な動きを示して来た。こんどこそは、と田鍋師を始め建設委員一同もハリキって力の入れ方も違って居る。そうして昨今建築資金の募金運動が猛烈に開始された。田辺師も、私は名古屋に舞台を再建せねば死ぬにも死ねぬ、と決意の程を示し背水の陣を布いて尽力して居られる。この動きの成功する事を中京能楽会の為祈ってやまない。

○

名古屋は土地にシテ方の大家はなく各流共東西より夫々思い思いの師を招聘して此の道を学んで居るのである。観世では東より喜之、橋岡、武田師、西より大槻、山本師がそれで各々毎月一回位稽古に来て居られる。此の稽古会が中心となって各会が自然に分立の形となって居る。従来之等各会の相互の連絡は種々なる事情で満足にとられていなかったが二年ほど前私の主唱で流儀の玄人（当時は数名）素人を一丸とする観世会を設置せんと努力し各会の代表者が数回会合を催したが機未だ熟せず残念乍ら徒労に帰した。最近当流師範が各会共急に増加し、現在では廿数名を数え未だ嘗て見ない数的隆盛を示し、今秋九月三十日現宗家元正師及華雪師前記来名諸先生を迎えて先代左近追善能が盛大に当地で催され、其機会に当流の準職分、師範が団結して宗家を会長に戴き待望の名古屋観世会を創立する運びになって既に過日発会式を目出度く終った由、当地流儀の発展であり洵に慶びに堪えない。地下で眠る左近師も定めて喜んで居られる事と思う。

名古屋の特殊なる事情から考え新生観世会を円滑に運営する事は仲々困難な事であるが、その唯一の道は頗る簡単で、直接指導的立場にある人が何れにも偏せず最も公平無私に会を運営する事である。斯くする事のみが名古屋観世会の発展を必然的ならしめるものであり、中京全観世人はそれを新指導者に大きく期待して居る。

○

名古屋には東西両都市に類例を見ない保能会と言う存在があった。処が其は昭和十八年頃自然中止の形となって今日に及んで居る。この保能会は一口に言えば素人能が経済的に容易に出来ると言う吾々には洵に重宝な会で、能楽の普及発達に好適の組織であった。当地の各流の趣味者は茲で大いに勉強して後には玄人になった人も多い。近世名古屋能楽の発達はこの保能会に負う処大なるものがあると言っても過言ではない。この保能会が当地の能楽愛好家の手に依り、十年振りで今秋新たなる構想の下に復活されようとして活潑なる動きを見せて居る。私もその復活に努力する一人である。保能会の功績を顧みて名古屋と言う土地柄のみに成立するこの能楽普及機関の復活を名古屋の能楽師各位は全幅の支援を与えて協力されるであろうと私は信じて居る。

十月二十七日、名古屋能楽界を圧倒的にリードする田鍋惣太郎が、主宰する名古屋能楽鑑賞会本年度三回目に当る第十四回名匠鑑賞能を開催する。「小督・替装束」観世銕之丞、「松風・見留」粟谷益二郎、「葵焼」井上松次郎、「安達原・黒頭・急進ノ出」観世喜之、小書尽しである。

月が替り十一月四日、能楽協会北陸支部結成の記念能が金沢能楽堂で行われ、初代支部長佐野吉之助は「松風」を、副支部長佐野安彦は「安宅」を勤める。副支部長は他に片岡外与吉・島村平次、常議員は住駒政次・飯島佐六・渡辺菊之助・山田太三久ら計十五名、当地来演の顔も見られる。十一月十一日、この春に死去した初世金剛巌を継ぐ金剛滋夫が二世巌を襲名し、宗家継承並に襲名披露能に「道成寺」を披く。ワキ高安滋郎、小鼓曽和博朗である。十一月十八日は第六回定式能、「百万」宝生英雄、「盆山」佐藤秀雄、「春日龍神」野口禄久、の宝生会。十一月二十五日の九皐会は例によって観世喜之の能二番、即ち「松風・見留」と「熊坂・替ノ型」、大鼓を大阪の大村良二が勤め、狂言は井上松次郎の「千鳥」である。番組に先立ち永島誠二と長山勝次郎による能装束の着附け実演があるのも催会に新機軸を出そうとする観世喜之らしい試みである。

師走に入り二日は久田秀雄の師範披露能、「小鍛冶」である。会場が中区南伏見町二丁目（御園座南半丁）の名古屋合唱団ホール舞台というのも珍しい。番組冒頭の挨拶に「私儀先代上田隆一先生並に御後嗣上田照也先生の御懇篤な御指導の下に斯道に精進致しておりました所未熟乍ら今春師範に取立を戴きました　今後共一層の御後援と御鞭撻の程偏に御願い申上げます」とある。同日、京都金剛能楽堂では金春信高が七十九世宗家を継承して披露能に「道成寺」（ワキ福王茂十郎・小鼓林吉兵衛）を披き、七十八世金春光太郎（のち八条）は「景清」を勤めた。師走九日、第四回能楽協会名古屋支部能は「名古屋能楽堂建設促進協賛」と銘打ち行われる。「葵上」竹市秀雄、「二九十八」河村丘造、「太刀奪」井上新三郎、「乱」柴田初太郎、他に素謡二（観）、舞囃子二（宝・剛）、仕舞十（観）で当時の流勢自ずから明らかである。

昭和二十六年の納会は師走十六日の金剛会中部支部第三回定式能。「本春逝去せられた能楽界の耆宿金剛流宗家巌師の後継滋夫師は今秋目出度く宗家を継承し先代の巌を襲名せられ襲名後始めて当地金剛流定式能に御来演を願う事になりました　芸道一途の新宗家に依り将来型金剛のよさを益々発揮せられる事と存じますが斯道御奨励の恩召を以て多数御同好の御支援を切に御願申上げます」と番組に言う。「松風・見留」豊嶋弥左衛門、「素袍落」歌村彦四郎、金剛巌は流儀得意の小書をもつ「土蜘蛛・千筋ノ伝」、型金剛のよさ存分に発揮されたことであろう。なお暮も押し詰まった二十三日、水道橋能楽堂では観世華雪による「求塚」の復曲上演があった。復曲の経緯は『観世華雪芸談』に次の様にある。

左近さんが在世中に「求塚はよい能だから、復興したいがチャンスがなくて困る」と申されながら、とうとう志を果されずに亡くなられたのですが、元正さんから「水らく後見をしてもらった記念に求塚を残してほしい」との御意向を伺いました。

# ◆仲夏から盛夏の舞台◆

## 「宝生会」と「第四回鏡座」「第十七回野村四郎名古屋公演」「第一回御洒落名匠狂言会」「茂山千作・千五郎の狂言を観る会」

竹尾邦太郎

「敦盛」　笛の音にその風流を怪しむ蓮生法師（ワキ雅介）が、折から家路に就く草刈り一行の一人、シテ耕司と問答になる前場、「げに面白き笞かな」と樵歌牧笛の有りようを知ったワキが、役謡を観世流とは逆にワキ主導で掛合ってゆくのが面白い。謡ふも、舞ふも、吹くも、からへ遊ぶも、はシテ・ワキ、連吟、互いの心も通じ合おうというものである。余人を退け十念を受けるシテの神妙は、地（冨四夫・満次郎ら）一杯に笛（誠）で中入するところも良い。

後場はクセ、へまことに一昔の、と床几を立つ。上ゲ端あと、へ我が袖も波に萎るる磯枕、と袖巻き上げて膝を着き、面を庇うかの型には涙を隠し、波を避け、旅寝する、三様の心を象徴して極まる。中ノ舞を大小（鉱一・良治）前で舞上げ、キリは熊谷直実との組み討ち。波打際にへ落ち重なって、の組落シの写実も鮮やかだった。（1時間22分）

「砧」　シテ英照、前は面曲見。◎我は忘れぬ音を泣きて、と三ノ松で独白に孤閨を歎き、暮には帰国を、の報せを齎す侍女夕霧（ツレ健太郎）と会えば、夫（ワキ芦屋某・勝久）への耐えていた思いは一層募る。初同（章・正宣ら）へ何を頼まん身の行方、とシオリ、シオリ解くと三年の歳月は偽りの現実であったか、と歩みを運びつつ己が愚かさを噛み締める（地謡）かに舞台へ入り、ツレは地前、シテは正中に下居する。砧ノ段は、へ憂きを知らする夕かな、とシオルとへ遠里人も眺むらん、と右ウケて月を見る心、感傷も一入である。更けゆく夜の皓々たる月の色、風の気色に落莫の景。へ西より来る秋の風の、と笛柱上を見、へ今の砧の声添へて、は数歩出てへ君がそなたに吹けや風、と右へワキ正遠くを眺め遣る辺り、身に泌む思いである。へ夏衣薄き契りは怨めしや、の数拍子には激しい感情の昂ぶりをみせ、へほろほろ、の所は独りで打ち、へ何れ砧の音やらん、とシオル。夫の帰国無きを知り、シオリ解くとクドキは、地のへ思はじと思ふ心の、と居立ったところで力なく扇を落し、へ弱るかな、とがっくり安座双シオリが痛ましい。へ乱るる（草の）、と立ち中入は地一杯に極く静かに入る。アイ下人は千五郎、経緯を常座で立シャベり、終ると橋懸からワキを呼び切戸に退く。

後ワキは無紅厚板・白大口の装着胴姿に掛絡、数珠を持つ。後シテは面痩女・襟白二・白地金菊菱文摺箔着付・浅黒大口・銀灰色秋草文縫箔壺折、杖をついて出、常座で謡い出す。クドキにへ打てや打てやと、と砧を見込み、へ報いの砧怨めしかりける、と微かに身体を震わせる所や、涙が却って火焔となる業火に、杖を捨てるや懐中の扇を開き、炎に咽ぶ口を覆う所など、写実の巧み。六道輪廻の苦悩が夫への執着から不実の怨みへと向かう描写力の確かは、右膝着いてへ思ひ知らずや恨めしや、とワキへ指シ強く迫るのも恐い程だった。キリは、へ打ちし砧の声の中、と砧へぐいと詰メて見込む所に成仏の感慨があり、常座で合掌、右ウケ留拍子踏んだ。（1時間43分）

「寝音曲」　大盃で三杯飲んで膝枕とあっては、それが主（千五郎）の「ちと堅い膝で」あろうと「えいえいやっとな、ちと酔うたな」と気持ち好く横になれるのも当然だろう。シテ太郎冠者・千作の天衣無縫は自然体、小謡もさりながら、膝枕の下から主の顎を撫で上げてじゃれつき、「女共と存じてござる」といけしゃあしゃあ弁解する所など生活臭もあって可笑しい。（19分）

「阿漕」　シテ満次郎、前は腰簑を着けない。居語に密漁の重い気分を述べ、地のへ罪邪はせ給へや、にワキ元へ合掌する所いささかしんみりする。居クセ、ロンギからへ立ち添ふ方や漁火の、と釣竿取って立ち、へ影も仄かに、と脇柱へ見ると釣竿振りかぶって釣糸キリリと掛けるや更に逆に撥いて掛けるのも鮮やか。へ俄に疾風、と面使いスミへ、へ叫ぶ声の、と耳を塞ぐ間もあらばこそ、釣竿捨てる険しい切迫感がひきつける。

後シテは面痩男・褶紺腰簑を着けて四手網を担ぐ。一ノ松でへ海士の刈る、と謡い、人目を避け道を替える心に二ノ松、へ沖にも磯にも、と顧みてへ唯我のみぞ、と船無きを確かめて舞台に入りスミに四手網を置く。カケリは密漁の漁夫なればこその機敏、一ノ松勾欄から頭取って網を凝視すると舞台に入り、左手で右手でときびきび魚を追い、ハッと膝を着くと網の網を取りへ伊勢の海、となる。

其処に面を伏せて耳を澄ます態に御経を聞くが、心は持網の網を手操っているのも密漁者の習性、へ波は却って猛火となる、と頭越しに四手網を捨てると、へあら熱や、と双双ジオリである。キリに頭取って焦熱地獄を眺め、へ起居に隙もなき冥途の責も、と合膝に逃れんとするのも凄じい印象だった。（1時間22分・6月18日・宝生会）

「花子」　シテ小三郎、実生活では先頃妻を娶り旬日を出たばかり、好色譚の披キは皮肉だが、独身では高度な色事の機微は出ないかもしれない。前場は花子との逢瀬の時を何とかたっぷり捻出しようの苦心惨憺が涙ぐましく、徒らに深刻ぶってみたり、適わぬとみれば哀願合掌も辞さない、など小三郎小器用に立ち廻る。これも小アド妻が又三郎ゆえの、安心感からの体当り演技だからと言えよう。たった一夜の戯も「嬉しや嬉しや」の喜悦に男の純情の無邪気、この辺り小三郎持ち味を十分にみせる。とばっちりはアド太郎冠者の高義、ただに役の微妙な実人生の役者修業の立場とも絡むか哀感も一入、肩衣の稲妻に雷太鼓文が不安定な心持ちを象徴するかで好演。

後シテは士烏帽子は脱ぎ、襟は浅黄から赤、着付も段熨斗目から赤地縫箔に替えて華やぎ、素袍袴も扇面散シ文濃緑地の物を瓢箪文浅黄地の物に替えて右肩を脱ぎ、太刀を持つ。一夜の濡れ場を、にたりと思い出し笑いに反芻するかの雰囲気を漂わす小歌に、自己陶酔して拍子を踏み、舞い出す辺りは今風のスキップする心か。好い気なもんだ、と思わせて小三郎なかなかである。キリは披衣を剥いだ後の凍りつく時間の怖さ。「あっ」とばかりの驚きに強く踏む拍子だが、それでもあり得ぬことと小首傾げるのもさもあろう。トメは「許しておくりやれ」の哀願の幕入り。（1時間23分）

「乱」　シテ味方團。「鏡座」同人で、先の小三郎と共に披キ二番の中の一。囃子はこれも同人の誠・嘉津幸・真之介に太鼓が遠来の惣右衛門。ワキ福王和幸・地頭片山慶次郎・主後見林喜一郎と主配役は京阪からの来演。「乱」は中ノ舞・乱・中ノ舞の形式である。軽快な流し足に波頭を爪先で蹴るように戯れる乱レ足は躍動感に溢れ、酒を汲む型、片脚上げて甕を覗く型も大きい。酔いにゆっくり崩れつつ安座してゆく辺りの旨さは若さの柔かいバネの力、酔態に色気がありよい猩々だった。（39分・7月1日・第四回鏡座）

「砧・梓ノ出」　シテ四郎、前は面曲見。へ我は忘れぬ音を泣きて、と三ノ松で独白に孤閨を歎き、案内を乞うツレ（保浩）に気付いて「人までもあるまじ」と中へ招じる態に両者舞台へ入ると、シテは地前、ツレは大小前に下居向き合い、三年間の消息の事があり初同（文義・朝義ら）のへ何を頼まん身の行方、とシオリ、シオリ解くと三年の歳月の虚しい現実に己が愚かさを、ツレに聞かせる様に述懐（地謡）する。

砧ノ段は、へ憂きを知らする夕かな、の後イロエになり、へ遠里人も眺むらん、とワキ正から目付柱上を見る。へ西より来る秋の風の、は大小前から幕へ眺め、へ今の砧の声添へて、と砧に向き、へ君がそなたに吹けや風、は扇でワキ柱へ指シて拍子一ツ踏む所にシテの強い意志を感じさせる。へ夏衣薄き契りは怨めしや、はスミから大小前へ、へほろほろはらはらと、と砧を打ち、へ何れ砧の音やらん、は扇を置くと左手で左から右へ愛しげに砧をさするのが珍しい。この夫恋慕の心が、夫の帰国無きを知ってクドキになる所に利く。へまことに変り果て、と酷く落胆の態に安座すると、へ思はじと思ふ心の、と双シオリの悲嘆は、へ声も（枯野の）、と立つと中入は地一杯に幕へ入る。アイ下人は友彦、常座の立シャベリから後ワキ（岑男）が無紅縫箔・長袴の装着胴姿に掛絡、数珠を持ち、ワキツレ（太刀持・正光）を伴い深刻な面持ちで出る。

後シテは面痩女・襟白二・白地金露芝文摺箔着付・浅黄大口・白綾壺折、杖をつき三ノ松へ斜に出て胸杖に梓の音を聞き、直シて踏み出し又止って聞き、次いで一ノ松で謡い出す。へ（標梅花の）光を、で運び舞台に入ると、クドキはへ怨めしかりける、とワキへ二・三足詰め寄る。涙が却って火焔となる業火に、へ胸の煙の炎に咽べば、と胸杖に立ち竦む態や、へ呵責の声のみ、と押されるように前へ出ると杖を手放し、へ恐ろしや、と退って膝を着き耳を塞ぐ所、写実に冴えをみせる。へ羊の歩み、と懐中の扇を持って立つと、へ廻り廻れども、は正中で小廻り三度の具象、へ味きなの浮世や、と打合せるのも悲嘆に非ず慨嘆の心か。夫の不実への怨みは右膝強く着くと、へ思ひ知らずや、とワキへ指シて迫るも、へ怨めしや、と気力萎えてシオリは胸打ち震わせて慟哭の趣。トメはへ菩提の種、の返シに扇開き、右ウケて一足詰メ拍子は踏まない。深く内面的なシテの苦しみに迫る充実の舞台だった。（1時間50分・7月8日・第17回野村四郎名古屋公演）

「花子」（杉浦賢次氏撮影）

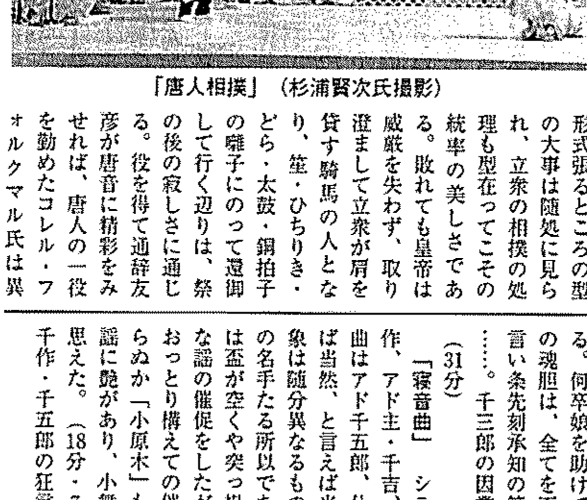
「二人袴」　婿良暢、親忠三郎は実生活も親子。阿吽の呼吸と言うが、息の合った実にほのぼのとした気分にさせられる微笑ましい舞台である。寛ぐことを袴脱いでと言うが、婿入は儀式で体裁は整えねばならない。穿き馴れない袴で舅伸元に目見えする無邪気な婿、スミでついと身体の向きを変える時にみせる「クフン」と鼻を鳴らす仕草が、巧まずに場を和ませる。親子揃って座に改まれば、盃事はいざ知らず、舞を所望されて頼りに後ろを気にする親の苦境に、窮地を救わんの心意気は無邪気が一転頼もしく、良暢の親孝行である。太郎冠者は耕道。（38分）

「無布施経」　シテ僧・萬、アド施主祐丞。日常生活の狎れで大事をうっかり失念はままあること、その大事が布施であり、失念されて困るは僧。しかし、体面上それとは言えず独りやきもきする僧の心象風景を、萬は熱演の中に沸点までボルテージを上げてゆき、人間の心理の深層に巣くう浅ましさを活写する。一方、施主は布施の事を全く忘却している自然体の強さ、生真面目な応対に祐丞よい味を出す。熱くなる僧と冷めている施主の、噛み合わない遣り取りが近頃出色。（41分）

「唐人相撲」　満を持して、と言うべきであろうか、狂言共同社の培ってきた力を結集して実に一世紀ぶりと言える上演である。

帰国を願い出る日本人相撲取り弘之、取り次ぐ通辞友彦、勅許を与える皇帝祐一、永年の盟友トリオ一世一代の舞台と言ってよいかもしれない。古格を守って奇を衒わず、阿ることのない堂々たる正攻法の舞台だったと思う。

折から能楽堂の隣の体育館では大相撲名古屋場所が初日なら、法螺貝と銅鑼の音を合図に狂言来序の囃子で皇帝一行が賑々しく登場するこちらの舞台も大相撲である。奇手妙手を繰り出す日本人弘之は大勢の唐人を相手に大童の奮闘。唐人立衆も一所懸命が気持ちよく、最早相手が無いと知れば皇帝自らが立合うという。ここに「邯鄲」瑞夢の皇帝よろしく大宮の台上、狂言・楽（がく）を舞う祐一が貫録をみせ、所謂「空下り」を左右二度するのも愛敬である。楽のうちに袷狩衣などを次々と脱いで身拵えしてゆく物着の、



「唐人相撲」（杉浦賢次氏撮影）

形式張るところの型の大事は随処に見られ、立衆の相撲の処理も型在ってこその統率の美しさである。敗れても皇帝は威厳を失わず、取り澄まして立衆が肩を貸す騎馬の人となり、笙・ひちりき・どら・太鼓・銅拍子の囃子にのって還御して行く辺りは、祭の後の寂しさに通じる。役を得て通辞友彦が唐音に精彩をみせれば、唐人の一役を勧めたコレル・フオルクマル氏は異色。殷賑を極めた唐は都の長安の、シルクロードを往来する碧眼紅毛の人々を彷彿とさせて存在感があった。（1時間4分・7月9日・お洒落名匠狂言会）

「萩大名」　シテ大名千作、太郎冠者正邦、庭主千五郎、三代で勤める目出度さ。されば勝手知ったるお家芸の心安さ、話の運びは快調だがリードする千作が少々捌け過ぎか。「それは好い・こ・こ・ろ・が・け・ちゃ」など一語一語切れるアクセントが耳に付くが、キリに太郎冠者が居らず逃げ出す所、「さらば」に得も言われぬ味があり、「何がさらばでござる」と押っ被せて返す千五郎の呼吸も見事。けだし対話の面白さは間（ま）の妙、と改めて認識。（31分）

「濯ぎ川」　飯沢匡翻案の、元はフランスのファルス（笑劇）で今は千五郎家人気の現行曲。姑と嫁にいびられる婿養子の残酷物語。

女共の下着まで洗う婿千五郎、鼻を抓み「むさや」が如何にも実感なら、帰りが遅い、と相前後して川へやって来た嫁（茂）姑（千三郎）が、ヒステリックに様々な用を言い付けるのも当今ありそうで怖い。沢山は覚えられない、と書き物にして貰い、それ以外はしない約定を取り付けた婿の抵抗は、小袖を流してしまう事。約定に無いと拾わずに居れば、慌てる嫁は手を出して川に落ち流される。何卒娘を助けてと哀願する姑の魂胆は、全てを不問にするとは言い条先刻承知の筈の婿なのだが……。千三郎の因業な姑が中々。（31分）

「寝音曲」　シテ太郎冠者・千作、アド主・千吉、先の宝生会同曲はアド千五郎、仕える主が違えば当然、と言えば当然だろうが印象は随分異なるもの、そこが千作の名手たる所以であろう。千五郎は盃が空くや突っ掛かる様に性急な謡の催促をしたが、千吉は割合おっとり構えての催促で、其かあらぬか「小原木」も「放下僧」も謡に艶があり、小舞も楽しそうに思えた。（18分・7月20日・茂山千作・千五郎の狂言を観る会）

二井栄逸師能画集
**2001年能画カレンダー**
◉予約特価　1部　1800円　（郵送の場合送料とも1部　2200円）（2部以上の場合送料は一率600円）
◉予約申込み締切り　11月25日　ハガキで部数記入のうえ、当社へ予約申込み下さい。価格は前年と同じ。
能楽の友社（詳細次号）

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

〔9月〕
24日(日)　和泉流狂言大会　（無料）
〔10月〕
1日(日)　名古屋皐楽会秋季大会　（無料）（番組①面）
8日(日)　秋の邦謡会　（無料）（番組①面）
15日(日)　松謡会秋の会　（無料）（番組①面）
21日(土)　第12回清華能　（有料）（番組②面）
22日(日)　三交会大会　（無料）（番組②面）
29日(日)　武田謡楽会秋季大会　（無料）（番組②面）

### ◆熱田神宮能楽殿◆

〔9月〕
30日(土)　第1回橘諷会大会　（無料）（番組③面）
〔10月〕
7日(土)　猫恵会35周年記念大会　（無料）（番組③面）
9日(祝)　名古屋正花会　（無料）（番組③面）
14日(土)　なのり座公演　（無料）（番組③面）
22日(日)　鳳鳴会大会　（無料）（番組③面）
29日(日)　楽謡会、葵会、雅風会、錦興会合同謡曲大会　（無料）（番組④面）

## 清華能

**2月10日**

### 能「卒都婆小町」「海士」

小鼓方・福井啓次郎師と幸友会主催による「清華能」は、十世福井良久師の三回忌にあたり、きたる十月二十一日(土)名古屋能楽堂で追善能を開催する。

能組は、囃子「翁」半能「海士」（シテ浅見直州）能「卒都婆小町」（シテ野村四郎）狂言「悪太郎」一調「駒之段」「鐘之段」「木賊」素囃子「盤渉楽」など。（番組②面）

入場料　前売券四千五百円、当日券五千円、取扱所＝金剛能楽堂☎075・221・3045、広田後援会☎075・781・1885、075・781・3421

## 忠三郎狂言会

### 4都市で公演

大蔵流狂言・茂山忠三郎師主宰の「忠三郎狂言会」は十月四日・福岡・大濠公園能楽堂、同十八日東京・国立能楽堂、同二十七日大阪・大槻能楽堂、十一月二十一日京都・観世会館の四会場で開催される。

演目は人気曲「萩大名」（茂山忠三郎、茂山良暢、茂山千五郎）「口真似」（茂山良暢、茂山正邦、善竹忠亮）「素袍落」（茂山忠三郎、茂山千作、茂山千之丞）

入場料＝S六千円、A五千円、B四千五百円（当日引換）当日券五千円。

申込み＝忠三郎狂言会事務局☎075・231・0851

## 広田後援会能

**10月1日　金剛能楽堂**

広田後援会能は十月一日（日）金剛能楽堂で第九十五回後援能を開催。

舞囃子「融」（広田陸一）
狂言「清水」（茂山千三郎、茂山童司）
能「花筐」（シテ広田幸稔、子方弘田美穂、ツレ豊嶋晃嗣、ワキ植田隆之亮、ワキツレ森本幸治）

## 関西観世花の会

**9月30日**

### 湊川神社神能殿で

女流能楽師の横のつながりによる「関西観世花の会」はきたる九月三十日(土)神戸・湊川神社神能殿で第四回公演を開催する。

能組は、舞囃子「養老」水波ノ伝（藤井千鶴子）「弱法師」盲目ノ舞（佐伯紀久子）「須磨源氏」（池内頼子）能「桜川」（シテ森寿子、ワキ江崎金治郎）ほか独吟二番、仕舞十一番。中部からは、近藤幸江、前野郁子の両師が出演する、午後一時始、全自由席六千円。

## 二井会日本画展

**津・県立美術館で**

能画家二井栄逸師の個展と同氏が指導している名古屋・毎日文化センター水墨画教室、四日市・二井会日本画グループ、松阪・サンパーク水墨画教室、松阪・白潮会殿町教室の会員作品展「二井会日本画展」が去る九月十三日から十七日まで津市大谷町の三重県立美術館県民ギャラリーで開催された。二井栄逸師は「羽衣」「二人静」「松浦佐用姫」「鞍馬天狗」「草紙洗小町」「建礼門院」「能立樋」「葛城」「小面」「孫次郎」「花」などの作品が出品された。

伊勢の伝統の能楽まつり

## 第3回継承能

**2月10日**

伊勢の伝統の能楽を継承する会（菊川新司会長、事務局長土屋喜八郎氏）は、来る十月二十一日(土)伊勢市生涯学習センターで「第三回伊勢の伝統能楽まつり」を開催する。

演目は、仕舞（一色能）、舞囃子（通り能）「船弁慶」、狂言（馬瀬狂言）「瓜盗人」
能（一色能）「敦盛」（シテ石原慎一）狂言（馬瀬狂言）「止動方角」
能（通り能）「結城」（シテ北林康弘）、午後一時始。御来場歓迎。
連絡先＝事務局電話〇五九六・二二・一七二〇

## 名古屋能楽堂演能案内

### 名古屋皐楽会秋季大会

十月一日（日）午前十一時始　名古屋能楽堂

番外　弱法師　観世喜正
舞囃子　藤井敦子
素謡　花筐　加藤美登利　遠藤とめ子
若山弥栄子
柴田正春　竹村武
独吟　通盛　雲林院　梅村悦子
舞囃子　遊行柳　深見一枝　深見しげ　野田道子　賀茂　若山弥栄子
素謡　花月　田中英郎　観世喜正
能　松風　飯冨雅介　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
見留　間　野村小三郎
後見　観世喜正　観世喜之　地謡　小島英明　外山圭一　加藤保彦　高橋瞭一　佐久間二郎　駒瀬直也　五木田三郎　中所宜夫
素謡　阿漕　山田延恒　駒瀬直也　矢橋浩吉　諸隈良吉　観世喜之
素謡　恋重荷
仕舞　網ノ段　梅村悦子　竹村武　天鼓　藤井敦子
松虫
素謡　玄象　小林喜久　中所宜夫　岩井比佐　五木田三郎
能　猩々　奈倉早苗　高安勝久　笠鉱一　後藤孝一郎　助川龍夫　鹿取希世
後見　五木田三郎　観世喜之　地謡　坂真太郎　外山圭一　加藤保彦　高橋瞭一　中所宜夫　小林喜久　観世喜正　駒瀬直也
番外仕舞　実盛　観世喜之
附祝言

（終了五時半頃）

〔御来場歓迎〕　主催　名古屋観世喜之会
名古屋市南区元塩町一ノ一ノ一七（加藤保彦方）
連絡先　電話〇五二（六一一）三六五九

### 秋の邦謡会

十月八日（日）午前九時半始　名古屋能楽堂

番外素謡　通小町　今沢清一　沢美和　須部政一
舞囃子　清経　石原明子　高橋和成　市田純一
素謡　西行桜　冨士太鼓　森幹子　竹内英雄
舞囃子　敦盛　箕浦美智代　種村とし江　佐藤英生　堀みどり
素謡　遊行柳　竹内寛子　三口謙介
独吟　近江八景　勧進帳　深川寿美子
仕舞　融　南原彩稀子　梅
卒都婆小町　半田智子　木村ひで　箕浦美智代　高橋禧子　佐藤滝子
素謡　大原御幸　法印　局内　丹羽久子　牧野あい子
舞囃子　弱法師　百日之舞　西川喜代子　柏崎二木暉子
素謡　鸚鵡小町　高木町子　半田智子
仕舞　遊行柳　牧野あい子　芭蕉　加藤井知子
求塚　丹羽久子
舞囃子　巻絹　三浦百合子　野守　徳田文代
素謡　砧　南原彩稀子　飯島美津代　溝口乙子
番外　天鼓　梅田邦久　河村真之介　半田智子　助川龍夫　鹿取希世
舞囃子　天鼓　バンシキ
附祝言

（終了五時三十分）

〔御来場歓迎〕　主催　邦謡会　梅田邦久

### 故久田秀雄師十七回忌追善

### 松謡会秋の会

十月十五日（日）午前十時始　名古屋能楽堂

素謡　田村　（尾張旭）
菊蕊童　（朝日）　小松甲子夫　太田文子
花月　（都）　佐藤定子　坂下健一　大池智声　川井久仁子　安立太一　大山和久　都丸昭子　武山実枝子
連吟　賀茂
素謡　葛城
通小町　巽陽子　久田三津子　橋本鏡子
弱法師　前野郁子　大島貞子　河合重雄　藤田良子
花筐
仕舞　山姥　伊豆正治　立石良衛　山田慰子
盛久
仕舞　高砂　岡村いつ子　田村　立石良衛　山田慰子
熊野　宮里園子　羽衣　中島康子
仕舞　羽衣　木村照子　桜川　塚本澄子
紅葉狩　近藤文枝
仕舞　屋島　鈴木武　猩々　伊藤一枝　羽衣　伊藤克
独吟　老松　立石良衛　浜本きく子
舞囃子　吉野夫人　胡蝶　武山実枝子　河村真之介　柳原冨司忠　助川龍夫　鹿取希世
江口　大島貞子　河村真之介　柳原冨司忠　助川龍夫　鹿取希世
籠　松山晃之　河村真之介　柳原冨司忠　助川龍夫　鹿取希世
融　橋本鏡子　河村真之介　柳原冨司忠　助川龍夫　鹿取希世
番外　追加　舞囃子　天鼓　盤渉　松山幸親　河村真之介　柳原冨司忠　助川龍夫　鹿取希世

（終了予定五時半頃）

〔御来場歓迎〕　主催　松謡会　松山幸親

# 戦後名古屋能楽史 ⑬
## 〔第六章〕二年目に入った松坂屋ホール特設舞台（昭和二十七年）

竹尾　邦太郎

はや戦後七度目の正月を迎える。世相はようやく安定の兆が見えてきたようである。昭和二十七年度も名古屋能楽会（名古屋能楽師協会・名古屋市教育委員会）定式能は年六回、六回分番組末尾には能楽堂建設期成委員会名で「名古屋能楽堂建設にご協力願ひます」とあり、本格舞台への熱い思いが伝わる。第一回定式能は一月十九日、「東北」武田太加志、「福ノ神」井上新三郎、「舟弁慶・前後ノ替」観世喜之、である。この月、雑誌『宝生』が江島伊兵衛編集で復刊される。

二月十七日、前年秋に発会式を行った名古屋観世会の発会・定式能が行われて、当地観世会定式能の初回は以後二月に定着する。さて、記念すべき発会の番組は、冒頭に次の挨拶を載せる。「拝啓益々御清栄大慶に存じ上げます。今回予而宿望して居りました名古屋観世会を結成し特に宗家観世元正先生を会長に仰ぎ其指導のもとに観世流の発展会員の親睦を計る事と致しました就てはその最初の企として定式能及素謡会を催し順次各種の催しに及ぼしたいと念願致して居ります。本年度は従来より当地に最も関係の深い方々を招聘し左記番組の通り開催する事に致しました何卒御知友御誘ひ合わされ本会のため御賛同を賜ります様御願申上ます。昭和二十七年一月　名古屋観世会」　番組は「神歌」林愿蔵・国枝照清、「高砂」観世元正、「末広」井上新三郎、「千手・郢曲ノ舞」橋岡久太郎・山本博之、「鞍馬天狗」大槻十三、三役は全て能楽協会名古屋支部の会員である。

この月、現在も上演されれば話題となる三島由紀夫の近代能楽集「卒都婆小町」と、今は大蔵流茂山千五郎家の現行曲となっている飯沢匡の新作狂言「濯ぎ川」が文学座アトリエ公演で初演される。三月十六日、常に当地能楽界をリードする田鍋惣太郎の名古屋能楽鑑賞会の第十五回名匠鑑賞能。昨春に続く宝生大会は宗家以外の来演で「小袖曽我」宝生英雄・野口禄久、「杜若」野口兼資、「寝音曲」井上新三郎、「景清」宝生九郎。番組初めに大阪より辰巳孝・清、金沢より佐野安彦・飯島佐六の来演を言い、「なお咸陽宮の一調は重習にて此際是非お聞き願います」とあるのが如何にも囃子方重鎮の催能、小鼓田鍋惣太郎・謡野口兼資である。三月二十一日は春の九皐会能楽大会、斯会では一般に何々大会と付くと素人会を指すことが多いがこれは玄人会。装束展観、観世喜之・野村広二の対談、着付実演のあと素謡「千手」増田一雄・国枝照清、「橋弁慶」梅若万三郎・梅若万紀夫（子方）、「伯母ケ酒」佐藤卯三郎、「葵上・梓ノ出」観世喜之、前年秋と同様に能楽の啓蒙普及活動に積極的な観世喜之の姿勢である。三月二十三日、第二回定式能は金剛会、「巻組」豊嶋弥左衛門、「歌争」歌村彦四郎、「望月」金剛巌。三月二十九日、文化財保護委員会は無形文化財として能を含む芸能十一件、工芸技術三十六件を初めて認定し、特別史跡及び名勝には名古屋城跡が認められる。

この月、二〇〇〇年九月現在で五八二号を数える『能楽タイムズ』紙が丸岡大二編集の許、能楽書林より発刊される。

四月に入ると小学校から大学まで入学期を迎えるが、東京芸術大学に能楽科が新設され、法政大学では野上豊一郎記念能楽研究所が開設される。四月四日、日本芸術院は第三部芸能（第一部美術・第二部文芸）三名の補充を急いでいたが観世華雪（68）に決定する。余談だが四月九日、日航機木星号が大島三原山に墜落、乗員乗客三十七名全員死亡の惨事があり、翌十日にはその放送時間帯に銭湯の女風呂を空にしたというNHK「君の名は」が始まる。四月二十日、第二回観世会は素謡会で「忠度」観世喜之、「松風」藤波順三郎、「天鼓」片山九郎右衛門、である。この月、二十四日には能「安宅・勧進報」を下敷にした黒澤明監督の「虎の尾を踏む男達」が当地では名宝劇場・大宝劇場・堀川東宝で一斉に封切られる。題名は勿論「安宅」のキリへ虎の尾を踏み毒蛇の口を逃れたる心地して陸奥の国へぞ下りける、から採る。この作品は撮影中に敗戦になり、一旦中断の後に戦後完成したがGHQの検閲で公開禁止となっていたもので、その後の「羅生門」より遅れて日の目を見るという珍しい経路を辿る。因に弁慶大河内伝次郎・富樫藤田進・強力榎本健一（エノケン）・義経岩井半四郎である。四日後の四月二十八日、対日講和条約の発効により「午後十時三十分をもって過去七カ年にわたる占領管理から解かれて自主権を回復、名実ともに独立国としての輝かしい再発足の日を迎えることとなった」と新聞は報じ、四十八ヶ国と国交再開へ動き出すが、一方ではまた「講和条約発効にともない、GHQの勧告で梅若の催に参加していた三役が、再び公演を拒み、梅若の公演はほとんど不可能になる」事態も惹起する（京都観世会館『能』『近代能楽百年史』）。

五月十日、小鼓方大倉流宗家大倉正二が長十郎を襲名。十六日は第三回定式能で淡交会、「桜川」橋岡久馬、「鏡男」佐藤卯三郎、「鵜飼」橋岡久太郎である。二十三日、NHK電波研究所から狂言「棒しばり」野村万之丞が初めてテレビ試験放送される（『能楽思潮』40・41合併号）。この月、三十一日は能楽協会名古屋支部能が発会の初回（昭和二十五年五月二十八日）から通算の第五回を迎え、「杜若」杉村竹翠、「膏薬煉」河村丘造、「船弁慶・白波ノ伝・船中語・船唄」大塚一二・高安滋郎・歌村彦四郎、「船弁慶」はシテ・ワキ・アイにそれぞれ小書を付けて金剛流の充実ぶりが窺える。

六月に入ると八日は鬼頭為太郎（一八七七―一九三六）十七回忌追善能。鬼頭家は太鼓方観世流の名家で斯界に重きを成して今日に至る。番組挨拶に長生会（鬼頭家の結社）の片岡孫忠は「此度特に秘曲娘捨を大槻十三師に御相手を頂き、一調を八郎師（為太郎嫡男）が勤め申する事に相成り一門此の上無き幸と存ずる次第であります」と言う。シテ方・太鼓方両観世流宗家（元正・元信）の他に大鼓亀井俊雄、太鼓小寺俊三の来演もあり賑やか、「羽衣」片岡怜子、「当麻」観世喜之、「悪太郎」井上新三郎、「砧」橋岡久太郎、「土蜘蛛」観世元正、能四番の大能である。六月十五日、第四回定式能は宝生会、「弱法師」宝生九郎、「雷」河村丘造、「殺生石」辰巳孝。六月二十二日は金剛会中部支部の第四回（初回は昭和二十五年十一月二十六日）定式能、「羽衣・盤渉」金剛巌、「朝比奈」井上祐一、「鞍馬天狗・白頭」豊嶋弥左衛門である。この月二十七日、仕舞のテレヴィ初放送が午後三時半に砧村放送技術研究所から流されて成功したという。「屋島」浅見重信（四分）、「玉ノ段」木原康次（六分）、「船弁慶」宗家（五分）、で何れも裸着用。この試験放送のあと「能とテレヴィの問題」について演者と放送関係者が集まって座談会が持たれるが、以下は宗家の質問の一部である。「テレビは黒白が建前ですか」「将来はカラーと黒白とどっちへいくんでしょうか」「テレビをフィルムにとって放送することもありますか？」「演出というか、カメラの把え方というか、大変むずかしい専門的な技術がないと完全には行かないでしょうね」（昭和二十七年『観世』九月号より抜粋）。宗家のマス・メディアへの関心の高さが窺えるが、TVの裏記にテレヴィとテレビの混在があり、用語一つを取り上げても今昔の感一入である。なお右の座談会に出席したNHK理事の南江治郎（能に造詣が深く、昭和二十九年檜書店刊『能の展開』の著書があり、宗家結婚には媒酌人を勤める）は同座談会で「この間ここから放送した狂言（野村万蔵父子）の棒しばりと比べて今日のは非常によかったと思います」と発言するが、先のNHK電波研究所は砧村放送技術研究所の別称なのかどうか……。（この項つづく）

---

## 十世　福井良久　三回忌追善
## 第十二回　濤華能
―幸友会別会鑑賞能―

十月二十一日（土）午後一時半始
名古屋能楽堂

**半能　海士**
赤頭三段之舞　高安勝久　杉江元　後見　上野雄三　永島忠侈　地謡　飯冨雅介　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　鹿取希世　加賀敏彦　高橋暸一　清沢一政　山本章弘　鵜沢郁雄　浅井文義　山本順之　上野朝義

**一調　駒之段**　長田驍　福井聡介
**鐘之段**　山本順之　筧鉱一

**素囃子　盤渉楽**　河村眞之介　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　竹市学

**一調　木賊**　衣斐正宜　幸清次郎

**狂言　悪太郎**　シテ野村又三郎　伯父井上祐一　僧佐藤友彦　後見　野村小三郎

**能　卒都婆小町**
一度之次第　野村四郎　殿田謙吉　大日向寛　後見　上野雄三　浅見眞州　地謡　亀井忠雄　福井良治　藤田六郎兵衛　野村昌司　山本章弘　鵜沢博通　山本順之　郁雄忠侈　上野朝義　浅井文義　山本順之　永島忠侈

主催　幸福会　福井友会　福井啓次郎　福井良治

**素囃子　善知鳥**　神原登美子　松原克己　服部千加子　後藤阿紀　鈴木多美子　原小夜　市川武彦　山内満智子　後藤弘次郎　山口幸

**富士太鼓**

**隅田川**

**舞囃子　野宮**　合掌留　戸松花枝

**仕舞　菊慈童**　立松美貫子
**笹之段**　梅田弘子
**放下僧**　原田千恵子
**玉鬘**　山内満智子
**千手**　森清子
**融**　原小夜

**仕舞　箙**　早川功一　小松隆之　雲雀山　雲林院　松原克己　加納博
**井筒**

**舞囃子　賀茂**　林賢一
**定家**　瀬戸勝治

**仕舞　西王母**　服部千加子　神原登美子
**松風**
**班女**　後藤阿紀　後藤弘次郎
**羽衣**　後藤阿紀
**江口**　山口幸

前売入場券　特別席（正面）一万五千円　指定席（脇正面・中正面の一部）一万三千円　自由席（脇正面・正面地裏）一万円
当日券　自由席　一万二千円（特別・指定席残券あれば二千円増）
取扱い　プレイガイド（松坂屋・三越・名鉄・中日・芸文）各楽師宅
お申込み　名古屋市中区大須三丁目2番40号　福井啓次郎
電話（〇五二）二四一―三一四六

---

## 三交会大会

十月二十二日（日）午前十時始
名古屋能楽堂

**能　葵上**
瀬戸洋子　光松見知子　杉江元　椙元正樹　間佐藤友彦　筧鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　大野誠

**素囃子　安宅**
子方　森清子　同山　加納博　同山　小谷隆之　早川功一　林賢一

**能　紅葉狩**
渡辺幹子　中村立子　秋田恵美子　杉江元　高安勝久　椙元正樹　間佐藤融　井上靖浩　河村真之介　後藤嘉津幸　鬼頭好信　鹿取希世

**狂言　盆山**　佐藤友彦　井上靖浩　後見　佐藤融

**番外仕舞　東方朔**　久田三津子　橋岡慈観

**附祝言**

（終了五時半頃）

主催　三交会　久田三津子

〔御来場歓迎〕

---

## 武田謡楽会秋季大会

十月二十九日（日）午前九時十分始
名古屋能楽堂

**舞囃子　唐船**　武田大尚

**素囃子　井筒**　川辺まさ子　川原林澄
**野宮**　村主栗安部豊彦

**仕舞　胡蝶**　奥田悦子　桑原寿子　松風　太田ふみ子
**玉之段**

**舞囃子　高砂**　八段之舞　大塚幸二　羽衣　和合之舞　小林直子
**山姥**　立廻　田中蔦子

**素囃子　三井寺**　久田勘吉郎　高橋爽一郎　武田欣司

**舞囃子　放下僧**　カッコ入　辻岡勝洋　実盛　武田大志　高木宏子
**藤戸**　北田尚子

**素囃子　卒都婆小町**　今村香　吉井順一　吉井基晴

**舞囃子　弱法師**　盲目之舞　松岡満寿子　班女　市川敦子
**通小町**　雨夜之伝　高橋千紗　松虫　五段　渡辺一彦

**素囃子　砧**　川村ちゑ子　山路敬一郎　吉川三郎

**仕舞　雨之段**　松陰真澄　柏崎道行　小林冨美代　鉄輪　佐野最子
**舞囃子　百万**　法楽之舞　小瀬古喜代子　熊野　村雨留　上野典子
**紅葉狩**　急之舞　井田順子

**素囃子　花筐**　石橋恵子　植井みつ子　松山栄
**仕舞　敦盛**　キリ　小瀬古勝巳　林信吾
**笠之段**　鈴木利治　箙　斉藤忠佳
**女郎花**　長谷川邦彦

**素囃子　鵜飼**　前山鎮男　内田勝美
**番外仕舞　岩船**　武田邦弘　小瀬古勝巳

（終了予定六時）

主催　武田謡楽会　武田邦弘

〔御来場歓迎〕

## 熱田神宮能楽殿演能案内

### 第一回　橘諷会大会

九月三十日（土）午前九時始
熱田神宮能楽殿

番外仕舞　難波　立花香寿子
嵐山　井戸　良祐
素謡　天鼓　服部志ま子　梅若　盛彦
俊寛（ナリヤス）　井戸　良祐
東北　橋本　雅一
羽衣　岡田　猛夫　梅若　善久
原　喜美子　井戸　和男
倉田寿和子　池内幸三郎
舞囃子　杜若　政木美貴子　清経　社本千寿子
船弁慶　武原　美恵
仕舞　半蔀（クセ）　大山　範子　花筐（狂）　前川　益澄
邯鄲　鬼頭みき江　通小町　鈴木　正子
菊慈童　米山　佳子
素謡　杜若　河尻千鶴子　梅若　基徳
仕舞　鵜之段　日下佐起子
素謡　熊野　塚田　澄子
須賀　黎子　近藤　愛子
遊行柳　井上　種子　立花香寿子
梅若　善高
能　鐵輪（早鼓）　鈴木　八寿
高安　勝久　筧　鉱一
椙本　正樹　福井啓次郎　助川　龍夫
間　井上　祐一　鹿取　希世

素謡　実盛　熊谷　綯子　梅若　修一
弱法師　北田麻綺子　池内光之助
梅若　盛彦
舞囃子　砧（後）　河合　敦子　三輪　菊池　敏子
独吟　小鍛冶（クセ）　間宮　芳子
素謡　野宮　川口　和恵　岡田　晃一
舞囃子　班女　岩田　宏子　高砂　中村　明美
松風　浜島十一子
番外舞囃子　乱　梅若　盛彦

〔御来場歓迎〕
橘諷会
梅若盛彦
（終了予定午後六時頃）

## NHK放送予定

（平成12年9月～10月）

■NHK・FM能楽鑑賞
（日曜日午前8時～9時）

〔9月〕
24日　「歌占」「雪」
金剛流　種田道雄ほか

〔10月〕
1日　「砧」観世流　坂井音重ほか
8日　「木賊」宝生流　近藤乾之助ほか
15日　番囃子「融」
喜多流　友枝昭世ほか
22日　「放下僧」金春流　桜間金記ほか
29日　「附子」和泉流　三宅右近ほか
「横座」大蔵流　茂山千之丞ほか

■NHK教育テレビ
10月3日(水)　午前5時25分～5時55分
日本の伝統芸能　やさしい能・狂言鑑賞入門
第5回狂言の表現「末広」「三番三」
講師　山本東次郎（再放送）

## 猶恵会35周年記念番組

十月七日（土）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡　吉野天人　青山　順子　岡田　晃一
熊野　橋本　雅一
松風　河合紀代美　池内光之助
熊澤恵美子　井戸　良祐
仕舞　花月（キリ）　神谷　千津　井戸　和男
野宮　竹村　鶴代
素謡　砧　谷　節子
梅若　善久
望月　外山　聖子　梅若　善高
子方立花香寿子
ツレ梅若　基徳
杜若　熊谷　リ江　梅若　修一
谷　節子　梅若　盛彦
能　井筒（日下すみ子）　高安　勝久　筧　鉱一
福井啓次郎　鹿取　希世
間　井上　祐一
後見　梅若　盛彦　井戸　良祐
梅若　盛義　橋本　雅一　岡田　晃一
岡田　朗詠　地謡　梅若　善久　梅若　修一
梅若　善高
梅若　基徳　井戸　和男
舞囃子　巻絹　河合紀代美　河村眞之介　助川　龍夫
後藤孝一郎　竹市　学
玄象　鈴木　ふく　河村眞之介　助川　龍夫
後藤孝一郎　竹市　学
番外舞囃子　富士太鼓（現之楽）　熊澤恵美子　河村眞之介
後藤孝一郎　竹市　学

〔御来聴歓迎〕
附祝言
主催　猶恵会
熊澤恵美子

## 名古屋正花会番組

十月九日（祝）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡　神歌　伊藤　秀子　山本　博通
舞囃子　草子洗小町　富永　芳栄　融（五段替ノ形）　杉野　伸江
野宮　伊藤健一郎
仕舞　紅葉狩　榊原　和美　蝉丸　川中　陽平
舞囃子　桜川　真野　健　胡蝶　秦野　淳代
放下僧　湯浅　知子
素謡　井筒　大下　敏恵　西野　文枝
仕舞　楊貴妃　青柳イツエ　松虫　奥村　泰広
稲葉　正信
能　経正　福王　和幸　山本　哲也
福井啓次郎　藤田六郎兵衛
連吟　吉野天人　柳生　サキ子
中井　典永
岡本恵美子
寺田シゲ子
安井　敦子
中戸　千種
采女

舞囃子　白楽天　川久保彰礼　通小町（雨夜之伝）　脇田喜美子
天鼓　寺田　雅美
仕舞　玄象　清水　雅音　春栄　清水　和音
舞囃子　海士（五段替之型）　中村　侃子　清経　細川　広子
邯鄲　中川　芳子
素謡　卒都婆小町　山野　初子　内海　興光
山本　博通
仕舞　雲林院　山中　節子　玉鬘　川瀬とよ子
玉之段　足立奈々子　鉄輪　豊住　雅子
舞囃子　半蔀　竹内美紀子　三輪　水野　恵子
源氏供養　駒形賀津子
独吟　駒之段　原田　一平
葵上　神野勝之助
舞囃子　高砂（丸岡佐智子）　羽衣（和合之舞）　笹　マツ子
須磨源氏　池内　博彦
番外仕舞　屋島（五段）　大槻　文蔵
杜若（キリ）　山本　勝一
番外舞囃子　葛城（大和舞）　山本　博通

附祝言
（終了予定五時半頃）

〔御来場歓迎〕
主催　名古屋市民芸術文化祭参加
指導　名古屋正花会
共催　名古屋観衛会
指導　山本博通
後援　正花会

## 名古屋市民芸術文化祭参加
### 狂言　なのり座公演

十月十四日（土）午後二時半始
熱田神宮能楽殿

鎌腹（かまばら）　野村小三郎　佐藤　融
井上　靖浩
後見　野村又三郎
小舞　名取川（なとりがわ）　佐藤　融
地謡　今枝　靖雄
佐藤　友彦
今枝　郁雄
三人片輪（さんにんかたわ）　井上　靖浩　野村又三郎
佐藤　融
野村小三郎
後見　井上　祐一

■入場料（前売）
S席（指定）正面三千五百円
A席（自由）脇正面二千五百円
学生席（自由）脇正面二階二千円
（当日五百円増）
■チケット取扱い　名古屋女子大学林研究室（☎052・852・9436）
■お問い合わせ　井上靖浩・Eメール（inoue@nagoya-wu.ac.jp）
佐藤　融方（☎052・911・8784）
野村小三郎方（☎052・222・5225）

## 鳳鳴会大会

十月二十二日（日）午前十時半始
熱田神宮能楽殿

番外素謡　経正　武田　志房　武田　友志

素謡　通小町　奥田　昌人
兵藤　善茂　楳木　映夫
大原御幸　法皇　小川　明宏
内侍局　三村　恵子
郷　三枝子
村上　郁子　大坪　重遠
景清（トモ）　松木　千俊
佐藤　正弘
矢野　義章　松井　弘
木賊　武田　友志
三川　紘平　武田　志房
立衆　佐川　勝貫
池田　祖父江修一
義仲　武田　宗典
曽我兄弟　笹山　忠
木曽

能　咸陽宮（花陽夫人）　福王　和幸
女　武田　文志
郷　三枝子
女　三村　恵子
浅井　一元
紫舞陽　広松　和夫
間　井上　祐一
後見　松木　千俊　河村総一郎　助川　龍夫
武田　志房　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
中川　雅章　地謡　佐川　勝貫
武田　宗典
松山　幸親
高橋　瞭一
仕舞　雨月（中入前）　長谷川京子
鞍馬天狗　矢野　義章
武田　友志
吉田　明
飯冨　雅介　河村総一郎
柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
間　井上　祐一
後見　小島　一英　佐川　勝貫
武田　志房　須部　甫　清沢　一政
武田　宗和　宗典　岡　久広
藤井　徳三
松木　千俊
地謡
番外仕舞　賀茂　武田　友志
隅田川　武田　志房
谷行　武田　文志
囃子　高砂　木本　仁之　河村総一郎　助川　龍夫
柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
松風（岐之舞）　山崎佐東子　河村総一郎
柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
胡蝶　佐藤　正弘　河村総一郎　助川　龍夫
柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
玄象　大坪　重遠　河村総一郎　助川　龍夫
柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

附祝言
（終了予定午後五時五十分）

〔入場無料〕
〔御来場歓迎〕
主催　鳳鳴会
武田　志房

幹事　豊明市間米町敷田一二三五―一〇一　松井　弘
電話〇五六二―九二―〇三三五

## 熱田神宮能楽殿

### 楽謡会・葵会 雅諷会・錦興会 合同謡曲大会

十月二十九日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡
老松　若杉春江
巴　野々部信男
敦盛　井上義久（葵会）
井筒　西よしえ　上田千代（楽謡会）
楊貴妃　伊奈志づ江　加藤テル子（雅諷会）
野宮　鈴木公子　三谷俊幸（楽謡会）
半部　松尾智子　瀬崎和子（葵会）
　　大西智津子　鷺坂信子（楽謡会）
　　野村正子　冨田禎子（雅諷会）

独吟
景清　加野昭二郎（楽謡会）

素謡
龍田　山田仲子　若杉春江（葵会）
三輪　河津清子　犬飼百合子（楽謡会）
松虫　高橋正秋　森勝巳（葵会）
遊行柳　大西鐘八郎　梅村平義（楽謡会）
通小町　鶴見理太郎　上田生夫　笠原善隆（雅諷会）
巻絹　水野雅子　山崎ふみ　豊島伊奈子（錦興会）
鵜飼　伊藤昭映　飯田紘三　中原正雄（葵会）
猩々　恒川志やう　井本都子（楽謡会）

（終了予定　午後五時頃）

共催
楽謡会
葵会
雅諷会
錦興会

〔御来場歓迎〕
（素謡　省略箇所アリ）

連絡先
名古屋市守山区野萩町四―五八
梅村平義
電話　〇五二―七九二―三六二七
刈谷市元町四―一六二
藤田政信
電話　〇五六六―二一―二四八〇

## 日本能面巧芸会

### 第19回 新作能面展

日本能面巧芸会（林龍雲会長）は、毎年愛知県および名古屋市教育委員会の後援を得て「能面展」を開催しているが、きたる十月十七日から二十二日まで六日間、名古屋市中区栄二丁目、広小路通りの電気文化会館五階・東ギャラリーで「第十九回新作能面展」を開催する。

出展は、巧芸会の講師が指導している各文化センターの能面教室の会員の作品をふくめ、初心者から十数年の作歴のものまで、能面六十数点が出展される。

開催期間は午前十時より午後六時まで展観されるが、最終日の二十二日は午後四時まで、入場無料。

日本能面巧芸会＝名古屋市東区泉一丁目15―23、チサンマンション栄リバーパーク・801号、TEL052・953・1092

## ◆盛夏の舞台から◆

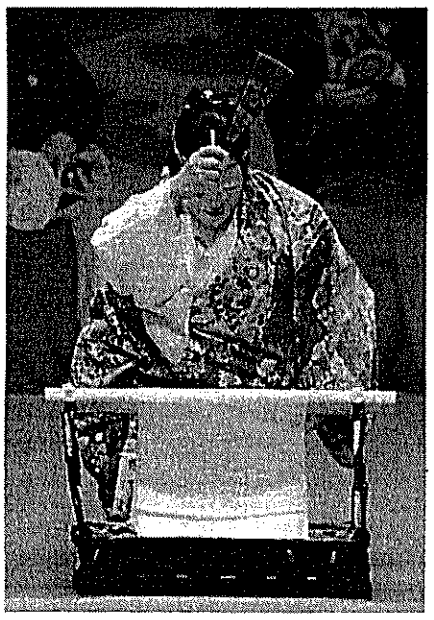
### 「第二十八回名古屋能楽堂定例公演」と「青陽会」「第十六回衣斐正宜後援会能」

竹尾邦太郎

「鐘の音」　息子の元服には黄金造りの太刀を、と金の値を問わせに鎌倉へシテ太郎冠者・靖浩を遣る主・祐一は息子の成長が嬉しく、太郎冠者も主の喜色に鎌倉へ行ける浮かれ気分、この雰囲気は親子競演ならこその賜物。そして、両者のこの心弾む様がそもそもの粗忽の発端で、太郎冠者の頭の中はすでに寺巡りで一杯、何の疑いもなく鐘の音を聞き歩く無邪気、靖浩の役に嵌る。ただ極楽寺の鐘はもっとたっぷりの余韻が欲しいし、主の機嫌を直す謡に味を出すのはこれからの課題であろう。（27分）

「砧」　喜多流は前場にワキが出ない。先ずツレ侍女夕霧（郷）が次第で登場、常座で鏡板に向きへ旅の衣の遥々と旅の衣の遥々と芦屋の里に急がん、の次第、地取の間に直り、名宜から主・芦屋某の意を受けて西下のことを言い、道行きとなる。前場の雰囲気をつくる大役のツレ郷、少々硬いが慎重に勤めて舞台を締める。

シテ芦屋某ノ妻・驍、面深井・襟白二・露芝文白摺箔着付・秋野茅屋文無紅段唐織、心尽しの秋風に誘われるように三ノ松に出ると



「砧」（杉浦賢二氏撮影）

へ涙の雨の、とシオル。夕霧に対面すれば、「珍しながら怨めしや」の声調に思いが迸り、夕霧との掛合はいわゆる立ち話になる。観世流のように「人までもあるまじ」と部屋へ招じる態に舞台へ入り、下居しての掛合とは趣を異にする。へ三年の秋の夢ならば、の返シに運び出し、心中の思いを地に謡わせるだけに心は内向し、砧の音に唐土の故事も想起されて更に募る思いである。

砧ノ段は、直前に物着となる観世流と異なり、へ衣に落つる松の声、の返シに物着となり、その間に砧の作り物が正先に出され、イロエもへよも問はじ、の後に入る。へ西より来る、と脇柱上を眺め、へ秋の風の、と幕へ見るのは風の通い路の先に夫を見る心か。砧の前に座りへ嵐の音を残すなよ。と砧を一ツ打つと、へ君が其方に吹けや風、とその音を乗せて運ぶ風の音を聴く態に左へ小首傾げるところや、へ薄き契りは、の数拍子からへ君が命は、と身体を捻って幕へ見るところなど、夫を恋着する繊細な描写。へ露涙、で砧を一ツ打つと槌に擬した扇は上げた侭、へほろほろはらはら、でゆっくり下ろしてくると、へ何れ砧の音やらん、の双シオリは思い詰めた果ての激情、これが夫の帰国無きを知ってのクドキの深刻に効く。

中入はへ（思ふ心も）弱るかな、と立ち、へ風狂したる心地して、と向きを変えると運び出して地一杯に橋懸へ入る。空しくなったシテが長い橋懸を退いてゆく凍りついた様な時空、幕入に、一分二十秒余かかる。次いでツレも入ると地謡（政允・陸ら）後列から人が出てシテの残した扇を引くが、楽屋働キはいざ知らず地謡方の手不足は後見にも及び、地方の小流の悲哀、万全の陣営で望むことは遠わないのだろうか。

さて、芦屋某ノ下人アイ友彦は立シャベリにシテの死を言い、一旦アイ座に退き背を向けて座ると、何事もなくワキ芦屋某（雅介）、唐草文段厚板着付・長袴・掛絡の姿で出、代わってアイは切戸に非ず本幕で退く。ワキは常座の名宜、法事を行うとて作物前に下居、へ無残やな、以下の哀悼はへ言葉を交はす哀れさよ、の返シにがっくりと安座、合掌するところに極まる。

後シテは出端（誠・嘉津幸・総一郎・龍夫）の出。面痩女・襟ト着付同前・浅黄大口・白綾壺折、杖をつき常座で謡い出す。邪淫の業の報いはクドキから因果の妄執に責め苛まれるところ、涙が火焔となって胸の煙の焔に咽び、恐ろしい苛責の声から逃れんとするところは、その具象表現に技の冴えをみせる。即ち、立ち昇る焔は上へ左手を指シ、その手を胸に当て煙に咽ぶと、杖を捨てて恐ろしさに後退りして尻餅を搗く様に安座、耳を掩うなど鮮やか。へ羊の歩み、の返シに立ってワキを指シ、つんのめる様な運びで迫るところや、へ君いかなれば旅枕、とワキを鋭く睨め付けてへ夜寒の衣うつつとも夢とも、と膝をついて激しく扇で床を打つところなど、合掌するワキも怖じ気をふるう程の鬼気迫る勢いである。

キリは位変わって成仏の心、へ菩薩の種となりにけり、と常座で合掌し、トメは拍子踏まず返シ句に幕の方へ向き詰メた。驍の好演は子方時代に、名人と謳われた六平太能心の薫陶を受けて刷込まれた教えが今に活きる技の切れ、見応え十分な舞台だった。（1時間42分・第二十八回定例能）

「橋弁慶」（杉浦賢二氏撮影）

「船ふな」「ふな」か「ふね」かで言い争うシテ太郎冠者・靖浩と主・祐一、太郎冠者はここぞと先例を古歌に求める。身の程を弁えず、古歌立てをして得意顔の太郎冠者に主の気も障ろうというもの。已れ下僕の分際で小癪な、の主の気持ちも分り、両者の真剣味に折角の遊山がパーとなるであろう後味も思いやられる。（13分）

「橋弁慶」　巷説の逆で牛若丸が悪さをし、懲らしめんとした弁慶もその神業にやられ、心服して主従の契りを結ぶという。

シテ弁慶・勘鹿、金入沙門帽子・襟紺・無紅厚板着付・白大口、縞水衣・小刀の威厳、トモ従者・正邦を伴い何事もなく出ると正中の名宣も物々しい。シテ・トモ問答は、化生の者の出没に他出無用との従者の諫言を一旦は聞き入れるも自尊心が許さず、打って出る気概は中入地へ夜を逞しとこそは待ち居たれ、とキッと向きを変えて早鼓で幕へゆくところ、気合充分。アイは早打・靖雄、肩衣（右肩脱ぎ）括袴・小刀・杖、常座立シャベリに化生の者のことを言い、触レのあと片幕で入ると代わって一声（誠・孝一郎・鉱一）で子方牛若丸・勘吉郎君が出る。白鉢巻・襟赤・厚板着付・白大口の裳着胴姿に白水衣を被く。へ五条の橋の橋板を、元気に踏み鳴らし、脇座で人を待ち受けるところ、直面・袈裟頭巾・半切・黒水衣（肩上ゲ）・太刀の後シテが勇躍という感じで登場する。一ノ松で颯爽と薙刀を素振りし、打ち担いで辺りを見廻し、へ手に立つ敵の、と薙刀を振り下ろすところ豪快である。へさも荒らかに、と拍子二ツ踏むシテに、へ人来るぞと、と羽織っていた水衣を被く子方、舞台に入ったシテは子方を認め、立廻は鮮やかな薙刀捌き。面前へスッと刃先を突き出すシテに、臆する気配も見せぬ子方は更に斬組の元気溌溂、シテと擦れ違いざま後ろから「柄元をはっしと」と薙刀の石突きを蹴上げるところは如何にも悪戯ッ子。互いに刃先を合わせるところも良く型は極まり、勘鹿勘吉郎親子の共演は大いに実が上がる。キリにへ薄衣被かせ、と子方の後ろへ廻ったシテが水衣を羽織らせるところは、一瞬しゅんとさせられた。（46分・8月6日・青陽会）

「羽衣」　シテ愛、へなうその衣は此方のにて候、と嬲々たる呼掛で現われる可憐な天人が惹きつける。憂愁の面泣増・月輪戴天冠・襟白赤・七宝繋文白摺箔着付・赤地秋草尉斗文縫箔腰巻の姿は少女の清純。羽衣が戻らぬと分かって悲しみに沈み、天界を懐しんでシオルのを見ればワキ白龍・元（白紺段尉斗目着付・萌黄水衣肩上ゲ・裾紺腰蓑）も心を動かされずには居られない。羽衣を返すとあって「あら嬉しやさらば此方へ賜り候へ」、と思わず進み出ようとするシテに、ワキの「暫く」が一瞬シテの気勢を殺ぎ、出る足をためらって一足退くところ、極く自然にはしたなさへの羞恥も見せて愛機細。物着の美麗な赤地桐風文長絹に舞グセも華やぎ、へ波も松風も長閑なる有様、と面使ヒも可愛げである。序ノ舞（誠・啓次郎・総一郎・龍夫）の晴れやかな気分はキリに揺曳し、浦風にたなびく羽衣を撥ネ扇二ツにみせて今は三保の松原を見下ろす高みの心、左右への面使ヒに名残惜しさも感じさせて常座、右ウケ左袖返シ留拍子、素直で爽やかな天人の舞台だった。ワキツレ正樹、地（英照・良雄ら）、主後見乾之助。（1時間11分）

「鼻山伏」　物の怪に憑かれたらしい小アド太郎・靖浩、病（やまい）鉢巻の赤に襟の赤、着付は朱無地尉斗目・長袴のモギ胴姿は上半身赤尽、それが如何にも高熱でぐったりの印象。乱暴な頭脈で「邪気邪気」とあっさり診断、祈禱するシテ山伏・祐一の自信も、白目を剥き「ポーン」と口走る太郎に狼狽、烏ノ印を結べばアド太郎兄・融にも空気伝染、二人共に「ポーンポーン」と喚き出す仕末。独り残された山伏も何やらもぞもぞと痒みを覚え、胸掻き毟るように立つと「ポーン」、此の間（ま）が上々で、三者の調和もよくとれ佳。（20分）

「乱・和合」　シテ正宜・ツレ輝和、装束は赤尽で唐織は枝垂桜文。ツレを先立てシテが出て相舞、へ月星は隈もなき、と頭ヲ取ルところでシテは型だけをする。乱は観世流のような乱レ足や流レ足は全く無く、水の上を跳ねる心に思える抜き足があるのみで上品。相舞は遠近法の錯覚か、ずれると見えてピタリ一致して踏む拍子も軽やかに美しい。二者同装でシテの唐織に若干深みがあると思えるが、舞で入り違う裡にどちらがどちらか分らなくなる程よく息の合った舞である。へ有難や、はシテ・ツレ連吟、キリは、へ酔ひに臥したる、をシテが下居でツレは安座、立つと向き合いトメ拍子を踏んだ。ワキ高風・雅介、側次に非ず眩いばかりの袷法被が如何にも富貴の身となった証、名宜も堂々と舞台を引き締めた。囃子は学・冨司忠・真之介・龍夫、地は乾之助・光夫ら、後見を英照・良雄。（40分・8月26日・第十六回衣斐正宜後援会能）

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## 創作能「高山右近」

11月18日名古屋能楽堂

名古屋市民芸術祭2000主催事業として、「創作能・高山右近」が十一月十八日(土)名古屋能楽堂で上演される。（番組②面）

この創作能は、「能本来の編成に加えて、いくつかの洋楽器を加え、天より舞い降り、未来へと旅立つ右近の霊の予感として鳴り響く」（パンフレットより）と〝創作能の新しさ〟を解説している。ローマ法王庁大使館、カトリック名古屋教区、南山大、名古屋芸大などが後援。

## 龍吟の会特別公演

### 11月7日　名手そろえ演能

笛方・藤田流宗家・藤田六郎兵衛氏主宰の「龍吟の会」は、十一月七日(火)、名古屋能楽堂で特別公演を開催する。（前号一部既報・番組②面）

能組は、尾張徳川家初代徳川義直生誕四百年を記念する一調一笛「龍田川辺」（謡・観世清和、小鼓大倉源次郎、笛藤田六郎兵衛）。この龍田川辺は、徳川家光作詞と伝えられ、能管、小鼓とも徳川美術館所蔵の由緒ある名器が使われる。

復曲能「長柄の橋」（シテ片山九郎右衛門）

能「土蜘蛛」（前シテ大槻文三、後シテ梅若六郎）

午後一時開演、入場料A席一万五千円、B席一万千円（全指定）

前売りはチケットぴあ、龍吟の会（電話052・571・6341）

## 豊田市能楽堂　演能案内

◆11月11日(土)
豊田市能楽堂定例公演（有料）
狂言「宗論」野村萬▽能「恋重荷」桜間金記（金春流）

◆11月18日(土)
殿島修二先生を偲ぶ会（無料）

◆11月19日(日)
豊田関連会社謡曲大会（無料）

◆12月9日(土)
狂言づくしの会（有料）
狂言「樋の酒」茂山千之丞「墨塗」茂山千三郎「闘罪人」茂山千作・茂山千五郎

（豊田市能楽堂☎0565・35・8200）

## 能面展と特別講演会

### 名古屋能楽堂秋の企画展

名古屋能楽堂では、恒例の「秋の能面展」として、前期・十月十四日(土)から十二月三日まで、後期十二月九日(土)から平成十三年二月四日(日)までの二期にわたり、能楽堂特別展を開催、とくに今回は、面を類型別に展示される。

また十一月十八日(土)には、芸能学会海員・曽我孝司氏による「白山信仰と能面」のテーマで、能面特別講演会が名古屋能楽堂会議室で開催される。定員百名、無料、予約ができる。（TEL052・231・0088）

中部地方では、岐阜、石川、福井の三県にまたがる白山山麓の寺社には古い能面が数多く残されており、特に美濃、加賀、越前地方に残る能面について講演される。

## 殿島修二先生を偲ぶ会開催

11月18日豊田市能楽堂

平成二年逝去された観世流準職分・故殿島修二氏は、大槻清韻会のグループとして、風韻会を主宰して多くの方々が教えをうけたが、その風韻会の有志がこのほど「殿島修二先生を偲ぶ会」を企画、きたる十一月十八日(土)豊田市能楽堂で謡曲大会が催される。

殿島先生は明治三十三年生れ、大槻十三師に師事、昭和二十三年風韻会設立、昭和三十二年から三十年余にわたり、毎日婦人文化センターで講師を担当し謡曲を指導、名古屋清韻会の設立にあたって、当時名古屋で大槻三羽鳥といわれた杉村竹翠、水藤元三諸先生と協力し、斯界の興隆に貢献、「能楽の友」紙の設立発起人の一人として尽力された。

今回の偲ぶ会は、風韻会の冨士道周明、古井佐季、渡辺節子、北原良一郎の諸氏が世話人となりすすめられた。番組は素謡「半蔀」「遊行柳」舞囃子「草子洗小町」「松風」「天鼓」「龍田」「清経」「砧」「野宮」「藤戸」「弱法師」「頼政」ほか仕舞、独吟など十二番。午前十時始。連絡先・冨士道周明氏（TEL052・801・5171）

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

〔10月〕
22日(日)　三交会大会（無料）
29日(日)　武田謡楽会秋季大会（無料）

〔11月〕
4日(土)　名古屋金春流友会（無料）
　　名古屋金春会能（有料）（番組①面）
5日(日)　郁諷会大会（無料）（番組①面）
7日(火)　龍吟の会特別公演（有料）（番組②面）
10日(金)　名古屋能楽堂定例公演（有料）（番組②面）
12日(日)　名古屋観世会定式能（有料）（番組②面）
15日(水)　双葉苑狂言鑑賞会（有料）
16日(木)　名古屋梅若六郎の会（有料）（番組②面）
18日(土)　市民芸術祭2000・創作能「高山右近」（有料）（番組②面）
19日(日)　名匠狂言会（有料）（番組③面）
25日(土)　発声学研究国際公開講座（有料）（番組③面）
26日(日)　久田観正会（無料）

### ◆熱田神宮能楽殿◆

〔10月〕
22日(日)　鳳鴫会大会（無料）
29日(日)　楽謡会、葵会、雅諷会、錦興会合同謡曲大会（無料）

〔11月〕
3日(祝)　幸友会（無料）
5日(日)　大蔵狂言会（無料）
19日(日)　宝生会定式能（有料）
25日(土)　恵美壽会（無料）
26日(日)　恵美壽会（無料）

## 名古屋能楽堂演能案内

### 名古屋金春流友会

十一月四日(土)午前九時十五分始
名古屋能楽堂

仕舞、連吟、独吟
〔御来場歓迎〕

### 金春流能

十一月四日(土)午後二時始
名古屋能楽堂

番組

仕舞　兼平　吉場　広明　豊田　均　金春　穂高
　　松風　金春　安明　地謡　高橋　汎　高橋　忍
鵜ノ段　高橋　忍　地謡　箕浦　進　加藤　剛

能　求塚
ツレ　本田布由樹
ツレ　鬼頭尚久
本田　光洋
杉江　元
飯冨　鉱一
橋本　雅介　筧
宰　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　鹿取　希世
後見　横山　紳一　加藤　英昭
　　佐藤　俊之　地謡　武馬　正和　高橋
　　中田　智久　小島　芳樹　金春　安明
　　井上　隆敬　赤広　一雄　高橋　汎　忍
　　河村　吉場　広明　高
問狂言　松田　高義

狂言　寝音曲
太郎冠者　野村又三郎
主人　野村小三郎
後見　松田　高義
　　永田　孝司
蝉丸　横山　紳一　高橋　忍
仕舞　弱法師　高橋　汎　地謡　本田　光洋
　　野守　佐藤　俊之　伏原　靖二
　　林　功
連吟　高砂　金春　信高　金春　安明

能　天鼓
後シテ　金春　晃実
前シテ　金春　穂高
　　高安　勝久　河村眞之介　助川　竜夫
　　福井啓次郎　大野　誠
問狂言　野村小三郎

附祝言
後見　鬼頭　尚久　新美　智正　佐久間祥夫　佐藤　俊之
　　高橋　忍　地謡　伊藤　雄二　横山　紳一
　　本田布由樹　鈴木　寿　金春　安明
　　小池　信之　吉場　広明　茂穂　前田

（有料）五千円（正面指定席）
四千円（中正面、脇正面自由席）
三千円（学生証、自由席）

（五時五十分頃終了）

主催　名古屋金春会
　　名古屋金春流友会
　　名古屋春栄会
　　㈳金春円満井会

お問い合わせ　名古屋金春会事務局
お申込み　名古屋市昭和区松風町2－15－2（フシハラ内）
TEL052・842・7931

## 故久田秀雄師十七回忌追善

### 郁諷会大会

十一月五日(日)午前十時始
名古屋能楽堂

連吟　小鍛冶　名古屋大学観世会
　　殺生石　名古屋大学観世会

仕舞　花月（キリ）　松本ちずる
　　富士太鼓　野崎　和恵

素謡　井筒
吉田冨喜子　志津　明子
　　田村　宮口　由美　河村真之介　後藤孝一郎　竹市　学
舞囃子　羽衣　熊谷　晃子　河村真之介　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　竹市　学
　　玄象　名倉　恵子　河村真之介　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　竹市　学
（五段替之型）

素謡　俊寛
成経　豊島　慎一
康頼　佐治　光幸
大島　修　赤尾　正
　　三輪　江川恵美子　筧　鉱一　福井啓次郎　鹿取　鬼頭喜太郎　希世
舞囃子　六浦　忍田チヨ子　河村真之介　福井啓次郎　助川　鹿取　龍夫　希世
　　唐船　伊藤　明美　筧　鉱一　福井啓次郎　鹿取　鬼頭喜太郎　希世

素謡　山姥
笠田　昭雄
門脇　千鶴　下川　宜長
　　清経　佐治　光幸　筧　鉱一　久田舜一郎　野口　亮
舞囃子　半蔀　志津　明子　筧　鉱一　福井啓次郎　大野　誠
　　菊慈童　幸王　泰子　河村総一郎　久田舜一郎　助川　野口　龍夫　亮
仕舞　兼平　豊島　慎一

素謡　小督
竹腰　英子
小西　年子
森田　玉恵　四角ふみ子
　　邯鄲　赤尾　正　河村総一郎　柳原冨司忠　助川　大野　龍夫　誠
舞囃子　自然居士　中野　裕子　河村総一郎　豊島　慎一　大野　誠
　　現在七面　水野　臣子　河村総一郎　柳原冨司忠　助川　大野　龍夫　誠
番外仕舞　柏崎（道行）　上田　貴弘
　　鞍馬天狗　久田　勘鬼
番外舞囃子　江口　前野　郁子　河村総一郎　柳原冨司忠　野口　亮
（終了予定五時頃）

〔御来場歓迎〕

主催　郁諷会
　　前野郁子

## 元熱田能楽殿運営委員長
# 長谷晴男氏逝去

元熱田神宮権宮司、熱田神宮能楽殿運営委員長、長谷晴男氏は九月十五日午後一時十四分、肺気腫のため逝去された。享年八十二。

葬儀は二十日十一時から名古屋千種の吹上愛昇殿で執り行われ、神社本庁、愛知県神社本庁、熱田神宮、春日大社、住吉大社、皇学館大学、石清水八幡宮、多賀大社はじめ神社関係、名古屋能楽界関係者らの供花が飾られ、会葬の列がつづき冥福を祈った。喪主長谷雅子さん。

故長谷晴男氏は大正六年十月生れ。昭和二十六年熱田神宮権弥宜、三十九年権宮司に就任、能楽関係では昭和三十年熱田神宮能楽殿建設当初より事業に参画、地鎮祭、竣工祭には斎主を奉仕、舞台披きには能奉行をつとめた。

昭和三十九年熱田神宮能楽殿運営委員会委員長に就任、昭和六十二年まで二十三年間委員長として能楽殿の運営、整備、施設の充実に努力、昭和六十二年「地域文化功労者文部大臣表彰」（個人表彰）を受彰し、ひきつづき熱田能楽殿運営委員会顧問として在任した。さらに皇学館大学教授、神社本庁祭式講師もつとめ著書もある。

また「能楽の友」紙が昭和四十二年創刊されて以来、顧問として尽力され、歳末助け合い義捐能、能楽師養成金事業また名古屋新能の上演遂行に当たって積極的に参画、中部能楽界の振興に多大の貢献をされた。

# 日本初の発声学研究国際公開講座
## 観世流「隅田川」上演
## 11月25日、名古屋能楽堂で

洋楽と邦楽を発声の視点で検証し、能楽の上演と共に〝情操〟の科学を解明しようという画期的な企画が、きたる十一月二十五日㈯名古屋能楽堂で催される。

このイベントは「2000発声学研究国際公開講座」で〝洋楽と邦楽（発声芸術）の境界〟のテーマで、発声学において国際的に指導活躍し、アメリカ・ライダー大学で発声と発声教授法を指導するマーヴィン・ケンジー教授を招き、日本の代表的古典芸能である能楽の演能と、同教授による公開レッスン、新美成二東大教授の基調講演とともに、洋楽および邦楽発声各研究家によるシンポジウムが行われ、わが国初の国際的な合同研究公開講座として注目されている。

この企画は、観世流能楽師範・生駒里翠氏が日本声楽発声学会のメンバーとして、これまでロンドン、ニュージーランドでの声楽発声学国際指導者会議に出席して講演、世界の研究者が邦楽の発声法に非常に注目してきており、日本声楽発声学会の愛知県支部設立準備委員会の委員長として、この公開講座の実行委員長となり、関係各界に諮り、今回の実現の運びになったものである。

セミナーのスケジュールは次のとおり。

〔第一セッション〕（発声学講座）公開レッスン＝M・ケンジー教授、受講者・声楽家小山陽二郎、烏居みゆき。

〔第二セッション〕（能楽鑑賞）能「隅田川」シテ関根祥六、子方・関根祥丸、ワキ錦木寧男、ワキツレ高橋正光、笛・一噌庸二、小鼓・福井啓次郎、大鼓・箕鉱一。

〔第三セッション〕（基調講演）新見成二（東京大学教授、日本音声言語医学会理事長）＝テーマ、発声の根源／洋東西の発声異・同、つづいて（シンポジウム）座長＝加藤友康（加藤耳鼻咽喉科医院長）新見成二、M・ケンジー、山田実（桜美林大学教授）関根祥六（観世流能楽師、日本能楽会会員）＝敬称略

後援・日本声楽発声学会、県教委、市教委、中日新聞社

開場十二時半、開演午後一時半（終了予定午後四時半）、会場名古屋能楽堂（電話052・231・0088）

入場料　指定席五千円、自由席四千円。

前売り券取り扱い＝チケットぴあ（☎052・320・9999）名古屋能楽堂、事務局（名古屋市名東区本郷二―七七、トモエビル405、中日現代社内、日本声楽発声学会愛知県支部設立準備委員会、☎052・777・7577）

M・ケンジー教授

新美成二教授

生駒里翠実行委員長

# 龍吟の会特別公演

十一月七日(火)午後一時開演
名古屋能楽堂

尾張徳川家初代、徳川義直生誕四百年を記念して

一調一管　**龍田川辺**（たつたかわべ）　謡　観世　清和
伝・作詞　徳川家光
娘　片山清司
片山九郎右衛門
笛　大倉源次郎
小鼓　藤田六郎兵衛

復曲能　**長柄の橋**（ながらはし）　中村彌三郎　山本孝　三島元太郎
荒木賀光　藤田六郎兵衛
間　茂山七五三
後見　片山慶次郎　分林道治　武富康之
味方玄　片山伸吾　斉藤信隆
地謡　赤松禎英　古橋正邦　大槻文蔵
梅田味方　武富邦久

能　**土蜘蛛**
頼光　観世清和
頼光の従者　観世喜正
胡蝶　観世晩夫
僧　大槻文蔵
土蜘蛛の精　梅若六郎
間　井上靖浩
後見　梅田味方　福王知登
赤松禎英　福王茂十郎　河村総一郎
福王和幸　福井啓次郎　観世元伯
藤田六郎兵衛
地謡　清沢一政　古橋正邦
武富康之　片山清司
片山伸吾　片山慶次郎
斉藤信隆
（終了四時三十分頃）

〔入場料〕A席一万五千円、B席一万千円（全指定・税込）
お問い合わせ　藤田六郎兵衛事務所　TEL052・571・6341

主催　龍吟の会　中部日本放送館　中日新聞社

# 名古屋能楽堂定例公演
## ―30回記念特別公演―

十一月十日(金)午後六時三十分開演
名古屋能楽堂

狂言　**痩松**（やせまつ）　山賊　大野弘之　女　井上祐一　後見　井上靖浩

能　**安宅**（あたか）　延年之舞　能力　太刀持　松田高義　佐藤融
間　高安勝久　河村眞之介　後藤孝一郎　竹市学
後見　泉久田三津子　中川嘉夫　雅章
地謡　外山圭一　高島良一　古橋正邦　松山幸観　梅田加賀　須部敏彦　清沢一政
（午後八時四十五分頃終了予定）

主催　能楽普及事業実行委員会
協賛　能楽協会名古屋支部

〔入場料〕前売一般四千五百円、学生三千円（当日一般五千円、学生二千五百円）
〔前売券取扱い〕名古屋能楽堂（電052・231・0088）チケットぴあ、市内プレイガイド

# 名古屋観世会定式能（納会）

十一月十二日(日)十二時半開演
名古屋能楽堂

能　**邯鄲**（かんたん）　観世　観世紘頭　芳宏　橋本雅介　飯冨宰
間　谷田宗二朗　杉江元　祖元正樹　奥津健太郎
後見　小島一英　梅田邦久
地謡　須部宣　高島良一　高橋瞭一　武田正邦　祖父江修一　関根祥人　久田勘鴎
後藤嘉津幸　竹市学　鬼頭好信

狂言　**鬼瓦**（おにがわら）　野村又三郎　野村小三郎
後見　奥津健太郎

仕舞　**車巻**　僧　絹（キリ）　関根祥人　武田宗和
地謡　古橋正邦　武田邦弘　中川雅章　本田勲

能　**山姥**（やまうば）　祖父江修一　武田志房
白頭　杉江元　高安勝久　祖元正樹
間　松田高義　河村眞之介　柳原冨司忠
後見　久田勘鴎　関根祥人
地謡　外山圭一　松山幸親　加賀敏彦　清沢一政　小島一英　武田宗和　梅田邦久　中川雅章　助川竜夫

# 名古屋市民芸術祭2000主催事業
## 創作能「高山右近」上演

十一月十八日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

創作能「高山右近」について　加賀乙彦

# 高山右近

山賊　右近の妻　梅若猶彦
右近の娘　泉嘉夫
侍女　井上靖浩
里人　井上祐一
囃子　笛　根岸啓子　藤田次郎　森田都紀　正昭　幸　高野金春　國和
地謡　久田勘鴎　山本正人　鶴克彦　八神孝充　黒田博
洋楽　総指揮　フルート　ハープ　チェレスタ　ベル　編鐘　野田輝行　田中隆英　井上栄利加　竹内将也　石崎陽子
女性合唱　渡辺有里香　赤池美優　三宮保　杉村亜子　実　田中郁子　中島詩乃　細沼弥恵　矢崎陽子

〔入場料〕七千円（全自由席）
取扱い＝チケットぴあ、プレイガイド、名古屋能楽堂
問い合わせ＝「高山右近」名古屋上演実行委員会　TEL052・832・3185

主催　名古屋市民芸術祭実行委員会
名古屋市・名古屋市教育委員会
名古屋市文化振興事業団
創作能「高山右近」名古屋上演実行委員会

附祝言

〔有料〕当日券（自由席）八千円　主催　名古屋観世会

# 梅若六郎の会

十一月十六日(木)午後六時半開演
名古屋能楽堂

仕舞　野宮　山本勝一

狂言　**箕被**（みのかぶり）　子方　河本晋矢　進
山本東次郎　山本則孝

能　**安宅**（あたか）　梅若晋矢　博通　貴博　維教　直隆　章弘　康陽　切　正道　信重　山本博通　山中貴博　鷹尾維教　角当直隆　小田切章弘　山崎康陽　河村正道　梅若六郎
滝流　宝生閑　河村大　大倉源次郎　藤田六郎兵衛
間　山本東次郎　山本則孝
後見　赤瀬雅則　西村泰男　井上遼冶　井上和幸　今村一夫　久田勘鴎　梅田邦久　山本勝一　波多野晋
地謡

主催　梅若六郎後援会名古屋支部

〔入場料〕正面一一、五五〇円、脇正面八、四〇〇円、中正面八、四〇〇円
お求めは梅若六郎後援会事務局　TEL03・3363・7718

# 戦後名古屋能楽史⑭

## 〔第六章〕一二年目に入った松坂屋ホール特設舞台（昭和二十七年）

竹尾　邦太郎

（前項につづく）

さて夏七月、ぼつぼつ装束納だが六日は第十六回名匠鑑賞能。前年同期と同じく京都から片山・井上・杉浦、三家父子の来演で番組には「其の他新進楽師の一門、併て大鼓石井流宗家代理谷口喜代三・太鼓金春流元老前川光隆、両師以上何れも関西代表の諸師、尚在名全楽師揃っての好演、是非初夏の半日を鑑賞願います」の口上がある。「通小町・雨夜ノ伝」杉浦義朗・片山博太郎、「素袍落」井上新三郎、「融・酌ノ舞・思立ノ出・今古返」片山九郎右衛門・高安滋郎、一調「鳥追船」田鍋惣太郎・井上嘉介。番組末尾に「能楽堂建設に御協力願ます」とあり、熱田神宮能楽殿が竣工する直前の昭和三十年十月十六日の第二十四回名匠鑑賞能までその呼び掛けは続けられる。なお「融」の小書「酌ノ舞」は当地五十年ぶりと『小鼓芸話』には言う。

七月十九日、中部日本新聞は「高まる〝婦人能〟熱」と題する一文を掲載、戦後俄に熱気を帯びる女権拡張運動の一端を報じて興味深い。今その一部を抜粋（括弧内筆者）する。

「前略――婦人能の起りは孝明天皇（一八三一―一八六六）が御所内で女官を集められ野村三次郎師（金剛流・一七九八―一八七〇）が能謡を教えたのが始まりだが、因襲のこい能楽界が婦人に門戸を開放したのは昭和の初期で、婦人解放運動と共に婦人に謡う喜びが与えられたわけである。――中略――健康と作法の点から三番目ものが婦人に適している。能を習うには週一回、月額二百円から五百円ぐらいの謝礼で、初歩なら十番から二十番ぐらい素謡でけい古をして、その間に仕舞を併せて習うのがよいようだ。三年もたてば相当型ものも舞うことができるが、昨年十二月本社後援で開かれたオール婦人能で絶賛をうけた金剛流片岡道子さんはその例で、本年四月京都で邯戦の能を舞い称賛された。後略」

因にオール婦人能の曲目は「小袖曽我」、配役は十郎片岡登志子、五郎片岡道子、母平瀬つね子、鬼王伊藤照子、段三郎鈴木たみ、アイ河合英子、笛上滝文子、小鼓井深艶子、大鼓水田式子、地謡広瀬秀子・関加代子・中内ます・田中雛子・竹市よ志・大塚房子・田島芳子・安部静子（『金剛』第六号に拠る）。脇道に逸れるが七月十九日はまた第十五回オリンピック大会がヘルシンキで開幕、戦後初参加の日本はレスリング・バンタム級で石井庄八が金メダルに輝く。七月二十日、関市春日神社に奉納能楽があり、その中で片山九郎右衛門の「羽衣・和合ノ舞」が七月二十三日午後二時、中日放送により録音放送されたという（『観世』昭和二十七年九月号に詳しい）。七月二十七日の第三回観世会は装束納で袴能「百万」観世喜之、外に素謡五番「養老」早川輝吉・「小袖曽我」高野瀬透・「斑女」林愚蔵・「葵上」国枝照輝・「猩々」増田一雄、仕舞八番、一調二番、当地観世会々員総出演である。

八月三日、名古屋山本観衛会創立十五周年記念は太田重次郎・加藤総兵衛師範披露を兼ねる素謡と能の会、場所は松坂屋ホールに非ず中区西川端町一の五（市電矢場町東へ二丁）の中日会館特設舞台である。素謡三番、連吟二番、仕舞十六番に能は「楠露」、シテ恩地満一・太田重次郎、ツレ楠木正成・加藤総兵衛、子方楠木正行・山本順之。この春、講和条約が成って占領管理が解かれたとはいえ戦時下の忠孝思想への懐旧か、有名な桜井の別れに取材した明治時代の新作「楠露」が披露能に取り上げられたのは珍しい。盛夏のことでもあり、両シテの性格の曲で両者直面であることの考慮もあったろうか。

九月八日、『謡の教え方習い方』『節の研究』の著書もある治金工学の権威廣瀬政次が心臓麻痺で四日市に客死、享年五十九歳、早すぎた死が惜しまれる。九月十七日から三日間は当地でもお馴染みの観世喜之の再建矢来能楽堂舞台披キ記念日加寿能。当地からは第三日の「乱・双ノ舞・置壺」観世銕之丞・観世華雪のワキに高安滋郎、一調「笠ノ段」藤波順三郎に田鍋惣太郎が出勤する。九月二十一日、第五回定式能は例年通り大阪勢、「井筒・物着」大槻十三、「女郎花」山本博之、狂言は当地狂言共同社の担当は変らず「萩大名」歌村彦四郎である。一日置いて二十三日は大槻十三の率いる名古屋清韻会創立三十五周年記念能、素人会で番外に大槻秀夫の仕舞「野守」や大槻十三の舞囃子「船弁慶」などがある。この月、季刊誌『喜多』は十一号をもって『喜多春秋』と改称し、隔月刊となる。

十月に入り十九日は第十七回名匠鑑賞能で芸術祭参加を謳い、「一昨年春、本会へお出演大好評の金春流元老桜間弓川・龍馬、親子両師、同流重鎮本田秀男師、久々で金春流のお能です。その上お馴染の観世喜之師、並に大阪の同流新進楽師山中信義・信之兄弟両師（当地発出勤）。囃子方にも大倉流大鼓山本敬一郎師（大阪）、金春流太鼓田中好一師（東京、当地初めて）。なほ在名全楽師の出演、大能で御座います。初秋の半日お鑑賞下さいませ」とある。「放下僧」観世喜之・本田秀男、「井筒」桜間弓川、「棒しばり」井上新三郎、「殺生石・白頭」観世喜之、一調「花筐・クルヒ」田鍋惣太郎・桜間弓川、ここに「放下僧」は一昨年の観世喜之と桜間金太郎（弓川）の異流共演が物議をかもした「蝉丸」と同一のケースだが、お咎めはなかった様である。

十一月一日、先代観世喜之（一八八五―一九四〇）十三回忌追善能は当代喜之が「隅田川」を手向ける。十一月十五日は第四回観世会、「景清」柴田初太郎、「栗焼」井上松次郎、「玉葛」武田太加志、「鉄輪」山本博之、翌十六日は第六回定式能で「忠度」野口禄久、「鐘の音」井上松次郎、「鉄輪」宝生英雄、「鉄輪」は観世流との競演の様相となった。十一月二十四日、久しぶりに御園座舞台での催能は中部日本新聞社主催、名古屋能楽会・名古屋楽師協会・能楽堂建設委員会後援の「名古屋能楽堂建設基金造成・五流宗家並ニ代表楽師大演能」、文字通りの大演能で戦後当地に五流が集うのはこれが最初である。午前・午後の二部制で、一部は「橋弁慶」金春信高・本田光洋（子方）、「素袍落」井上新三郎・茂山弥五郎・茂山忠一郎、「葵上・梓ノ出」観世元正、舞囃子「安宅」桜間龍馬、仕舞「松風」杉浦義朗・「山姥」本田秀男、「土蜘蛛・千筋ノ伝」金剛巌・豊鶴弥左衛門（頼光）。二部は舞囃子「高砂」片山九郎右衛門、「羽衣・霞留」喜多実、「末広」茂山弥五郎、一調「女郎花」田鍋惣太郎・井上嘉介、仕舞「八島」宝生英雄・「殺生石」喜多長世、「船弁慶・後ノ出・留ノ伝」宝生九郎・田鍋洋一（子方）、以上の豪華版。

因にこの催能は四年後の昭和三十一年、中部日本新聞社が興した中日五流能の呼称に直し第一回とする。なお一部の狂言「素袍落」は、後に喧伝された山本東次郎・野村万蔵・野村万作の「武悪」（昭和二十八年六月十九日・冠者会）、茂山弥五郎・野村万蔵・茂山圭五郎の「武悪」（昭和三十七年三月十六日・東京能楽鑑賞会）の、異流共演の嚆矢をなすものであろうか。シテ太郎冠者を勤めた井上新三郎（一八八七―一九五五）の息禮之助（一九一五―二〇〇〇）は自著『祖父・父を憶ふ』の中で次のように言う、「新三郎はこの時の舞台を大変光栄、誇りにしていたようだが、後年承れば、文字通り異例の異流共演と言うことで、殊に大蔵御宗家には関係方面の御了解を得るため格別のお骨折りをいただいたようである。そんな周囲の実現のための努力を知ってか知らずか、新三郎一人、大いに喜んでいたものである」と（写真参照）。

師走に入り七日は山本観衛会、八月三日と同じ中日会館特設舞台で婦人能『杜若』村田京子、主宰の山本博之は舞囃子「枕慈童」、三人の息は仕舞で「和布刈」勝一・「梅枝」真義・「車僧」順之、他に「巻絹」柴田初太郎、独吟「鳥追舟」林愚蔵がある。師走十四日の第六回能楽協会名古屋支部能も中日会館、松坂屋ホールでないのは年末商戦のためでもあろうか。番組は「弱法師」竹市秀雄、「不須」井上松次郎、観世流仕舞四番、連吟・独吟各一番、舞囃子「松虫」久田秀雄、一調「松山鏡」野崎太郎・西村弘敬、宝生流仕舞一番、金剛流仕舞二番、舞囃子「巻絹」鈴木右門、「不見不聞」河村丘造、「天鼓」岩田由之助、喜多流の出演が無いのが寂しい。同じ日、東京では喜多流「綾鼓」が喜多実によって復曲初演され、十四日には多摩川能楽堂の銚仙会で、前年観世華雪により復曲上演された「求塚」を橋岡久太郎も初演する。能楽界は着々と元気を取り戻し、昭和二十七年が暮れる。

「素袍落」　於　御園座
右より茂山忠一郎・茂山弥五郎・井上新三郎
大蔵弥太郎（後見）＝故井上禮之助師提供


## 二井栄逸師画抄集

## 平成13年能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー2001年版。B3（タテ51.5cm×ヨコ38.0cm）表紙とも7枚の美麗カレンダーです。

◉予約特価　1部1800円、郵送の場合送料共1部2200円（2部以上の場合、部数にかかわらず送料は一律600円、例・3部の場合送料とも6000円）

◉予約申し込み期限11月25日（それ以後は部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい）

◉お申し込み方法　ハガキ又はFAXで部数明記の上当社へお申込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。

申し込み先　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464－0858）
電　　話（052）731－7984
F A X（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393



## 名匠狂言会

十一月十九日（日）午後二時開演
名古屋能楽堂

番組　解説　林　和利

二人袴　裃　野村又三郎　太郎冠者　弟　井上祐一　佐藤友彦　野村小三郎

木六駄　太郎冠者　野村万作　主人　茶　石田幸雄　野村萬斎　伯父　野村万之介　後見　松田高義　高野和憲

素囃子　神舞　河村総一郎　三島元太郎　後藤孝一郎　竹市学

枕物狂　祖父　茂山千作　孫甲　茂山茂　孫乙　茂山宗彦　茂山童司　河村総一郎　後藤孝一郎　三島元太郎　竹市学　地謡　茂山正邦　茂山千之丞　茂山七五三　岩崎狂雲　後見　木村正雄

（入場料）S席八千五百円　A席七千五百円　B席六千五百円

主催　中日新聞社



## 2000 発声学研究国際公開講座

〔洋楽と邦楽〈発声芸術〉の境界〕

十一月二十五日（土）午後一時半始
名古屋能楽堂

〔第一セッション〕◆発声学講座　公開レッスン＝M・ケンジー教授　受講者＝小川陽二郎、鳥居みゆき

〔第二セッション〕◆能楽鑑賞　子方　関根祥丸　関根祥六　観世流能　隅田川　鐘木　岩男　高橋　正光　覚　鉱一　福井啓次郎　一噌　庸二　後見　生駒　里翠　泉　嘉夫　地謡　岡庭　祥大　清沢　一政　上田　公威　関根　祥人　祖父江修一　高梨　良一

〔第三セッション〕◆基調講演　新美成二＝テーマ・発声の根源／洋東西の発声異・同　◆シンポジウム　座長＝加藤友康、新美成二、M・ケンジー、山田実、関根祥六

〔入場料〕指定席五千円　自由席四千円

前売券取扱い＝チケットぴあ、名古屋能楽堂、各実行委員会事務局＝TEL052・777・7577

主催　日本声楽発声学会愛知県支部設立準備委員会

後援　日本声楽発声学会、愛知県教委、名古屋市教委、中日新聞社

# ◆初秋の舞台から◆

## 「大阪梅猶会」「観世会」「第二十五回鳳の会」

竹尾邦太郎

「藤戸」　シテ和男。戦略の機密漏洩を恐れたワキ盛綱・茂十郎に無辜の吾子を刺殺された老母が、その理不尽を責める前場がよい。

感情を抑え、〽御前に参りて候なり、とワキに向き合う気魄に、「恨みとは更に心得ず」と平静を保ちながらも動揺を隠せない盛綱。重ねて問い質す老母を遮り威嚇する盛綱に、たじろぐ風もなく伏目がちにトーンを落としてしんみり心の裡を述べる老母。一曲の導入部の、シテとワキの緊迫感溢れる好演は、続く初同（盛義・生香ら）も〽跡弔はせ給へや、など祈りにも似る願いは盛綱を目覚めさせ、素直にさせるに充分な説得力の名調である。ワキ語は努めて冷静の雰囲気、「取って引き寄せ」、ではっとなり、シオル老母に淡々と語り続けるのが却って苦衷を思わせる。殺害現場を知らされ、〽あの辺ぞと夕波の、とすっと立って目付柱へ見ると、込み上げる思いは〽こはそも何の報いぞ、と音立てて膝をつきワキへシオルところや、〽亡き子と同じ道に、のクセの型所、右膝強く打つ態から小刻みに三四足ワキへ躙り寄り、両手差し出すのを払われて退り、安座の双シオリが正座になるところなど、見応えがある。

後場は、妄執を伝えんと姿を見せた漁夫の亡霊による殺害現場の再現。刺し通される型は袖の外側、〽そのま、海に、と杖を首枷にして廻ると膝をつき沈むところ鮮やかだが、地の〽折節引く汐に、と立ち、〽浮きぬ沈みぬ、のところは稍性急の感。キリの、〽水馴棹、と杖に左手を添えて櫂に擬し、船漕ぐ型はきれいだった。アイ忠一郎、囃子は啓子・晧祐・芳昭。（1時間12分）

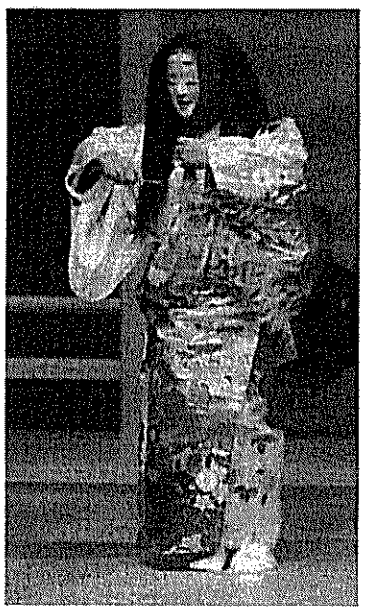
「茶壷」　路上酔臥の他人・隆平の担荷を狙うスッパ忠一郎の大胆は、いざと言う時の口調法の自負。中を裁く自代・正裕に正直に応じる隆平と、抜け目なく喋々する忠一郎、親子芸劫の差も見えてその対照は配役の妙。なお忠一郎の肩衣文様は帆掛舟、「尻に帆を掛けて逃げる」暗示なら、隆平のそれは大木の切り株、「ころり転んだ木の根っ子」とも思えて面白い。（24分）

「井筒」　シテ盛彦。面小面・襟白二・白摺箔着付・菊段唐織、木ノ葉を持つ。可憐な中に凛とした気配をみせ、右ウケ松籟を聞き、木ノ葉を置いて合掌するところなど淑やかで品があり、ワキ旅僧・弥三郎との問答も確りと、穏やかに受けるワキに気後れしない。初同（光之助・晃一ら）の〽一叢芒、以下の寂た情調に、〽草茫々として、と見渡す辺りの心持ちもよかったが、身上とその時の心情を地に語らせる居グセは、少々落着かず未だし。中入は〽隠れけり、の返シにシテ柱の陰に巧く融け込んだ。

後シテは初冠・赤地扇面散シ文縫箔腰巻・紫地金花菱文長絹の麗容。キリ近く、〽業平の面影、と扇で右手前の芒を押し分け、沁々井を覗き〽我ながら懐しや、とシオッて退ると、〽凋める花の、は下居に扇を笏の様に持ち、面を隠すところ、また、〽寺の鐘もほのぼのと、と軽く四ツ拍子を踏む中に松籟や芭蕉の葉擦れの音を重ねて夢が破れるトメまで、型の美しさは師譲りだが、更に内面の充実を望みたい。（1時間33分）

「鉄輪・早鼓」　シテ修一。狂言口開は、夫に捨てられ呪い殺さんと丑の刻詣に来る女に、神託を伝える社人・隆司。浅黄水衣の被衣のシテが一ノ松裏勾欄へ寄って壁に向い、〽貴船の宮に参らん、の独白が既に鬼気を孕めば、道行の謡は過ぎゆく点景の一つ一つに怨みを重ねて沈鬱。夜の闇に融け込む被衣の女に神託を伝えるや、「恐ろしや」と逃げ出す社人に、〽美女の容と見えつる、女が被衣を脱いで羽織れば、面泥眼・袋着胴姿はまさに凄じい形相である。中入は〽立つや黒雲の雨降り風と鳴神も、と面左右にキッと切って空を見上げ、被衣を人形（ひとがた）の様に抱きかかえ、〽思ひ知らせん、と一瞬立ち止まって走り込むところは、有無を言わせず夫をかっ攫って行くかの鮮烈な印象だった。この光景に「あら恐しや」とアイ座から再び社人が出るのも珍しい。

後は面橋姫・赤地金鱗箔着付・濃紫地紋尽縫箔腰巻、強靭なバネを秘めたしなやかな姿態に怨念が滲む様である。〽いかに殿御よ、と台に居立ち烏帽子見据えるクドキの沈痛は、〽捨てられて、とシオル愁歎も切ない。〽夫を喞ち、と台を下りれば、今宵限りの命を〽痛はしや、と思う己が心に苛立つ様に、一転復讐の鬼となる凄まじさは髪を打つところ。キリは、〽先づこの度は帰るべし、と捨て台詞を吐きかけるかに台に寄ると、走り込みは墓前で一ツ踏み、残り留になった。愛を突き抜けた憎の厳しさに、陰湿な嫌味は消し飛んだと思った。（1時間・9月2日・大阪梅猶会・大阪能楽会館）



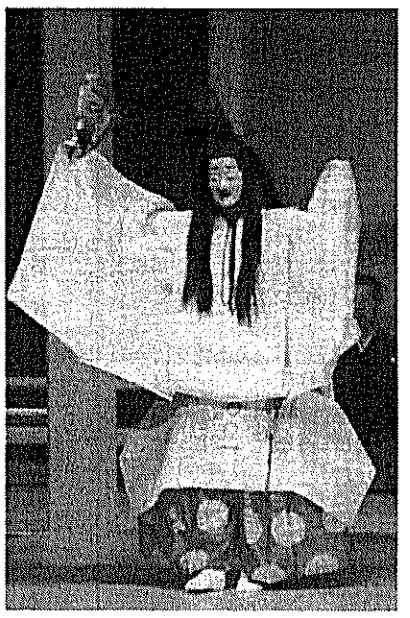
「蝉丸」（杉浦賢二氏撮影）

「蝉丸」　小書は付けてなかったが替ノ型、茶引廻シの萩藁屋は大小前に据える。蝉丸・清司、襟白浅黄・白綾着付・浅黄指貫・萌黄単狩衣。ワキ清貫・勝久、捨てられる盲目の蝉丸への同情を言う次第から道行は着詞の後、蝉丸は地前の床几に角かけ座る。宣旨として物着に床几を下り、狩衣を脱ぐと下は紫水衣（金霞文）、角帽子をつければ僧形である。蝉丸との掛合もさりながら、笠と杖を渡す坦々とした手際には抑制された情があり、勝久充実ぶりをみせる。悲境を甘受する蝉丸が、とり残される現実に〽伏し転びてぞ、と笠を捨て、杖も捨てての安座双シオリにも自ずから品位が表われる清司も立派、身も世もない号泣動哭も、シオル両手の位置の微妙に関わろうか。アイ博雅三位・靖浩が郷重に萩藁屋へ送る辺りもよい。

逆髪は暁夫、面は愛らしい表情の若女（か）、豊かな黒髪を左右に垂らし、襟白二・菊菱文白摺箔着付・段唐織脱下ゲ、笹を持つ。〽風にも解かれず、〽手にも分けられず、と煩い髪を掴み（写真）、文字通りパッと〽かなぐり捨つる、ところなど、当たりどころの無い女心の遣る瀬なさ。道行は手綱を取る態に〽駒の歩みも、と橋懸へ入ると一ノ松、水鏡の己が姿に〽浅ましや、と退るも更に確めるように二ノ松勾欄、双手を翳して下を覗けばへげに逆髪の影映る、と小廻りに驚きをみせ、〽現なの我が姿や、と右ウケてシオルところ、心象風景を鮮やかに映す。琵琶の音が取り持つ姉弟邂逅のひとときの慰さめも、しんみりと情感たっぷりの地（邦久・邦弘ら）は居グセ二人の詠嘆、次第に寂しく沈潜する。

キリの別れは、〽これまでなりや、と蝉丸にアシラヒ、直ルと思いを断ち切るように橋懸へと立ってゆく逆髪が弟蝉丸を思いやり、〽留るをさこそと夕雲の、と歩みを止めると目付柱へ薄く見上げ、シオルところ殊に趣深い。〽蘆屋の軒に、と立つ蝉丸、後髪引かれる思いで二ノ松から振り返ってシオル逆髪は、シオリのまま幕へ入り蝉丸は杖をつき常座框近く出てシオリ留。哀れ惻々と迫り暁夫・清司絶妙のコンビネーションだった。（1時間39分）

「船渡聟」　立場を利用して脅し同然、酒にありつく船頭・友彦。酒飲みの卑しさが露骨なだけに、ゆすった相手が聟・融と分ったときの狼狽は聊かオーバーアクション気味。遂には経緯を知った妻・弘之に自慢の大髭を剃り落され、様子を変えて聟と対面するが、顔を袖屏風で隠しっ放しである。シテ融は心優しい模範的な聟ぶりだった。（42分）



「融」（杉浦賢二氏撮影）

「融・舞返」　シテ文蔵。一ノ松、〽浦さび渡る気色かな、と手繰って持つ田子の縄を手放すのを切っ掛けに、暫し己が来し方を黄昏の秋に重ね合わせ、そぞろに述懐しつつその感慨に切りをつけるかに、今度は田子の縄を丁寧に天秤の中央に手繰り寄せて二つの田子を纏め、静かに下へ置く手際の美しさが、既に一曲の出来映えを予測する。塩釜の浦をめぐるワキ欣哉との問答も几帳面に、掛合からワキに「塩釜の浦を都の内に移されたる謂れ」を問われる語の口跡も明晰。それが俄に荒れ果てた眼前の景に昔を恋い、左膝を両手に抱えて項垂れると、地（九郎右衛門・邦久ら）の〽浦千鳥、とがっくり安座双シオリに、ワキは一瞬虚をつかれ、立って気分転換の名所教えにもってゆくところなど、シテ・ワキの呼吸も上々。名所教えがすみ、〽先づいざや、と一ノ松に田子を取りに戻って出ると、大きく田子を振り、ガラリと投げ出すが、淵から汲むのではないのは理屈ながら、框外で汲んで欲しかった。中入は途中で田子を捨てると、一ノ松で〽跡も見えずに、と沈み、返シ句に立ちすらすら入る。

後は面中将・初冠（垂髪）・黒垂・襟浅黄赤・白縫箔着付・緋指貫・白直衣・太刀の姿の高貴。眼目の早舞は昔日の融大臣の爽颯暢達、三鼓の流シで三ノ松へ抜け、小廻りは更に逆に二回、右袖返シてクツログと再び舞台に戻り、舞返の急ノ舞は栄華の得意、一ノ松で舞上げると地との掛合にキビキチと切りの型を極め、謡を残して幕に入りワキ留。あれよあれよと思う間もなく英姿は験に残り、素晴しい舞台だった。（1時間34分・9月10日・観世会）

「蝉」（杉浦賢二氏撮影）

「懐中聟」　世事に疎いシテ聟・靖浩、聟入作法を教え手・弘之に習う理由は「聟入をなされつけて」いるからの思い込み。人聞き悪いと教え手、あれは舅を「見舞うというもの」と釈明するが虫は納まらず、祝儀の引出物は全て懐中へと教えるが弘之渋くてよい味である。勇躍舅・祐一に対面して弓一張りを授かり驚く聟は、ここぞと思案してそれを素袍の両袖へ通せば、まさに案山子である。身動きも不自由な盃事（写真）、その一興に舞を所望した舅は、先のは短かいと連舞を楯に更に三段ノ舞（笛竹市学）を舞わせる意地悪だが、扇を右から左へ口に咥えて移すなど靖浩の舞は達者で難度は「棒縛」より上。キリは堪らずにへ窮屈やの窮屈やの、と逃げ出す聟を、〽先づ待たせられい、と追い掛ける舅、三十四年ぶりの稀曲だがよくこなれた好舞台。太郎冠者は靖雄の代勤融。（27分）

「懐中聟」（杉浦賢二氏撮影）

「蝉」　正先に短冊付松立木。ワキ僧・融、善光寺への途次、上松宿で松の短冊に気付きアイ所ノ者・郁雄に問えば、鳥に殺された蝉の慰霊と分って供養すると、面嘘吹・黒頭・襟紺・薄茶縞貶斗目着付・茶水衣が茶っぽい油蝉めくシテ蝉ノ亡霊・友彦が現われ、地（靖浩・政行ら）との掛合に冥途の苦患の有様を見せ、いま成仏、と作物前で黒頭と水衣を鮮やかに脱ぎ、へつくつく法師となりにけり、と留める。友彦声の調子一段とよく、旨く纏まった近頃の舞狂言。（21分）

「犬山伏」　茶屋・政行の茶の湯加減をめぐり癇癪持ちの山伏・祐一は、お節介な僧・友彦が床几に居るのにも腹を立て、言い掛かりを付けて己が肩箱を持たせようと突っかかる。堪り兼ね口を利く茶屋は、飼っている猛犬（融）を馴れさせた方を勝とするが、黒頭の兇暴な犬は僧の経「トラヤアア」に己が名を呼ばれたとじゃれつき、山伏には吠えかかる。その動態が蓋し傑作で犬が舞台を攫うか。ただ先の「蝉」と犬の黒頭、僧の経は共に大悲心陀羅尼で付き過ぎ、選曲に一考ありたい。（29分・9月15日・第25回鳳の会・熱田神宮能楽殿）

## NHK放送予定

（平成12年10月～11月）

◉NHK・FM能楽鑑賞

（日曜日午前8時～9時）

〔10月〕

22日「放下僧」
（金春流）桜間金記ほか

29日「附子」
（和泉流）三宅右近ほか
「横座」
（大蔵流）茂山千之丞ほか

〔11月〕

5日「班女」
（観世流）梅若六郎ほか

12日「蝉丸」
（宝生流）今井泰男ほか

19日「柏崎」
（観世流）藤井徳三ほか

26日「黒塚」
（金剛流）宇高通成ほか

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話 03(3291) 2488　振替00130－7－3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入
電　話 075(231) 1990　振替01010－0－113

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話 (052) 731－7984
FAX (052) 733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## 歳末助け合い協賛能
### 能3番、狂言1番　12月3日　名古屋能楽堂

能楽協会名古屋支部（泉嘉夫支部長）は、歳末助け合い運動の一環として、名古屋支部主催による「歳末助け合い協賛能」を毎年十二月に開催、支部所属の各流能楽師による演能で、愛好者の協力を得て推進しているが、ことしは十二月三日(日)、名古屋能楽堂で、能三番、狂言一番ほか各流による舞囃子、独吟、仕舞で行われる。

能組は、喜多流能「海人」経懐中之舞（シテ長田駿）観世流能「遊行柳」（シテ久田勘鵬）宝生流能「小鍛冶」（シテ稲川寿一）和泉流狂言「腸突」（井上靖浩）ほか金剛流舞囃子、独吟、観世流仕舞、午前十一時始。

入場券当日三千円（前売二千五百円）、（番組②面掲載）

なお、昨年度の歳末助け合い協賛能の催しにて、愛知県、名古屋市へそれぞれ二十八万三千二百四十円、合計五十六万六千四百八十円が寄付された。

## 文化功労者
### 茂山千作氏

今年度の文化功労者が十月二十四日発表され、能楽界では、狂言大蔵流・四世茂山千作氏(八〇)が選ばれた。

茂山千作氏＝本名七五三＝は大正八年生まれ、京都府出身。

紫綬褒章、観世寿夫賞、平成元年重要無形文化財個人指定（人間国宝）平成三年日本芸術院会員、同年勲四等旭日小綬章受章。平成五年京都府特別文化功労賞。

なお受賞式は、十一月六日、東京・虎ノ門のホテルオークラで挙行。

十一月十九日に名古屋能楽堂で開催の名古屋市民芸術祭2000協賛「名匠狂言会」（中日新聞社主催）で「枕物狂」を上演。

## 十八世宗家宝生英雄七回忌追善
## 名古屋宝生会創立45周年記念
### 名古屋宝生会別会能
### 明春3月「道成寺」上演

名古屋宝生会は、明年の同会創立四十五周年を記念し、さらに第十八代宗家・宝生英雄氏（社団法人能楽協会会長、日本能楽会会長歴任）が平成七年逝いて七回忌にあたり、明春三月十八日、名古屋能楽堂で、宝生英雄七回忌追善、名古屋宝生会創立四十五周年記念の「宝生会別会能」を開催する。

能組は、能「清経」音取（シテ衣斐正宜）「井筒」物着（シテ倉本雅）と宝生英照宗家の「道成寺」の能三番ほか狂言、舞囃子、連吟、仕舞など。午前十一時始。

正面A席一万五千円、正面B席一万二千円、脇正面B席一万二千円、中正面C席一万円。十二月十日発売開始（予約受付中）。

会員券取り扱い＝宝生流能楽師宅、市内プレイガイド。

連絡事務所＝天白区島田2－301、島田橋住宅2－1310、佐藤耕司方。TEL052・803・7372。

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

〔11月〕
25日(土)　2000発声学研究国際公開講座・能「隅田川」（有料）
26日(日)　久田観正会秋季大会　（無料）（番組①面）
〔12月〕
2日(土)　秋の清謡会　（無料）（番組②面）
3日(日)　歳末助け合い協賛能　（有料）（番組②面）
9日(土)　名古屋大学観世会自演能　（無料）
10日(日)　壺泉会能　（有料）（番組③面）

### ◆熱田神宮能楽殿◆

〔11月〕
25日(土)　恵美寿会大会　（無料）
26日(日)　恵美寿会大会　（無料）
〔12月〕
16日(土)　叶石会・一謡会　（無料）
17日(日)　薫謡会　（無料）

## 豊田市能楽堂
### 演能案内

■十二月九日(土)
［狂言づくしの会］
狂言・大蔵流「樋の酒」
次郎冠者・茂山千之丞
太郎冠者・茂山あきら
主人・茂山宗彦
狂言「墨塗」
大名　茂山千三郎
太郎冠者　茂山茂
女　茂山正邦
素囃子
笛・竹市学、小鼓・福井良治
太鼓・河村総一郎、太鼓・助川龍夫
狂言「闇罪人」
主人　茂山千作
太郎冠者　茂山千五郎
立衆　茂山千三郎
茂山正邦
茂山宗彦
茂山茂
茂山逸平
笛・竹市学、小鼓・福井良治、大鼓・河村総一郎、太鼓・助川龍夫
午後二時開演、入場料＝正面席六千円、脇正面席五千円、中正面席四千円、脇・中正面席は学生半額。

チケット取扱い＝豊田市能楽堂（電話0565・35・8200）チケットぴあ（電話052・320・9999）

## 日本風俗史学会「江間賞」
### 飯塚恵理人氏が受賞

能楽研究家、椙山女学園大学助教授・飯塚恵理人氏は「近世能楽史の研究―東海地域を中心に」と題する研究をまとめ、椙山女学園大学研究叢書として昨春、雄山閣出版から刊行されたが、日本風俗史学会選考委員会では、「この著作が民俗芸能・地方文化史にかかわる能楽研究の基礎を拓く研究であり、文芸と地方歴史文化の間をゆく、学際分野への研究成果は高く評価できる」として、平成十二年度の「江間賞」を授与することを決定した。

「江間賞」は、日本風俗史学会会員が公表した著述論文のうち、風俗史学研究に著しく貢献した業績一点に対して授与される賞で、日本風俗史学会の創設者である江間務先生からの寄付金を基金として運営されている。同著について、「東海地域は、近世より経済的にも豊かで、その蓄積された資力を背景として民俗芸能を形成するさまざまな芸道が盛んなところであった。が、その実態は必ずしも学問的には明らかにされていない。本研究は民俗芸能史・地方文化史にかかわる能楽史研究の基礎を拓く研究である」（筑波大名誉教授・日本風俗史学会会長・芳賀登氏の同著によせた序文）と評価されている。

飯塚氏は昭和三十六年生まれ。昭和五十九年筑波大学比較文化学類卒、平成三年同大学院博士課程単位取得、平成三年椙山女学園大学生活科学部専任講師、平成六年同助教授、平成十二年同大学文化情報学部助教授。

また能楽師有志が参加する東海能楽研究会のメンバーとして研究発表を行っている。

## 名古屋能楽堂演能案内
### 久田観正会秋季大会

十一月二十六日(日)午前九時半始
名古屋能楽堂

番組

連吟　菊慈童　今田雅勝　中田征
素謡　吉野天人　小田あさ乃　川村勝廣
清経　早川宗雄　橋本清　水科堅
仕舞　敦盛（クセ）服部喜美子　神谷功
櫻井筒（クセ）椙山範彦
三輪川　橋本桂
素謡　山姥　後藤玲子　田中信子　久田勘鵬
舞囃子　鞍馬天狗　仁科初夫
融　仲村スミ
梅枝　後藤玲子
（静和）橋本桂
（義経）林宏一
水藤喜二郎
羽柴秀一　笠田稔
素謡　正尊　河村総一郎　久田舜一郎　鬼頭喜太郎　大野誠
義経　久田勘吉郎
同山　藤谷官彌
松山幸親
上田拓司
須部浦一
祖父江修一
清沢政一
寺澤幸祐
梅若基徳
山田義高
岡田信道
能　安宅　高安勝久　河村総一郎　久田舜一郎　大野誠
勧進帳
義経
強力　野村又三郎
太刀持　野村小三郎
問　久田三津子　黒田孝博
浦田保利　玉木博
久田勘鵬　高橋暸一
地謡　加賀敏彦
後見　上田笠田　大介
上田　黄弘　稔
下川宣長
素謡　恋重荷　仲村吉田スミ　隆美　泉嘉夫
鉢木　志賀禮子　丸山敏子　久田勘鵬　内田永男
隅田川　大久保由実　小池房子　久田勘鵬　玉木孝男
杉山範彦　吉田勝己
俊寛　村瀬隆夫　久田勘鵬
舞囃子　鄙（バンシキ）　志賀禮子　河村眞之介　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　大野誠
山姥（立廻り）　大久保由実　河村眞之介　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　大野誠
船弁慶（後）　内田永男　河村眞之介　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　大野誠
番外仕舞　嵐山　上田貴弘
江口（キリ）　浦田保利
昭君　久田勘鵬
附祝言　（五時頃終了予定）

主催　久田観正会
蒲郡観正会
岐阜久田観正会
鵜久田観正会
名古屋市名東区一社三―一六二
久田勘鵬
TEL（〇五二）七〇五―一五八五

【入場無料】

東京

# ホテルに能楽堂建設

## 東急、渋谷に来春オープン

ハードからソフトへ、激動の二十世紀から新たな二十一世紀の扉が開かれようとしているとき、東京で来春開業をめざすホテルとオフィスを中心とした超高層複合施設のなかで「能楽堂」の建設が進められている。

この施設は、東京急行電鉄が東京・渋谷区の渋谷駅南に建設中の「セルリアンタワー東急ホテル」で、十七階までがオフィスおよび各施設、十八階から四十階までがホテル、地下三階～五階が能楽堂と宴会場、地下二階が能楽堂と宴会場、地下三階～五階が駐車場となっており、多彩な施設の融合で、都市生活に新たな魅力を提案する新しい国際交流の場をめざしている。

とくに「セルリアンタワー能楽堂」の建設について、複合施設のなかで「和の伝統芸能にふれていただける新しい交流の場として、いままでにない魅力を創出していきたい」としており、能楽師の方々だけでなく、素人会の皆様にも定例発表会、おさらい会など多目的に利用していただき、ご会合後の打上げパーティー、ご宿泊滞在等、バラエティに富んだ利用も承りたい」とあいさつしている。

問い合わせ先は、東京急行電鉄（株）渋谷開発事業部・能楽堂準備室、電話03・3477・6412、FAX03・3461・6329。

セルリアンタワー能楽堂の使用料は、［日曜日・祝日］素人会＝基本料金八時間まで三十万円、玄人会＝五時間まで十五万円［土曜日］素人会＝八時間まで二十七万円、玄人会＝四時間まで十二万円［平日］素人会＝八時間まで十八万円、玄人会＝四時間まで六万円［時間延長］素人会＝一時間につき三万七千五百円、玄人会＝同・一万五千円。

# 日本能面巧芸会事務局移転

能面の制作、研究グループとして「能面展」などを開催している日本能面巧芸会は、さきに第十九回能面展を開催したが、十月三十一日をもって、瑞穂区船原町のマンションに同会事務所を移転した。なお多年にわたる林龍雲会長が辞任され、磯部峯雲氏が会長代行として務められることになった。

新事務所＝名古屋市瑞穂区船原町四―一六―五　マンション「ファミーユ・アイ302号室」電話052・882・4310

# 平成13年上期 山本定期能楽会演能

山本定期能楽会の平成十三年度上半期定期能（予定）は次のとおり。

◆一月七日（日）午後一時始
翁　山本　章弘
白楽天　波多野　晋
巴　松浦信一郎

◆二月四日（日）一時始
高砂　山本　博通
舞囃子　桜川　千崎　隆一
花月　山本勝一

◆四月七日（土）一時始
素謡　雲林院　橋永　和風
敦盛　森本　哲郎
二段之舞　西行桜　山本　眞義

◆六月二日（土）一時始
素謡　鵜飼　松村　順一
野宮　山本　順之
車僧　今村一夫

［入場料］一般券（四回券）一万五千円、一般券（一回券）二千五百円、学生券（一回券）二千五百円

問い合わせは、大阪市中央区徳井町一丁目三―六、山本定期能楽会　電話〇六・六九四三・九四五四。

# 名古屋能楽堂演能案内

## 秋の清謡会（第23回）

十二月二日（土）午前九時半始
名古屋能楽堂

番組

番外素謡　國栖　今沢　美和　清沢　一政　須部　甫
素謡　経正　岡田　弘子　鈴木　明雄
素謡　巻絹　深谷紀佐子　伊藤　礼子　水越　弥生
仕舞　小鍛冶　クセ　片野　光子
巻絹　クセ　川出芙美子
紅葉狩　クセ　名和由起子
連吟　寝覚　山内　志げ　小栗知津子　高島　順子　田中　たみ　奥村　小浪　高見かね子　鬼頭　和子
仕舞　敦盛　キリ　杉田千鶴子
蝉丸　道行　織田　敏男
姥山　クセ　金原　孝典
猩々　金井　邦男
連吟　花筐　伊藤　孝治　都築　照治　金井　邦夫　織田　敏男
舞囃子　難波　五段　今川　米子　河村真之介　柳原冨司忠　助川　龍夫　鹿取　希世
舞囃子　班女　奥村　小浪　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取　希世
舞囃子　放下僧　山口　耕造　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取　希世
素謡　三輪　加藤　茂代　鬼頭みゆき
舞囃子　采女　小林美和子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
舞囃子　當麻　岩田加代子　河村総一郎　福井啓次郎　助川　龍夫　藤田六郎兵衛
独調　三輪　山本　博子　柳原冨司忠
番囃子　融　榊山きよ子　高安　勝久　河村総一郎　福井啓次郎　助川　龍夫
舞囃子　高砂　五段　水越　弥生　河村真之介　柳原冨司忠　助川　龍夫　鹿取　希世
舞囃子　田村　鬼頭みゆき　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取　希世
舞囃子　船弁慶　手嶋なみ江　河村真之介　柳原冨司忠　助川　龍夫　鹿取　希世
素謡　安達原　中村　正一　今川　米子　小林美和子
地謡　伊藤　孝治　都築　照治　織田　敏男　金原　孝典　金井　邦夫　山口　耕造

番外舞囃子　龍田　清沢　一政　河村真之介　柳原冨司忠　助川　龍夫　鹿取　希世
舞囃子　邯鄲　梅田　邦久　河村総一郎　福井啓次郎　助川　龍夫　藤田六郎兵衛

附祝言

主催　清謡会
（観世流謡曲・仕舞教室）
TEL〇五六四・五二・六九〇九
補佐　梅田邦久

［御来場歓迎］

# 歳末助け合い協賛能（第三十二回）

十二月三日（日）午前十一時始
名古屋能楽堂

番組

能楽（喜多流）
人間国宝　長田　木野村大介　駿
桂懸中之舞　橋本　飯冨　雅介　宰　アイ　松田　高義　後藤孝一郎　筧　鉱一　竹市　学　助川　龍夫
後見　松井　長田　郷　俊介　地謡　森田　中村　吉川　克彦　寛治　伊藤　英毅　内田　狩野　了一　成信　正　金子敬一郎　和谷　衡市
仕舞（観世流）
大江山　今沢　美和　地謡　三村　近藤　幸江　恵子　瀬戸　洋子　久田三津子
舞囃子（金春流）
安宅　広瀬　雅弘　福井啓次郎　河崎　勲　地謡　佐久間祥夫　小島　芳樹　加藤　正嗣　金春　穂高　前田　茂穂　大野　誠
独吟（金剛流）
奈良八景　牧野　元子
能楽（観世流）
遊行柳　久田　勘鬼　後見　泉　久田三津子　嘉夫　地謡　松山　外山　高島　八神　孝充　幸親　主一　良一　梅田　邦久　祖父江修一　須部　中川　雅章　甫
狂言（和泉流）
胸突　井上　靖浩　佐藤　友彦　後見　井上　祐一
能楽（宝生流）
稲川　寿一
小鍛冶　杉江　橋本　元　宰　アイ　今枝　靖雄　後見　玉井　竹内　澄子　博祐　地謡　福井　河村真之介　良治　外山　通夫　石森　智幸　加賀山憲治　久野　幸三　鬼頭　嘉男　大野　好信　誠　鬼頭　衣斐　正宜　辰巳満次郎　佐藤　耕司
附祝言

主催　能楽協会名古屋支部

（終了予定午後四時）

（入場券）
前売　二、五〇〇円
当日　三、〇〇〇円
学生　一、五〇〇円

（前売場所）
市内プレイガイド
チケットぴあ（〇五二―三三〇―九九九九）
チケットセゾン（〇五二―二九〇―九九九九）
名古屋能楽堂（〇五二―二三一―〇〇八八）
出演者

# 壺泉会能

十二月十日（日）午後一時半開演
名古屋能楽堂

仕舞
花筐　クルイ　大槻　文蔵
花筐　クセ　山本　眞義
地謡　鶴泉　八神　孝充　嘉夫　克彦　近藤　幸江　三島　憲
狂言
大名　野村又三郎
太郎冠者　松田　高義
聟　野村小三郎
能
人を馬
後見　山本　赤松　槙英　眞義　地謡　武富　松山　黒田　鶴　博　克彦　康之　斎藤　大槻　文蔵　多久島利之　山本　正人　信隆
風
泉　雅一郎　嘉夫
飯冨　雅介　後藤孝一郎　筧　鉱一　鹿取　希世
アイ　野村又三郎

主催　壺泉会
名古屋市昭和区山手通3―8―2―306
泉　嘉夫方
TEL・FAX052・832・3185

［入場料］一般券六千円、学生券二千円（全席自由席）
［チケット取扱所］市内各プレイガイド、名古屋能楽堂（052・231・0088）泉方（052・832・3185）出演各楽師

# 戦後名古屋能楽史 ⑮

## 〔第七章〕三年目の松坂屋ホール特設舞台（昭和二十八年）

竹尾　邦太郎

戦後八度目の正月を迎える。昨春、対日講和条約の発効によって自主権を回復した後の、独立国としては初の正月である。明治二年（一八六九）以降行われるという歌御会始の題、即ち勅題はこの年に相応しい「船出」、勅題小謡の作は『観世』誌主筆齋藤藤太郎、作曲は二十五世観世宗家元正である。〈数なる宝巣めつつ海の彼方に行く船は産業日本の象徴とや、の詞章は、貿易立国を目指す我が国の在り方を映し出す。

元旦、民法CBCラジオは九時から九時十五分まで謡曲「翁」柴田初太郎（菊鶴足袋提供）を、NHKは十時から十一時まで五流謡曲「翁」金春、「竹生島」喜多、「熊野」宝生、「芦刈」観世、「鞍馬天狗」金剛、を流し天下泰平を寿ぐ。能始は一月十八日、名古屋能楽会第一回定式能は囃子「翁」観世喜之、「巴」武田太加志、「末広」佐藤卯三郎、「遊行柳・青柳ノ舞」観世喜之である。一月二十三日、日本芸術院会員三名の欠員補充が紙上に発表され、第三部芸能部門で葛野流大鼓方川崎九淵が推挙（就任は五月二十六日）される。同日、後に小説日本芸譚「世阿弥」を物した松本清張が「或る小倉日記伝」で、五味庸祐「襄神」と共に第二十八回芥川賞受賞と報じられる。

二月、謡の名手、京都の井上嘉介（一八九七―一九五三）が死去する。当地最後の舞台は前年十一月二十四日、田鍋惣太郎との一調「女郎花」である。二月十五日は本年第一回観世会、番組冒頭に次の挨拶を載せる。

「名古屋観世会の定式能は幸に御高評を頂き、毎回満員の盛況を呈しますことは誠に感謝に堪えません。さて長い間の試練を通って独立国民としての平常性が取り戻されるにつれ、世界という広い視野から私共民族の立場に新しい反省が加えられまして、ここに能楽の偉大な價値が再評價されて参りましたことは御同慶の至りであります。昨秋フランス人エレーヌ夫人の羽衣の記念碑が三保の浦に建てられましたことなどは能の世界性乃至永遠性を物語るものでありまして、国の内外を問はず今後益々斯道への関心が高まることと思います。

当観世会はその風潮に照らし、且つは昔様の輿望にお應へ申すために一段の努力を致し度いと存じます。どうぞ此の上共御援助御鞭撻を賜りますよう切にお願い申し上げます」と格調高い。番組は「芦刈」観世元正、「雲林院」観世喜之、「福之神」井上新三郎、「野守・黒頭・天地ノ声」武田太加志、京都から大鼓に谷口喜代三の来演もあった。

なお挨拶中のエレーヌ夫人は、体系的技法に囚われない黙劇に似る即興的な自由舞踊の創始者イサドラ・ダンカン女史（一八七八―一九二七）の愛弟子で、夫君はマルセル・ジュグラリス。自国で能の美を知り「羽衣」に傾倒、自身の創意工夫で一九四九年五月、巴里ギメ博物館の舞台で「羽衣」を舞い好評を博するが、第四回公演のあと舞台に倒れて病臥二年余、没するという。憧れた三保の松原を「一目見たい」の願いに碑が建てられ、昭和二十七年十一月一日の除幕式には梅若万三郎（万佐世）が「羽衣」を手向けた。

同日、社団法人能楽協会は「対観世流トノ妥結ヲ見ルマデ梅若六郎氏一門トハ芸事上ノ交際ヲシナイコト」を声明する。（『観世』昭和二十八年三月号・四月号の「梅若問題彙報」に詳しい。）

能楽から少々外れるが、弥生三月には五日にソ連首相スターリン（一八七九―一九五三）が七十四歳で死去し、朝鮮動乱絡みの軍需株を中心に株價は一斉に所謂スタ―リン暴落するが、明るいニュースは名バイオリン奏者ジョゼフ・シゲティ（一八九二―一九七三）が二十年ぶりに、またピアノの巨匠ワルター・ギーゼキング（一八九五―一九五六）が初来日する。三月は亦卒業の季節、各地で旧制大学最後、新制大学最初の卒業式が挙行される。

歴史を顧みれば維新後の混乱期、禄を失った能役者の中には糊口を凌ぐために他に職を求めたり、縁者を頼ったりした者が多かったろうが、多少余裕がある者は将来を見通して子弟に教育をつけさせたりしたが、現在活躍中の能役者の中にも、そのひそみに倣い、戦後新制大学で教育を受けさせられた（？）子弟もあったであろう。飽くまでそれは衣食のために他の活躍分野を視野に入れてのこと、役者の力量が上がる訳のものでもないが、当今の暖衣飽食の時代にあっては殊更に、芸道修業にいわゆる高等教育が必要不可欠かどうか一考すべきであり、「時代だから」の一言で軽々に看過は出来ないだろう。戦後スタートした新制大学の数の多さと中身の薄さを皮肉った大宅壮一（一九〇〇―一九七〇）の、「駅弁大学」の造語も思い出される。

閑話休題、三月十五日は第十八回名匠鑑賞能、「昨春大好評の宝生大会、今春も家元宝生九郎師、当代能楽界の元老芸術院会員野口兼資師、若宗家宝生英雄、野口祿久両師始め新進楽師、又大阪より辰巳孝・清、金沢より佐野安彦・飯島佐六・各師大勢にての来演、当地在名全楽師出演、好番組、どうか流儀を超越して昔様の御清覧をお待ち申し上げます。なお求塚は宝生流独特の大曲是非御覧願ます。昨年観世流にても再興の名曲で御座います」の口上で、舞囃子「志賀」佐野安彦、「田村」宝生英雄、「求塚」野口兼資、「悪太郎」井上新三郎、一調「勧進帳」田鍋惣太郎・野口兼資、「黒塚・白頭」宝生九郎。野口兼資はこの七ヶ月後に福岡で演能中仆れるが、田鍋惣太郎とのこの一調が当地最後の舞台となった。三月二十二日、第二回定式能は金剛会の担当で舞囃子「西王母」山田仁三郎、「花月」金剛巌、「花争」歌村彦四郎、「二人静」豊嶋弥左衛門・調三、舞金剛のよさが偲ばれる。

陽春四月、十九日の第二回観世会は前年同様素謡会である。素謡六番は「藤戸」増田一雄、「紅葉狩」飯田賢、「頼政」林愿蔵、「熊野」林喜右衛門、「隅田川」片山九郎右衛門、「葵上」杉浦義朗。仕舞が七番で「桜川」加藤良久、「雲雀山」太田重次郎、「実盛」岩田与司、「嵐山」柴田初太郎、「花筐」杉浦義朗、「通小町」片山九郎右衛門、「鞍馬天狗」林喜右衛門。京都から名家の当主の来演はそれぞれに素謡と仕舞各一番の御馳走、当地シテ方も元気である。この月、旧臘十四日の能楽協会名古屋支部能「天鼓」の地謡に列なっていた観世流松良正一が亡くなり、詳細な型付を附した「金春昭和新修謡本」が金春流刊行会より出るが後に問題化することになる。

五月九日、九皐会は「弱法師・盲目ノ舞」観世喜之、があるが他は不明。翌十日は林愿蔵の潤水会の補助で河村鉦二・佐藤岩雄・芥川秀子の師範披露能、「菊慈童」佐藤岩雄、素謡「道成寺」芥川秀子、「熊野」河村鉦二である。十七日は第三回定式能で淡交会の割り当て。「巻絹」橋岡久太郎、「船ふな」井上松次郎、「盛久」高橋静夫（橋岡久馬の病気による代勤）。ここで『観世』五月号に西田三好が寄稿した「中京・観世だより」を一部転載する。当時の様子が窺い知れて興味深い。「旧藩時代より由緒ある名古屋布池能楽堂を戦災で失って以来、新しい舞台の復興運動は屢々繰り返されていたが、幾たびか不成功の苦杯を嘗め、今又熱田神宮造営奉讃会と協力して神宮境内に舞台を再建しようと相当具体的な募金運動がなされているが、関係者不聊れのためと、中京能謡人の一致した力が盛り上っていないので未だ着工の運びには達していない。

そうした中に、これは又個人で趣味の能舞台を慥えたという観世流友がある。その朗話の主は山本博之師社中の土居鋼翁氏といい、昨秋名古屋観御会社中能楽会で能「弱法師」を舞い、初能であったが予想外な好演をして先輩を驚かせた方。その頃より山本門の稽古舞台が欲しいと思い立ち今春、市内西区笠取町にある御自営の会社事務所を利用して立派な能舞台を新築されて中京能界の話題を賑わしている。舞台の大きさは二間半四方、後見座は奥行四尺、橋懸り一間、天井、屋根も能楽堂その侭の形を備えた堂々たるもの、鏡板の松は山本門師範、加藤総兵衛氏が石川英風画伯の指導によった趣味の筆になるもの、舞台の照明は蛍光灯を用い、見所からの投光灯と共に完璧を期している。去る三月十五日には博之師、勝一師を招き社中一同にて舞台披きの素謡、囃子会を催した。尚こんどが第一期工事であって、続いて楽屋一棟を増築される予定であるから、秋にはその全容が完備され、能舞台に思れない中京能界の一名物となろう。

○

名古屋は東西両能楽隆盛地に挟まれた離れ島であるので、各流共に夫れ夫れ両地から大家の出張教授を受けている人が多い。これらの人々の稽古は大体月一回位で、東西両地の如く常に先生の膝下にあって意の侭に稽古を受けられるという境遇でない。であるから進んで練習したい人は互に協力して研究の機会を自らの努力で作るより外致し方がないのである。こうした環境と芸熱心な人々の希望によって、能や舞囃子、謡の研究機関として生れたのが、観世流友のみで組織する「観清会」である。山本、大槻門の人々が主で、それに熱心なる他会の人も自由に参加出来ることになって居る。又新進師範も数名加入しているが、このように趣味者と師範とが一体となって研究し合うのも他地では見られない異色ある風景であろう。この会も既に回を重ねること十五回、創設以来満三年となり五月五日には記念大会を前記土居能舞台で催すことになっている。

○

もう一つ異色あるところを御紹介したいのは婦人ばかりの「謡調会」。

声帯の異る殷方とは、私達は御一緒に謡い難いですからと、当地観世流、各会の婦人連が相つどい、婦人だけで毎月一回、素謡と囃子の会を催している。男子禁制であるので窺い知る由もないが、聞くところによると仲々熱心とのこと。

会員の中には昨年、素謡「鸚鵡小町」を披いた中村つゆさん。能「杜若」を舞った村田京子さんの名も見られ、それに女流師範加藤良久、飯田新子、芥川秀子さん達も参加している。幹事は土岐茂子さん、熱心にやって居られる。」

（この項つづく）

## 特別展「面」

名古屋能楽堂で明春2月まで

名古屋能楽堂では、特別展「面」（あわれとをかしの対比）を十月から開催しているが、開催後期の十二月九日（土）から平成十三年二月四日（日）は、出品を入れかえて展示する。展示は約三十点で、主な展示品は次のとおり。

〔翁・尉面〕白式尉、黒式尉、朝倉尉、三光尉

〔男面〕喝食、童子、中将、猩々

〔女面〕小面、孫次郎、曲見（しゃくみ）、老女小町

〔怨霊面〕痩男、怪士、橋姫、般若

〔鬼神面〕大飛出、黒髭、大べし見、小獅子

〔狂言面〕武者、登髭、賢徳、狐など。

問い合わせ＝名古屋能楽堂（電話052・231・0088）

◇――――◇

◇――――◇


## 熱田神宮能楽殿演能案内

### 叶石会・一謡会

十二月十六日（土）午前十時始

熱田神宮能楽殿

素謡　野宮　高野瀬恵三　近藤　重治

囃子　「田村」前、「熊野」「西王母」「東北」「松風」見留、「山姥」「花筐」クセ、「融」酌之舞「松風」「善知鳥」翔入、「百万」

能　杜若　祖父江修一　飯冨　雅介　林　喜久子　助川　龍夫　福井啓次郎　大野　誠

後見　古橋　正邦　池ヶ谷　豊　清沢　一政　泉　嘉夫　地謡　近藤　重治　武田　邦弘　高野瀬恵三　梅田　邦久　須部　甫　味方　玄

仕舞　「竹生島」（河村裕一郎）「春栄」（河村雛子）

囃子　「三井寺」一声、「砧」前、「実盛」「藤戸」「経政」（宝生流）

付祝言

主催　叶石会　一謡会　河村総一郎

〔ご来場歓迎〕

## 岡崎地区の催能案内

### 第2回　五色の会・能を観る

十二月二十三日（土）午後二時始曲

花朋会敷舞台

岡崎市大西町奥長入四七―四　電話　〇五六四―五八―七六二六

仕舞　箙之段　宇高　通成　地謡　檜垣　孝文　塚本　嘉樹　廣田　幸稔　宇高　竜成

狂言　仏師　スッパ　野村小三郎　田舎者　松田　高義

能　羽衣　羽田野良子　高安　勝久　河村眞之介　後藤嘉津幸　前川　光範　鹿取　希世

後見　廣田　幸稔　伊藤　雅子　小鴨梨辺華　地謡　天野　幸輔　竹市　幸司　宇高　通成　宇高　竜成　塚本　嘉樹　熊谷　伸一

主催　花朋会敷舞台

補佐　宇高通朋の会

後援　岡崎市教育委員会

〔入場料〕前売五千円（当日五千五百円）

お問合せ　朋の会事務局　岡崎市中町五―二―一五　電話／FAX　0564・23・4364（羽田野方）

# ◆仲秋の舞台から◆

## 「先代観世喜之二十三回忌追善能」「宝生会」「名古屋能楽堂第二十九回定例公演」「久田秀雄十七回忌追善特別公演」

竹尾邦太郎

「安宅・勧進帳・瀧流」　先代喜之二十三回忌に当代喜之が手向ける。茶地大口は宝輪ニ飛雲文様、浅黄縞水衣に剣を佩く。小刀でないところ自ずからの威、才知縦横の喜之弁慶は做らず昂らず、事に動じない器量を遺憾なく発揮して芸格の大きさを見せる。勧進帳は脇正、「それつらつら」で大鼓（鉱一）が激しくチョンと入るのが効き、それに励まされる様に滔々と読み進めるところ、美声と相俟ち小気味好い。ヘ生死長夜の長き夢、でついと傍に寄るワキ富樫勝久、覗き込まれるのをそれとなく遮る構えに（写真）左肩を上げて動ずる気配もない弁慶喜之、緊迫の一瞬は弁慶の気力に圧されて退る富樫、見応え充分である。子方義経（駒瀬佐保子君）が咎められ、アイ太刀持祐一の挑発に「さてその斬ったる山伏は判官殿か」の反駁も知将の重み、徒らに激さない。逃避行の難を通れるには主を打擲も方便の今、過去の戦功も無意味な浮世を嘆くクリからクセまでを抜き、粗相を詫びる富樫志の酒で宴となる。ヘ面白や、と扇を目附へ投げ、男舞は珠数で舞う。途中三ノ松へ抜けて舞台へウケ、瀧を見上げる態は更に勾欄下に流れを見、盃を追う様に舞台へ戻ると、盃に擬した扇をスミで拾い上げ舞い続けるのも壮快。

キリはヘ疾く疾く発てや、と子方・同山（九人）は幕へ走り、シテは三ノ松でユウケン右ウケ左袖返シ留拍子、同山・後見から地謡も半数は一門で揃えられる九皐会の層の厚さと充実ぶりは統制がよくとれ好舞台だった。子方は女児とは云え口跡確りと健気に勤め、強力又三郎は神妙、囃子（希世・啓次郎・鉱一）と地（邦久・裕一ら）も力の籠った立派な演奏。（1時間20分）

「安宅」（杉浦賢次氏撮影）

「寝音曲」　太郎冠者・友彦の謡上手を耳に挟み所望する主・弘之に、「さてはお聞きなされましたか」と主を直視すると、何やら魂胆がありげに笑みが綻びてくるところが微妙。「大原木」を謡い終え、主の膝をポンと打つのは己れに感じ入った所作なのか、それとも讃辞の強要か……。（28分）

「道成寺・赤頭・中ノ段数調・無躅ノ崩」　シテ喜正、祖父三世喜之への手向けである。三世は当地と縁が深く、昭和三十年十一月に熱田神宮能楽殿が竣工するや、五流道成寺を企画した田鍋惣太郎の名匠鑑賞能で宝生九郎に次ぎ昭和三十一年五月、観世流を代表して「三度ノ次第・無躅ノ崩・赤頭替装束」の小書で勤めている。当代喜之はそのとき後見、家芸の伝統がすくすく育ってゆくのを目の当たりにするのは嬉しい。

小書の「躅」は「拍子」、中ノ段に数拍子を踏み、ワカヘ道成寺とは、で鐘に振り向く際に拍子を踏まず急ノ舞へ雪崩込む乱拍子のバリエーション。この度の乱拍子は「赤頭」の小書で短かく、鱗形を逆に廻るのも珍しい。小鼓は嘉津幸、シテ喜正との若さのぶつかり合いが清新で力が入る。急ノ舞の敏捷は鐘への緊道へ、金色烏帽子を撥ねて鐘の下へ廻り込むと両手を鐘の縁に、で探る気配が見えたがどうだったろうか。後シテは白綴被衣を撥ねると赤頭に着付の赤地を白地の鱗箔に替えて緋長袴。蛇体は長袴を柔らかく捌き、面切ル様は鎌首擡げる凄さ、キリの走り込みも鮮やかに最後は飛び上って幕へ消え、悠揚迫らぬワキ雅介貫禄のトメだった。（1時間36分・9月16日・先代観世喜之二十三回忌追善能）

「道成寺」（杉浦賢次氏撮影）

「忠度」　シテ博祐。前は、ヘ通ふ浦風に山の桜も散るものを、と目附柱の方へ面を使い、杖に両手を重ねつくづく眺めるところ、その詩的情趣は「行き暮れて」の一首へ揺曳して優しく、ワキ旅僧・勝久の供養を喜び下居合掌も真情。後は面中将・黒垂・梨打・襟浅黄赤・紅白段唐織着付・白大口・萌黄長絹太刀・短冊付矢、すっきりした瀟洒な姿は強そうに見えないが如何にも歌人の公達、僧の夢枕に立ち現われる。ヘ須磨の浦風も心せよ、と常座から右への面使ヒは前場のヘ山の桜も散るものを、に呼応するか。クリ地に正中床几に掛るが、ヘさも忙がはしかりし身の、の返シに立つ迄は暫時、流是としてもその要はあろうかと思われる。六弥太との格闘以下は、型の極りの美しさに強さが伴わないもどかしさが感じられた。（1時間26分）

「野宮」　シテ雅。前は、ヘ物儚しや、と小柴垣を眺めてからヘあら淋しこの宮所、とシテ柱框近くで面を使うところまでの心持ちなど、秋深い野宮の小世界に漂う落莫の趣がよく出る。斎宮へ下るに至る六条御息所の身上を言うクリ・サシ・クセは床几。御息所の化身とは云え里女の床几は珍しい。クセ後半、ヘ身は浮草の、と立ち、流れ流れて母と娘が斎宮へ赴く心中は、思えばヘ怨みなりけれ、のクセ切、膝を着きワキ旅僧・雅介へシオルのも痛ましい。質されてワキにアシラヒ名宣ると、ヘ夕暮の、と直ッて立ち、鳥居の影に紛れて消えてゆく中入は、嫋々とした送り笛（六郎兵衛）に寂しみも一入である。

後は、緋大口・紫長絹の気品。葵上との賀茂祭の車争いは、ヘばっと寄りて、と地前からスミへするすると出ると、人々が轅に取り付く様を袖を右、左と返ス象徴的な型に見せ、押しやられ身の程思い知らされてシオル切なさに悔しさが滲む。序の舞を淑やかに舞上げると昔が今に偲ばれ、野宮の佇まいを回顧するところ、ヘ露うち払ひ、は右の垣へ型だけし、松虫の音を耳朶に集めるように扇翳して目附から左へ廻る辺り沁々する。この懐旧が束の間の破ノ舞へと掻き立てた熱情が醒めてキリ、ヘ内外の鳥居に出で入る姿は、と鳥居に左手で掴まると右足外に出して軽く着けると退り、トメは常座、二時間になんなんとする長尺を終始緊張の裡に勤め雅好演。（1時間56分）

「伯母ヶ酒」　昔、庶民にとり酒は祭や祝い事の外は無縁、されば酒屋に伯母を持つのは一種の憧れ、この曲の作者が意図するところだったろうか。しかし身内とは云え伯母（又三郎）から只で飲む訳にはゆかず、阿諛追従の末に詭策を弄して酒にありつく甥・小三郎。現代はこれがゲーム感覚になりがちだが、昔のままに怪異の存在を信じ怖れる気持ちは甥にもあるべきだろう。（23分）

「殺生石」　シテ寿一。前は面万媚、初同のヘ物凄き秋の夕べかな、と常座で右ウケ面使ヒするところ妖艶さの片鱗を見せるも中入に無気味さは感じられず、面小飛出・赤頭の後も、妖狐の俊敏、更には狩り立てる三浦介上総介の果敢な攻勢や射殺の有様など、スピードと技の切れ味が欲しかった。（52分・9月17日・宝生会）

「飛越」　シテ新発意・又三郎。発意は発心で菩提心を起すこと、新発意（しんぼち）は即ち新入りの出家、茶の湯の心得もあろうと思われる。「心に掛けてやうこそ誘はれたれ」と茶に不案内の何某・陞行に同行を求められ、道々茶の講釈を垂れる得意は、小川を飛越えられずに濡れ鼠を揶揄されて取っ組み合いになるところより又三郎遙かに精彩。（19分）

「千手」　囚われの重衡（ツレ安明）と預かる狩野介（ワキ元）、そして君命で重衡を慰めに侍る千手（シテ光洋）、雨の春夜の憂愁に満ちた小宴は、出家を許されずヘ憂き身の果ぞ悲しき、とシオル重衡に千手は術（すべ）も無く面を伏せ、励ますかに酌に立てば狩野介は序に肴を勧める。取り敢えずの千手の朗詠は共感を得、三者連吟は夫々の思いもしっとり合い名調。イロエを舞い、クリ・サシ・クセは重衡の叙事詩、上ゲ端あとの千手の思いは、ヘ花咲く千手の袖ならば、とスミから扇翳して廻り序ノ舞へと舞の艶麗である。襟白赤・白摺箔着付・金地鉄線ニ扇面散シ文唐織の華やぎは、しかし唐織が財斗にきちんと着いておらずに少々しどけなく、官能的に見えたのは頂けない。それかあらぬかヘ琴を枕の短夜の、は艶夢を見るあだっぽさの枕ノ扇である。

キリはヘはや後朝に、と間隔置いて重衡と行き違うと正中で扇を開き、地を残して入る重衡と狩野介を見送り、ヘ目もあてられぬ気色かな、の返シテに目附柱へ向きシオリ留は哀愁一入だった。なお厚板着付・白大口・掛絡姿の重衡が数珠を持たないのは在家ゆえの遠慮か。因に掛絡は行道作務衣とも言われ禅門では不断着という。地頭は汎、主後見は晃実、喜多流と異なり流儀一門挙げての上演が嬉しい。囃子は希世・冨司忠・鉱一。（1時間26分・9月22日・第29回定例公演）

「羽衣・彩色ノ伝」　シテ三津子、ワキ白龍・元に羽衣を返して貰えず、ヘ住み馴れし空に、と憑懸勾欄へつと詰め、薄く面を使い雲の行方を追うかのところ哀感一入。物着で赤地舞衣を壺折に、破ノ舞はイロエに替えて二ノ松に流れ、勾欄に寄ると袖を被いて下界を眺める態は、更に雲上遙か彼方の感じに目附柱の方へ視線をやるところ、空へ帰れる安堵の満足感をまざまざ見せた。（59分）

「求塚」　シテ勘鶴。賑やかな菜摘女達から何時か残された女が旅僧に求塚の謂れを語る前場は、男二人から求愛される苦悩に入水すれば男達も刺し違えるところ、ワキへのアシラヒを事の次第克明に印象づけるアクセントにヘ二人の男子は、と立つとヘさし違へて、は左手を胸乳に当て、「玉ノ段」と同じ型の具象に説得力をみせる。

後場、女ノ霊は面霊女・襟白二・白摺箔着付・小豆色大口・白綾（向鶴菱繋地紋）壺折、罪もない鴛鴦を射させ、剰え男二人を死に追い遣った罪は地獄の責め苦の凄惨は塚の中、化鳥に苛まれ両手で頭上を庇うところや、ヘ縋りつき取りつけば、と右手左手と火の柱に掴まるや、ハッと手放しヘあら熱や、とその手で胸掻き毟るように安座のところなど鮮烈。塚を出ては懺悔の有様、無間の底にヘ足上頭下と落つる間は、と扇を逆手に下を指し、ゆっくり膝を着くとヘ三年三月の苦しみ果てて、と安座になるところは時間の経過を目の当りに見る思いの巧妙。火焔が消えヘ暗闇となりぬれば、と扇を面に翳して静かにスミから左へ廻り、ヘありつる住処、を幕から左へ尋ね眺むるところもよく、塚に入りトメは再び外へ出て所要は一時間五十分。今回追善する亡父共々神戸で修業した勘鶴にとり、生田川を舞台の本曲は土地の能、その充実ぶりは思い入れも深かったろう。

「千鳥」　付けがある上に酒を求めに遣らされる太郎冠者・又三郎、甘言を弄して酒をせしめる手立てを楽しむ余裕すら感じさせて強か。（30分）

半能「融・酌ノ舞」　シテ清和、初冠・黒垂・緋模様大口・白直衣、太刀を佩く。達拝掛早舞は、正先で膝を着いて一つ酌み、それを静かに見詰めて立つと飲み干す型、三鼓の流シに幕際まで行き、一ノ松に戻り袖巻上げると打上げ、地が謡い出す。地との掛合によい型をきびきびと極め、キリは袖巻上げてヘ月の都に入り給ふ、と横懸へするする行き、ヘ面影や、と幕に入り常座でワキが見送り下居合掌のトメ。暢達流麗、品位流石を思わせた。（26分・9月23日・追善特別公演）


## 二井栄逸師画抄集

## 平成13年能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー2001年版。B3（タテ51.5㎝×ヨコ38.0㎝）表紙とも7枚の美麗カレンダーです。

◉予約特価　1部1800円、郵送の場合送料共1部2200円（2部以上の場合、部数にかかわらず送料は一律600円、例・3部の場合送料とも6000円）

◉予約申し込み期限11月25日（それ以後は部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい）

◉お申し込み方法　ハガキ又はFAXで部数明記の上当社へお申込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。

**申し込み先　能楽の友社**

名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464－0858）
電　　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393


## NHK放送予定（平成12年11月～12月）

◉NHK・FM能楽鑑賞
（日曜日午前8時～9時）

〔11月〕
26日「小袖曽我」
（喜多流）佐々木宗生ほか

〔12月〕
3日「野宮」
（観世流）観世喜之ほか
10日「富士太鼓」
（宝生流）本間英孝ほか
「是界」（同上）
17日「鬼界島」
（喜多流）栗谷菊生ほか
24日「鵜鴒小町」
（観世流）浦田保利ほか

◉NHK教育テレビ
12月31日（日）
午前6時40分～8時
日中伝統芸能の競演
「狂言と昆劇」
狂言・昆劇合作「秋江」
・昆劇「朱買臣休妻」から「痴夢」
・狂言（和泉流）「附子」
野村万作、野村萬斎、石田幸雄、張継青ほか

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話 03(3291) 2488　振替00130－7－3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入
電　話 075(231) 1990　振替01010－0－113

# 能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話 (052) 731－7984
FAX (052) 733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

## 観世寿夫記念 法政大学能楽賞（第22回）

# 山本 孝氏 味方 健氏 受賞

法政大学（清成忠男学長）は、一九七九年（昭和五十四年）に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに二十一回の贈呈を重ねているが本年も、各方面の識者の推薦による候補者について、選考委員（田中義教・法政大学理事、金春惣右衛門、馬場あき子、西哲生、表章、西野春雄、山中玲子の諸氏）により慎重に審議された結果に基づき、第二十二回の受賞者として、大倉流大鼓方・山本孝氏、観世流シテ方・味川健氏を決定した。

両氏の受賞理由は次のとおり。

［受賞者］山本（やまもと）　孝（たかし）氏

［贈呈理由］作品の内面世界を表現しようとする真摯な情熱と的確な技量に支えられた氏の大鼓は、以前よりシテ方からの高い信頼を得てきたが、特に近年の舞台成果は著しい、関西での大曲上演に欠かせない中核的存在であるとともに、後進の育成にも尽力し、広く能楽の発展に寄与している。

［受賞者］味方（みかた）　健（けん）氏

［贈呈理由］氏の近著『能の理念と作品』は、能楽師でありかつ能楽研究者でもある氏が多年にわたって発表してきた、独自の方法による研究成果の集成であり、余人には真似ることのできない優れた業績である。能界と学界の橋渡し役としての尽力も高く評価される。

なお、贈呈式は、「催花賞」の贈呈式と合わせ、明年一月十六日(火)午後六時より赤坂プリンスホテルで行われる。

## 催花賞　野村又三郎氏

法政大学は、服部康治氏からの観世新九郎家文庫受贈を記念して、一九八八年（昭和六三年）四月に「服部記念法政大学能楽振興基金」を設定し、同基金に基づく事業の一つとして、能楽三役の功労者および能楽の普及・発展に貢献の大きい個人・団体を顕彰する「催花賞」を設定している。この名前は観世新九郎家伝来の「催花」の額にもとづいて名づけられた。

第十二回の催花賞の決定に当たって、各方面の識者から推薦された候補者について、法政大学研究所と別項記載の能楽賞選考委員が慎重に選考した結果、和泉流狂言方・野村又三郎氏を決定した。

［受賞者］野村（のむら）　又三郎（またさぶろう）氏

［贈呈理由］柔らかみの中に粘り強さを秘めた氏の芸は、近年、円熟の境に達し、その洒脱な演技と相手の力を引き出す包容力によって多くの舞台成果をあげている。名古屋を本拠として、和泉流では少数派となった野村派の芸統を守り続け、後継者を育て上げた功績も大きい。（②面関連記事）

## 面紹社の新春能面展

**1月6日から鶴舞図書館で**

能面研究会「面紹社」（主宰・保田紹雲氏）は新春一月六日から一月三十一日まで名古屋市鶴舞中央図書館一階展示場で、新春能面展を開催する。

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［平成13年1月］

| | | |
|---|---|---|
| 3日(水) | 名古屋能楽堂定例公演 | （有料） |
| | 正月特別公演 | （番組①面） |
| 6日(土) | 名古屋学生能楽連盟 第45回学生能・狂言の会 | （無料） |
| 8日(祝) | 名古屋清韻会 | （無料）（番組①面） |
| 14日(日) | 狂言鳳の会第26回公演 | （有料） |
| | 新春初笑い狂言 | （番組②面） |
| 16日(火) | 名演1月例会「大蔵狂言会」 | （有料） |
| 17日(水) | 名演1月例会「大蔵狂言会」 | （有料） |
| 18日(木) | 名演1月例会「大蔵狂言会」 | （有料） |
| 21日(日) | 第3回万作を観る会 | （有料）（番組②面） |
| 28日(日) | 名古屋宝生会定式能 | （有料）（番組③面） |

### ◆熱田神宮能楽殿◆

（TEL 052－682－1751）

［1月］

3日(水)　能楽協会名古屋支部謡初式（能楽協会関係者のみ）

### ◆豊田市能楽堂◆

（TEL 0565－35－8200）

［1月］

13日(土)　豊田市能楽堂新春能　（有料）（番組③面）

16日(火)・17日(水)・23日(火)・24日(水)・25日(木)　中学生のための能楽鑑賞教室（対象・中学生）

## NHK教育テレビ・能狂言番組

（年末年始特集）

◆12月31日(日)　午前6：40～8：00
狂言と昆劇　狂言昆劇合作「秋江（しゅうこう）」
狂言「附子」ほか、野村万作、野村萬斎、張継青ほか

◆1月1日(月)　午前7：00～8：00　新春能狂言　第一日
能（金剛流）「住吉詣・蘭拍子」　シテ・金剛永謹　ワキ・福王茂十郎

◆1月2日(火)　午前7：00～8：00　新春能狂言　第二日
狂言（大蔵流）「末広かり」　茂山千作ほか
狂言（和泉流）「磁　石」　野村万作ほか

◆1月3日(水)　午前7：00～8：00　新春能狂言　第三日
能（観世流）「二人静・立出ノ一声」　シテ・観世喜之　ツレ・観世喜正ほか

## 名古屋能楽堂正月特別公演

平成十三年一月三日(水)午後二時開演
名古屋能楽堂

狂言　松囃子
万歳太郎　井上　祐一　兄　佐藤　融
弟　井上　靖浩
大鼓　河村眞之介　大鼓　助川　龍夫
小鼓　福井啓次郎　笛　鹿取　希世
後見　今枝　靖雄

法皇　武田　邦弘
局　片山　伸吾
内侍　味方　玄
梅田　邦久

能　大原御幸
飯冨　雅介　杉江　元
相元　正樹　河村総一郎
橋本　宰　福井啓次郎　鹿取　希世
佐藤　友彦

間　黒田　博　清沢　一政
須部　甫　八神　孝充　久田　勘鶴
泉　泰孝　地謡　本田　勲　泉　嘉夫
高橋　暸一　祖父江修一
後見　（午後四時三〇分頃終了予定）

主催　能楽普及事業実行委員会
協賛　能楽協会名古屋支部

【入場料】前売一般四千五百円、学生二千五百円（当日一般五千円、学生三千円）
【前売券取扱い】名古屋能楽堂（電052・231・0088）
チケットぴあ（052・320・9999）
市内プレイガイド

## 名古屋清韻会

平成十三年一月八日(成人の日)午前十時始
名古屋能楽堂

番組

素謡　山田　富美
平岩　昌子　田中　文子

清経　地謡　篠田佳代子　浅井　庸子
大野ゆき子　中村　玲子
斎藤真佐子　中村喜久子
水井カズ子　御牧　紀代
服部　美さ　木下　芙蓉
森　明子　加藤美知子

班女　緒方　陽子　富田　貞子
森　清子
地謡　野村　和子　青山　信江
佐藤加代子　樺本　圭子
岩田　正子　志方つね子
田中　泰子　伊藤るり子
坪田　玉江　木野　照子
松尾　美和　冨田　初子

俊寛　成経　佐藤　尚雄
康頼　林本　政夫
平岩　明　中原　基夫

仕舞　笹之段　長瀬　砂絵
箙　クルイ　花筐　光崎　照子
箙　西岡　隆子

舞囃子
松風　戯之舞　川崎あきゑ　笛　鉦一　福井啓次郎　鹿取　希世
菊慈童　名倉　菊子　笛　鉦一　福井啓次郎　助川　龍夫
野宮　合掌留　山本　淳子　河村真之介　後藤孝一郎　大野　誠
実盛　加藤美智子　福井啓次郎　鹿取　希世
天鼓　谷口　寛子　笛　鉦一　福井啓次郎　大野　誠

能　楊貴妃　古井　佐季
台留　宝生　閑　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

間　野村小三郎

葛城　大和舞　長島みつこ　河村真之介　後藤嘉津幸　鬼頭喜太郎　鹿取　希世

自然居士　羯鼓入　御牧　紀代　河村真之介　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛

浮舟　渡辺　節子　河村総一郎　後藤孝一郎　竹市　学

【③面へつづく】

## 観世寿夫記念 法政大学能楽賞 受賞者の略歴

### 味方 健 氏

観世流シテ方、能楽研究者。一九三二年（昭和七年）八月十二日京都に生まれる。少年期より河村兄弟の稽古を受け、六五年（昭和四十年）、十七世林喜右衛門の内弟子となる。七四年（昭和四九年）独立。九一年（平成三年）より日本能楽会会員。立命館大学文学部、龍谷大学文学部、同大学院等で、長年講師をつとめ、演者としての経験を活かした方法論によって、作品論、演出史を中心に数々の論考を発表。岐阜県郡上郡に伝わる番外曲（くるす桜）の改作・舞台化や、廃曲（長柄の橋）復曲への参画も、そうした活動の一つである。

一九九八年（平成十年）、長年の研究成果を集大成した『能の理念と作品』により、法政大学より博士（文学）の学位を取得。その他、『邦楽百科辞典』（音楽之友社）、『能・狂言事典』（平凡社）の項目執筆や、『由良家雛子伝書』の翻刻（『庶民文化資料集成Ⅲ・能』三一書房）等、著作多数。二〇〇〇年京都市芸術文化協会賞を受賞。京都能楽会常任理事、子息の玄、圃両氏もシテ方観世流の能楽師。

### 山本 孝 氏

大倉流大鼓方。日本能楽会会員。一九三六年（昭和十一年）九月十八日、故山本敬一郎の次男として大阪に生まれる。父および故亀井俊雄に師事。初舞台は一九五〇年（昭和二十五年）五月、大倉家祖先祭での舞囃子。一九五七年に（乱・道成寺）を披き、六四年には（道成寺）の大鼓で大阪文化祭奨励賞を受賞。その後七一年（卒都婆小町）、八一年（姥捨）八二年（鵜鵜小町）八八年（檜垣）九八年（関寺小町）と老女物もすべて披曲。作品の内面を表現しようとする的確な演奏に、東西のシテ方からの信頼度も高い。九七年（平成九年）には、大鼓山本同門会の（景清）（班女）の大鼓により大阪文化祭賞受賞。

また、後進の指導・育成にも力を注ぎ、観世流大鼓の再興（八六年）にあたっても力を尽くした。同流の後継者たる守家由訓氏を内弟子として受け入れ指導するなど、自流内にとどまらず広く能楽界全体の発展のために尽くし、信望を集めている。

日本能楽会理事。四役審議会役員。大阪能楽養成会講師。長男哲也氏が後継者。

### 催花賞 野村又三郎氏

和泉流狂言方。一九二一年（大正十年）三月三十一日、十一世野村又三郎信英の三男として東京に生まれる。野村派野村家は、江戸時代には京都在住のまま尾張徳川家と肥後細川家お抱えの狂言方であった家柄。本名・信廣。父に師事。初舞台は四歳（一九二五年二月）で、（肝）（あかがり）のシテ。その後十六歳で（三番叟）、十七歳（那須語）十八歳（釣狐）、十九歳で（花子）と立て続けに披き、四二年（昭和十七年）入隊。四九年（昭和二十四年）シベリアから復員し、五十年に十二世野村又三郎を襲名。五九年（昭和三十四年）に祖父・父ともに稽古に出向いたことのある名古屋に移住し、以後、名古屋を中心に活躍する。

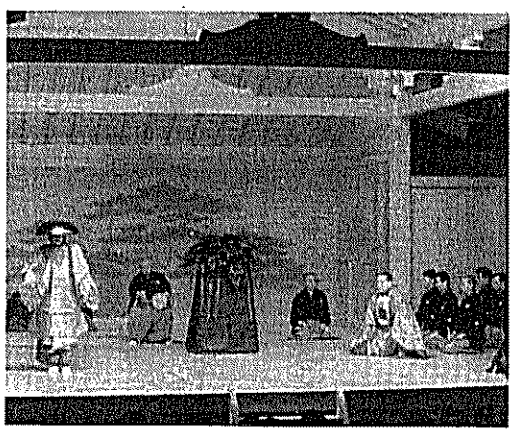
東京でも三宅派の野村派など和泉流他家と共演することも多く、相手の力を十二分に引き出す的確な力量と包容力には定評がある。一九八二年度（第三十七回）芸術祭で優秀賞を受賞した（花子）をはじめ、氏の演技と芸格によって成功した舞台は枚挙にいとまがない。近年所演の（毘沙門風流）（庵の梅）（枕物狂）など、品格があり洒脱な芸風は当代随一といわれる。また二〇〇〇年（平成十二年）には、数え八十歳で（釣狐）を演じ、若者の狐とは違った、枯淡、円熟の境を示した。

後継者の小三郎氏をはじめ後進の育成にも成功し、又三郎家の存在感を高めている。長年にわたり名古屋と東京で「やるまい会」を主宰。能楽協会理事、名古屋支部長を歴任し、東海地区の能楽界の発展にも寄与。一九六七年より重要無形文化財総合指定。九二年勲五等双光旭日章を受章。

## 発声学研究 初の国際公開講座 盛会

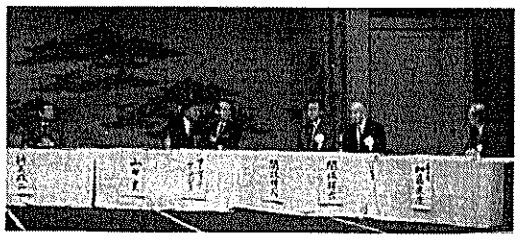
### 能楽の心象表現の真髄披露

邦楽と洋楽を発声の視点で検証し、演能とともに、〝情操〟の科学を解明しようという画期的な企画として、「発声学研究国際公開講座」が日本で初めて名古屋能楽堂において、去る十一月二十五日開催された。



能「隅田川」

邦楽の発声法については、すでにこれまでロンドンやニュージーランドで開かれた国際発声学指導者会議で注目されてきているが、観世流師範・生駒里翠氏が日本声楽発声学会の愛知県支部設立準備委員会の委員長として、この発声学研究国際公開講座を企画、発声学において国際的に指導活躍している米国ライダー大学教授・マーヴィン・ケンジー教授を招き、能楽鑑賞により、発声芸術と情操の科学の真価を深めようというもので強い関心がよせられ、講座が催された。



公開講座第3部のシンポジウム

講座は本紙十月号既報のように三部にわかれ、第一部では公開レッスンとして、ケンジー教授の指導による男性、女性の声楽家による歌唱、洋楽、邦楽の発声の対比のレクチャー、第二部では、観世流関根祥六師による能「隅田川」の上演、その心象表現の芸術性を観客に深い印象と感銘を与えた。

さらに第三部では、基調講演につづいてのシンポジウムで各パネラーが発言、とくに関根祥六師は「鵜鵜小町」秘伝の発声を披露、満席の見所の感動を新たにし、午後四時半ごろ終了した。

公開講座を企画した生駒里翠氏は「公開レッスンでは時間調整に不備があり、またシンポジウムでは発声と情操について存分な討議がされなかったことは残念で、今後の参考にしたいと思っています。しかし能『隅田川』の上演を通して、発声芸術の核心の一端にふれることができ、観客の方々にも強い印象が得られたと思います。情操の科学は新しい世紀への世界の課題であります。ご来場頂いた方々に心から感謝申し上げる次第です」とあいさつしている。

〔①面より清韻会つづき〕

求塚　鬼頭貴代子　河村総一郎　柳原富司忠　藤田六郎兵衛

仕舞　北原良一郎　加藤新一郎

花月　河村真之介　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　鹿取　希世

弱法師　佐久間美親　河村真之介　後藤嘉津幸　河村総一郎　後藤嘉津幸　竹市　学　助川　龍夫　竹市　学

巻絹　佐久間美親

通小町　冨士道周明

龍田　福間　克彦　移神楽

融　桑原　信夫　舞返

高砂　加藤　千一　河村真之介　柳原富司忠　河村真之介　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　助川　龍夫　竹市　学

番外仕舞　大槻　文蔵

維盛　（終了　六時頃）

【御来場歓迎】

主催　大槻清韻会

## 「鳳の会」新春公演

平成十三年一月十四日(日)午後一時三十分開演

名古屋能楽堂

番組

オープニングトーク　名古屋女子大学短大部教授　林　和利

鬼瓦（おにがわら）　主人　佐藤　友彦　太郎冠者　鹿島　俊裕

釣狐（つりぎつね）　白髪主　狐　佐藤　融　狐師　佐藤　友彦

素囃子　羯鼓（かっこ）　大鼓　笠　鉦一　小鼓　後藤孝一郎　笛　竹市　学

金岡（かなおか）　金岡　井上　祐一　妻　井上　靖浩　地謡　鷲見　政行　大野　弘之　佐藤　友彦　鹿島　俊裕

【入場料】（全席指定）A席五千円、B席三千五百円、学生二千円　会員A席三千八百円、B席二千三百円

取り扱い＝チケットぴあ（TEL052・320・9999）

お問い合わせ＝名古屋女子大学・林研究室（052・852・9436）▽井上祐一方（TEL&FAX052・834・6112）▽ギャラリーA・C・S（052・835・3780）

## 名演 1月公演 大蔵流狂言

一月十六日(火)午後六時四十五分始
一月十七日(水)午後一時半始
（二回公演）午後六時四十五分始
一月十八日(木)午後一時半始
（二回公演）午後六時半始

狂言「素袍落」「濯ぎ川」「佐渡狐」

◆全自由席三千八百円（別途入会金七百三十円）

〔問い合わせ〕名古屋演劇鑑賞会　TEL052・932・3739

## 第3回 万作を観る会

一月二十一日(日)午後二時開演

名古屋能楽堂

狂言の解説　名古屋女子大学教授　林　和利

宝の槌　太郎冠者　佐藤　友彦　すっぱ　井上　靖浩　野村小三郎

悪太郎　悪太郎　野村　万作　伯父　野村万之介　婿　野村　萬斎

茸　山伏　野村　萬斎　何某　石田　幸雄　耳　月崎　晴夫　耳　深田　博治　耳　高野和憲　耳　中村　修一　耳　竹山悠樹　耳　破石照　耳　時晋　耳　石田光洋　耳　野村淡朗　鬼　野村万作

【入場料】S席七千円、A席六千円、B席五千円、学生三千円

【取り扱い】チケットぴあ（TEL052・320・9999）、プレイガイド（名古屋三越）

【問い合わせ】なごや・万作の会事務局　TEL052・251・1933

主催　なごや・万作の会

## NHK—FM 新春謡曲狂言

◆1月1日(月)　午前11：00～11：50
番囃子（観世流）「高砂」　シテ　観世清和　ワキ　村瀬　純　ほか

◆1月2日(火)　午前11：00～11：50
狂言（大蔵流）「薩摩守」　善竹忠一郎ほか
狂言（和泉流）「福の神」　三宅右近ほか

◆1月3日(水)　午前11：00～11：50
番囃子（金春流）「国栖」　シテ　本田光洋　ワキ　鏑木岑男ほか

## NHK放送予定（平成12年12月～13年1月）

（毎週日曜日　午前8時～9時）

12月24日　「鵜鵜小町」（観世流）浦田保利ほか

〔平成13年1月〕

7日　「三輪」（観世流）　井上嘉久ほか
14日　「高砂」「猩々」（宝生流）宝生英照ほか
21日　「富士山」ほか（金春流）　金春安明ほか
28日　「船橋」「盛久」（再放送）（観世流）野村四郎ほか

# 戦後名古屋能楽史 ⑯

## 〔第七章〕三年目の松坂屋ホール特設舞台（昭和二十八年）

竹尾　邦太郎

（前項につづく）

五月二十五日、午後二時より上野国立博物館に天皇陛下をお迎えして昭和二十七年度（第九回）日本芸術院恩賜賞並びに芸術院賞の授賞式が行われ、当地でもお馴染みの金春流桜間弓川が芸術院賞を受賞。

月が替り六月一日、四月に金春流刊行会から刊行された「金春昭和新修謡本」を宗家金春信高は認めぬ旨の声明を出し、内紛が表面化する。六月三日、宝生十六世宗家九郎知栄（一八三七―一九一七）の伝記という松本たかし（一九〇六―一九五六）作の小説『初神鳴』を、伊藤大輔と田中澄江が脚色し、伊藤大輔が監督映画化した大映の『獅子の座』が封切られ、当地では千歳劇場でロードショウ公開、一週間遅れて六月十日には日活平和（大須）・桜映劇（浄心）・オリオン座（滝子）・スバル座（覚王山）・大曽根日劇・堀田大映など八館で上映される。まさに映画は金盛、主演は長谷川一夫・岸恵子・堀雄二・田中絹代、音楽は団伊玖磨、美術を伊藤熹朔が担当する。試写会の後であろうか、六月三日付中部日本新聞は『獅子の座』をみて、の見出しで三芸能家（藤田流十世六郎兵衛重明・赤堀流宗家鶴吉・洋舞家佐々智恵子）の座談会を掲載。ここに六郎兵衛の発言だけを抜粋すると、「日本で非常に伝統の長い能の世界を映画に採り上げたことは有意義です。歌舞伎と同じように若い学生の間でも研究され始めましたし、能に限らず芸の道の厳しさがこの映画でよく分ります」「子供が扇子で叩かれたり土蔵へ入れられたりするのを見ていると自分の幼い頃を思い出す」、――映画の観客は若い大衆が大部分ですから芸の特別な世界はなかなか理解させられないし、今迄映画でもその道の人が見るといい加減な所がよくありましたが、今度はどうでしょう――「やはり宝生流の助力を本格的に受けているから別に不満はない。俳優も短時日の間にあれだけよくやった。難を言えば舞と音楽が少しズレたことです」などとある。また丸岡明（一九〇七―一九六八、作家で能楽評論家）も六月十七日付夕刊同紙で、注目をひく能楽界・大衆化に前進・映画進出、として「今後能の大衆化を計るのなら、映画界と手を組むのが一番だと思った」と述べるが、著書『現代の能』（昭和二十九年・能楽書林刊）の中の映画「獅子の座」に詳しい。更にワキ方高安流宗家澄郎（一九一七―一九七八）は、後に（九月十四日）『獅子の座』及びその頃の当地の能楽環境について、中部日本新聞夕刊のコラム「芸能夜話」で以下の談話を披瀝する。「昭和四年先々代の金剛流家元（石京氏慧）の推薦で十三世を継いだわけです。映画〝獅子の座〟を見て幼少の頃を思い出しました。水桶を載せる程でもなかったが、三輪車を天井に吊し上げられた覚えはあります。人前で細かい注意をすることは父（西村弘敬、一八八七―一九七三）も嫌っていたんでしょうね。ですからいつも稽古をつけられるのは夜の十一時半過ぎです。そこで家元に伝わる秘伝とか奥伝を授けられたわけなんですね」

「名古屋は芸所と言われる割合に他芸は盛んだが、能は余り盛んじゃないですね。盛んでないのは名古屋の能楽界が封建色が濃く宣伝公開が少かったからでしょうなあ。新様式能（進取の気性に富む初世金剛巌・一八八六―一九五一、の造語。『金剛』復刊第一号巻頭『金剛芸談』中に〈新様式能の意図〉とあり、『私のやった新様式能も、あれはただ照明の面からのみの一つの試みにすぎませんが、それでもいろいろと論議されたようです』などと述べられている。

略年譜に拠れば、昭和二十二年三月大阪朝日会館での「松風」が第一回新様式能演出で、第二回は翌年四月同会館での「船弁慶」と「乱」である。これについては、当時会館主事であった十河巌が『金剛』復刊第五号の初世追悼号に寄せた「金剛巌氏と新様式能」及び昭和四十二年十月檜書店刊『沼艸雨能評集』が詳しい）は一つの宣伝法だが、能の本道じゃないでしょうね。やはり能は学生を通じて普及することでしょうね」

「シテ方の名士は名古屋では育たない。結局名古屋の趣味者、支持者が少いからでしょうね。第一名古屋に居ては生計が成り立たないんですよ。私もその代表の一人で現在某鉄工所で働いています。幸い理解があるもんですから私の仕事の余暇に勤めている恰好です。息子も小学校二年生になったんですが……。結局は家元を継ぐことになるでしょうなあ」と。

独立して自主権を回復した措置であろうか、六月四日、中央気象台は台風の呼び方を外国女性名から発生順位番号とすると発表。利根川の決壊で大氾濫をもたらした昭和二十二年のキャスリン台風、関東一円を荒らした昭和二十四年のキティ台風などは忘れられない。

六月十三日、橋岡久太郎古稀祝賀能は門下八名の師範披露を兼ねる名古屋淡交会の主催。八名は「神歌」六車真三・林芦笛、仕舞「養老」増田徳三郎・「紅葉狩」飯田新子、素謡「道成寺」鬼頭五郎・尾関健太郎・飯田賢、舞囃子「難波」岩田由之助である。メーンは「鶴亀」観世元正、「卒都婆小町」橋岡久太郎、「夜討曽我」観世喜之・浅見真健（橋岡久馬代勤）で狂言は「引括」井上新三郎、大鼓に川崎之靖・赤尾保が来演する。

六月二十一日は第四回定式能で「経政」辰巳孝、「芥川」歌村彦四郎、「阿漕」宝生九郎の宝生会。余談ながら二十三日には中日スタジアムにナイター設備が完成し、午後七時から中日対広島の十回戦が行われる。余談と言ったが能楽界には野球愛好者多々、『観世』誌にも「観世対檜チームの第二回野球戦（第一回は昭和二十六年十二月）は七月七日（昭和二十八年）、千代田球場に於て檜チーム先攻でダブルヘッダー二試合を挙行。試合に先立ち、観世チーム山階主将に花束の贈呈式後、十時三十分、古藤主審のプレイボールに依り試合は開始された」などの記事が載る。名古屋でも当時松坂屋本店東に在ったエンゼル球場で、斯界の面々が野球を楽しんだと仄聞するが、詳細不明は残念。資料お持ちの方は是非本紙発行所へ御一報を願いたい。

七月四日、NHKテレビが水道橋能楽堂から能を初めて全国へ中継放送する。曲は観世流「羽衣・和合之舞」でシテ観世元正、ワキ野島信、囃子は一噌幸政・三須錦吾・渡部栄蔵・観世元信、地頭は藤波順三郎、後見を木原康次・武田太加志、流儀挙げての意気込みは伝わるが放送は午後一時から、夕刻勤め帰りの人々がボクシングやプロレスを見るために街頭テレビへ蝟集する時代、受像機が一台二十万円前後（大学卒の初任給相場は八千円位）とあってはこの中継を見た人々微々たるものであったろう。

さて翌五日は年一度の能楽協会名古屋支部能の七年目、場所は中日会館特設舞台で「班女」大塚一二、「魚説法」佐藤秀雄、「安達原」久田秀雄、他に仕舞六番、連吟二番、舞囃子三番。番組冒頭には「今回は若手楽師の研究発表の意味にて特別に若手に依る舞囃子一番を加えました故宜しく御批判の程御願申上げます」とあり、その一番「高砂」を柴田収が勤め、この催能が実質的に装束納となる。当時、盛夏はいわゆる能閑期であるが紙上は賑やか。中部日本新聞は七月十四日、西田三好の司会による「能と婦人」と題する座談会を掲載、中村つゆ・加藤良久・片岡道子・戸田和子ら観世五・金剛二・宝生二の女流九名が発言する。七月二十一日は先に触れた「金春昭和新修謡本」問題につき、金春宗家は桜間道雄・野村保の両名に破門を通告。七月二十七日、戦後日本の景気浮上に一役買い、それに伴い能楽界の復興にも目に見えぬ影響を与えたであろう朝鮮動乱が、板門店で休戦協定が結ばれて調印される。七月三十一日、次の記事が能楽関係者の間で話題を呼ぶ。

「平和公園へ移転する市内の墓地整理は着々進められているが、〝矢場の地蔵尊〟で名高い中区矢場町清浄寺境内にあった能楽観世流の名門、京都片山家の二代目片山九郎右衛門豊慶（一七一〇―一七九五）の墓碑がこの移転で無縁仏として数万の墓石と共に平和公園の一角に埋められ所在が分らなくなっていることが判明、中京能謡人を嘆かせている。

この墓碑は寛政年間、豊慶の愛弟子であり名古屋観世流の基礎を築いた木下庄三郎（一七六〇―一八三一）氏一門が名古屋に居住していた時に造られたもので〝寛政庚申（一八〇〇）冬尾張門人源正頼謹誌〟とその墓石に細かく刻まれた碑文（左記）は近世能楽史を知る貴重なものとされていた。

片山豊慶之塚

片山先生、諱豊慶、京師人也、幼好声楽、東遊于観世氏之門、留七年而帰、遂為入室弟子、後復数東、其家所秘皆伝矣、天明中始来遊我也、予実請之、前後六来、従学益多、先生亦以其所秘尽伝於予、今張人興於此芸、而又使本下氏家於我者、皆先生之力也、先生以寛政乙卯正月廿七日、没于京師、年八十五、葬于本国寺、其子豊矩及孫豊恭不墜箕裘、及他国門人、食於先生之芸者処々有之、嗚呼先生可謂為中興之師於此芸哉、尾張門人某々等、相謀立石於城南徳寿山、以記其由、庶幾乎先生之声、永世不絶矣　（名古屋市史・風俗編一五八頁、第三節能楽・第二款能役者・第四項観世流の役者、中の〝参考〟に拠る。原文は全て本字、返点は略）

この墓碑があることは昭和九年ごろ名古屋の囃子方木造諷石氏と八代目当主片山九郎右衛門博通氏――先代宗家左近氏の実弟に当り観世流関西の統帥で京都在住――により紹介され名古屋史誌にも記されていた（前掲）。

戦災で同寺は焼失したが、墓碑はそのまま健在だった。ところが市の墓地移転でこの寺の墓地も昨年九月から十月にかけて平和公園へ移転されたが、そのさい豊慶の墓碑も無縁仏として各寺から集められた数万の墓石と共に無縁墓地へ埋められ、所在が分らなくなってしまったもの。このことを聞いた当代片山九郎右衛門氏は驚いて、私が終戦後名古屋出演の折に矢場の地蔵さんに参りましたところ焼跡の本堂の前、元手洗のあった辺りに墓碑が立っていました。その時も寺に名刺を置き回向料などあげて墓石に用事のある時は当方へ連絡して呉れる様くれぐれも頼んで帰ったのを覚えています。実に残念なことだと名古屋観世会西田三好氏のもとへ手紙を寄せている」

（この項つづく）


## 豊田市能楽堂演能案内

### 豊田市能楽堂　新春能

一月十三日（土）午後二時開演

豊田市能楽堂

番組

舞囃子（観世流）養老　梅田邦久　水波之伝
河村総一郎　柳原冨司忠　鬼頭好信　藤田六郎兵衛
地謡　河村博重　橋本雅夫　河村晴久　祖父江修一

狂言（和泉流）末広かり　果報者　井上祐一　太郎冠者　井上靖浩　都の者　佐藤友彦　後見　佐藤融

能（観世流）三輪　観世栄夫
素囃子　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　上田悟　一噌庸二
間　井上祐一
後見　武田欣司　片山慶次郎　柴田稔
地謡　松山幸親　高橋暁一　清沢一政　祖父江修一　橋本雅夫　梅田邦久　河村晴久　河村博重

主催　豊田市
共催　豊田市教育委員会　豊田市文化振興財団

◆入場料
正面席六千円　脇正面五千円
中正面席四千円（脇・中正面席は学生半額）
◆チケット取扱い
豊田市能楽堂（0565・35・8200）
チケットぴあ（052・320・9999）


## 名古屋宝生会定式能（第45期第1回）

平成十三年一月二十八日（日）午後一時始

名古屋能楽堂

番組

能

右近　足立知子　衣斐愛　玉井博祐　杉江元　飯冨雅介　橋本宰　井上靖浩　後見　倉本雅　竹内澄子　地謡　石原勝成　竹内孝成　青木堯　柴田賢治　覚鉱一　助川龍夫　後藤孝一郎　鹿取希世

狂言　佐藤友彦　井上祐一　大野弘之　後見　今枝靖雄

素袍落

仕舞　金森秀祥　玉井博祐　倉本雅　竹内澄子　衣斐愛

難波　佐藤耕司　地謡　稲川寿一　馬場冨四夫　辰巳満次郎　佐藤耕司

雲雀山　後見　佐藤耕司　和久荘太郎　地謡　竹内淳一　外山通夫　織田哲也　富田正代司　鬼頭嘉男　衣斐正宜　金森秀祥　久野幸三

大蛇　稲川寿一　田口将成　辰巳満次郎　杉江元　高安勝久　相元正樹　橋本宰　飯冨雅介　河村真之介　後藤嘉津幸　鬼頭好信　竹市学　間　佐藤耕司　佐藤融

〔有料〕正会員年四回繰り一万八千円（当日の販売も致します）学生券　当日券　二千円

主催　名古屋宝生会
事務所　名古屋市天白区島田二―三〇一　島田橋住宅二―一三一〇　佐藤耕司方　電話FAX〇五二―八〇三―七三七二

# ◆仲秋から晩秋の舞台◆
## 「復曲・泰山木を観る会」
## 「第五回千作の芸を見る会」
## 「第十二回涛華能」

竹尾邦太郎

「泰山木」　脇方福王流十六世宗家茂十郎輝幸の意欲的な復曲は観世流座付であった謡。前シテ天女・清和・後シテ泰山府君・六郎で演出は文蔵、初演。因に野上豊一郎校訂の岩波文庫、『能作書』（一四二三年世阿弥六十一歳の著述）には、たいざんもく（泰山府君）、とあり、五流では金剛流のみ「泰山府君」として現行曲。復曲の典拠は佐成謙太郎著『謡曲大観』で古謡本と称する観世流明暦三年（一六五七）本か。当時の観世流宗家は十世左近重成（一六〇〇―一六五八）、十一世左近重清（一六三二―一六八七）である。草創期から版本流布までは二百余年と思われるが、今回の復曲の意図はその間の演出を探ること、即ち、ワキはシテとの会話の他に、現在は地謡が受持つ情況説明なども、過去にはワキが積極的に関わり地頭として統率していたのではないかということらしい。そう言えば、古い番組にはシテ・ワキ・囃子方の「役」はあるが地謡・後見は無いものが多々ということからも、任務を表わす「役」で後場などワキの発言が僅少だったり、皆無というのはあり得ない、の脚方の思いが底流には在るだろう。

舞台は先ず囃子方（六郎兵衛・源次郎・哲也・悟）が座着き、地謡（禎英・拓司・博通）も舞囃子の時の様に角カケ、雁行して着座すると、アイ花守・千三郎が桜立木を床を滑らせ押して正先に据える。桜立木には〽人を寄せじと花の垣、の詞章通り小柴垣を繞らせているのも珍しい。

音取笛鼓でワキ桜町中納言がツレ臣下・和幸（士鳥帽子・段狩斗目着付・素袍袴・小刀）を伴い出ると、冒頭で、花の盛りの余りに短きを惜しみ、生物の命を司る泰山府君を祭って延命を願う、という曲の主題が述べられる。桜町中納言とは、〽佐国まさに身を捨てて後の春を待たず、と後シテの詞章にある桜の熱愛者大江佐国（おほえのすけくに・従五位上掃部頭兼越前介）に次ぐ桜人、藤原成範（しげのり・平安末期の歌人）の異名である。斯程の人が、桜の能の後場で発言皆無としたら寂しいに違いない。

さて、雲と紛う花に降り立つ前シテは六郎家蔵の面逆髪（大和作）・襟白二・白摺箔着付・金地立湧地紋団扇散シ文唐織・単袖無シ・天冠の麗姿。桜一枝、手折って帰りたいが月明かりで恥しく、夜更け、月の隠れた隙に闇に紛れて手折ると、逃げおおせて嬉懸へ、右肩に担き喜々とした態の中入の一方で、ワキにはその姿が見えない。それは、ワキだけに前シテが見える「実盛」の逆、ワキはワキで花の盛りの後が気掛りで心穏やかではあり得ない。

前場は、このシテとワキの桜花への心のあり様、対応の仕方の、掛け違いの面白さにあるが、シテの心境や状況を謡うところにワキ・ワキツレが加わるのは違和感を覚える。

アイは立シャベリ。千三郎は情景描写巧みで、足跡も無く垣も損ねず人影も無いのは人間業ではなく、花を折る音だけがしたなど、前場のシテとワキの立場を明快に印象づける。御折念を、と促してアイが退くとワキは床几を下り出端で後場になる。

後シテは宗家蔵の面小べし見（赤鶴作）・黒頭・透冠・厚板着付・赤地唐草文半切・紺地唐花文狩衣（衣紋）・唐扇。先には花の延命を希われて祀られ、更には花盗人探索祈願、それに応える府君の登場は、ずかずかと一ノ松に出ると神通力で天女の仕業と見破り、舞台へ入っては府君の行くところ、天女を求めてスミからワキ前へと苛立つ風は一ノ松に目指すツレ天女（清和）を認めて正中へ出、招キ扇は一寸来いとばかりの呼びつけ、自身一ノ松に出向いて床几に掛ると、天女は行き違いに舞台へ入り遠拝掛の舞になる。

面・天冠・着付は前と同じ、白地飛雲文大口に赤地唐花文舞衣を壷折り、桜枝で舞うのは花の鎮魂を願うためか、舞上げて、〽天女は再び天下り、と袖を被いて沈むのは詞章通りの具象表現。手折った桜枝を元に継木して笛前の床几に掛れば、代って府君が霊験を見せんと豪快な舞働に神威を誇示し、キリの〽花の梢に飛び翔って、と三度膝を着いて膝行する辺り胸が空いた。

前列二（ワキ・ワキツレ）と後列三（シテ方地謡）の合唱で前列左のワキがリーダーの形は、かつて黒川能が金剛能楽堂に来演の折（一九七三年）二列の地謡の前列左端（俗に角店と云うらしい）だけが小刀を帯び地頭であったことを思い出した。また草創期の、演能所要時間の短さを言えば、美濃国能郷で四月十三日、白山神社に奉納される古能の世界、シテもワキも謡をうたわず舞だけで、謡は全部地謡が受持つという完全な職掌の分離で一曲の所要は三十分以内というところからも想像され、復曲「泰山木」は様々なことを考えさせて刺激的だった。（1時間5分・10月4日・泰山木を観る会・大槻能楽堂）

「猿聟」　爛漫の桜花の下、晴れの聟入りの儀に聟・七五三を迎える舅の老猿・千作の、面の下の素顔も上気しようというもの、そわつく様に嬉しさが溢れる。盃を受ける聟に謡い出す舅、それに和する供猿の面々、〽花見ずばいかでか此の山に一夜明かさん、と興に乗り一さし舞う聟、全員面をつけているだけに、喜びの表情は体から発散する。三段ノ舞を〽面白かりける風情、で舞上げて一ノ松へゆく聟に、〽舅はこれを見るよりも、立って舞えば、聟も相舞に再び舞台へ戻る。草臥れた（っ）舅を尻目に聟は更に独り舞い続け、〽泊り泊りを眺めつつ、とスミで左袖被き扇で面を隠す「翁」の型をするが、千五郎一家眷属の面々が千作を囲む和楽の極みは〽楽しうなるこそ目出度けれ、の祝言、その微であろうか、面白い。（26分）

「海士」シテ浅見真州　〈涛華能〉
（杉浦賢次氏撮影）

「瓜盗人」　生活苦から盗んだ瓜をさる方に進上したばかりに、美味いからと更に求められれば、自身の収穫と頒いた手前は欲心を買うためにも畑へ忍ばねばならない俄盗人・千五郎。しかし、悪いと知りつつ一旦現場に立てば、警戒した畑主・千三郎に一層闘志を燃やす浅慮、案山子が畑主の扮装とは露知らず、祭の出し物の稽古に恰好とばかり案山子相手に活き活きとリハーサルである。迎え撃つ畑主は先刻承知でそのリハーサルに乗り、俄盗人を翻弄して楽しむ強かさ。好舞台であるが洗練され過ぎては時代の素朴さを失い、土の香りも消えかねないだろう。（36分）

「木六駄」　十二頭の牛に負わせた木六駄と炭六駄に酒一樽、伯父・七五三へ届けよと主・正邦から託されるシテ太郎冠者・千作、小言も愚痴もこぼさず快く承知するのが如何にもいじらしく、純情朴訥な老僕ぶりは役を越えて人柄が滲む。人同様に牛と言葉を交わし、心を通わせて雪中山路に牛を追う姿は、〽語り慰み行く程に、の道行吟その侭に、自身への労りと牛への愛情も切ない程。

さて峠、生憎く酒を切らせた茶屋・千之丞に落胆の太郎冠者、緊急避難でもあるまいが茶屋に唆されて使いの酒樽、鏡を抜けば一滴千里に二人だけの酒宴である。長年に亘る名コンビ阿吽の呼吸は酔余の謡に小舞、足許覚束無く舞う太郎冠者の洒脱な鶉舞が絶品なら茶屋の間の手も巧妙。茶屋に促され、睡魔を振り払えば気宇壮大、木六駄を茶屋に進上して山を下りる酔いの勢いは口も滑り放題、牛を真似、「案山子もおおっ」、誰と問われて「身どもおおっ」の無躾も憎めない千作の稚気だった。（42分・10月13日・第五回千作の芸を見る会・京都観世会館）

半能「海士・赤頭三段ノ舞」　シテ真州。〽あら有難の御弔ひやな、と頂いた経を二ツ折にして立ち、子方（久田勘吉郎・神妙に勤め佳）へ静かに寄り、経を展げて渡すと、受取る子方はその経を読み進む態に巻き畳んでゆく。その様を常座先へ戻ったシテが、頭を取って暫し眺めるところは、経の有難さと吾子の成長の喜びに泌々浸るか。その喜びの余りの、めりはりの利いた舞の暢達も見事。（40分）

「悪太郎」シテ野村又三郎　〈涛華能〉
（杉浦賢次氏撮影）

「悪太郎」　伯父が日頃の素行を陰口すると仄聞し、気負って乗り込む悪太郎、おっとり構えてあしらう祐一と性急な物言いの又三郎が好対照である。更に、伯父に深酒のあとを気遣われ、路傍で熟睡中に長刀は取り上げられるは、大髭は剃り落とされて僧形にされるはの上に、南無阿弥陀仏の法名まで与えられていた甥悪太郎が、折から出会った念仏僧・友彦に、我が名を呼ばれたと思い込んで付き纏う後場は、期せずして内心互いに相手の意図を探り合う恍けた可笑しさが出色。（30分）

「卒都婆小町・一度ノ次第」　シテ四郎。小書でシテが先に出る。三ノ松、胸杖に暫し休息する老残の小町女心の微妙は、孤独の侘びを一ノ松、古の栄華の思いに支え、世過ぎの物乞いに街へ出るには日が落ち月が出てから。薄暮、都の景を眺め舞台へ入ると、杖に縋る胸杖では最早たりず、老足にどっとくる疲れ、笠を脱ぐと常座先の床几に掛かる。床几は後見が持ち出すが、予めの方が朽ちた塔婆らしい。

面小町老女・襟白二・露芝文白摺箔着付・白地雪持笹ニ雪輪文縫箔腰巻・濃紺縷水衣の小町は、次いで舞台に入るワキ謙吉・ワキツレ寛に見咎められるや古の才女の矜持、卒都婆問答は強烈な自我を抑え、早い頭の回転で相手を論破、圧倒し慴伏させるところは溜飲が下がる。だが、素性を問われ持ち物を尋ねられると先の問答の鋭鋒は何処へやら、形面上から形面下の問題へと現実に戻れば、落魄の身の羞恥は一気に爆発し、物乞いから奇矯な言動に及び、〽余りに色が深うて、と笠持つ右手がぶるぶる震える写実は、四位の少将に憑かれて物着あと、〽百夜までと通ひて、と正中からグッと出て踏み留めるところ、〽あら苦し、と左袖胸に押し当て、〽胸苦しや、と更にその上へ扇を重ね、〽かやうに物には狂はするぞや、と安座ワキに面だけアシラフ辺り、四郎卓越した描写力を見せた。

囃子は六郎兵衛・良治（披キ）・忠雄、地頭順之、後見真州・雄三、老女物としては短いがそれだけに緊迫した好舞台で面白かった。（1時間21分・10月21日・第十二回涛華能）

「卒都婆小町」シテ野村四郎　〈涛華能〉
（杉浦賢次氏撮影）

◇……◇

◇……◇